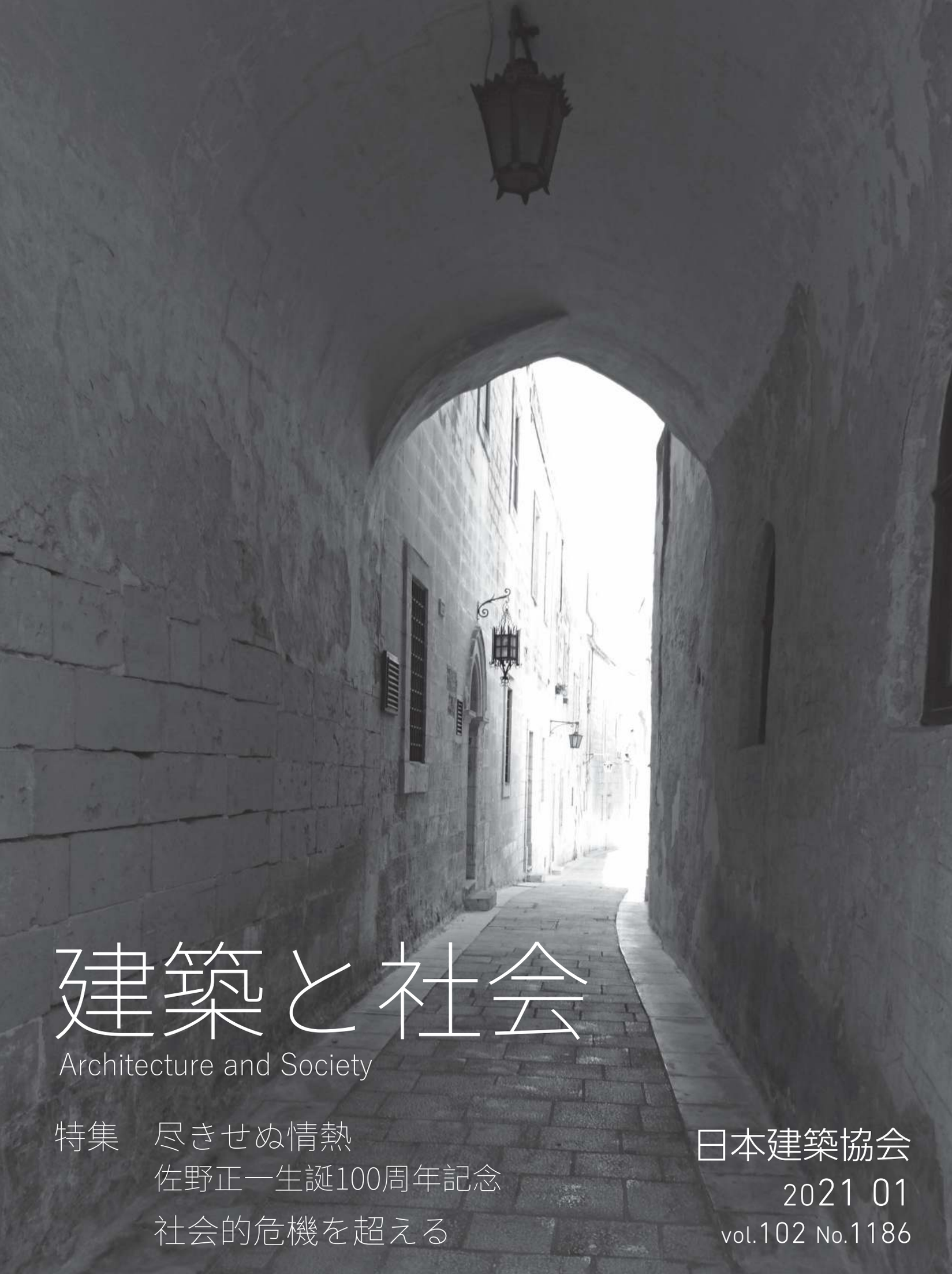


建築と社会

Architecture and Society

特集　尽きせぬ情熱
佐野正一生誕100周年記念
社会的危機を超える

日本建築協会
2021 01
vol.102 No.1186

若き創造者たちへ

「第68回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。
今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。
選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1．応募できる人は満35歳（2021年３月31日現在）以下の青年技術者であって、**本会個人会員**に限る。

2．原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。

5．「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第67回青年技術者特集号」（2021年７月号予定）に掲載する。

6．**提出資料**

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料（A、Bあわせて A3版6枚以内／書式は任意）

A：業績資料

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合 ―― それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い

業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した、力量が活かされた、と思われる部分を説明してください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。業績資料の中に内容を含めても良いです。（**応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をしてください。**）

7．**提出期限**　2021年3月31日（水）

8．**提出先**　（一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マート7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

9．**提出方法**　郵送（当日消印有効）または持参

10．**青年技術者選考委員会（予定）**

委員長　中原　岳夫／㈱安井建築設計事務所大阪事務所設計部部長
委　員　橋本　　修／㈱昭和設計執行役員
松原　茂樹／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授
水方　秀也／㈱竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
阿蘇品尚士／㈱東畑建築事務所 執行役員本社オフィス東京代表
瀧野　敦夫／奈良女子大学生活環境学部住環境学科講師
小倉　良友／㈱日建設計エンジニアリング部門 設備設計グループシニアダイレクター
古久保　真／清水建設㈱関西支店設備設計部副部長
山口　善史／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部長
青木　康造／大成建設㈱関西支店建築部品質管理室長
他１名

2021年を迎えて

一般社団法人 日本建築協会　会長　設楽貞樹

2021年の新春を迎え、謹んで年始のご挨拶を申し上げます。
昨年はコロナ一色の１年でした。瞬く間に全世界に拡散し、私たちは先の見えない事態に不安を抱えながらの生活を余儀なくされました。そしてなかなか感染終息の気配も見せない警戒感の中での新年となりました。この状況は建設投資にも影響しています。昨年、国土交通省が発表した建設大手50社の2020年度上半期の受注総額は、前年同期比９％減となりました。また、関西の経済についても厳しい状況が続いています。先行きの不透明感は依然強く、景気の持ち直しには時間がかかりそうです。
日本建築協会の業務にもコロナの感染拡大は大きく影響しました。本部の理事会や支部の総会に初めて書面決議を採り入れ、総会での講演会や表彰、懇親会は中止せざるを得なくなり、講習会や見学会、イベントなどは下半期に後倒しとなりました。また、各種委員会も開催回数を減らす一方オンラインによるWEB会議が主流となりました。こんな状況ですが、単に延期や中止だけでは知恵がありません。このような厳しい時こそ工夫して対応していく姿勢が大事と考えております。すでに実施している会議・打合せのWEB化をはじめ、講演・セミナーのウェビナー化、あるいは見学会のバーチャル化等々の工夫が考えられます。これらを新しいコミュニケーション方法の広がりとポジティブにとらえて、従来の活動の展開方法も見直していくきっかけを与えられているのだと考えています。
協会は今コロナ以外にも大きな課題を抱えています。機関誌「建築と社会」誌の見直しです。もとはといえば会誌収支の改善問題を端緒に始まった議論ですが、昨年「会誌活性化ワーキンググループ」を立ち上げ意見を募ったところ、１．WEB化　２．会誌の刷新　３．分科会・小委員会の再編・活性化の３つのテーマが抽出されました。これを受け、昨年後半に編集委員会の各分科会・小委員会の代表で構成する「特別編集委員会」を開催し、具体的議論を進めてまいりました。もともと収支改善を目的として始まったのですが、深まる議論の中から、会誌の意義とは？魅力ある会誌とは？時代の流れに沿った配信方法は？等々建設的雰囲気の中で根源的議論へと進みつつあります。年内のできるだけ早い時期に方向性を見出せるものと期待しています。
協会はこの「建築と社会」誌の発行以外にも、従来から行ってきた講演会や見学会、講習会の開催、出版物の発行、顕彰・コンクールの実施、イベントの企画・実行、在阪建築４団体など関係団体との交流・連携など、広く社会に貢献する事業に引き続き取り組んでまいります。
一方、昨年はコロナ禍の中でも、新しい試みに挑戦しました。「イケフェス大阪」と連携したイベント「日本建築協会Presents！史料と歩くおおさかの今とむかし」では、初めてバーチャルでまち歩きを楽しんでいただきました。今年も、新しいコミュニケーションの方法を工夫しながら、斬新で魅力ある企画を提案してまいりますので、ぜひ参加していただきたいと思います。
新年を迎え、コロナに屈することなく前向きな気持ちで課題の一つひとつに積極的に取り組んでまいりますので皆様の一層のご支援、ご協力をお願いし、年頭のあいさつといたします。

日本建築協会・常設委員会

本年の抱負

編集委員会

会誌活性化のプロセスを会員の皆様と共有する１年に。

編集委員長
勝山太郎

昨年は「より魅力ある会誌創りに向けて、具体策を打ち出す１年に」という目標を掲げ、会誌改革に向けたアクションを起こしました。まず会誌活性化WGチームを立ち上げ、編集委員会の外からの視点で、メンバーの皆様から貴重なご意見をいただきました。
そして、そのご意見を受けて各分科会・小委員会・U35メンバーによる特別編集委員会を立ち上げ、具体案の策定を進めてきました。この委員会でも有意義かつ活発な話し合いが進んでいます。本年４月号でこれまでの議論の内容や特別編集委員会が考えている活性化案をご紹介する予定です。この号を契機に読者である会員の皆様からご意見をいただきたいと思っており、その仕組みづくりもする予定です。会誌の新しい姿として双通行性というキーワードも上がっており、是非、活性化のプロセスを会員の皆様と共有しながら進めたいと思っています。ご協力よろしくお願いいたします。

事業委員会

コロナ禍の○○

事業委員長
中尾勝悦

昨年の在阪建築15団体合同新年交礼会は、EXPO2025『いのち輝く未来社会のデザイン』の開催に向けた明るい話題で始まりました。それが、４月・５月の大規模な自粛要請に変わり、今に至っています。過去、建築界では1919年にスペイン風邪により辰野金吾博士が亡くなり、映画などでは警笛が鳴らされていたにも拘らず、災いは忘れたころにやってきてしまいます。
反面、遠隔会議には皆が慣れ、スムーズな運営が行えるようになったと感じています。10月24日にバーチャル開催したイケフェス大阪では、５つの特別連携プログラムの一つとして、日本建築協会による「史料と歩くおおさかの今とむかし」で参加し、好評を得ました。
もう、自粛や様子を見て先延ばしするのは懲り懲りと思います。今年は、コロナ禍の建築見学会・コロナ禍の講演会など、コロナ禍を前提に事業を検討し、遠隔地と連携して進めて行きます。
一昨年に引き続き、皆様方の積極的なご参加・ご協力をお願いいたします。

出版委員会

ニューノーマル時代を迎えて

出版委員長
西　博康

出版委員会は、1949年から、162冊の作品を創出し、多岐にわたる分野で建築と社会をつないで参りました。出版物は、国内だけではなく、中国・韓国・台湾でも翻訳本が出され、増刷も続いております。昨年も、「建築と構造の接点」を発刊し皆様に提供させて頂きました。しかしながら、昨年は、コロナ過の中、制限的な活動とせざるを得ませんでした。今年は、NN時代のなか、講習会会場でのご参加以外にもWEB参加など、皆様方がより利用しやすい形態の建築セミナーの企画を立ち上げて参ります。
出版活動におきましては、若手技術者が設備工事を解り易く理解出来るもの、不法行為を生じさせない為理解しておくためのもの、デザイナーが構造デザインの認識を高めるためのもの等、幅広く企画して参ります。出版委員会企画の書籍やセミナーを是非ともご活用下さい。また、執筆してみたいという志をお持ちの方は、是非ともご一報ください。

教育委員会

学ぶことを楽しみたい

教育委員長
橋寺知子

昨年、教育委員長という、とてもえらそうな役職を仰せつかり、まだ慣れない日々を送っています。大学に勤務し、教育が仕事の一つであるものの、なかなか馴染みません。
教育委員会は、歴史ある「講習会小委員会」と「高工生教育小委員会」、そして「史料研究会」の活動が中心です。教育には「仕方なくこなす勉強」のイメージがありますが、どのような年代・立場にあっても学ぶことには楽しみがあると思います。実務講習会は実践的な学びの場であり、高工生デザインコンクールは、建築の次の担い手たちに授業とは違う研鑽の場を提供しています。史料研究会は『建築と社会』に「再読関西の建築」を連載していますが、会誌の記事を通して大先輩たちと対話し、教えてもらっているような気もします。古い会誌にはよく座談会の記録が掲載されています。情報を持ち寄り、意見を交わす…、協会の活動は学校とは異なる学びの場だったのでしょう。他の委員会とも協働し、いろいろな企画を練っていきたいと考えています。今年もご協力よろしくお願いします。

未来創生プロジェクト

対話を重ねたこの１年

未来創生プロジェクト委員長
中村文紀

未来創生プロジェクトが立ち上がって３年になります。だれも予測しえなかった１年を体感し、「未来創生」の意味がどのような未来になっても適応できる「しなやかさ」を創ることであると認識を新たにしました。昨年は、対面が困難な中、３委員会ともリモート会議を積極的に行ない、これまでとは趣は異なりますが、密な対話を重ねた１年でした。建築次世代委員会は、現場見学会の意義に立ち返った議論を重ね、11月に動画撮影も取り入れた、平城宮跡南門の復元現場見学会の開催に漕ぎつけました。この動画は今後、会員の皆様への公開も考えています。2040年の社会を考える2040委員会は、まさに「未来とはなにか」を問い直す対話を続け、新たな展開に目途を立てつつあります。U−35委員会では、多様な議論と周到な準備をへて、11月に中之島公園を舞台に「建築と水辺」と題した３密回避のアイデア満載の公開イベントaction7を行いました。今年こそ３委員会のシナジーを発揮した活動をと考えています。

定員を従来より減らし、新型コロナウイルス感染防止対策を行い開催いたします。ぜひご参加くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
※セミナー当日は必ずマスクを着用していただき、発熱・咳等の症状が見られる場合には、受講をご遠慮ください。入金後、受講者を変更される場合は、事前にお知らせください。

2020年度 建築工事実務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。（6単位）

■講習会会場〈大阪府建築健保会館〉
交通：地下鉄谷町線・中央線谷町四丁目駅8号出口より徒歩5分



日　時：2021年 1 月14日（木）
9：00～17：30
会　場：大阪府建築健保会館
6Fホール
大阪市中央区和泉町2-1-11
TEL：06-6942-3622
定　員：45名（先着順）
受講料：16,000円（含テキスト代 税込）
※テキスト当日配布

■申込方法
FAXまたはE-mailにて、
①催し名「実務講習会」
②受講者氏名（年齢）
③事業所名
④受講票送付先住所
⑤担当責任者
⑥E-mailアドレス
⑦電話番号
⑧受講料支払方法（銀行振込、郵便振替、等）
⑨CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDをお知らせ下さい。
受講料は、前納制となっておりますので、併せて銀行振込、郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票を送付します。
なお、当会HPからもお申込いただけますので、http://www.aaj.or.jpをご覧下さい。

■申込先
（一社）日本建築協会（担当　内山）
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F
TEL：06-6946-6981/FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

＜振込先＞
●三井住友銀行
大阪中央支店　普通　0860034
●三菱UFJ銀行
瓦町支店　普通　0210054
●りそな銀行
北浜支店　普通　0272234
●郵便振替口座　00910-9-39975
名義　シャ）ニホンケンチクキョウカイ
一般社団法人日本建築協会

■趣旨と内容
●本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の中堅以下の技術者を対象としたものです。
●現場実務の基礎である「施工計画」と「仮設見積」に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■科目・講師

施工計画

谷本　達哉 氏
㈱淺沼組大阪本店
建築部品質管理室主任

永野　浩一 氏
㈱竹中工務店大阪本店
技術部企画管理グループ部長

施工計画は、品質を確保し、安全で能率よく経済的に本体工事を進める鍵をにぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

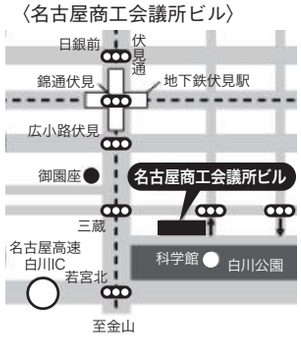
山口　紀宏 氏
㈱大林組大阪本店
建築事業部生産技術部計画第三課長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

日本建築協会東海支部主催 建築工事実務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
（公社）愛知建築士会（6単位）

■講習会会場
〈名古屋商工会議所ビル〉



日　時：2021年 1 月20日（水）
9：30～17：00
会　場：名古屋商工会議所ビル　9階
愛知建築士会内
名古屋市中区栄2-10-19
定　員：40名（先着順）
受講料：16,000円（含テキスト代 税込）
※テキスト当日配布

■申込方法
FAXまたはE-mailにて
①講習会名
②郵便番号・住所
③受講者氏名・年齢
建築CPD単位申請希望者は氏名の下にCPD登録番号を明記
④事業所名
⑤申込担当者名
⑥電話番号・FAX番号・E-mailアドレス
⑦受講料支払方法（銀行振込等）
受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。
なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、http://www.aaj-tokai.jpをご覧下さい。

■申込先
（一社）日本建築協会　東海支部
〒460-0008
名古屋市中区栄2-10-19　名古屋商工会議所ビル・9階（愛知建築士会内）
TEL：052-201-2201/FAX：052-201-3601
E-mail：info@aaj-tokai.jp
■締切日　2021年 1 月13日（水）
但し、定員に達し次第締め切ります。

＜振込先＞
●三菱UFJ銀行
栄町支店（普通　0167157）
シャ）ニホンケンチクキョウカイトウカイシブ
一般社団法人日本建築協会東海支部

■趣旨と内容
●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
●現場技術者の初級者を対象に、とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
●積算業務では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

施工計画

日吉　智紀 氏
清水建設㈱名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

池戸　幸二 氏
㈱大林組名古屋支店
建築工事部建築生産技術第一課長

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

木原　陽 氏
㈱竹中工務店名古屋支店
見積部建築2グループ主任

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

日本建築協会中国支部主催
建築工事実務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度プログラムです。
建築関連CPD（６単位）

■講習会会場
（広島工業大学　広島校舎）
・広電市内電車　袋町または中電前下車
・広島バス　平和記念公園前下車



日　時　2021年 1 月28日（木）
9：30～17：00
会　場　広島工業大学　広島校舎
広島市中区中島町5-7
定　員　30名
受講料　16,000円（含テキスト代 税込）
※テキストは、当日配布させていただきます。

■申込方法
FAXまたは中国支部へ直接
①講習会名　②〒・住所　③受講者氏名（フリガナ）　④事業所名　⑤担当責任者　⑥電話番号・FAX番号　⑦受講料支払方法（銀行振込等）　⑧CPDを申請される方は、申請先の団体名をお知らせ下さい。
受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票をお送りいたします。
定員を従来より減らし、新型コロナウイルス感染防止対策を行い開催いたします。ぜひご参加くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
※セミナー当日は必ずマスクを着用していただき、発熱・咳等の症状が見られる場合には、受講をご遠慮ください。入金後、受講者を変更される場合は、事前にお知らせください。

■申込先
（一社）日本建築協会　中国支部
〒730-0805　広島市中区十日市1-1-9
（相生通り鷹匠ビル４階山陽工業㈱内）
TEL 082-232-6471/FAX 082-291-2233
E-mail：info@aaj-chugoku.jp
URL：http://www.aaj.or.jp
■締切日　2021年１月21日（木）
但し、定員に達し次第締め切ります

＜振込先＞
●広島銀行
本川支店（普通　3424438）
シャ）ニホンケンチクキョウカイチュウゴクシブ
一般社団法人日本建築協会中国支部

■趣旨と内容
●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
●とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
●「積算業務」では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

施工計画
所崎浩之 氏
清水建設㈱広島支店
主査
適切な施工計画を立案できることが、建築現場技術者の必須条件です。
安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積
尾野本　悟 氏
広島工業大学
教授
仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。
施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務
八道　憲一 氏
鹿島建設㈱中国支店
次長
見積業務の中で基本となるのは、数量積算です。この手順、基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

東海支部主催見学会
春華堂 新本社ビル「スイーツバンク」ずだじこども園・ずだじ幼稚園

うなぎパイで親しまれる春華堂の新本社ビル「スイーツバンク」は、鉄骨造２階建て、本社オフィスに加え、一般向けの販売店とカフェ（レストラン）、浜松いわた信用金庫森田支店を含む複合施設で４月にオープンを予定している施設です。菓子から連想される「家族団らんの時間」を表現すべく、外観はテーブルとイスをモチーフにしたという他に例のないプロジェクトです。
見学会は設計を担当した日建設計の意匠担当者が同行し説明と質疑応答を予定しています。
ずだじこども園、ずだじ幼稚園は地元浜松で活動するナウハウスによる設計です。いずれも中部建築賞をはじめ各種建築賞を受賞している見どころの多い建築作品です。
当日は見学後にナウハウスを訪ね事務所を見学し、懇談会を予定しています。
いずれも又とない機会です。お見逃しなく。

日　時　2021年 3 月26日（金）
13：00～17：30
受付　12：45～
所在地　◆春華堂新本社ビル
（浜松市中区神田町553）
◆すだじこども園・ずだじ幼稚園
（浜松市南区恩地町291）
◆ナウハウス
（浜松市南区頭陀寺330-20）
集　合　春華堂新本社ビル
最寄駅　JR浜松駅から遠鉄バスにて「よろい橋」下車徒歩約５分
定　員　30名（先着順）
参加費　500円（資料代）

申込方法　①催し名
「浜松建物見学会」
②氏名（ふりがな）
③所属
④連絡先E-mailアドレス
⑤連絡先FAX番号
⑥連絡先電話番号・E-mail
上記項目を明記の上E-mailまたはFAXでお申し込みください。
申込先
（一社）日本建築協会東海支部浜松建物見学会担当宛
Tel：052-201-2201/Fax：052-201-3601
E-mail info@aaj-tokai.jp



建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan
日 本 建 築 協 会
2021 01
Vol.102 No.1186

■特集予告
● 2 月号／第27回私の空間作法
● 3 月号／東海支部特集

今月の表紙

撮 影 者：内山貴裕（うちやま　たかひろ）
撮影場所：マルタ共和国バレッタ
撮影時期：2019年 5 月

写真について
バレッタは地中海に浮かぶ島国マルタの小さな首都です。オプショナルツアーで訪れた時の風景の 1 コマ。
また行くことができるなら、今後は心ゆくまで街を堪能したい。

特集　尽きせぬ情熱　佐野正一生誕100周年記念

1　年表 ―― 11
はじめに●設楽貞樹 ―― 13
2　卒業設計　科学技術中樞計画 ―― 14
3　総論　佐野正一氏　── 人と作品●石田潤一郎 ―― 22
4　各論　佐野正一
建築家として　モダニズムからのズレ●藤森照信 ―― 30
建築家として　類まれな鑑賞者●米山　勇 ―― 31
業界のリーダーとして
佐野正一氏の見ていたもの！（新型コロナ禍は一過性）●岡本森廣 ― 32
業界のリーダーとして　崇高なる建築家　佐野正一氏●櫻井甸子 ―― 33
業界のリーダーとして　“技芸”求め続けた建築人●西山英勝 ―― 34
業界のリーダーとして
佐野正一さんの矜持に触れた20年前の夏の日●松隈　章 ―― 35
業界のリーダーとして
共創の設計思想から覗く佐野正一像●井上雅祐・浅沼拓也 ―― 36
建築協会会長として
協会会長・先輩として　～佐野先生のこと～●金多　潔 ―― 37
芸術の支援者として　偉大な建築家　佐野正一先輩に捧ぐ●嶋　高宏 ― 38
芸術の支援者として
都市の格　～音楽ホールを持つ銀行本店～●勝田泰久　談 ―― 39
事務所経営者として　設計事務所の継承●椚座正信　談 ―― 40
父として　佐野正一の疾風怒濤　～息子からの眼差し～●佐野吉彦 ― 41
5　注ぎ込まれた情熱
音楽ホール　サントリーホール●眞鍋圭子 ―― 44
音楽ホール
未完成交響曲　～佐野正一のサントリーホールへの想い～●木村佐近 ― 46
駅・駅ビル
佐野正一の存在感　～国鉄時代の建物設計を通じて～●佐竹鐵也 ―― 48
駅・駅ビル
大阪駅ビル（旧愛称アクティ大阪）設計での佐野正一●中西　稔 ―― 49
駅・駅ビル　設計・組織作りの原点は国鉄・駅ビル●岡本弘之 ―― 50
空港ターミナルビル
空港ターミナルビル　情熱と好奇心／直実行●横尾迪夫 ―― 52
博物館　東京国立博物館平成館計画●大村鐵太郎 ―― 54
ガスビル増築　佐野正一の思い
～大阪ガスビル増築設計～●原見昌志　談 ―― 56
庁舎　設計担当者の立場から「佐野正一の時代」を考える。●中川洋一― 58
6　佐野正一語録 ―― 60
謝辞と編集後記●設楽貞樹 ―― 62

特集　社会的危機を超える

【総論】
社会的危機からの復興
～東日本大震災の経験からコロナ禍を展望する～●御手洗潤 ―― 64
【各論】
1　新型コロナ感染症をどう理解するのか
～防災・復興の視点から～●牧　紀男 ―― 68
2　孤高の才は都市の雑踏の中で光彩を放つ●奥山信一 ―― 70
3　これからの都市構造のゆくえ●星　卓志 ―― 72
4　一次産業空間の再起動
～農山漁村の現状と持続性へのまなざし～●下田元毅 ―― 74
5　コロナ禍で気づく音のデザイン●小松正史 ―― 76
6　在宅勤務のプロセスと課題～一人暮らし～●林　雄太 ―― 78
【編集後記】―― 80

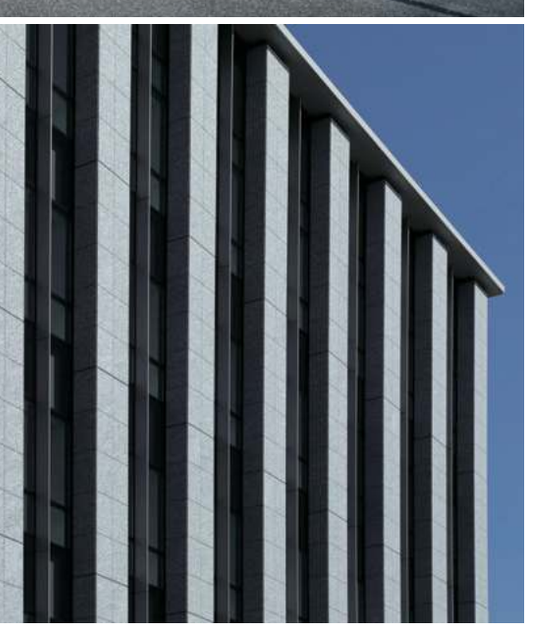
年頭の言葉　2021年を迎えて●設楽貞樹　1
本年の抱負　常設委員会●勝山太郎・中尾勝悦・西　博康・橋寺知子・中村文紀　2
会告　若き創造者たちへ「第68回青年技術者顕彰」のご案内
2020年度建築工事実務講習会（本部、東海支部）　3
2020年度建築工事実務講習会（中国支部）、東海支部主催見学会　春華堂新本社ビル「スイーツバンク」　ずだじこども園・ずだじ幼稚園　4
作品作風　滋賀中央信用金庫　6
gallery　住まいのカタチ●石　憲明　8
法令コーナー　都市再生特別措置法等の一部を改正する法律（令和 2 年法律第43号）　●国土交通省都市局まちづくり推進課　●国土交通省都市局都市計画課　82
再読　関西の建築　Whityうめだ●阿部文和　83
構造の頁　創業150周年事業の挑戦（仮称）KONOIKEテクノセンター●河井翔太郎　87
「建築と社会を考える」は休載します
デザインコンクール　第66回工高生デザインコンクール
設計課題／「『現代』の茶室」　88
information　ヨーロッパの宝石箱　リヒテンシュタイン伯爵家の至宝展／企画展　広重の名所江戸百景　併催：新収蔵品・新寄託品を中心に／没後70年 南薫造／特別展　花森安治『暮しの手帖』の絵と神戸　100
月間の動き　2020年11月　118



建物外観



本部エントランス





待合エントランス



滋賀中央信用金庫

建　築　主　滋賀中央信用金庫
設計・監理　清水建設関西支店一級建築事務所
施　　工　清水建設関西支店

「地域を大切にし、発展的未来を共に創造する」を経営理念に活動する滋賀中央信用金庫の本部新築計画である。「地域社会とのつながり」をテーマに、外構、エントランス、ロビー空間をひとつながりに計画した。

敷地は地場の中小企業が連なる産業建築群や、住宅街、大規模商業施設に囲まれた場所に位置する。人や車の往来の複雑なこの場所に、地域社会とのつながりを強めていくという信念を体現する信用金庫本部としての建築の有り様が求められた。

滋賀中央信用金庫と地域社会をつなぐ結節点として大庇による回廊を計画した。“つなぐロッジア”と名付けたこの空間は、訪れる人を決して雨に濡らさないよう建物アプローチを包み込み、街、本部、営業部の３つの場所をつないで、地域社会を受け入れる窓口の役割を果たす。

本部エントランスには、“地域を映し出す窓”として、地場企業製作の和紙アートを壁面に組み込む計画とし、アートを介して企業との交流を促す仕組みとした。

待合ロビーは地域住民へのおもてなしを表現するため、“ロッジア”に面した大きなガラス張りと内部のロングスパン構造により、街、ロビー、営業室を一体化し、「地域社会との融合」を表現した。

滋賀中央信用金庫と地域社会が共に豊かな未来に向けて互いに作用しながら発展し、地域社会全体の活性化を支えていただけるよう願っている。

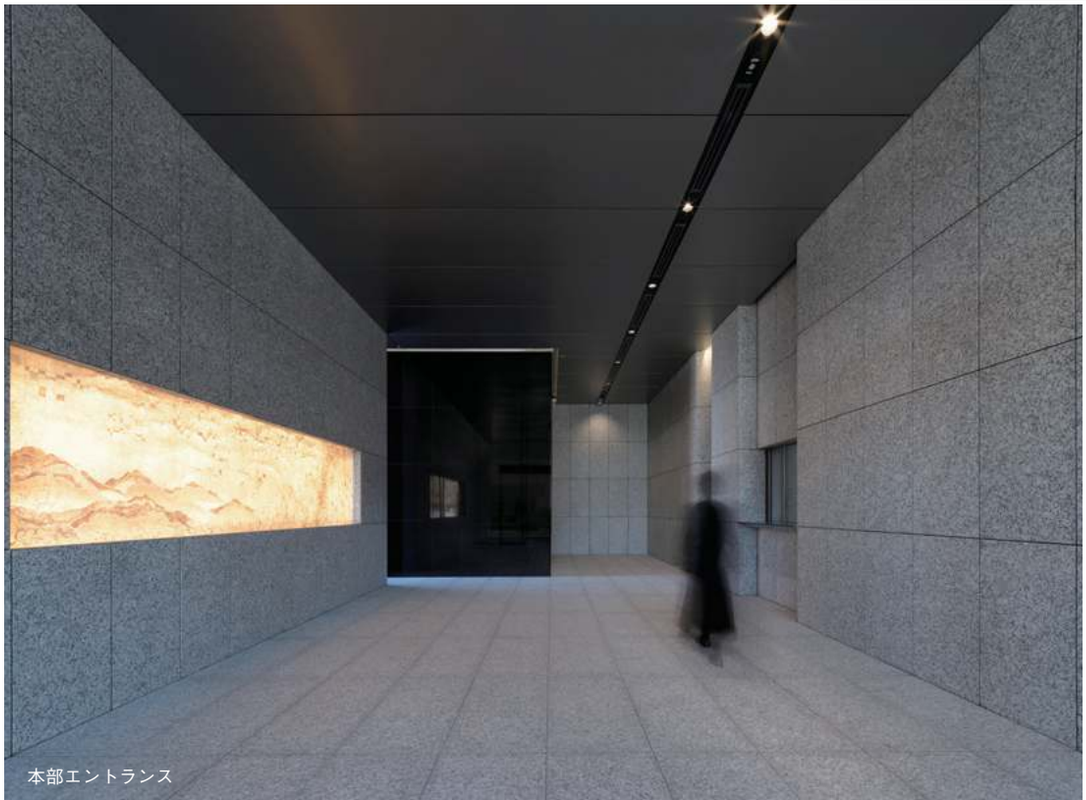
（吉村淳二・福地佑介／清水建設）

所 在 地　滋賀県彦根市小泉町
敷地面積　4214.06㎡
建築面積　1377.00㎡
延床面積　5263.63.00㎡
構造規模　S造　地上５階
工　　期　2019年２月～2020年２月
最 寄 駅　JR東海道本線　南彦根駅
撮　　影　エスエス大阪支店


待合


役員ホール


応接室


本部エントランス


和紙アート

gallery

まち　建築　ひと

住まいのカタチ

設計
石　憲明



住まいの設計において、とくに力をいれているのは、クライアントであるみなさんとの対話です。対話のなかから設計のヒントを見つけ出し、それを機能と結びつけながら「住まいのカタチ」として提案したいと考えています。

たとえば、思いやり、愛情、安らぎ、真夏の木陰に吹き抜ける風のような、あるいは春のひだまりのような心地よさ。そうした言葉にならない思いをくみ取り、それを実際のカタチにする。そうやって、〈優しさ〉や〈思い〉をカタチにすることで、暮らしは変わっていきます。

時にその「カタチ」は、周囲の景色と混ざり合いながら、建物の外部と内部のつなげる空間となってあらわれることもあります。便利さや広さばかりを優先するのではなく、リビングと一体となった外部空間や四季折々の借景を楽しめる大きな窓、そうした「住まいのカタチ」が、そこに暮らす家族の豊かな未来を育んでいくと考えています。



アウトドアリビングの家
川沿いの桜並木に面したのどかな住宅地の一角。プライバシーを確保しながら桜並木を一年中感じられる空間を目指しました。
外部と内部の境界を曖昧にし、自然と外に出てしまうような、庭でもテラスでもない新しい外部空間、それがアウトドアリビングです。
LDKからアウトドアリビング、桜並木へと連続してつながる家族団らんのための空間が広がります。





庭園借景の家
1988年竣工のRC壁式構造の邸宅を改修しました。２階北側のキッチンは、中庭テラスへのつながりを意識した空間としています。南側のリビングには日本庭園を借景とする大きな窓を設けた住み心地の良い空間としました。

石　憲明（せき　のりあき）

1976　兵庫県生まれ
1999　大阪大学工学部環境工学科卒業
2000　一級建築士事務所@HAUS ARCHITECTS参画
2001　大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修了
2003　GoNs建築設計事務所共同設立
2005　一級建築士事務所 seki.design設立
2012　一級建築士事務所 株式会社seki.design設立
http://sekidesign.com/

撮影　福澤昭嘉

企画編集：澤田純一（作品作風小委員会）



尽きせぬ情熱

佐野正一生誕100周年記念

尽きせぬ情熱　佐野正一生誕100周年記念

目　次

1	**年表**			11
	はじめに		設楽貞樹	13
2	**卒業設計**	科学技術中樞計画		14
3	**総論**	佐野正一氏　── 人と作品	石田潤一郎	22
4	**各論　佐野正一**			
	建築家として	モダニズムからのズレ	藤森照信	30
	建築家として	類まれな鑑賞者	米山　勇	31
	業界のリーダーとして	佐野正一氏の見ていたもの！ （新型コロナ禍は一過性）	岡本森廣	32
	業界のリーダーとして	崇高なる建築家　佐野正一氏	櫻井旬子	33
	業界のリーダーとして	“技芸”求め続けた建築人	西山英勝	34
	業界のリーダーとして	佐野正一さんの矜持に触れた 20年前の夏の日	松隈　章	35
	業界のリーダーとして	共創の設計思想から覗く佐野正一像	井上雅祐・浅沼拓也	36
	建築協会会長として	協会会長・先輩として ～佐野先生のこと～	金多　潔	37
	芸術の支援者として	偉大な建築家　佐野正一先輩に捧ぐ	嶋　高宏	38
	芸術の支援者として	都市の格 ～音楽ホールを持つ銀行本店～	勝田泰久　談	39
	事務所経営者として	設計事務所の継承	椚座正信　談	40
	父として	佐野正一の疾風怒濤 ～息子からの眼差し～	佐野吉彦	41
5	**注ぎ込まれた情熱**			
	音楽ホール	サントリーホール	眞鍋圭子	44
	音楽ホール	未完成交響曲 ～佐野正一のサントリーホールへの想い～	木村佐近	46
	駅・駅ビル	佐野正一の存在感 ～国鉄時代の建物設計を通じて～	佐竹鐵也	48
	駅・駅ビル	大阪駅ビル（旧愛称アクティ大阪） 設計での佐野正一	中西　稔	49
	駅・駅ビル	設計・組織作りの原点は国鉄・駅ビル	岡本弘之	50
	空港ターミナルビル	空港ターミナルビル 情熱と好奇心／直実行	横尾迪夫	52
	博物館	東京国立博物館平成館計画	大村鐵太郎	54
	ガスビル増築	佐野正一の思い ～大阪ガスビル増築設計～	原見昌志　談	56
	庁舎	設計担当者の立場から 「佐野正一の時代」を考える。	中川洋一	58
6	**佐野正一語録**			60
	謝辞と編集後記		設楽貞樹	62

特集扉　写真提供：毎日新聞社

佐野正一の軌跡

西暦	1921	1928	1933	1940	1942	1945	1946	1950	1955	1959	1961	1964	1972	1980	1981	1983	1985	1989	1990	1991	1994	2002	2014	2015	2021
	大正	昭和																	平成						令和
年号	10	2	8	15	17	20	21	25	30	34	36	39	47	55	56	58	60	64	2	3	6	14	26	27	3
	0歳	7歳	12歳	19歳	21歳	24歳	25歳	29歳	34歳	38歳	40歳	43歳	51歳	59歳	60歳	62歳	64歳	68歳	69歳	70歳	73歳	81歳	93歳	（94歳）	（100歳）
出来事	大阪市南区天王寺悲田院町に生まれる（1月10日）	大阪府立浪速高校尋常科（七年制高校）に入学 教会の日曜学校へ行き信仰を深め、洗礼を受ける。 町立御影小学校に入学	東京帝国大学工学部建築学科に入学（4月） 同窓に佐治敬三（実業家・サントリー）、小塩高文（物理学者）、曲直部寿夫（心臓外科医）ら。	卒業に至るまで安宅彌吉の奨学金を受ける。 池辺陽（坂倉建築設計事務所、東大教授）、石原尚（元国鉄東京建築工事局長）ら。 同級生に芦原義信（芦原建築設計研究所、東大教授、法政大教授、日本建築学会会長など）、 東京帝国大学を卒業（9月30日） 受賞）を題材とした。 卒業論文は浜田稔の指導で軽量コンクリートの研究を行い、卒業設計は科学技術中枢計画（辰野賞銀牌 6カ月短縮となったため、卒業論文と卒業設計をまとめるだけに変更された。 国有鉄道施設局建築課に入省（9月） で志望を変え、鉄道省に就職する。 大蔵省営繕管財局への就職が内定していたが、同省技師から東大助教授へ戻っていた吉武泰水のアドバイス 海軍技術士官建築技術部門に志願し入営（9月）	敗戦後、三浦半島の久里浜に帰還復員（11月） 工事主任官として着任。 軍事教育訓練機関後、海軍技術中尉に任官。マーシャル群島の小島にある航空基地の整備担当の現場へ 運輸省施設局建築課に復職（12月） 南太平洋マーシャル群島で終戦を迎える。	日本国有鉄道鉄道を退職（3月） 後に三代目京都駅の設計を担当。 課長補佐として設計基準のとりまとめや海外情報の蒐集などの仕事に携わる。 日本国有鉄道鉄道総局施設局建築課に転勤（8月） 東京駅本屋の屋根仮復旧の仕事を担当する。	大阪鉄道局天王寺管理部建築課長（9月） 大阪鉄道局施設部建築課長補佐（5月） 安井武雄の長女理（みち）と結婚（3月）	安井武雄の死後、監査役を辞任し、取締役として就任（6月） 安井建築設計事務所に監査役として入社（4月） 岳父安井武雄の発病の知らせを受けて国鉄を退職することを決心する。	代表取締役社長に就任（4月） 寿屋山崎工場（サントリー山崎蒸溜所）設計に対し昭和34年度日本建築学会賞（作品）を受賞。	業界における功績に対し昭和47年度大阪府知事表彰を受ける（5月） 東海道新幹線旅客駅（旧国鉄新幹線停車場）設計に対し昭和39年度日本建築学会賞（作品）を受賞。 日本建築学会賞を受賞	大阪市建築美観委員に任命される（3月）	建設省建築審議会委員に任命される（5月）	建設事業関係の功績に対し建設大臣表彰を受ける（6月） 大阪市建築審査会委員に任命される（8月）	藍綬褒章を受章（4月）	代表取締役会長に就任（1月）	日本建築士事務所協会連合会会長に就任（2月～1998年）	勲三等瑞宝章を受章（4月）	大阪市民表彰を受ける（11月） 大阪市都市景観の形成に寄与した功績により大阪市市民表彰〈文化功労〉を受ける	代表取締役相談役に就任（4月）	腎臓疾患のため死去（3月20日）	生前の社会、公共に対する功労を称え正五位を叙位（4月）	総合デザイナー協会（JDA）動画で観るミラノサローネ&佐野正一「特別功労賞」授与（7月） 「毎日・JDAの学生デザイン賞」金の卵賞（大学生の部）の建築部門に「佐野正一賞」が新設（10月）


国鉄京都駅〈3代目〉（1952）


サントリー山崎蒸溜所（1959）


大阪ガスビル新館（1966）


大阪国際空港ターミナルビル（1969）


大阪ターミナルビル アクティ大阪（1983）


サントリーホール（1986）


大阪市中央区総合庁舎（1989）


日本中央競馬会京都競馬場（1999）


東京国立博物館 平成館（1999）


幼少期（1924頃）


東京大学在籍時（1940頃）


海軍技術将校（1942頃）


社内風景


大阪国際空港ターミナルビル：祝杯（1966.6）


サントリーホール（1988）


出版記念パーティ：佐治敬三氏と佐野正一（1999.4）

日本建築協会でのあゆみ

- 工高生デザインコンクール審査委員長
- 青年建築家選考委員長（1956・1957）
- 出版幹事會 編集委員会委員長（1956～1957）
- 理事に就任（1956.4）
- 講演「建築と社会とのつながり」
- 法規委員会委員長に就任（1963～1968）
- 副会長に就任（1978.4～1984.10）
- 会長に就任（1984.11～1994.3）
- 建築クラブ代表（1992～1998）
- 名誉会長（1994.4）
- 「建築と社会」佐野正一特集号を発刊（2021.11）

はじめに 1（日本建築協会会長として　設楽貞樹）

日本建築協会第７代会長であり、現在の安井建築設計事務所の礎を築いた佐野正一が没してからはや６年余の年月が経とうとしています。当協会の会長在任は、1984年から1993年と足掛け10年にまたがる長いものでした。在任中の1987年に迎えた協会創立70周年に当たっては、春の記念式典を主催したほか、一連の記念事業として「日本建築協会賞」の創設、「関西の建築家50」などの出版や展示会開催、ヨーロッパ研修旅行の催行等々意義深い企画を実施したほか、在任期間を通じてその幅広い見識のもと、協会会員のみならず、広く関西の建築界にとって大きな功績を残した存在でした。

建築家であり、事務所経営者、業界のリーダー、さらには芸術の支援者・・と多様な顔を持っていた佐野正一。奇しくも2021年１月10日は生誕100年の誕生日に当たります。これを機に当協会では、その足跡をたどり、各方面にまたがる功績を浮き彫りにすることにより、そのマルチな人物像を後世に伝え残そうと特集を企画いたしました。

特集のキーワードは「情熱」です。尽きることなく内からあふれ出す「情熱」が人の心を動かし、類まれなリーダーシップを生み出す原動力になっていたと感じるからです。各執筆者の原稿が届く度にその感を強くした次第です。したがって特集のタイトルを『**尽きせぬ情熱**』としました。文語体でやや古臭いかもしれませんが、「尽きることのない情熱」と口語体で表現するより、簡潔で締まりがあると考え選びました。大正生まれの時代感覚に引きずられた（？）のかも知れません。

なお、本特集の構成は、冒頭の佐野正一の年表、東京大学の卒業設計の紹介に続き、下記の大きく４つで構成されています。

■石田潤一郎先生執筆の「総論」

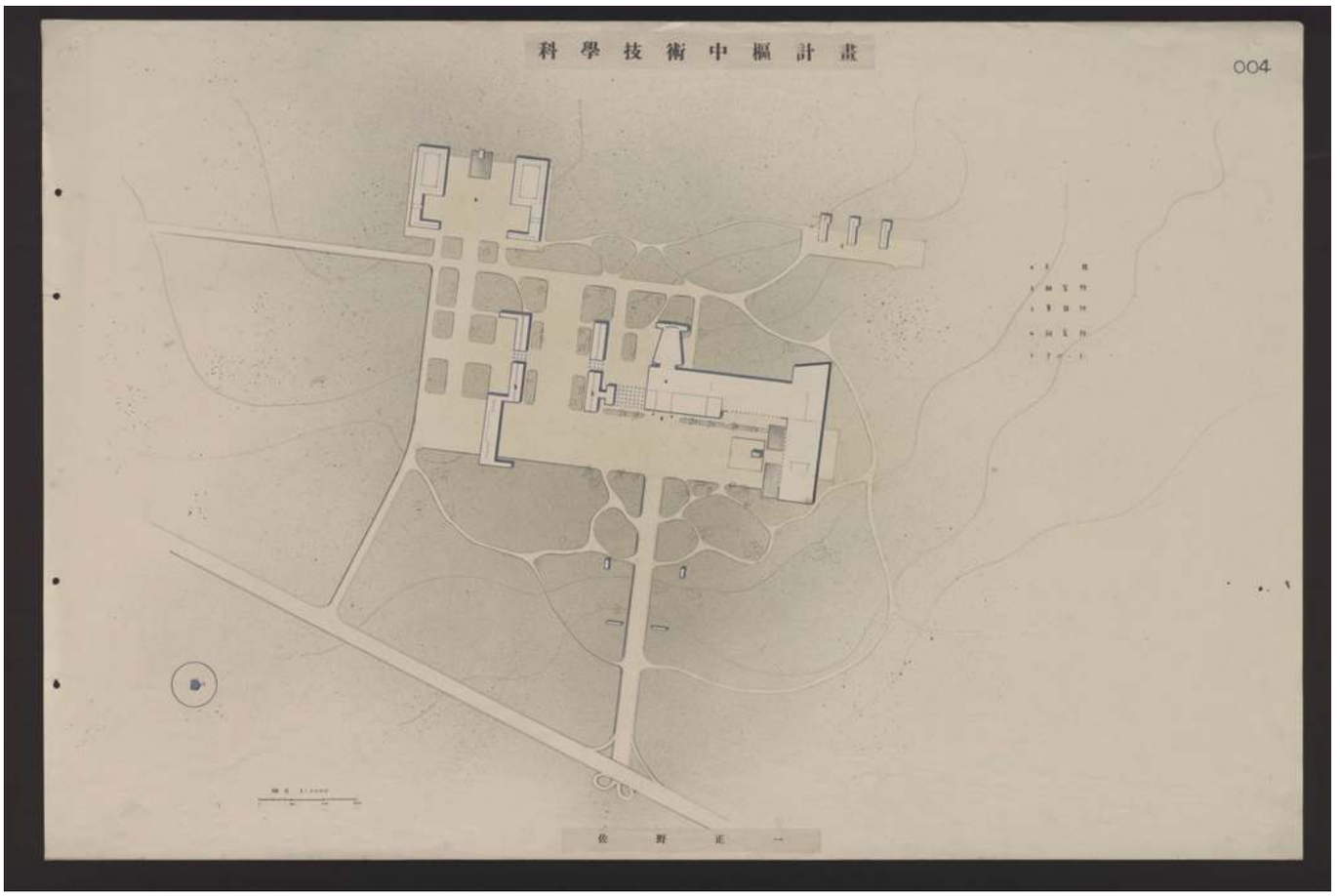
■執筆者それぞれの視点から佐野正一像を語る「各論佐野正一」

■佐野正一が設計に込めた思いをビルディングタイプ別に語る「注ぎ込まれた情熱」

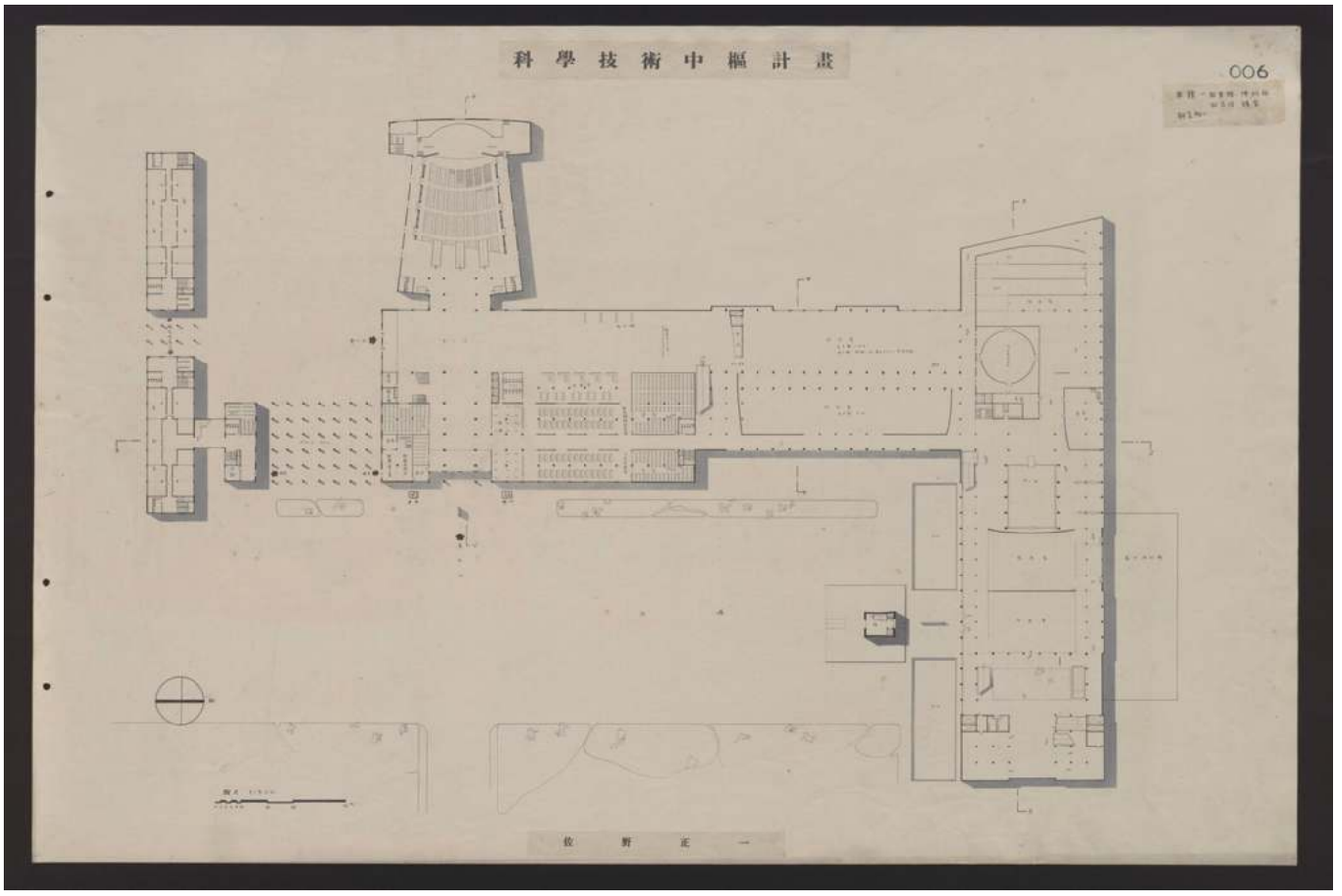
■佐野正一が生前語った、あるいは書き残した言葉の中から抽出した「佐野正一語録」です。

はじめに 2（安井建築設計事務所社員として　設楽貞樹）

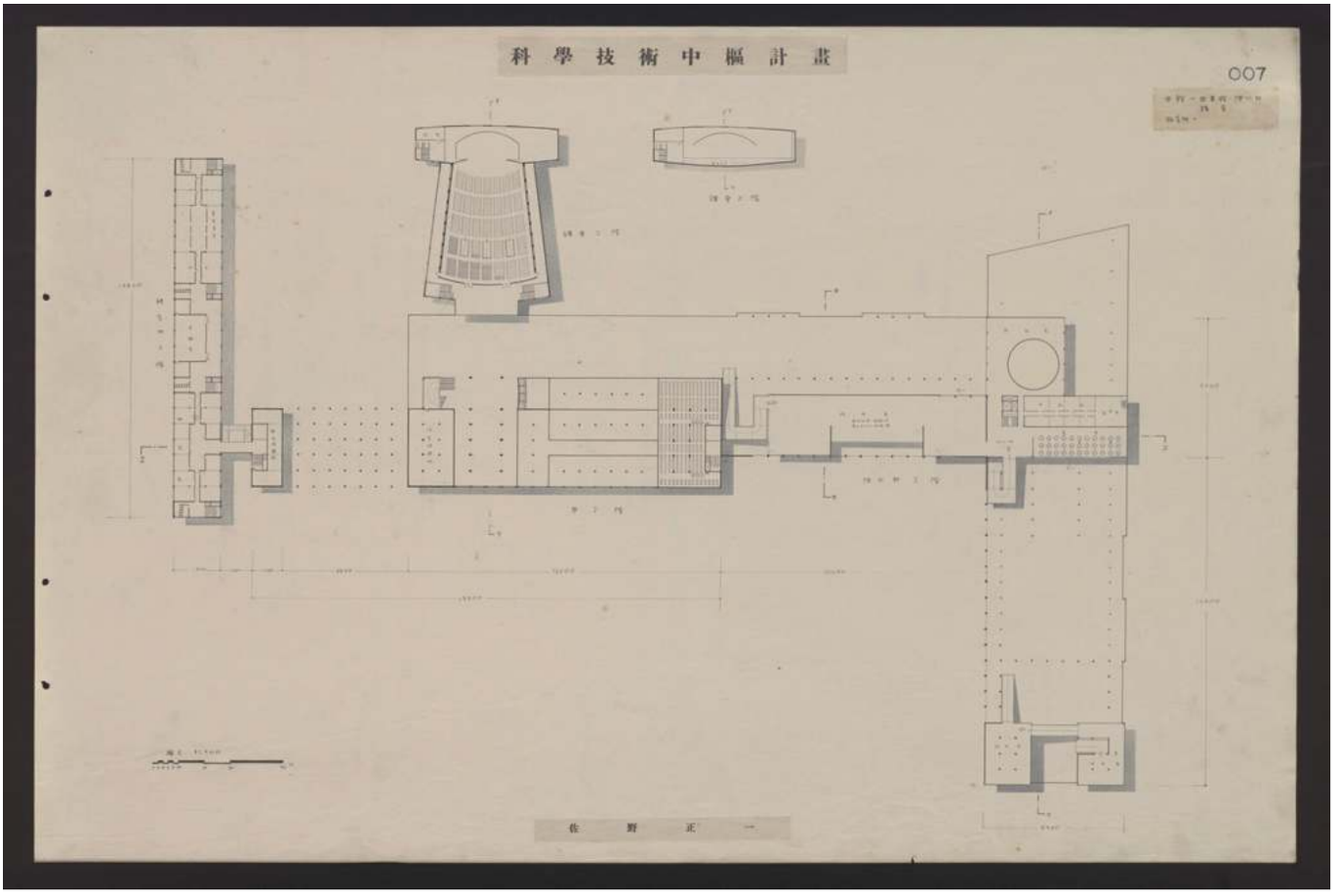
中表紙の顔写真は、佐野正一85才の新聞インタビュー時の写真です。85才にしてこの眼光。そしてその一瞬の目の輝きを逃さずシャッターを切って写真に定着させたプロカメラマンの腕、すべてが一致した瞬間がここにあります。社員からすると、この眼差しで睨まれた瞬間を思い出して、ドキッとするような写真です。表紙にはこれしかないと選びました。思えば社長室（のちに会長室、相談役室と室名は変わりましたが）には、随分な緊張感を持って入ったものです。時に予期せぬ視点からの指摘にドギマギしたり、「君の限界だな」とぴしゃりと言われたり・・実に怖い存在でした。しかしながら、そんな厳しい中にも社員とその家族に対する眼差しは温かいものがありました。そんな佐野正一像の一端を書き残すことができればという思いで取り組んだ特集です。佐野正一への感謝を込めて・・・。



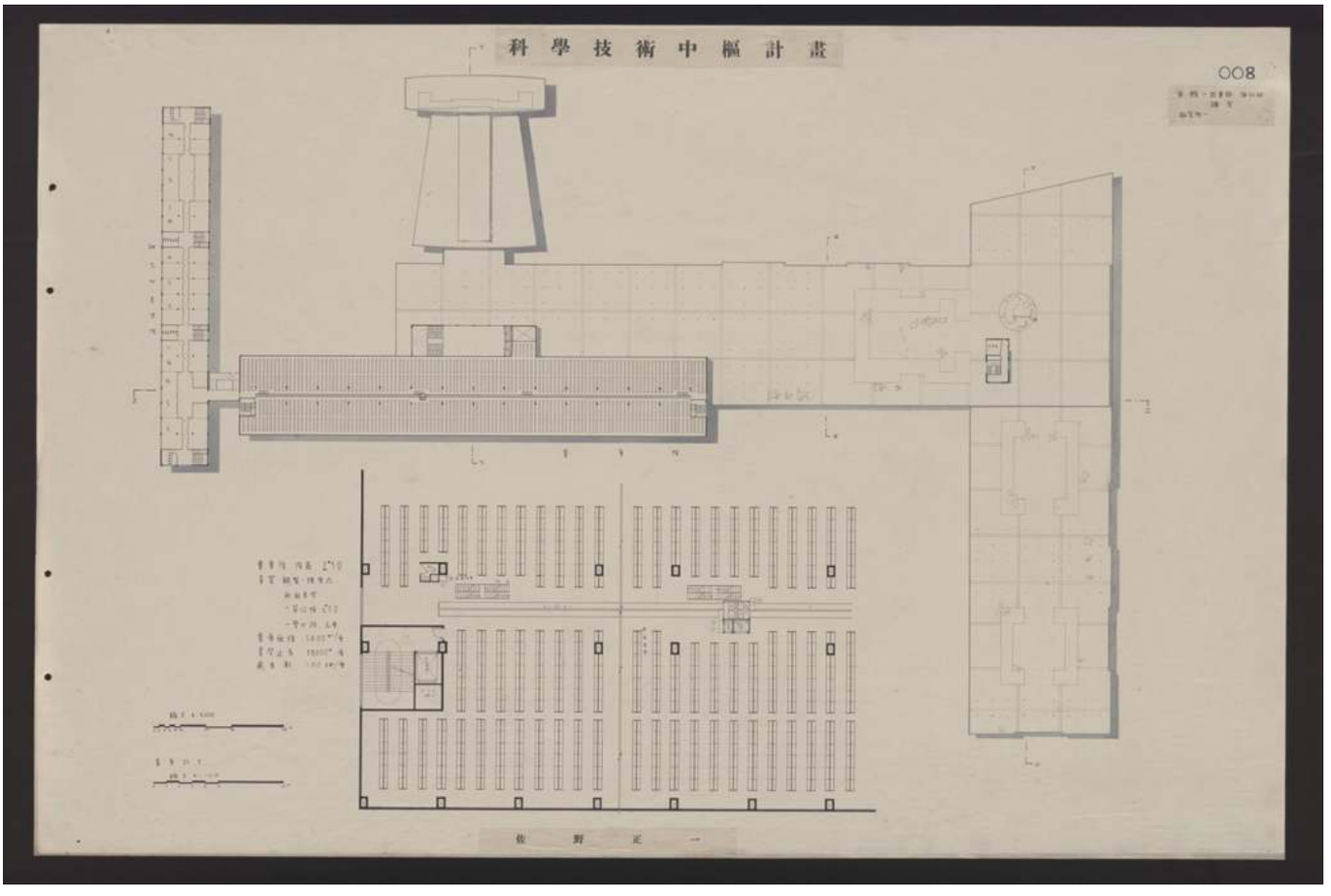
配置図



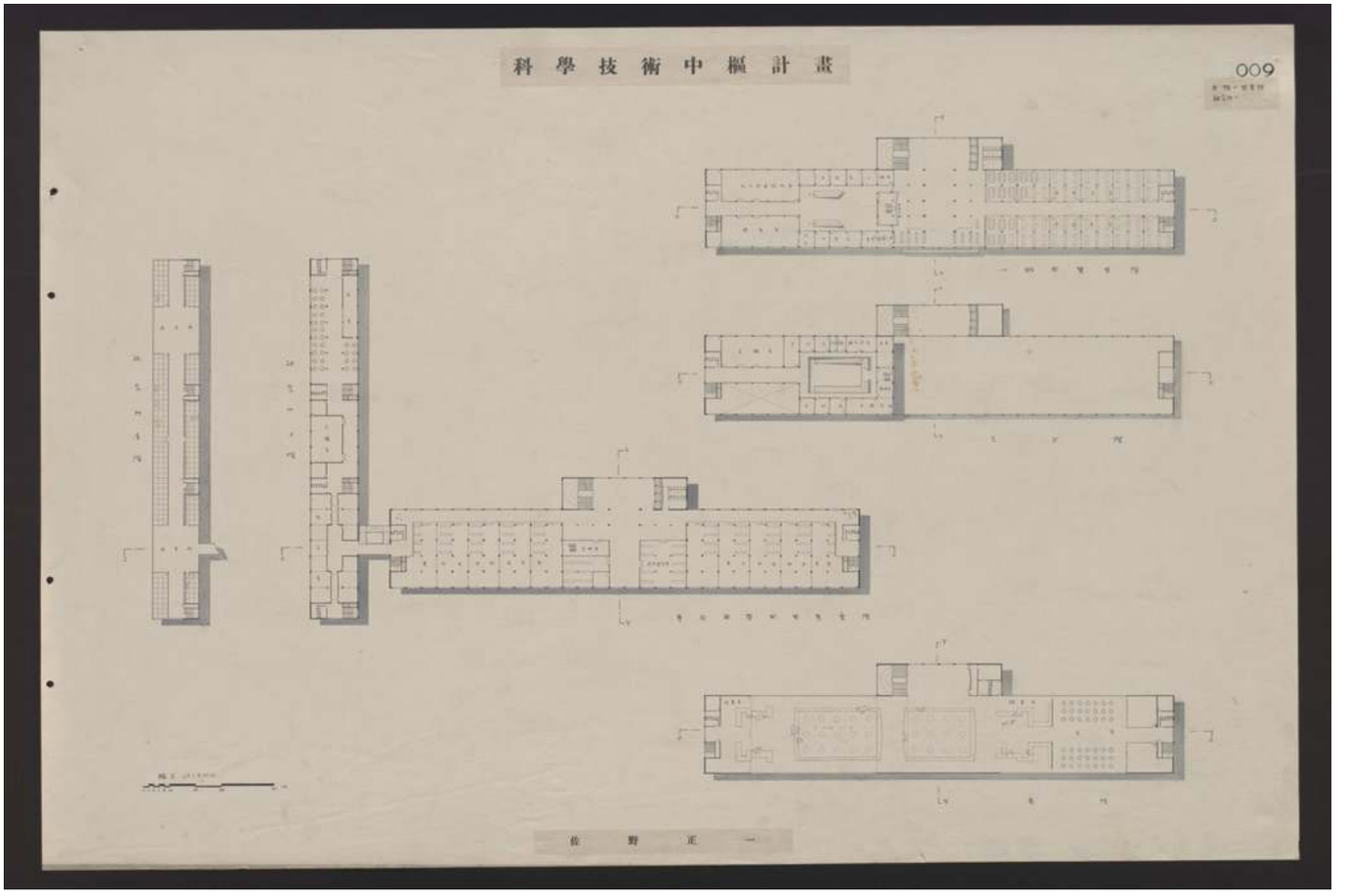
1 階平面図



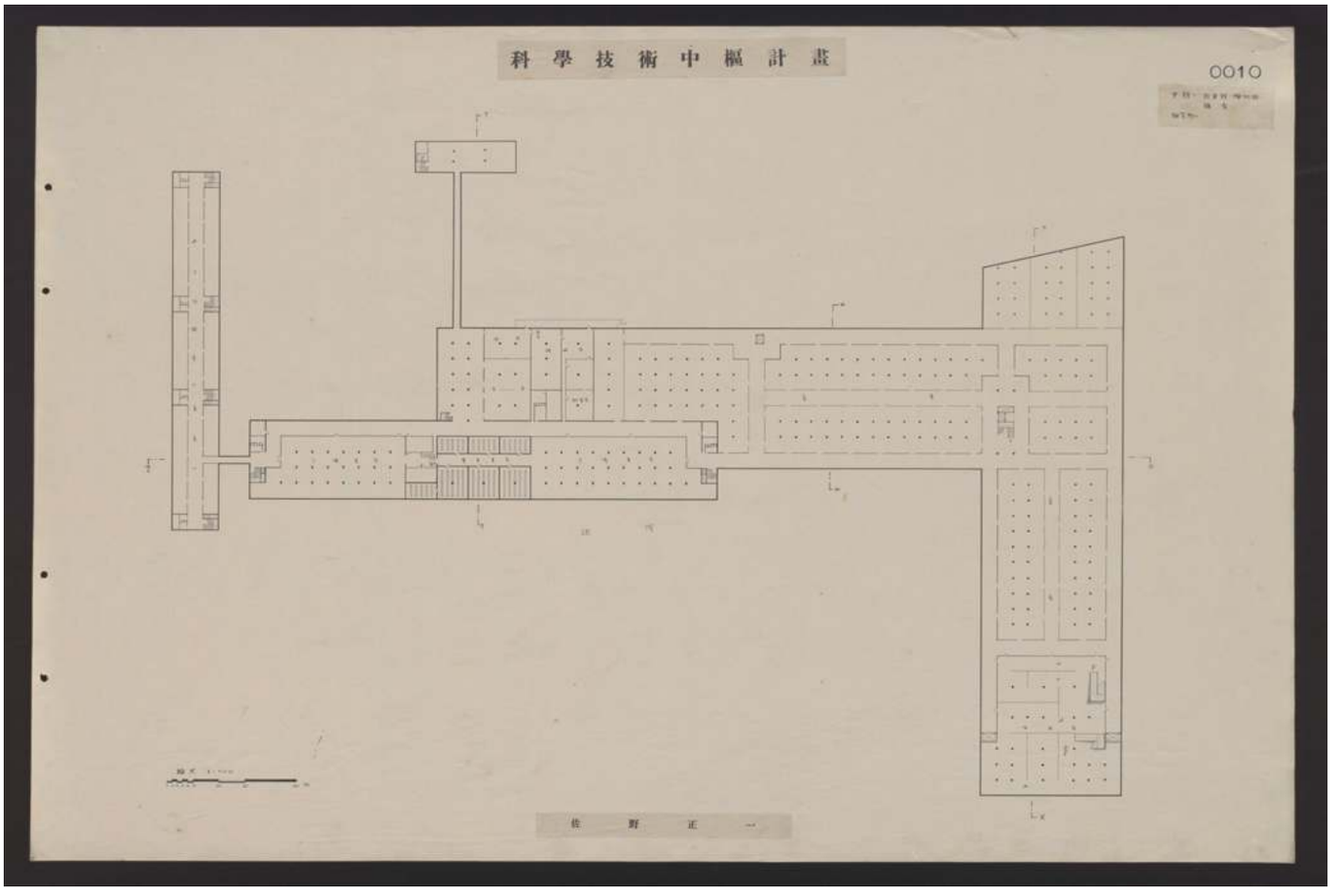
2 階平面図



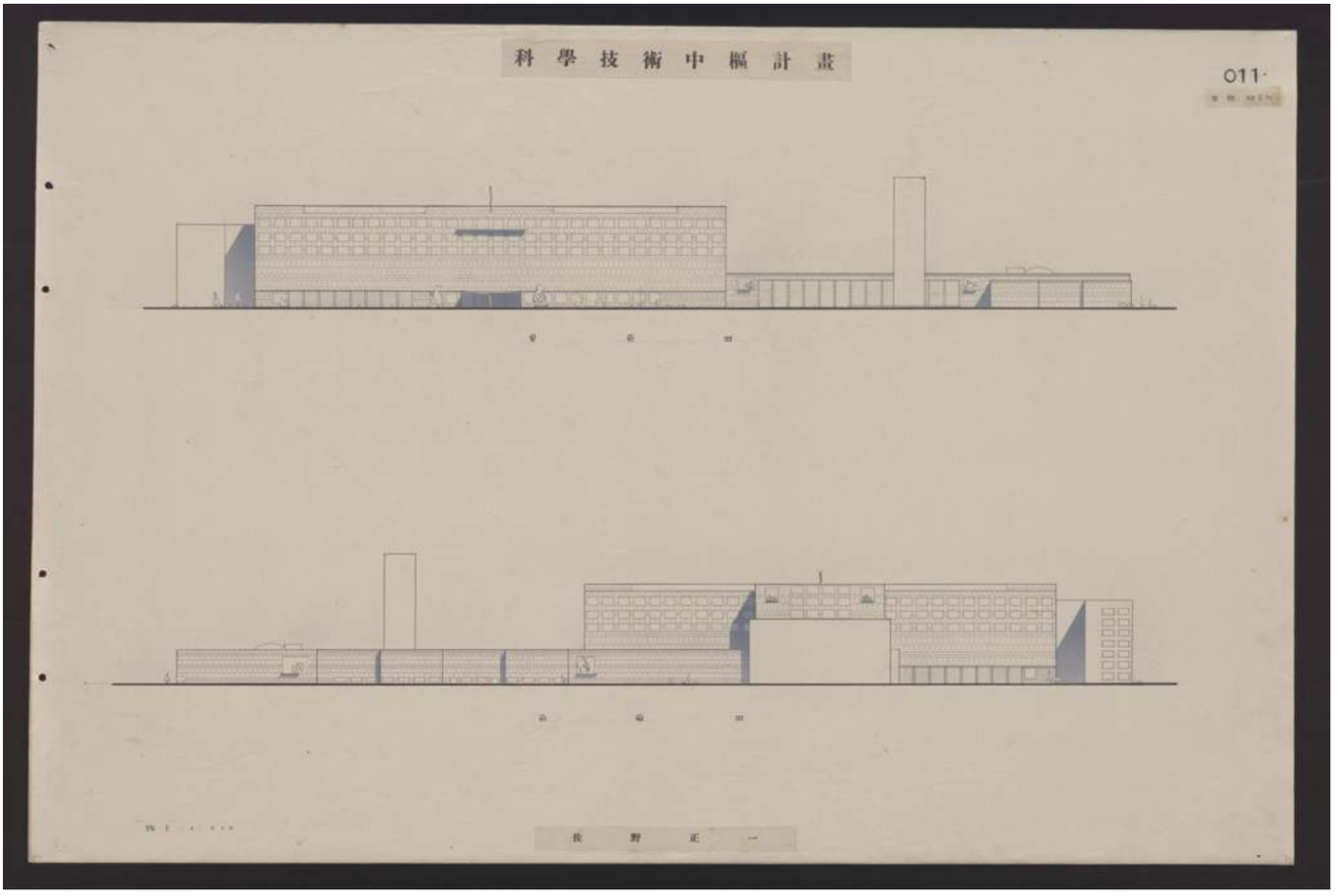
3 階平面図



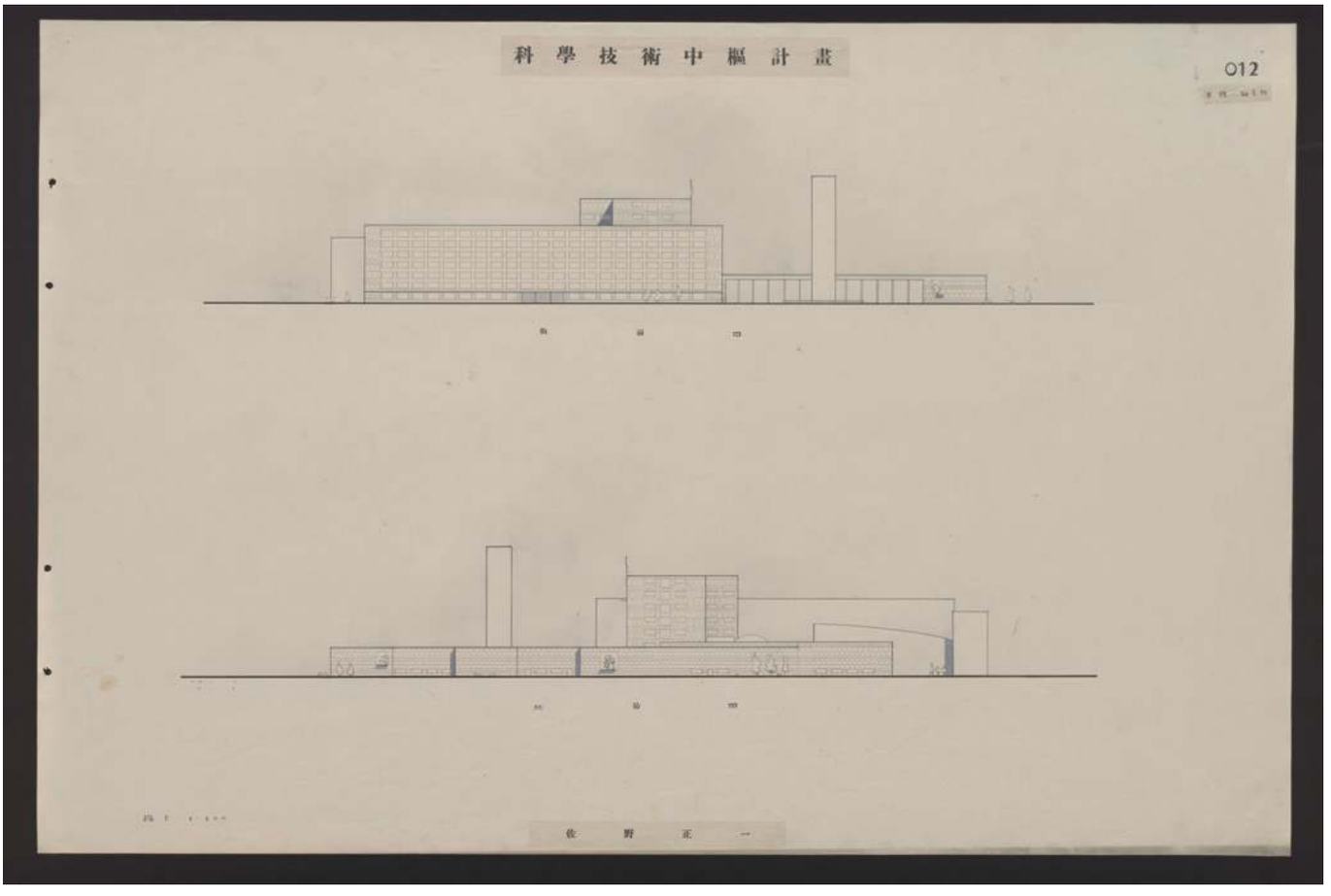
上層階平面図



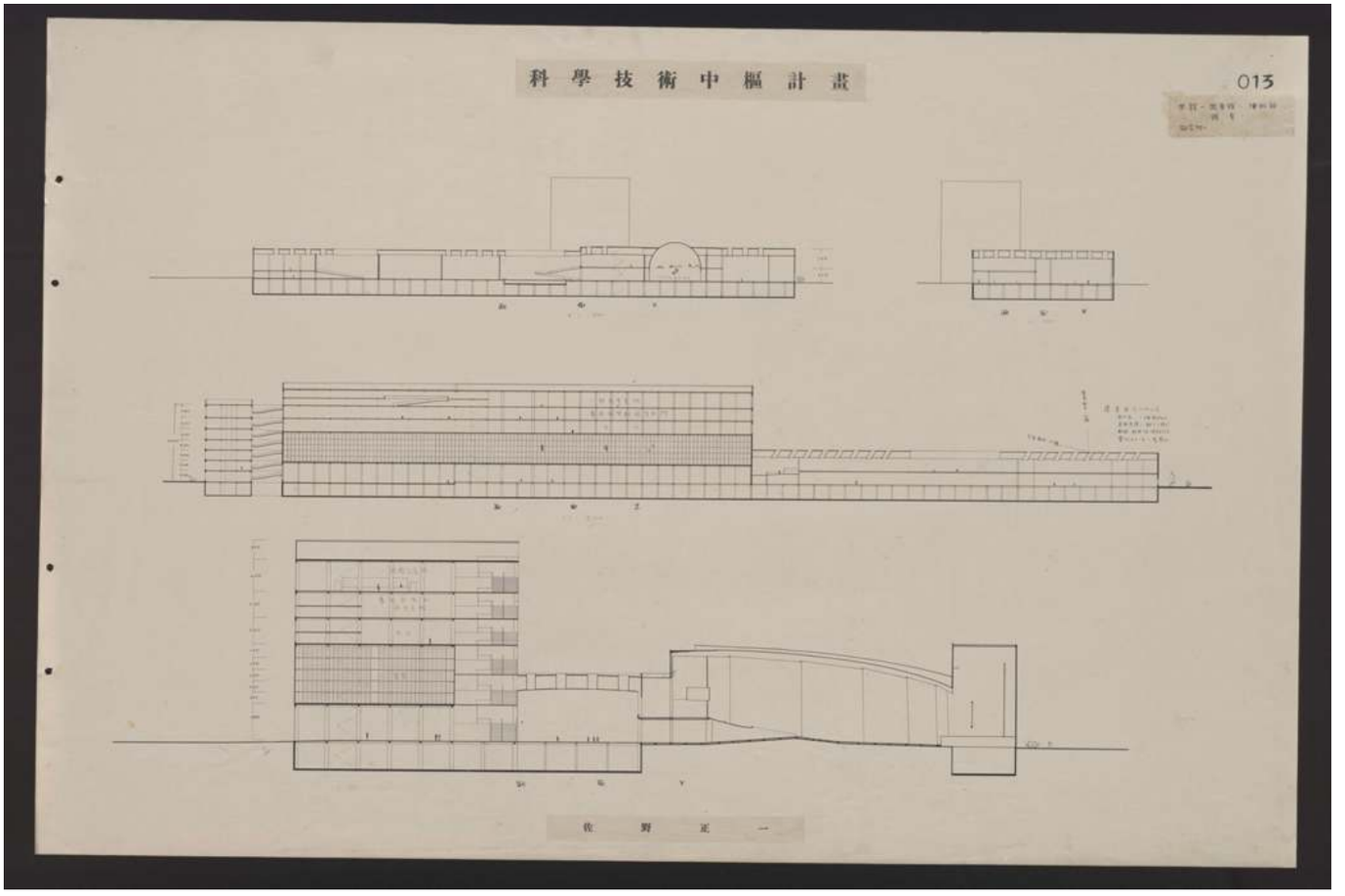
地階平面図



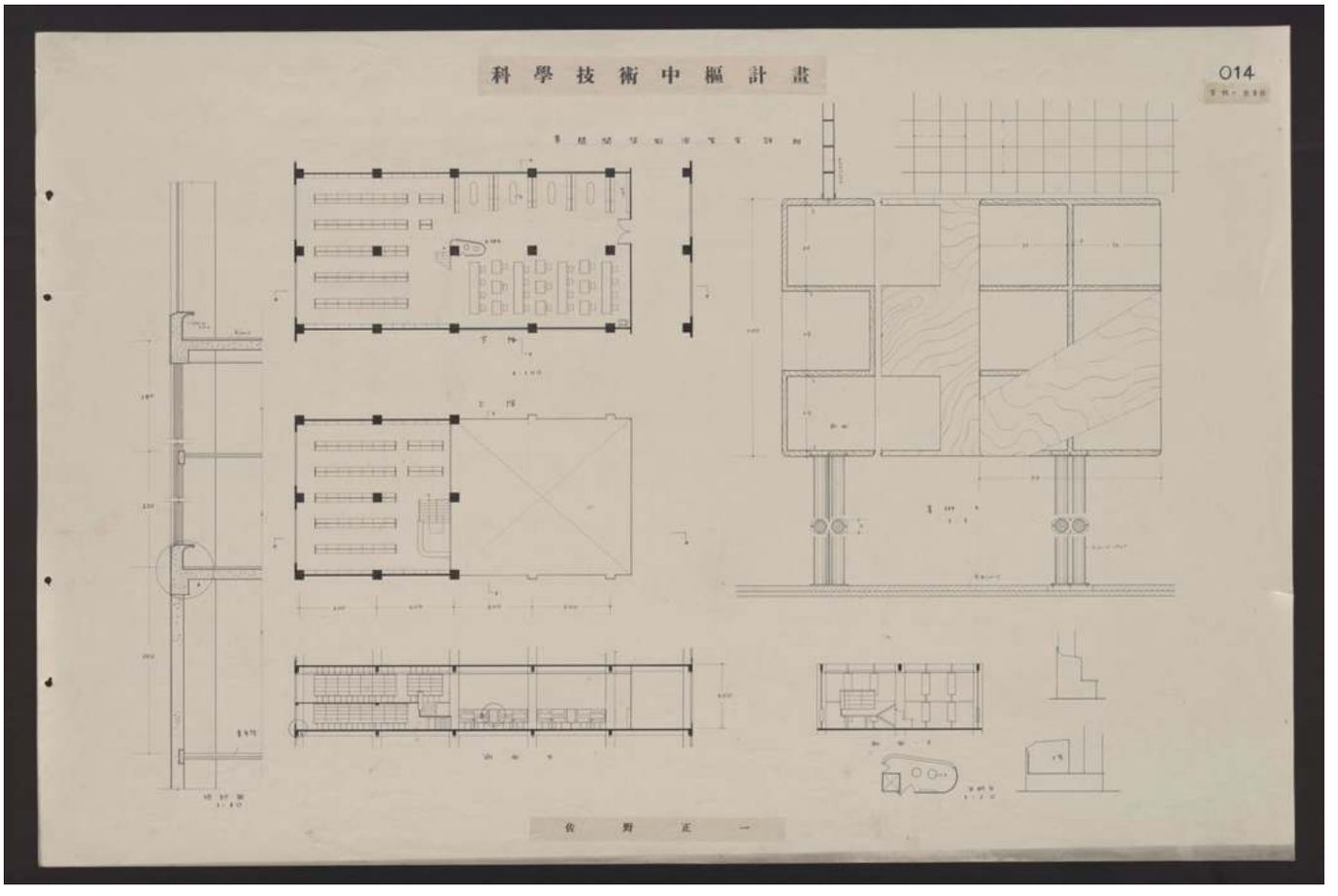
東・西立面図



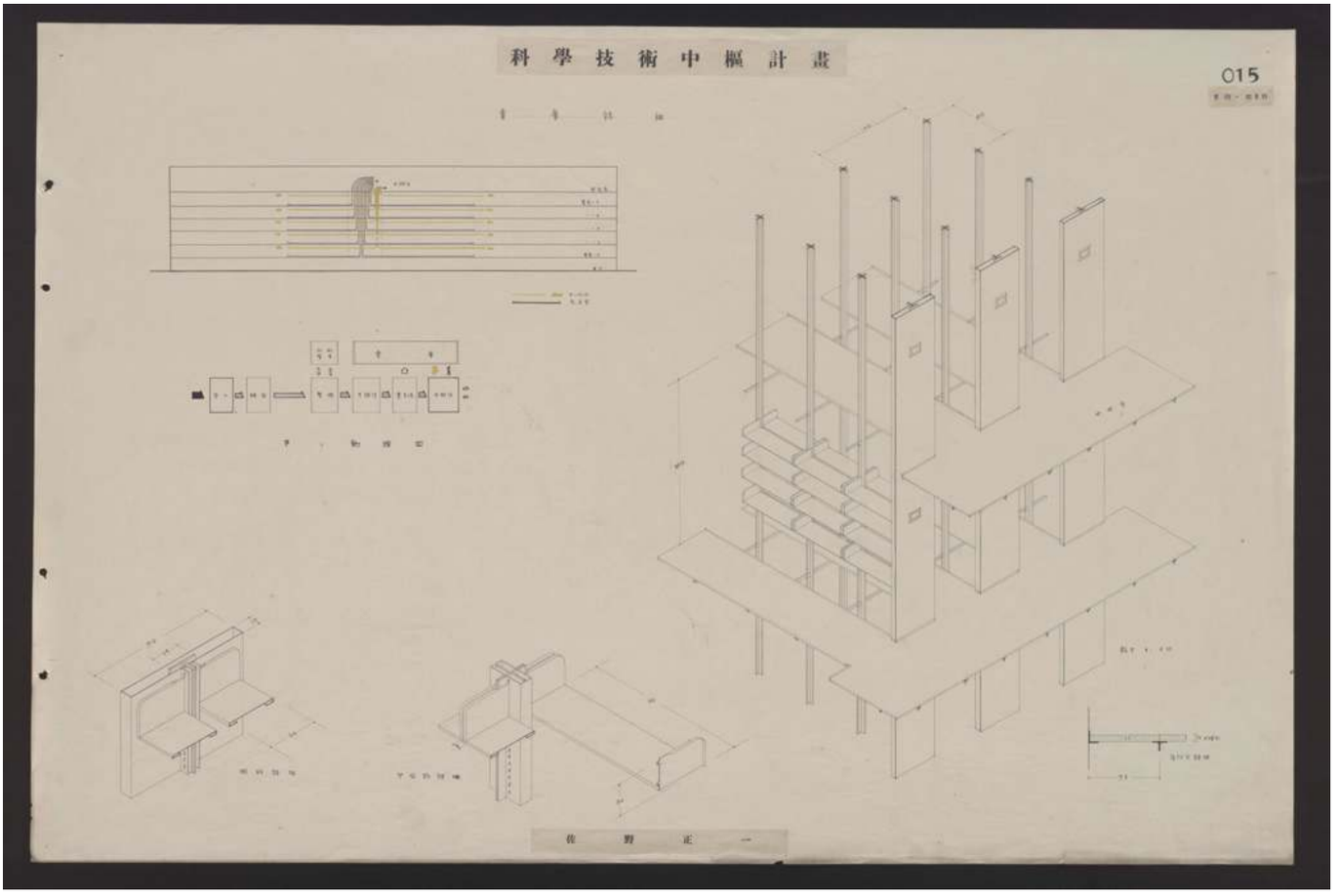
南・北立面図



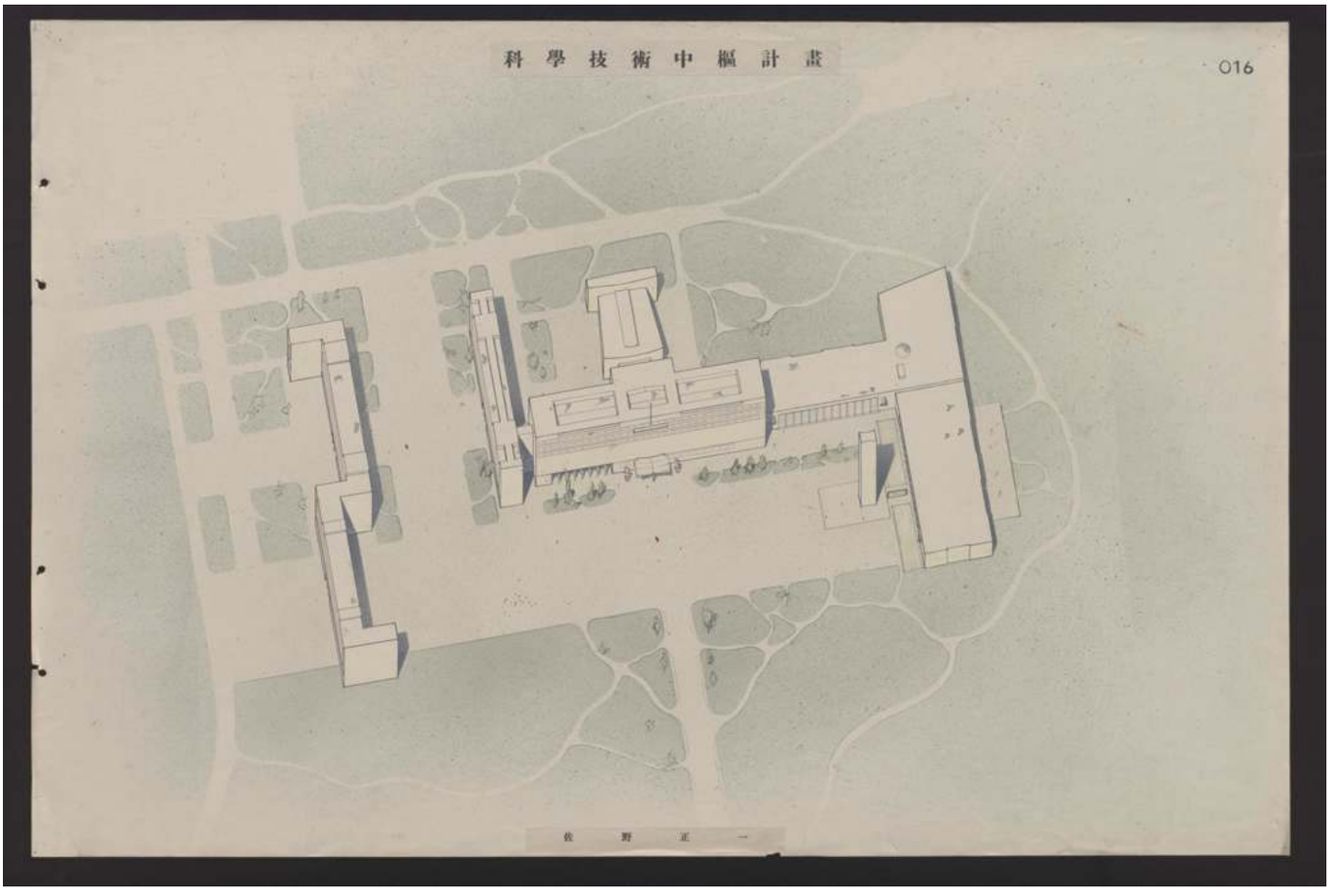
断面図



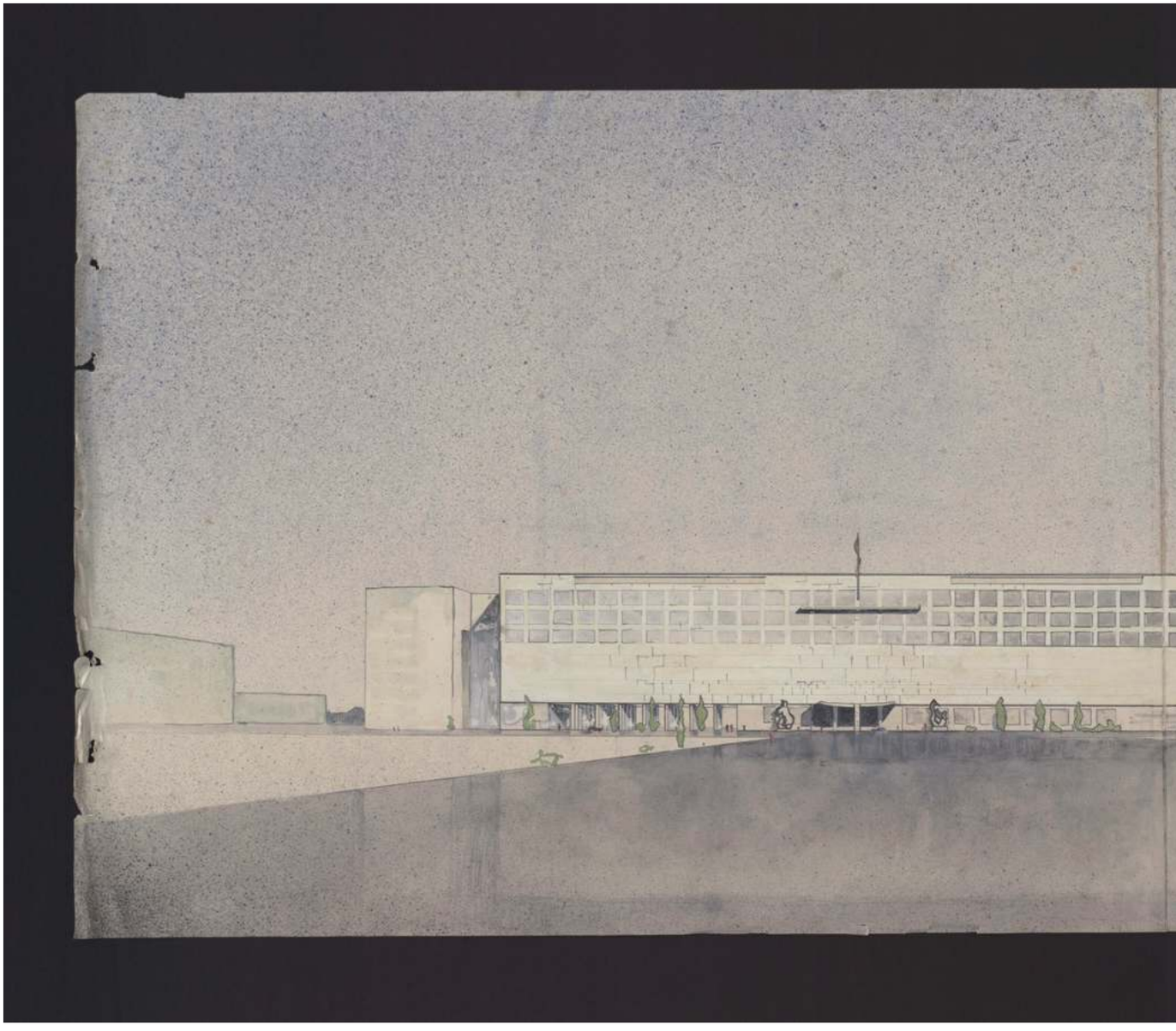
詳細図

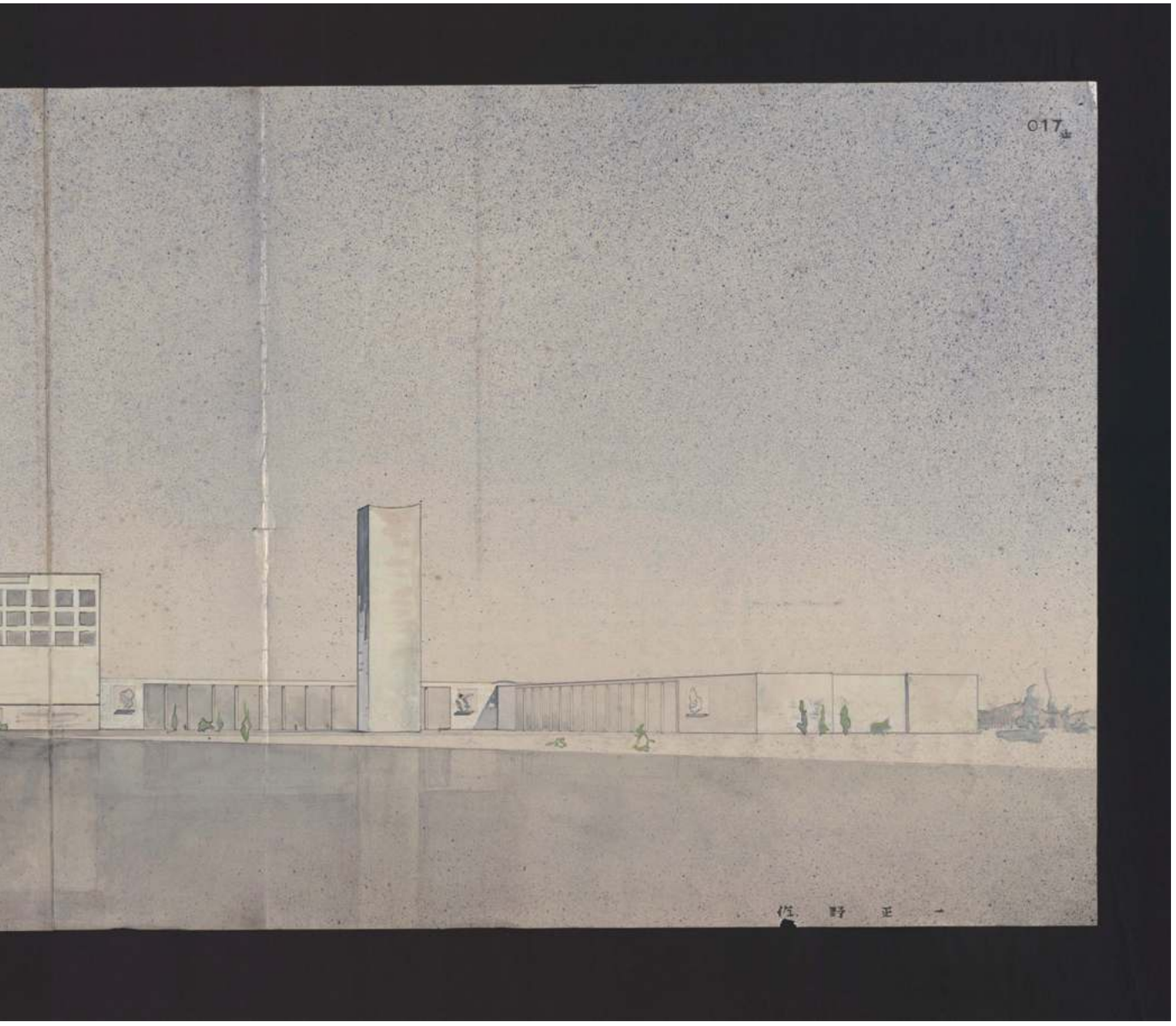


書庫・書棚詳細図



等角投影図





透視図

卒業設計

佐野正一1942年（昭和17年）の卒業設計（抜粋）である。本来の卒業は翌年３月であるが戦局急を告げる背景から卒業を半年繰り上げて９月の卒業となった。半年短くなった期間に卒業設計と卒業論文の両方をまとめるのは、大変であったことは想像に難くない。
卒業設計のテーマは「科学技術中樞計画」である。研究室、図書館、書庫、講堂という機能が配置され、日本の科学技術を推進する先端機能の集積というところであろう。まず驚くのが実に精緻に作図されていることである。そのほかに気づいたいくつかの特徴は、その後の佐野正一の設計手法、そして作品につながっていく原点とおぼしきものが複数発見でき、大変に興味深い。

◇モジュール設計の原点
図書館書庫のシステムが細かく示されていて、各書棚の寸法が詳細に図示され、その基準寸法から柱スパン、さらには建物全体の寸法が導き出されていることが見て取れる。これはのちに安井建築設計事務所にとっての大事な建物ジャンルの一つとなる空港ターミナルビルにおけるモジュール設計の原点となったのではと思われる。

◇建物配置の妙
卒業設計の敷地設定は森林に囲まれた丘陵地帯と見て取れる。後年の作品「野村総合研究所（1972）」の航空写真と見比べると、緑豊かなアプローチ動線や、建物配置に共通のものを感じずにはいられない。

◇バランスの妙
全体配置の中での塔の配置が絶妙で、建物群を引き締める役割を果たしている。これは佐野の国鉄時代の代表作であった三代目京都駅（現在の京都駅の先代）におけるシンボリックなタワーの配置につながっているように見える。（ちなみにこの塔は烏丸通の正面に配置されていたため、遠くから視認できる優れたアイストップになっていた。）
この卒業設計作品は優秀作品に与えられる“辰野賞”に輝いている。
今回、東京大学のご厚意により、この卒業設計作品を紹介させていただくこととなった。深く感謝を申し上げます。



野村総合研究所
撮影：佐藤建築写真事務所



三代目京都駅

佐野正一氏——人と作品

武庫川女子大学 客員教授
石田潤一郎

1952年鹿児島市生まれ。
京都大学工学部建築学科卒業。同大学院建築学専攻修士課程、同博士後期課程修了。
工学博士。京都工芸繊維大学 名誉教授。武庫川女子大学 客員教授。
専門は建築史、都市史。
日本の近代建築研究の第一人者。

主な著書
「関西の近代建築」など著書・論文多数。

主な受賞
2003年度日本建築学会賞（論文）、2015年度日本建築学会賞（業績：共同）など受賞。

1．建築を学ぶ

佐野正一は、大正10年（1921年）1月10日、佐野又郎と小春の長男として大阪市に生まれ、御影、豊中で育った。中高一貫の7年制高校であった大阪府立浪速高等学校（戦後、大阪大学に統合）に進む。そこで、のちのサントリー社長佐治敬三と級友になる。佐治は佐野正一について「学業優等、品行方正な模範生」と回想している。

佐野は卒業後の進路に迷ったが、絵が得意だったことから建築学科を候補の一つとして思い定め、安井武雄を自宅に訪ねて、進学の適性などについて質問をしている。安井の長女が御影幼稚園の1学年下にいたというつながりがあり、また大阪ガスビルの設計者として名前を知っていたという縁からだという。安井は「建築は才能が必要だから」と建築学科を選択することを必ずしも勧めなかったというが、佐野は自分の適性を信じ、昭和15年（1940年）4月、東京帝国大学建築学科に進学する。同級生は30名、プロフェッサー・アーキテクトとして名をなす芦原義信と池邊陽、新宮殿建設を統括することになる小幡祥一郎、清水建設の社長を務める吉野照蔵、電電公社で関東逓信病院などを設計する大沢秀行らがいた。そこでの教育、そして時代に対する感慨は、昭和51年（1976年）執筆の「戦中派の建築教育」（『建築雑誌』第91集第1106号）に委曲を尽くして述べられている。以下の在学中の記述は、この回想に多くを拠っている。

旧制の大学は3年制であったから、本来ならば昭和18年（1943年）3月卒業の予定であった。しかし、戦時体制の強化に伴って、昭和16年（1941年）10月に高等教育の修学年限を短縮する措置がとられ、佐野らの学年については卒業を6カ月早めて昭和17年（1942年）9月とされた。このため昭和17年の春休みと夏休みを潰して、6月下旬に卒業設計提出、9月中旬に卒業論文提出となった。

卒業設計の題目は「科学技術中枢計画」である。科学技術の振興のための行政、啓蒙、研究を担当する各機関、およびその所員の住居まで含めた複合施設であった。長手は366メートルに及ぶ大建築物で、そのため図面枚数も17枚に達した。佐野はこの制作で辰野金吾賞を受賞している。その内容についてはのちに改めて触れることになろう。

一方、卒業論文は、浜田稔教授の下で不燃材料を研究した。こうしたテーマとなった経緯について、佐野は次のように語っている。

> 頭の良さ無類と云われた先生には案外人間くさい抜けたところがあって私は勝手に私淑することにきめたものだ。卒業論文は都市防災を主題にしようと考えて先生にもちこんだら「君い、それより不燃材料やってみたらどうや」とあっさりかわされて、田中一彦君と組んで、私としたら場違いな方向に引きこまれるはめになる‥‥

また、そののちの座談ではより詳しく、こう語る。

> 僕は都市計画がやりたかったのだけれども、高山英華先生はまだ助教授で講座がなかった。そこで浜田稔先生のところへいって防災都市計画をやりたいといったんです。「よし、わかった、それをやれ、その前にちょっと手伝え」といわれた。軽量コンクリート関係の研究をやるというんです。軍や建設省あたりの委託研究があったのです。軽量コンクリートは‥‥防火材料として非常に重要だということですが、材料的には不備があった。その新しいものをこしらえろということです。アルミニウムの粉末を入れてこねる‥‥アルミニウムがだんだんなくなってきた。その代用をしないといかんというので、木の葉を燃やしたらいいだろう‥‥セメントがなくなった。そのかわりに昔からの日本の材料のタタキを改良するとか、いろんな代用材料ばかりです。

このときの研究成果は昭和18年（1943年）5月の『建築学会大会論文集』に「セメント、鋸屑、珪藻土からなる防火用の板に関する研究」として掲載されている。外壁の防火板としてセメントにおが屑、珪藻土のどちらか、あるいは両方を混和した厚さ15ミリの板を製作し、これを加熱して温度と強度の変化を調べたもので、結果を踏まえて、防火板の規格案を提示している。

ここまでの記述からもうかがえるように、佐野正一はきわめて優秀な学生であり、首席で卒業している。このことについて、佐野は以下のようにほやかして書いている——「卒業式のあと建築学科だけの別れの会があり、私は皆を代表してぼそぼそと謝辞を述べた」。

時間の流れが前後するが、全学の卒業式について、佐野は以下のように興味深い記述を残している。

> 昭和17年9月25日、安田講堂で卒業式があった。総理大臣東条英機、文部大

臣橋田邦彦両氏が臨席し粛とした盛儀であったが遺憾ながら感銘は薄かった。‥‥「壮行会みたいだな」誰かがぽつりと云った。総理大臣の大げさな身振りはまさに出征兵士を送るときそのまま空々しかった。

卒業後の就職先は鉄道省であった。入学当初から官庁に勤めることをイメージしていたようである。ただ東大建築学科では首席卒業者は大蔵省に任官する不文律があり、佐野もそのように決まりかけていたのだが、同省技師から東大助教授に戻ってきたばかりの吉武泰水に「アカデミックすぎてどうにもならん」と止められたのだという。歴史様式のデザインに固まっているというニュアンスであろう。そこで急ぎ鉄道省に追加してもらうことになる。

2．出征・復員、国鉄技師

しかし、佐野は鉄道省に勤務することなく、10月1日には海軍技術士官として入営する。訓練と研修を受け、三重県鈴鹿市加佐登の海軍基地で実務経験を積んだのち、技術中尉として翌昭和18年（1943年）8月にマーシャル諸島へ赴く。元来ドイツ領であったが、第一次世界大戦後、「マーシャル群島」の名称で委任統治領とした。佐野はその一つ、マロエラップ環礁の中心地、タロア島に置かれた航空基地整備の工事主任として、施設部隊の隊長を務めることとなった。部隊といっても、隊員は兵士ではなく、軍属身分の民間作業員であった。そこでの働きについて、佐野はこう書いている。

まず部隊の編成を軍隊編成並みの単純なものに立て直し、生活環境をこれに伴って合理的に改め、作業体制を責任明快で、変動に即応できるように工夫を加え一新した。日常作業は毎朝朝礼、隊長の訓示ののち海軍体操をやり作業場へ隊列行進、食事休憩も同様に規律を要求した。隊長の率先した実践によって体制も隊員の意識にも著しい変化が見られたと感じた。

この回想からは、佐野が決して単なる学校秀才ではなく、早くから（このとき満22歳である）将たる能力を示していたことが読み取れる。

着任当初は穏やかな日々であったが、昭和19年（1944年）1月30日、アメリカ軍はマーシャル諸島の攻略に着手し、マロエラップ環礁も爆撃と艦砲射撃を浴びる。米軍の上陸を受けた他の島々の日本軍部隊は次々と玉砕を遂げるが、マロエラップはいわゆる飛び石作戦の対象となって航空機による攻撃にとどまる。しかし、3000人余が駐屯する絶海の孤島は深刻な飢餓にさらされることとなる。畑を開いて作物を育てても、上空から見つかればそれも攻撃されたという。以前、インタビューした際に、この時期のことに話が及んだが、詳しくは語りたくない気配が明らかにあった。それでも『建築家三代』で佐野は「三年余の兵役の期間は長い人生の流れのなかではごく短いに違いない。しかし‥‥戦争を経験した人だけの知る生死をみつめた心の高鳴り、異常な体験をした鮮烈な印象は、以後永く記憶に残るもの」と書き記している。

昭和20年（1945年）8月の終戦によって武装解除され、同年11月、日本への帰還を果たす。12月、運輸省（鉄道省から改称）に復職を認められる。佐野はいみじくも「私の人生はこのときから始まるのだ」と書いている。

着任当初は本局に勤務して東京駅の修復にも携わる。昭和21年（1946年）3月には安井武雄の長女、理（みち）と結婚し、鶯谷の鉄道寮の一室に住まう。終戦直後の東京での生活はつらく、実家に戻るべく、大阪鉄道局へ転勤する。大阪には4年間勤務した。その間、主に天王寺管理区建築課長として戦災復旧、災害復旧の小規模工事に忙殺される。建築のデザインについて特に考えたことはなかったというが、「名もなき普通の家屋が‥‥地方の町の景観をつくっていくことに建築という仕事の本質がある」ことに気付いたのは貴重な体験だったと書いている。

昭和24年（1949年）6月に日本国有鉄道が独立する。これに伴って機構改革がおこなわれたのを機に、翌昭和25年（1950年）8月東京に戻り、施設局建築課長補佐を務める。その年の11月18日、京都駅が放火によって全焼した。佐野は新駅舎の基本設計を主導して、猛烈なスピードでまとめ上げ、翌昭和26年（1951年）3月には着工にこぎ着ける。竣工は昭和27年（1952年）5月であった。

国鉄では、このほかに共済組合の資金を活用しての職員用の病院、官舎の建設にたずさわった。また昭和29年（1954年）には宝塚市仁川にコンクリートブロック造の小住宅、織田邸を設計している。

3．安井事務所入社

佐野正一の義父となった安井武雄は戦中から戦後にかけて辛酸をなめていた。終戦直後は施工業も兼ねることでかろうじて設計活動を続けてきた。安井建設株式会社の作品としてカトリックダイゼスト東京支社という名が挙がるが、これは佐野正一の設計によるものという。昭和26年（1951年）1月、安井武雄は安井建築設計事務所を設立し、設計専業に戻り、大和紡績本社ビル（1952年）、日綿実業本社ビル（1953年）などで健在ぶりを示した。しかし、事務所を訪ねた佐野は、60歳代後半となった安井の健康を気遣う事務所幹部から業務の代行を依頼された。京都駅を完成に導き、国鉄での建築活動に意欲を持っていた佐野はその時点では猶予を願って、すぐには承知しなかったという。しかし、安井武雄は昭和29年（1954年）5月に心臓弁膜症を発症し、病勢は進んだ。昭和30年（1955年）2月、佐野は再度入社の懇請を受け、承諾する。その時点の決断を次のように回想している――「重大な時がきたと思った。こうなったら、もはや他人事のように傍観はできない。どんな対応ができるかはわからないが当たってみる他はない」。翌3月、佐野正一は国鉄を退職し、4月に安井建築設計事務所に監査役の肩書きで入社する。5月24日、安井武雄は71歳の生涯を閉じる。

その後の事務所経営について、『建築家三代』で佐野は、きわめてあけすけにこう述べる。

なんといっても主を失った安井事務所を世間はどう見るか、ことに深い愛顧関係にあった野村證券、大阪ガス両社の考え方が重大だった。安井武雄に対する個人的信頼が基本であっただけにその当人が亡くなったとなれば、この時機に縁切れとなるかもしれない。‥‥それだけはなにがなんでも避けねばならない。幸いに安井武雄生前に受託した設計の仕掛り物件がある。当面はこれを正確に完成させることだ。‥‥昭和29年までの仕事は、いつものように安井自身の細密なスケッチによりすべてが進行した。‥‥安井の死後の仕事では設計のベテランたちのつくりあげた図面に安井の流れをくんで調整の手を入れるのは私の責任になった。‥‥事務所として仕事をするからには特色をもつ仕事をしなければならない。当面私たちの目標は安井建築設計事務所らしい仕事ぶりをすることに限られていたはずであった。そうなればなにがなんでも安井流を打ち出せというわけだ。



大阪ガス京都支社

昭和30年代前半の作品はたしかに安井武雄のデザイン手法を踏襲したものが多い。そうしたなかでも、大阪ガスビルの造形言語を巧みにすくいとりつつ、佐野正一ならではの明快な平面計画と切れのよい比例感覚が現れているのが大阪ガス京都支社（1957年）である。佐野自身も『建築家三代』でこの作品については「事務所の存廃をめぐって混迷していた時期、大阪ガスから京都支社ビルの設計を依頼されて感激、奮起してこれをやりとげてまたまた感激」と、珍しく手放しで自賛している。それほどまでに事務所を急に継承することになった時期の苦難は大きかったといえるであろう。

4．クライアントの開拓

佐野正一が安井事務所を受け継いだ時点では、野村證券と大阪ガスからの受注が業務の大半を占めており、佐野はその偏りに怖くなったという。彼は他のクライアントの開拓を急ぐが、新しい注文主の筆頭はサントリーであろう。

発端は昭和31年（1956年）夏のことであった。寿屋の専務取締役、佐治敬三は、大阪・堂島川のほとりの本社に佐野を呼んだ。冒頭に触れたように、二人は旧制浪速高等学校の同級生で、親交があった。終戦直後、戦場から復員した佐野正一がまず佐治敬三を訪ねたほどの仲であった。ともに肩書きは重役であっても、年齢は若く、佐治は36歳、佐野は35歳であった（同級生なのに歳が違うのは、佐治敬三が浪高尋常科のときに病気で休学したため）。実年齢が若いだけでなく、二人のキャリアも緒に就いたばかりだった。佐治敬三が寿屋の経営を実父鳥井信治郎から完全にゆずられたのは前年の昭和30年（1955年）ごろのことであった。

佐治は、現われた佐野に対して、大阪府下島本町にある山崎蒸溜所の増築について相談をもちかけた。新しい麦芽製造場の原案を作ったが、巨大なものになり立面がまとめきれない、「何か、ええ知恵はないか、考えてくれ」――という依頼である。それまで寿屋では工場施設の設計については社内で処理し、特に設計事務所に依頼することはしてこなかった。その流儀で進めようとしたが、あまりにも無骨なものになりそうで泣きついたのであった。

佐野正一は佐治からの依頼に即答を避けて、まずは工場を視察し、関係者と協議した。それを通してこの建築の設計がいかに難かしいものであるかを理解した。そして、佐治が持ちかけてきたようなアドバイザー的な関与では、問題群を解決できないと考えた。彼の言葉を引こう――「基本となる技術的事項すなわちプラント、キルン、パイピング、設備、機器操作のすべてを充分に理解した上で、形態について、色調について、肌触りについてフリーな設計者の立場から新たに考え出さなければならないと覚悟を決めた」。こう決意して、佐治に対して、「寿屋山崎工場製麦工場の設計依頼と受けとめたい」と返答する。さらには、想定されている工場全体の刷新について、今の段階で施設のレイアウトや改築の順番を考えるべきことも進言する。こうして、安井建築設計事務所にとって、サントリーとの最初の設計契約が結ばれることとなる。この経緯には、与条件の全容をすぐに把握できる佐野の明敏さと、職能に対する厳しさがよく現れていよう。

佐野時代になってから獲得した業務のもう一つの柱は駅舎と空港ビルである。その早い例が国鉄の天王寺民衆駅である。昭和34年（1959年）に民衆駅方式で再建することとなり、9月、国鉄を中核に近鉄・南海・鉄道弘済会・日本交通公社・日本食堂・都ホテルが出資する株式会社天王寺ステーションビルディングが設立された。翌昭和35年（1960年）6月に着工し、2年間の工事を経て、昭和37年（1962年）9月に竣工する。設計監理者としては国鉄の東京工事事務所・大阪工事局・大阪電気工事局・天王寺鉄道管理局の4部署、そして安井建築設計事務所、天王寺ステーションビルディングの計6者が掲げられている。この間の事情について、佐野正一は『建築と社会』第43輯第10号でこういう。

> 民衆駅の原則にしたがって躯体と国鉄部分の内装設計は国鉄大阪工事局建築課で、民資部分の内装設計は私どもが担当して進める取りきめであったが、建物面積も大きく内容も複雑だから両者の作業の錯綜は避けられない。それがうまく協調して進み得たのは根底に関係者相互間の強い信頼と協力があったことが何よりも特筆されなければならない。

通例は、国鉄側で設計の骨子を固めて、外部の設計事務所は部分的に参加することになるのだが、ここでは安井事務所が設計を主導した。佐野が国鉄OBというだけの縁ではなく、「錯綜」を円滑にさばくことのできる佐野の手腕に対する「信頼」が醸成されていたからにほかならないだろう。

ここで目を向けたい佐野の発言がある。『建築文化』昭和32年（1957年）8月号に掲載された座談会「大阪の建築と建築家」の中での言葉である。

> 大阪の大建築家達が育ってきたルートというものは、大阪の経済勢力と結びついて非常に安定した制作態度で建築を追求してきた。‥‥そこで現実に対して批判的であるより先に、とにかく肯定しようというような姿勢が植えつけられてきたんじゃないかと思うんですが、建築が関西に伸びるには、そういった態度は一擲する必要があると思うんです。一擲するというのは単純に否定してしまうのではなくて、やはりその現実を見きわめて、十分にまず浸ってみる必要があるのじゃないか、そしてそれを否定しない限りは関西の連中から新しい建築家を育てるということは不可能じゃないかと思うんです。現実にとにかく対立してゆくだけの勇気、それと同時にそれをこなしていくだけの勉強を十分しなければ話にならない。‥‥それを乗り切った時に関西の建築が出てくるんじゃないかな。

現実を背負いながら、現実の中にそれを改革する契機を見出そうとする態度を求めている。それは村野藤吾の建築観とも通じるものがある。この現状に流されない醒めた姿勢がかえってクライアントの信頼をかちえたのではないか。ことに佐治敬三のような進取の気性をもった層にとっては魅力的に映ったのではないかと思われるのである。

5．佐野正一の事務所運営

佐野正一は取締役を経て、昭和36年（1961年）に社長に就任する。この間、事務所の性格は安井武雄の個人事務所から、組織事務所へと転換していくことになる。その変化がも

たらしたものについて、佐野自身は「事務所を構成する技術の各分野をバランスよく充実を図っていくこと」と「事務所の運営を経営的に考える姿勢」を挙げている。そして前者をさらに噛み砕いてこう語る――「私どもが目指してきたことは、組織を強化して多彩な提案能力を持つような事務所にしたい、ということでした。それは、意匠設計の部分だけでなく、構造技術でも設備の技術でもあるいはプレゼンテーションの技術、そういういろいろな部門で新しいものに蓄積をしていきたい。それによって、経済社会の信頼を確実なものにしていく」。そしてさらにまた「私らがやっている仕事は、最も完璧な建築技術をやろうとしている」と述べる（『建築画報』第25巻第215号）。

現実の社会において、建築はそれぞれに解決しなければならない多くの問題に遭遇する。その問題をいかに的確に把握し、いかに説得力のある解答を与えるか、この点において佐野が率いる安井事務所はきわめてすぐれた成果を挙げてきた。業務の中心は金融機関のオフィスビルであったが、そこでは、あらゆる災害を想定してそれらに完全に耐える性能を獲得し、事務機構を支える複雑な機械設備を統御した上で、良好な執務空間を提供するという一筋の隘路を探る営為が要求される。佐野は最初期の日本橋野村ビル新館から大和銀行本店ビル、新宿野村ビル、旧太陽神戸銀行神戸本部ビルにいたるまで、その困難な要請に応えつづけてきた。また、彼は建築計画学の発想をいち早く取り入れて、交通施設における乗客の移動・滞留をはじめて的確にコントロールする方法を確立した。天王寺民衆駅（1962年）、東海道新幹線旅客駅（1964年）、大阪国際空港ターミナルビル（1969・81年）などがその成果である。構造面の実績でいえば、阪神大震災で損傷を受けた作品が皆無であったことが何よりの証左であるし、設備については、多くの増築や複合用途ビルの設備を破綻なく設計してきた実績でわかる。

意匠、構造、設備、インテリア、工事管理、積算などの各部門に主体的に提案する権限を与え、しかし、佐野正一が全部門を掌握・指揮し、最終的に決定する。その責任の証として全設計図書に「S.S.」のサインをする――という「大型軍隊風のアトリエ型」を彼は平成元年（1989年）に社長を譲るまで貫徹した。

佐野の自伝的著作『建築家三代』において、このことに触れて次のように書き付けている。「私がアーキテクトとして最終決定をする。……補助アーキテクトの意見は聴くけれども最終決定はアーキテクトだ」。物事を大所高所から俯瞰しているような佐野の日頃の語り口を知る者にとっては、こうした勢い込んだ口調はやや意外に感じるだろう。しかし、顧みれば、佐野は事務所のテーゼとして「誇りと情熱」を掲げてきた。この標語と合わせて考えるならば、アーキテクトであることの誇り、アーキテクトたりつづけようとする情熱が佐野正一自身を突き動かしていたのだと納得できる。

6．佐野正一の建築デザイン

佐野正一が個々の作品を設計するときに、何を考えていたのか、それは『建築家三代』で当人が明快に語っていて、あますところがない。しかも、みずからの設計方法ということに関してもきわめて意識的である。佐野が自作の特質を約言した「機能主義と地域主義」「調和のあるオリジナリティ」という言葉は、実に的確である。

ただ一見分かりやすそうな佐野作品には、意外なほど周到な造形的な操作が隠されている。そして時代の刻印もそこには見え隠れしている。その一端を解きほぐしてみたい。

佐野正一の建築家としての出発点は国鉄在籍時代の京都駅にある。多くの人の記憶にあるこの建築は、取り壊される直前の錯雑たる使われ方をしている姿ではないだろうか。だが、昭和27年（1952年）に建てられた当時の写真や図面をつぶさに見直すと、この作品が実にくっきりとした空間造形上の提案を行なっていたことに気づかされる。

まず目につくのが、１階部分と２階部分を視覚的に分断しようとしていることだ。前面のコロネードの両端部での納まりを見ると、ここに出てくる柱の側面は２階の側壁と面一になるのだが、その面は中間の柱の側面と同様に黒御影を張る。つまり外壁全体を覆うクリンカータイルと見切りなしに切り替わる。また、西側面においては、コロネードの奥の外壁仕上げである黒のテラゾーがわずかに側面まで回り込む。

こうして１階から切り離された２階のヴォリュームは、両側壁が、２階軒から１階庇へ斜めに連続するという手法によって、「横長の台形の箱」という印象を見る者に焼き付ける。２階の軒は実際的な役割はないのであるが（前面は北を向いていて遮光の必要はない）、意匠的には側壁とおなじ見込みの版として空間を切り取らなければならないのである。

斜めに降りる側壁を上司、太田和夫は気に入らなかったらしい。だが彼の米国出張の隙に佐野はこのアイデアを強行したという。もし、この側壁がなく、２階の軒庇もなかったら、この立面は吉田鉄郎の大阪中央郵便局の低層部を引き延ばしたようなものとなる。そうした構造即意匠という1930年代モダニズム的表現を、しかし、佐野は採らなかった。

こうして切り出した横長の箱状のヴォリュームに対して、塔が直交する。塔も１階部分だけ仕上げ材をテラゾーに切り替え、大きく開口を取ることで、２階以上を縦長の直方体ヴォリュームとして見せる。縦長ヴォリュームの下端を横長のヴォリュームの下端よりわずかに下に置き、二つが噛み合う構成を明示する。塔に接するところの２階の窓が、袖壁のような見切りをおかずに、塔の側壁に突き当てになるところも、抽象化された幾何学形態の構成として見てほしいという意思の表われと捉えられる。

コロネードをくぐって内部に踏み込むと、その印象はさらに強められる。中央部分の改札口へのコンコースは天井がコロネードの天井がそのまま連続しており、単にガラスによって内部と外部が区切られているにすぎない。つまり外から見たときに認知される２階のボックスが、内部に入っても頭上に浮いて



三代目京都駅外観



三代目京都駅改札



天王寺ステーションビル

いるように感じられる。

ただ、さらに奥へ進んで改札室に入ると、空間像は、手品のように別の姿へ変えられる。改札室は東西25メートル×南北30メートルの大広間で、それが2層分吹き抜ける。しかも、まったくの無柱空間である。壁面はテラゾーを平滑に張り回した大壁で、掲示板等も完全にゾロに納められる。こうした処理によって、外観が提示する2つのボックスとは異なる第3のボックス状空間が内部に立ち現われる。

こうして、京都駅はきわめて抽象的なボックス群の構成物に還元される。ただ、細部においては、幾何学形態化からずれた心理的配慮が見出されることに注意したい。たとえば、改札口の直上の垂れ壁がわずかに前倒れになっている。それは乗客を迎え入れる姿勢だろう。あるいは、待合室や特別室の柱において、平面形が、中央部のくびれたバチ型になっており、角にアールがつけられる。さらには、2階食堂の壁面は大きくうねらされる。村野藤吾が自作を「遠目はモダニズム、近目には様式建築」と説明したひそみにならえば「遠目はノイトラ、近目はアールト」と形容できそうだ。

延々と佐野正一がまだ20歳代のころの（それも安井事務所以前の）作品をあげつらってきたのは、ここにすでに佐野の特徴が現われていると考えるからである。

初期の天王寺ステーションビル（1962年）は高層部を低層部屋上からのピロティに載せることで、巨大な駅舎を大小2つのボックスの組み合わせに還元している。広島ステーションビル（1965年）では側壁と方立の前方への突出を強調することで、建築物は垂直の版の組み合わせに還元される。

あるいは、屋上部分に化粧梁を飛ばして、輪郭を引き締める手法が目につく。野村総合研究所（1966年）、大阪国際空港ターミナルビル（1969年）、鹿児島空港ターミナルビル（1972年）などであるが、いうまでもなく、この手法はフレームによって囲われた箱状をなす仮想のヴォリュームを強く浮き立たせる。つまり、箱あるいは版への還元は継続して試みられているのである。



野村総合研究所

上に述べたことは、モダニズム建築に共通の幾何学形態化とは少し方向性を異にする。ここまでにも「版」という単語を用いたように、佐野作品で際だつのは平面（あるいはある程度の厚みをもった版体）である。

このことに思い至らせるのは、安井事務所の作品には構造体を外観に見せるものがきわめて少ないという事実である。すぐに思い浮かぶのは関西国際空港管制塔（1992年）と扇町キッズパーク（1997年）ぐらいではないか。大半の作品では柱型さえ明示されることはない。これも上記の語法と関連づけられるだろう。先にも触れた野村総合研究所は、野村證券関係の建築のデザインが、安井武雄の作風を継承したものから「近代主義、機能主義を表に出したもの」に変わる契機となったと佐野が述懐する作品である。白と黒とにまとめられた端正な立面は近代主義的な美学で貫かれている。配置計画は佐野がいうようにデッサウのバウハウス校舎に近いが、ファサードはファグス製靴工場を想起させる。だが、その柱型にはフィン状の突起が付けられていて、構造体の印象を消す。これによってファサードは自立したフレームという性格を著しく強める。御堂筋本町ビル（1985年）では、ファサードを3回雁行させるが、入り隅にマリオンを立てず、ガラス同士を直角に突き当てる。スパンドレルがミラーガラスの向こうに突き抜けていくように見える。このためマリオンがミースなどでそう見えるような擬似的な柱とは感じ取れず、マリオンとスパンドレルで構成される鳥かご状のボックスが入れ子になっていると見えてくる。



御堂筋本町ビル

佐野が「面の構成」を志向していることは、内部空間でより明らかになる。京都駅のコンコースにおいて、内壁が徹底的に面（つら）一（いち）に納められていたことを指摘したが、平滑な内壁は最近の作にいたるまで受け継がれる。東京国立博物館平成館（1999年）の内観は、外観の重厚さにくらべて、意外なぐらいシンプルである。エントランスホールなど、オットー・ワグナーのウィーン郵便貯金局を踏まえているのだが、こまかな分節を

排除しているため、ワグナーの世紀末的陶酔のかわりに、きわめて明晰な空間という印象を受ける。

畢生の力作サントリーホール（1986年）の内部もセセッション風の装飾を施されている。しかし、その彫りは浅く、かつ単純化されていて、むしろ内壁の平面性を強める方向に働く。客席は音響設計上、こまかな凹凸が随所にあるため、2階席壁の平滑さは目立つ。それでも、ここに繰り型を施したり材質を切り替えたりしないところが佐野正一の流儀なのだといわねばならない。

面を明示するために、内部においても柱や梁はしばしば隠される。柱列にさえぎられることなく視線が壁面に行き渡ることが望まれている。それはたぶん、林昌二の無柱空間とは質を異にしている。林は建築の内外を貫く空間の無限定性を求めるが、佐野はむしろ端然と囲郭された場の秩序をめざすといっていい。



大阪ターミナルビル

若書きの京都駅にうかがえたもう一つの特徴、すなわち控え目ながら有機性を導入することで、見る者の心理によりそおうとする姿勢はどうなったか。これもまた、格段の深みを増しながら、一貫して受け継がれている。たとえば、際だたされた壁面を魅力的にするために、その材質は徹底して追求される。それは端的には、日本橋野村ビル新館（1959年）のせっ器質タイルにはじまり、サントリーホール外壁の特殊タイルにいたるセラミックに対する思い入れとして示されるだろう。だが、それだけでなく、たとえば椅子の生地を壁クロスとして用いるといった頓才、大阪ターミナルビル（1983年）のアルミパネルのようにあえて工業製品に都市的表情を与えようとする冒険、さらには東京国立博物館平成館の超大判セラミックタイルへの挑戦として現われるのである。室内意匠で印象に残るのが、小品ながら（あるいはそれゆえに）佐野氏が愛着を持っていると推察される戸塚カントリー倶楽部クラブハウス（1997年）の2階ラウンジである。ここでは突き板が、壁から天井まで一枚の面のように貼り回される。それは村野藤吾の手法に触発されたのかもしれないが、むしろアドルフ・ロースのインテリアに近い。見えがかりの甘美さを排した抽象形態が、材料の質感によって強い存在感をもってくるところが共通するのである。



東京国立博物館平成館　撮影：エスエス東京

一方、直交座標系のなかに曲面・斜行面を挿入する語法は、サントリー山崎蒸溜所（1959年）の頂部を丸められた排気筒、また外側に折り曲げたようにわずかにとがった前面パラペットで大きく展開する。さらには大阪ターミナルビルの隅角の丸み、旧太陽神戸銀行神戸本部ビル（1987年）の曲面壁をへて、東京国際空港庁舎・管制塔（1992年）の半円の連続へ至りつく。

また、米山勇氏がその安井事務所論で佐野



サントリー山崎蒸溜所



旧太陽神戸銀行神戸本部ビル　撮影：ナトリ光房

正一の「CONCAVEなデザイン」と指摘しているが（「継承される『折衷』精神の諸相」（『新建築』2000年3月臨時増刊号））、ピンと張りつめた平面のなかに不意に内包的な空間が現われる語法も、こうした環境心理学的配慮として捉えることはできないか。

ここで、再度東京国立博物館平成館に触れたい。立面図を見比べるとよく判るのだが、本館（1937年）の立面の三層構成、縦長の窓の配列、中央車寄せの寸法などを、平成館はしっかりと写し取っている。その手法は本館の本歌取りといってよい。佐野は自他共に認める「増築の名人」であるが、ここでもその才腕が十二分に発揮されたというべきだ。米山氏は、日本人建築家には得がたい佐野のこうした能力を「折衷の精神」と呼ぶ。ここでは、既存の条件を捨象しないという姿勢に注目してコンテクスチュアリズムと名づけてみよう。与えられた文脈をとりあえず引き受け、それを作品のなかに生かそうとする心意気といいかえられるだろう。サントリーホールにしても、道路の下に潜りこませるという条件をあえて背負い込む。そのうえで、それを建築的に解決するために、屋上庭園として造形化する。

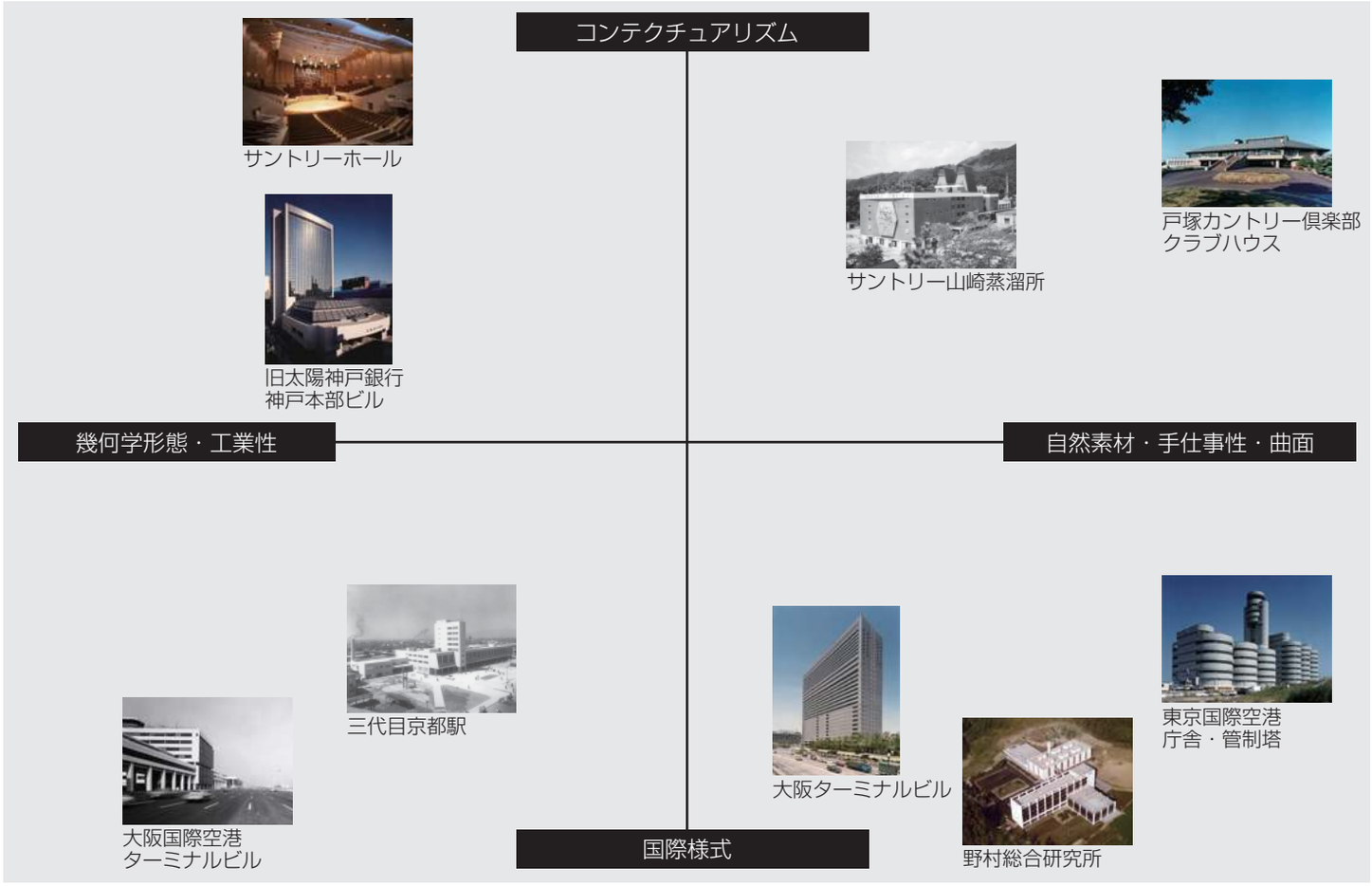
ここまでの分析を整理してみよう。佐野作品の形態的特質として、平滑な「版」で囲まれた直方体のボックスに還元しようとする志向が見て取れる。一方、それを補完する方向性として、自然材料や手仕事的素材の使用、曲面の導入による有機性の演出がある。この対立項と重なりながらも、次元を異にする二項《対立》を指摘できる。すなわち、「機能主義」をイメージ化した抽象度の高い造形――ここではとりあえずインターナショナル・スタイルと呼んでおこう――をめざす方向と、周辺環境や用途の由来などの外的ファクターによって形態を決めようとするコンテクスチュアリズムとの2方向である。先の対立項が作る座標軸と、このインターナショナル・スタイルとコンテクスチュアリズムの対立項が生成する座標軸は連動しそうで、しかし独立した枠組みをつくる。その微妙さが、安井事務所の作品群に共通性を与えつつ、それぞれに固有の意味を作り出しているといえる。こころみに2軸が構成する4つの象限に作品名を入れると下記のようになるだろう。

ここまで、安井事務所の作品を佐野正一のデザインの現われとして分析してきた。建築を意匠的側面からばかり問題にしては、「日本の建築家は『様式』を作ることに重点を置きすぎている」と語っていた佐野正一の気持ちからは離れてしまったかもしれない。

ただ、彼のいう機能主義と、作品が見せる表情の豊かさとは一体のものであることを指摘しておきたい。安井事務所を率いていくなかで――特に安井武雄の作品と否応なく向き合わされるなかで、佐野は多彩な造形言語を身につけていったはずである。勝手な推測だが、安井事務所の作品にしばしば現われる、階段状に折り上げる天井は、安井武雄の初期作品からのはるかな反映ではないだろうか。

7．その創造的精神

佐野は、安井事務所での設計を導く方向性として「デザインの安定した統一性を守ること、先端奇矯なデザインを狙わず調和のあるオリジナリティを採ること」を掲げている。これらの方針は、彼が捉えた歴史的パースペ



クティブのもとに構想されたイメージで裏付けられていると見るべきである。

『建築雑誌』第114集第1442号は、「二十世紀を決めた建築」について寄稿を募った。そこで佐野正一は「コルビュジエは……国際主義、機能主義をベースにモダニズムの新しい様式をつくりあげた。新鮮で明快なこの様式は急速に世界に強い刺激を与え、建築の主流として定着するにいたる。次々に発表された作品は一つ一つ異なった姿を見せるが、新しい時代の建築思想を目指す強い主張は共通している」と述べ、その上で「モダニズムの時代は終わって、ポストモダンの様式なき混迷の時代に移っている」と記す。ここで彼のいう「様式」は個々の作品に共通する基幹的な発想と手法とでも敷衍することが許されるであろう。ここで重要なのは、佐野がモダニズムを「様式」として把握し、信頼していたこと、そして「混迷の時代」に「様式」を打ち立てようと願っていたことである。事務所の設計においてデザインの統一性と調和を求める姿勢はこうした思考と通底するものである。

しかし、その一方で、佐野正一は盟友・佐治敬三が希求してやまなかった「エトヴァス・ノイエス（何か新しいことを）」という発想に深く共鳴していた。昭和44年（1969）に日本建築学会近畿支部でおこなわれた座談会「時間と建築」の席上、機能が変われば建築物は建て替わるべきと主張する白石博三や川崎清に反論して、佐野は「最初に構想された創造的な精神にもとづいてそういう形というものが継承される限りは……やはり私は生命はあり得ると考えます」と述べる。『建築家三代』の終章にも「建築設計の究極の目標は……新しい独創的な美しさをつくることにある」という言葉を見出せるのであり、「創造的精神」は彼にとってアーキテクトの本質をなすものであったといいうるのである。

佐野は自身の作風をしばしば「機能主義（あるいは技術主義）かつローカリズム」と説明している。それは、モダニズムを基調とする「様式」の完成と、常に独創的な発想を求める心―その双方を統合する方法論であるということができる。その意味で「機能主義」は、意匠的側面をも含む用語と見た方が正しい。一方の「ローカリズム」は端的にはサーリネン（佐野が愛着を隠さなかった建築家である）やアールトらの有機的表現を指す。時代が下がると、ジャコビアン・スタイルを連想させる木質材料の導入、あるいは19世紀末のゼツェッション的造形の参照などプレモダンに踏み込んでいる。東京国立博物館平成館の階段室が、オットー・ワグナーによるウィーン郵便貯金局のそれの本歌取りであることは実に意味深い。



「建築と社会」1988年10月号「座談会　大阪の文化と建築」より
左から佐治敬三大阪商工会議所会頭、岸昌大阪府知事、佐野正一日本建築協会会長（役職は掲載当時）

佐野正一はそうした自分の「様式」の完成形として東京国立博物館平成館の立面の「明快端正な美しさと豊かな表情」を挙げる。自身に向けられたその賞賛は、様式を喪っていく時代にあって、モダニズムの幅を広げ、その可能性を究めた営為への満足にほかならなかったであろう。

8．社会的・文化的活動

佐野正一は多くの建築組織の長を務めた。

日本建築協会においては、昭和31年（1956年）に理事に就任、昭和53年（1978年）から副会長を務め、昭和59年（1984年）に福田朝生急逝のあとを受けて会長に就任、以後約10年間の長きに渉ってその重責を果たし、平成６年（1994年）に名誉会長となる。会長在任中の業績としては、70周年記念事業の一環としての「日本建築協会賞」の創設、委員会制度の活性化、事務局の充実、地方支部の整理、在阪建築13団体の協会技術分野への加盟推進などが挙げられる。

建築職能団体でも積極的に活動し、昭和31年（1956年）ごろから日本建築家協会関西支部設立に尽力し、昭和35年（1960年）同協会理事、昭和44年（1969年）関西支部長に就任した。昭和49年（1974年）には大阪建築士事務所協会の設立にあたり、昭和63年（1988年）には同協会の全国組織である日本建築士事務所協会連合会副会長となり、平成２年から６年（1990年～94年）まで会長を務め、その後名誉会長となる。この間、大阪建築士事務所協会では平成２年（1990年）に会長に就任し、平成16年（2004年）まで務めた。このほか（社）総合デザイナー協会副理事長、（財）日本総合試験所理事など広範な団体活動にたずさわっている。

彼の社会的功績に対しては、昭和47年（1972年）に大阪府知事表彰、昭和60年（1985年）に藍綬褒章、平成３年（1991年）に勲三等瑞宝章、平成6年（1994年）に大阪市民表彰が贈られている。

一方、文化的活動としては在阪オーケストラへの支援が挙げられる。サントリーホールへの取り組みに如実に示されるように、佐野のクラシック音楽への愛着と造詣は並外れたものがあった。

佐野作品に英国建築の影響が見てとれるときがある。わかりやすいのはサントリー山崎蒸溜所だが、筆者が驚いたのは佐野の鎌倉の別邸のインテリア・デザインである。その英国風の格調は形態だけのものではなく、彼の生活、さらにいえば精神世界の投影であると感じられた。佐野正一は父の代からのクリスチャンでもあり、西欧的な教養人として身を持してきたことに思い当たるのである。

（いしだ　じゅんいちろう）

執筆者注：本稿のうち第６章「佐野正一の建築デザイン」については、佐野正一著『建築家三代』に寄稿した拙稿と重複する箇所がある

各論　佐野正一
建築家として

モダニズムからのズレ

東京都江戸東京博物館館長
東京大学名誉教授
工学院大学特任教授

藤森照信

1946年長野県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。現在、東京都江戸東京博物館館長・東京大学名誉教授・工学院大学特任教授。建築史家・建築家。
1986年、赤瀬川原平、南伸坊らと路上観察学会を結成、『建築探偵の冒険・東京篇』でサントリー学芸賞、1998年日本近代建築史の研究（『明治の東京計画』および『日本の近代建築』）で日本建築学会賞（論文）、2001年〈熊本県立農業大学校学生寮〉で日本建築学会賞（作品）を受賞。
近著に『建築が人にはたらきかけること』（平凡社）、『現代住宅探訪記』（世界文化社）、『藤森照信のクラシック映画館』（青幻舎）など。
建築作品に〈たねや　ラ・コリーナ　草屋根・銅屋根・栗百本〉（近江八幡市）〈モザイクタイルミュージアム〉（多治見市）など。

佐野正一さんの手になる多くの建物のうち、私が日頃何かと目にして印象深いものについて述べる。

一番よく訪ずれるのは上野の〈国立博物館平成館〉で、20世紀の建築をリードしたモダニズム建築との違いに「ああ、佐野さんらしいナァ」と思いながら中に入る。次に多く目にするのは〈サントリーの山崎蒸溜所〉で、西に向う新幹線の右手に、二つの突起とヨーロッパのエンブレム（紋章）風の巨大マークが目に飛び込むと、「こんな大胆な造形をしてよくうまくまとめたものだ」と感心する。背後の山との景観上の調和もちゃんと考えているし。〈サントリーホール〉は充実した内部以上に私には屋上庭園に関心があり、日本の建築緑化史を飾る名作だと思う。

この三作とも、こう改めて見直すと、モダニズムからのズレというか逸脱を特徴とする。

たとえば平成館の場合、窓を表現の主役とする一階、その上は壁が中心の階、一番上の水平連続窓の階、といったように全体を水平に三つの層に分けて構成する。三層構成にはヨーロッパの歴史主義が基にあり、モダニズムは許さなかった。

山崎蒸溜所の塔状突起はモダニズムなら四角なままで突き出すべきを、ゆるい山形にしているし、エンブレム状の装飾などモダニストは考えもしないだろう。この建物の窓が横長ではなく縦長のプロポーションを採るのもヨーロッパの歴史主義に由来する。

平成館と山崎蒸溜所の外壁に使われた自然石とタイルも、鉄（金属）とガラスとコンクリートの三種を旨とするモダニズムからはズレる。

サントリーホールは建物の上を緑化する屋上庭園を採る。これはル・コルビュジエがモダニズムの五原則の二番目に掲げ、一度全面的にやって止めたが、意地を張ってある時期まで目立たぬよう続けたという過去のあるやり方。科学技術を成立の基盤とする20世紀のモダニズムにとって、自然は理論と感覚の外部の存在であった。ただしコルビュジエを除いて。

佐野正一におけるモダニズムからの逸脱の源は、誰もが知るように安井武雄の名作〈ガスビル〉にちがいないし、ガスビルは歴史主義からモダニズムへの変化の過程のモダニズム直前のデザインであることはまちがいないが、“層の構成”“縦長窓”“石やタイル”“屋上庭園”はいずれも実は歴史主義に固有なデザイン要素ではない。

たとえば層の構成は、重力という力が人間の感覚に与えた結果の一つで、古典主義は三つの層を重ねることでこの感覚に応えている。それに対しモダニズムは、重力に応えた感覚が建築にあることを消そうとし、上下左右の無方向をファサードに求める。

縦長窓にも深い根拠がある。このプロポーションが生れたのは、窓の開口スパンを小さくしかできなかった時代の名残りと思われがちだが、それだけではない。窓という建築の内と外をつなぐ不可欠要素に人体のプロポーションとの一致を求めたのではないか。その方が、気持ちが落ち着くから。

石とタイルやゆるい山形は大地につながり、屋上庭園は人工物と緑の調和に通ずる。

重力、人体、大地、緑、いずれも歴史主義より前からあったこの世の根本にほかならない。エンブレムだけは、重力、人体、大地、緑とは性質がちがい、人間の文化の産物だが、しかしシンボルを求めるのは人間のそうとう深い文化的欲望から発っしている。

安井武雄は、科学技術の時代に歴史主義は時代遅れと確信していたが、しかし歴史主義に代るデザイン（モダニズム）がまだ見えない時期を生きた建築家だった。そして、ヨーロッパの歴史主義に変りうる可能性を求めて、和風や満州風やクレ（カーンに決定的影響を与えたアメリカの戦前の建築家、安井以外にクレに着目した建築家は知らない）の密林をさまよい、迷い、そうした試行錯誤の中で、建築の変らぬ本質として、“層の構成”“縦長窓”“石とタイル”を発見し、これをガスビルに投入した、のではないか。

それを継ごうとしたのが佐野正一だった、と考えてはどうだろう。（ふじもり　てるのぶ）


サントリーホール屋上庭園


サントリー山崎蒸溜所


東京国立博物館平成館

各論　佐野正一
建築家として

類まれな鑑賞者

東京都江戸東京博物館　研究員
米山　勇

1965年東京都生まれ。建築史家。
早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。早稲田大学非常勤講師、日本女子大学非常勤講師などを経て現職。著書に『世界がうらやむニッポンのモダニズム建築』（監修、地球丸）、『日本近代建築大全　東日本編』『同西日本編』（監修、講談社）、『米山勇の名住宅鑑賞術』（TOTO出版）、『時代の地図で巡る東京建築マップ』（共著、エクスナレッジ）、『けんちく体操』（共著、エクスナレッジ）など。
日本建築家協会ゴールデンキューブ賞特別賞（2011年）、日本建築学会教育賞（教育貢献）（2013年）受賞。

建築家佐野正一、今年生誕百周年を迎える関西建築界の巨人。彼の足跡を振り返るとき、私が思い浮かべるのは2つの顔 ── 音楽の愛好者、そして増築の名手としての佐野正一である。建築家が絵画や音楽、彫刻等他分野の芸術を趣味として嗜むことは何も珍しいことではない。だが佐野の場合、「聴くことと建築にかけてはだれにも負けない」と自負し、「音楽に関しては、趣味を通り越してプロ」と他人から言われるほどにこの芸術を愛していた。ここで興味深いのは「聴くこと」、すなわち鑑賞することと、「建築」が対になっていたことだ。徹底した「鑑賞者＝聴衆」としての姿勢が建築に向かうとき、総合的なコンサートの雰囲気というものを存分に満喫できる名作、サントリーホール（1986）を生んだ。

サントリーホールの計画に際し、施主の佐治敬三と佐野のふたりはベルリンに渡り、クラシック音楽界の帝王ヘルベルト・フォン・カラヤンに会って助言を受けている。カラヤンが佐野に直接教示した「音楽は、演奏者と聴衆が一体になってつくるものだ。ステージを中心に聴衆がこれを囲む形式が、その目的を満足させる」という言葉にしたがい、大ホールは、ベルリンフィルハーモニーホール（ハンス・シャロウン設計、1963）と同じヴィンヤード型となった。

このホールの音響は文句なく優れているが、それをとりまく付帯空間の雰囲気がまたすばらしい。佐野の生前、私は一度だけ彼と対談したことがある[1]。その時私は、「音楽を聴く環境として、あれほど最高なところはほかにないと思います。それに音響だけではなくて、バーラウンジの雰囲気がすばらしい」と述べた。それに対し、佐野は「やはりそれは私が好きだからでしょうね」と笑いながら答えたのを覚えている。その笑みは、作り手であると同時に鑑賞者である佐野の、音楽、そしてホールへの慈愛と自信に満ちていた。

一方、より純粋に設計技術の面で彼の業績を顧みるなら、増築の名手としての姿がひときわ印象深く焼き付いているだろう。日本橋野村ビルディング（1930／1959）、大阪瓦斯ビルヂング（1933／1966）という、佐野の岳父にあたる設計者安井武雄の名作の増築は、この分野における佐野の手腕を世に知らしめることになった。だが、増築の魅力を、他のどんな建築よりも感銘深く、大きなスケールで私たちに見せてくれたのは、佐野の最後の作品、東京国立博物館平成館（1999）であろう。

平成館の設計にあたって佐野と所員は、渡辺仁の設計による本館（1937）の建築を調べに調べたと聞く。その結果できあがった平成館は、基壇＋基準階＋アティック層という古典的三層構成の現代的アレンジ、連続する縦長窓、ピラスターの反転（ネガ）を思わせる凹形窓等、本館と意匠的に連続した続編＝広義の増築として捉え得る作品となった。

実は、博物館に近づく時点ですでに、佐野の仕掛けた建築体験は始まっている。上野公園からアプローチすると、本館の左側に寄り添うように平成館の寄棟屋根が少しずつ姿を現す。建物の軒高は20メートルと本館にそろえられているが、低く見えるのは建物がちょうど本館の奥行き分、後方に配置されているためである。古代建築を思わせるおおらかな屋根の勾配は、強い印象を与える本館の瓦屋根とのバランスと同時に、上野公園からアプローチする視線の動きを計算してのものであろう。建物に接近するにつれ、屋根の視覚的ヴォリュームは弱くなり、やがて視界から消え去る。来館者は歩みを進めるなかで、半世紀を超えた刻が凝縮される時空間を体験し、「増築」の面白さを感得させられることになるのである。

かつて日本橋野村ビル新館について佐野は、「旧館の設計図を見る私は客観的に視ることを建前にしていながら、次第に自分がそれに感動し引きずられてゆくのを感じはじめた」と述べている。石田潤一郎は、「過去の建築に感動できるという一見基本的だが多くの設計者が欠いている能力」をそこに指摘する[2]。そのような体験は、平成館の設計においても渡辺仁の本館について当然のごとく生じたであろう。

歴史的な建築作品を鑑賞者として味わいながら新たな創作を為していく増築の姿勢は、音楽の感動体験を包み込むホール空間の設計とまったく等質な、佐野正一の美学そのものであった。類まれな鑑賞者としての創造者 ── 建築家佐野正一の特質を表す言辞はそれに尽きるのではないか。　（よねやま　いさむ）



1．＜書評対談＞佐野正一著『建築家三代』（『建築画報』2003年3月号）
2．佐野正一、石田潤一郎『聞き書き 関西の建築―古き良き時代のサムライたち』、日刊建設工業新聞社、1999年

各論　佐野正一
業界のリーダーとして

佐野正一氏の見ていたもの！

（新型コロナ禍は一過性）

公益社団法人大阪府建築士会会長
岡本森廣

1949年生まれ。
公益社団法人大阪府建築士会会長　前近畿建築士会協議会代表会長、現近畿建築士会協議会纏め役　前国土交通省中央建築士審査会委員　大阪府収用委員会委員　前公益社団日本建築士会連合会前副会長・現理事
１級建築士　１級建築構造設計士
インテリアプランナー、１級施工監理技士　公害防止管理者
2015年黄綬褒章、2020年旭日小受章　授章
主な受賞
1998年奈良県住みよい福祉のまちづくり施設賞最優秀賞(生駒駅設計・監理)、2000年大阪心ふれあうまちづくり賞大阪府知事特別賞（安堂駅設計・監理)、2000年奈良市建築文化賞（学園前駅及びビル設計・監理)、2011年鉄道建築協会賞入賞（川越冨洲原駅)、2019年志摩観光ホテル耐震改修優秀建築賞

■はじめに

私が故佐野氏と言葉を交わした回数はほんの数回である。にも拘らず強烈な意識と薫陶を未だ胸中に「マグマ」のごとく抱いている。ここでは、印象的で私の中で強く記憶に残る次の３点について記したい。

１．総会・懇親会上での教示
２．建築士会と事務所協会合併
３．全国大会中止の決断

■総会・懇親会上での教示について

1988年（昭和63年、32年前の５月28日）の社団法人大阪府建築士会の総会の日に、初めて言葉を掛けていただいた。当時、佐野氏は大阪府建築士事務所協会会長であり、会の前身は建築士会の事務所部会から発展的に創設されたこともあり、わが会の総会には必ず出席いただき、挨拶と乾杯の音頭をとられた。

懇親会の宴たけなわの時に知らぬ間にスーッと寄ってこられ、「君は若いのだから
①目先や周りに惑わされずに常に国際環境や社会からの視点がどうなのか、身内ではない・社会の目で建築士会・自分をみる
②将来展望・夢を描き実現させる戦略・戦術を持つ」
と話された。

その時はさほど強く記憶に留めることは無かったが、時間を重ねて様々な委員長や副会長、会長になり、多岐重層で輻輳する課題に直面することになった時、この与えられた言葉で熟慮し、真摯に向き合い、活動に活かしてこられたと思う。

今、新型コロナウイルス感染症拡散・拡大（パンデミック）により、全世界的に社会経済活動、市民生活に大きな打撃を受けている。経済構造の激変が多様な経済指標で示され、景気も強烈な下押しで深刻化している。当会も活動を４月一杯停止、委員会はWEB会議等で凌いでいる。事業活動中止が財政や運営等々に多大のデフレスパイラルを引き起こすと憂慮される。また、感染症のみならず、多くの自然災害にも当会は公益社団法人として応えていく責務と期待が寄せられている。その責任ある立場で判断・決断をする折には、私は前述の社会の目で建築士会・自分をみる、将来展望を実現させる戦略・戦術を持つ、佐野氏のこの二つの言葉に立ち返るのである。

■建築士会と事務所協会の合併について

2002年、当会総会の懇親会の挨拶で当時大阪府建築士事務所協会の佐野会長は、士会と事務所協会の統合の提言を行い大きな話題となった。それまでに佐野会長と当会・宮崎会長との意志疎通は多様な場面で深耕されていたと思う。私も委員として参画し、その時の成果は業務の協働の試行として具体化され、一定程度達成されていた。

私は現下の新型コロナ禍やニューノーマルを考えると両人の先見性・積極性・行動力等を32年経った今、その重要な意味・意義を再認識しているところである。先に述べた背景や財政的脆弱性、社会が求める社会的活動、さらには少子高齢化等々から更に深刻化する会員減少に対応するには合併が残された戦略として有効な施策の一つと考えている。

既に32年前に佐野・宮崎両会長は予兆していた視点・行動には驚嘆する。

この統合準備会は2002年11月15日に開催され、第１回統合推進協議会は11月29日開催し第10回まで、合意書の取り交わしは2003年１月28日、その後は懇談会の形式で進んだ。さりながら様々な事由から佐野会長の思いが叶えられることは無かった。

■全国大会中止の決断について

忘れもしない足掛け４年かけて築き上げた建築士会全国大会大阪大会は2011年３月11日東日本大震災で中止となった。全国大会にかけた多くの会員や関係者のマンパワー、時間・情熱・コスト等は多大な貢献の積み上げであったこともあり、中止に至る議論には激論が放たれた。私も中心的に主導する立場として様々な意見の結実として断腸の思いで中止を決定したが、後に他府県や連合会の一部からも責められ、近畿建築士会協議会の一部の開催を是とする意見にも悩まされ続けた。

さりながら、その年の総会（2011年５月30日）時に佐野氏は以下の理由
①外交官が１か国を除いて全員離日
②アメリカが初めて日本に軍艦の災害派遣
③被災の12都府県の参加不能
④当会の投入したコスト等の莫大さ
から、「よくぞ決断した、進むより退く決断は中々にできないもの」と笑顔で私に話された。

褒められたことは、この時の１回きりである。

■佐野正一氏は生涯を通じて何を求め続けたのか!!!

私が幸いにも直接薫陶を受けた方は佐野正一氏や宮崎八郎氏である。
この両人は言葉の表現こそ違え
①目先や周りに惑わされずに常に国際環境や社会からの視点がどうなのか、身内ではない・社会の目で自分・士会をみる
②将来展望・夢を描き実現させる、戦略・戦術を持つ
という意味の言葉を常に口にされていたと思う。このことはかってない現在の新型コロナ禍にいかに生きるかのウイズコロナ・ポストコロナの発想であり、環境危機（地球温暖化）・自然災害の頻発・激甚化、少子高齢化、IoT、ビッグデータ、AI、ネットワーク化、デジタル化、ロボテックス等の技術革新や経済社会構造システムの変革に如何に真摯に臨んでいくかの基本的な理念を示唆していると思う。

特に足元をしっかり真っすぐに見つめながら、激変の時代を切り開く知恵を重ねて、新たな活動に繋げる工夫が必須であり、そのためには既存・従来に潜む化石的行動様式や考えから頭を切り替える心構えが求められると、今問われれば佐野氏はそのように語られると思うのだが!!!　　（おかもと　もりひろ）

各論　佐野正一
業界のリーダーとして

崇高なる建築家 佐野正一氏

㈱建築画報社
代表取締役社長
櫻井旬子

1954年生まれ。栃木県出身。
川村短期大学卒、安田火災海上勤務を経て1988年建築画報社入社。
趣味は４年目のゴルフ、能、ジャンルを問わず音楽、絵画（特に古典）、世界各地の映画鑑賞、読書、温泉地巡り

お蔭をもちまして、建築画報社は今年で創立57年を迎えます。

1964年に吉田五十八氏と竹中工務店のご尽力によって、A5版の創刊号「大阪ロイヤルホテル」を発刊したのち、毎月テーマ別に纏めた特集号は、アトリエ、大手組織事務所の作品集のみならず「中部日本ビルデイング」、「国立劇場」、「百十四銀行」、「京阪ビルデイング」、「アルキャスト特集」、「九州の新しい建築」、「東京競馬場スタンド特集」など、時代を読み解くに相応しい異色な本づくりが目立ちます。

安井建築設計事務所の作品集は、1967年に初めて発刊しましたが、この時佐野正一氏は、既刊目録を作ってはどうかと私の母（創設者小堀美津子1920年（大正９年）生まれ）にアドバイスされたと聞きました。

この目録の巻頭‘すいせんのことば’に、佐野氏は次のように書かれています。

「毎月多種類の建築雑誌が刊行されます。（中略）「建築画報」は、毎月特集形式をつづけている異色の編集で、それだけ編集の苦心も察せられますが、設計の実務をやっている私どもには貴重な資料がまとめて集録されていることは甚だ都合がよいので今後ともあたらしい造形、あたらしい記録をめざして良い雑誌に成長していただきたく期待しています。」

私が入社して９年後、1997年に弊社の創立30周年記念式典（会場は山の上ホテル）に佐野氏は、どの建築家をお呼びしたらよいか、親身に相談にのってくださったようです。当日のアルバムには、近江栄、内井昭蔵、宮本忠長、阪田誠造、柴田陽三、中園正樹、薬袋公明、佐々木群、櫻井清、井上雄治、北代禮一郎、加藤幸三、古畠誠一、野村武一、市川宏、中島隆、平島治、工藤立治、中出定男、田村信二、宮武保義各氏が歓談されている様子が残っています。（黒川紀章、福澤武、池田武邦、鋤納忠治、伊藤一彰各氏は欠席）

その後、2003年に日刊工業新聞社から発刊された、「建築家三代　安井建築設計事務所継承と発展」の出版記念パーテイに佐野氏は母と私を招待してくださいました。この時、母はすでに仕事から離れ体調も良くありませんでしたが、佐野先生のお祝いだからと出席を即決、東京會舘へ参りました。この時、母がこれまでの氏のお力添いにどれほど感謝をしていたか、私には痛いほど伝わりました。

晩年母は、佐野氏の体調を心配して、私が大阪へ出張した際には先生をお訪ねしてと頼みました。氏は病後でお杖をつきながら本社へ出向いた私に、クラッシック音楽の話や京都駅舎の古い図面を前に当時の苦労話を聞かせてくださいました。帰宅後すぐ母に報告すると、母は氏のお元気な様子を嬉しそうに聞いていました。

2000年に小誌で「安井建築設計事務所の75年」を発刊した際に山口廣先生が、「安井武雄から佐野正一へ」と題した巻頭論文を書いてくださいました。これを佐野氏は大変喜ばれて先生にお礼がしたいと言われました。私は仲介役をお引き受けして千葉の山口邸へ出向きお伝えしたところ、お気持ちだけで十分と先生はご辞退されましたが、佐野氏は引き下がりません。再度山口先生を口説きましたら、そういうことならとご自身でデザインした自宅玄関の吹き抜けにステンドグラスを入れたいと言われました。知人のステンドグラス作家（安河内敦子氏現aaca副会長）が引き受けてくれることになり図案は山口先生のスケッチに決まりました。完成後山口先生は、照れ臭いけれど朝太陽が差し込むとスケッチが浮き上がるんだよと、とても嬉しそうに話してくれました。

2014年３月、佐野氏の訃報が届きました。母が90歳でお国替えした３年後のことでした。大阪と東京での追悼の会、その年の暮れにはサントリーホールにて追悼企画のコンサートが開催され、私は幸いにもすべての会に出席することができました。

佐野氏は、母と私にとりまして頼りがいのある素敵な紳士でした。仕事にはとても厳しいと所員の方からいつも聞かされましたが、女性に対してのやさしさは格別でした。それこそが本物の紳士としての氏の一貫したスタイルではなかったかと思います。

最後に、これまで小誌がまとめた安井特集の一覧と主な記事を掲げ、これまでの氏のご厚情に心より感謝の意を捧げつつ、三代目のバトンを受けた佐野吉彦社長率いる安井建築設計事務所、及び貴誌「建築と社会」の益々のご繁栄を祈念し、結びといたします。

（さくらい　じゅんこ）

1967年　安井建築設計事務所作品集
「はじめに」佐野正一、寄稿「継承と展開　安井建築設計事務所のデザインの流れ」佐々木宏

1970年　大阪国際空港ターミナル特集
論文「鉄道と航空」佐野正一、寄稿「建築家佐野正一の横顔　その合理性と大阪的発想　貴重な体験＜鉄道時代＞」脇田裕史

1980年　安井建築設計事務所特集
論文「安井武雄とその継承」佐野正一、鼎談「都市・人間・余暇　リクレーション施設と都市再開発の手法」高山英華×藤田邦明×佐野正一

1984年　安井建築事務所特集
対談「設計における人間らしさを求めて」村松貞二郎×佐野正一

2000年　安井建築設計事務所の75年
寄稿「安井武雄から佐野正一へ」山口廣

2005年　安井建築事務所「FRONTIA MIND」
佐野吉彦氏による三本の対談「新しい境地への挑戦」大倉庄之助、権代敦彦、東伸一郎

2011年　安井建築設計事務所の教育施設
対談「学校づくりへの想い　可能性を広げる建築の力」長澤悟×佐野吉彦

2014年　安井建築設計事務所90周年「建築が切りひらく明日へ」
対談「100年企業が社会に果たしていくこと」横山禎徳×佐野吉彦

各論　佐野正一
業界リーダーとして

“技芸”求め続けた建築人

日刊建設通信新聞社・顧問
西山英勝

1944年　東京生まれ。
1967年　横浜国立大学学芸学部卒。
1968年　日刊建設通信新社（現・日刊建設通信新聞社）入社。
九州支局長、編集局長、企画総局長、副社長、1999年社長。会長を経て2016年から現職。

佐野正一氏 ── 。メディアにとって「最高級のネタ元」でした。それは、「建築家」として、「建築業界人」として、「設計事務所経営者」として、「先人」として、「お歴々」として、「音楽人」として、「ゴルフ人」として、時に厳しい（恐ろしい）言葉は、記事表現に工夫を求められましたが、現実を踏まえた上での先見性には「確かな情報」が込められていました。

2002年、大阪から衝撃的なニュースが流れました。大阪府建築士会（宮崎八郎会長）の創立50周年記念式典で、来賓の佐野正一大阪建築士事務所協会会長が「大阪士会と大阪事協は共に建築士法にもとづく団体で、もともと兄弟みたいなものだ。われわれとしてはできるだけ早い時期に合併したい」と発言、全国に波紋を広げた。背景には、会員数の減少、財政難などがあり、両会は協議を開始、基本合意までたどり着いたが、結局「時期尚早」として、現在に至っている。

建築界に限らず各産業界には数多くの団体が存在するが、当然のことながらそれぞれ団体には「それぞれの設立経緯」があり、時代背景や経済性が最優先される企業合併統合とは異なり、団体の合併統合には厚い高い壁が立ちはだかる。

それぞれの設立経緯を熟知しながら、「壁」に向かった佐野氏には建築家、建築界、設計事務所が保持すべき「技芸」に対する想いが強くあったのではないかと推測される。それは、建築界にとって今日現在も変わることのない事実でもある。

佐野氏は理事、副会長を経て1990年から日本建築士事務所協会連合会の４代目会長も務められ、全国的視点からも問題提起を重ねてきたが、特に「事業承継」が印象に残っている。建築物は用途に関わらず「地域に根付き、存続する」ため、設計に携わった建築家・設計事務所は「その持続への責務」が求められる。それ故に、アトリエ事務所、組織事務所を問わず「自らの持続性」も求められる。人口減少社会が現実化し、生産性向上・働き方改革が急務となっている今日、事業継承はあらゆる分野で緊要の課題となっているが、30年も前に「問題提起」したのは特筆すべきことである。

「建築の設計内容が幅広くなり、技術的にも高度化してきて、建築設計の業務が少しづつ変わってきた。そして単なるデザインのコンセプトだけをやれば、それでいいのでないかと思い込んでいる建築家も出るようになりました。そうではなく、全体が建築ですから、それをまとめて技術的にも完全なものにして、経済的な裏付けも、工程の管理についても、全部をつくるのが本来の建築事務所のあり方ですから、そういう考え方を明確にしなければならない」。「“技芸”という言葉があります。明治時代に建築という言葉が初めて発案されて、建築は技術と芸術の複合体ではないか。古い言葉ですが、“技芸”は建築の仕事の本質を示しているように思うのです」（佐野正一氏『建築人生を語る』－1992年3月19日付「建設通信新聞」より）。この言葉に、佐野氏の建築人の想いが込められているように思う。

閑話休題。

弊社（日刊建設通信新聞社）にとって佐野氏に関して特記すべきは「ゴルフ」である。1963年５月に、日刊建設通信新聞社関西支社の創設10周年記念として、関西建設人ゴルフ大会がスタートした。

初代大会委員長に就任していただいたのが村野藤吾氏で、その時、村野氏は71歳であった。大会は第２回目から、村野氏がクラブハウスを設計した宝塚ゴルフ倶楽部が会場となり、現在も同倶楽部で毎年春に開催されている。

その村野氏を補佐されたのが佐野正一氏である。村野氏を敬愛し、大会開催時は常に村野氏の体調を気遣っておられた。そして、村野氏が第20回大会まで委員長を務め、その後、村野氏の指名で、佐野氏に第40回まで、大会委員長を務めていただいた。

二人は終生ゴルフを愛し、奇しくも天寿を全うされたのが同じ93歳であった。

（にしやま　ひでかつ）



宝塚ゴルフ倶楽部で村野氏（＝手前）の打球を見守る佐野氏の様子

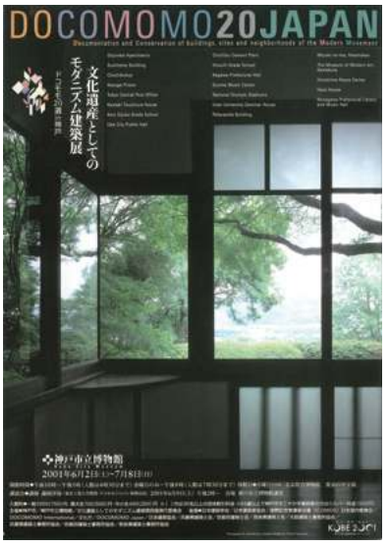
各論　佐野正一
業界リーダーとして

佐野正一さんの矜持に触れた20年前の夏の日

㈱竹中工務店 設計本部
（一社）聴竹居倶楽部 代表理事
松隈　章

1957年兵庫県生まれ。1980年北海道大学工学部建築工学科卒業後、竹中工務店入社。設計業務の傍ら近代建築の保存活用や数多くの建築展や書籍出版に携わる。
公益財団法人 竹中大工道具館評議員。
主な著書『聴竹居 日本人の理想の住まい』平凡社、『聴竹居 発見と再生の22年』ぴあ関西、『聴竹居実測図集』彰国社。
聴竹居の一連の活動に対して2018年度日本建築学会賞業績賞及び日本イコモス賞を受賞。ジェームス邸保存再生計画で日本建築美術工芸協会aaca賞及びBELCA賞受賞。

佐野正一さんとはたった一度だけですがお会いしたことがあります。今から20年前の2000年８月８日、けっして忘れられない大きな印象を残すものになりました。それは、「ある建築展」の関西巡回展の実行委員長をお願いしに安井建築設計事務所へお邪魔した時でした。当時の日本建築協会会長の市川宏さん（東畑建築事務所社長）と同協会の委員を私と共に長年務めていた米井寛さん（現在の東畑建築事務所社長）のお二人に同行しました。「ある建築展」は関西の建築界をあげて取り組むべき大きな企画展の関西巡回展で、やはり、その実行委員長には関西の建築界をリードしてこられた佐野正一さんしかおられないだろうとのことで、実行委員会準備会の段階から参画している日本建築協会関係者を代表してトップの市川宏さんからお願いしに行くことになりました。もちろん、アポイントメントをとり、実行委員長就任をお願いしご快諾いただけるものと思い込んで三人でお伺いしたのです。しかし、なんと実行委員長の就任依頼はあっさりと断られてしまったのです。



「ある建築展」とは、2000年の１月から10月にかけて、神奈川県立近代美術館を皮切りに北九州、高崎と巡回された「文化遺産としてのモダニズム建築展DOCOMOMO20選」展でした。DOCOMOMOは、「近代運動にかかわる建物および周辺環境の記録調査および保存」のための国際組織（NGO）であり、2000年にブラジルで開催された総会においてドコモモジャパンが正式に国際的に承認され、日本建築学会のワーキンググループが選定した日本の代表的なモダニズム建築20件を発表したのです。その建築展は日本で最初に選定された20選の成果をひろく社会に還元し、わが国の近代建築のすがたと建築文化のもつ意義を理解してもらうことを目的としたものでした。しかし、DOCOMOMO20選には関西からは「住友ビル」と「聴竹居」しか選定されていなかったのです。

市川宏さんが佐野正一さんに実行委員長就任のお願いを申し出たところ、佐野正一さんはこうおっしゃいました。「多くの優れた建築を生んでいる関西から20選のうち２つしか選ばれていない。さらに、東京の方々が中心で選んだものだけをそのまま関西で展示する展覧会の実行委員長になるわけには行かない。関西独自のものを考えるべきである。」

そこで、初めて三人は頭をガツンとされたように、関西建築界の矜持について気づかされたのです。そもそも佐野正一さんが長年会長をされた日本建築協会も、東京主体、学者主体の日本建築学会に対抗して、日本で２番目となる建築の、それも幅広い建築関係者が一堂に会する団体として発足したのでした。

この夏の日の佐野正一さんとの面談がきっかけとなり、DOCOMOMO20選の全国巡回展とは別に関西独自となる「関西のモダニズム建築20選」展を同時に開催することになり、2000年11月に関西の建築団体（日本建築家協会、日本建築協会、日本建築学会近畿支部）による実行委員会（事務局；日本建築協会）がスタートしました。そして2001年に神戸市立博物館での「文化遺産としてのモダニズム建築展DOCOMOMO20選in神戸」と同時期の約１カ月間、芦屋市立美術博物館において、関西建築界独自の取り組みとなった「文化遺産としてのモダニズム建築展in芦屋」関西のモダニズム建築20選を開催することができたのです。



石田潤一郎先生を主査とした日本建築学会近畿支部近代建築部会にこの企画展のために新たに近畿２府４県に現存するモダニズム建築20作品を選んでもらい、竣工当時の写真と図面・資料・模型でそれらの「過去」を、そして、築地仁氏、鈴木理策氏の２人の写真家によって新規に撮りおろされた写真と新たに製作された模型でそれらの「現在」を提示することによって、歴史と地域性豊かな関西におけるモダニズム建築の拡がりを広く紹介するものになりました。さらに展覧会にあわせて、芦屋のルナホールでの藤森照信氏の講演会、大阪ガスビルでのシンポジウム、「浦邸」と「聴竹居」の見学会も開催されました。

芦屋市立美術博物館として初めての「建築展」となったこの展覧会の会期中、通常の企画展を上回る約4500名近くの入場者が訪れました。身近にあるモダニズム建築の素晴らしさと、関西と言う特色ある風土と伝統が生んだモダニズム建築の多様性を提示できたこの展覧会は、佐野正一さんのまさに関西建築界のリーダーとしての「矜持」がもたらしてくれたものでした。

（まつくま　あきら）

各論　佐野正一
業界のリーダーとして

共創の設計思想から覗く佐野正一像

㈱大林組　設計部門
井上雅祐
浅沼拓也

井上雅祐
1966年　大阪府生まれ
1990年　大阪大学大学院工学研究科修了
1990年　株式会社大林組入社
1999年　東ロンドン大学ディプロマコース修了
現在、同社設計部門統括部長、大阪大学非常勤講師

浅沼拓也
1990年　栃木県生まれ
2015年　東北大学大学院工学研究科修了
2015年　株式会社大林組入社
現在、同社設計部門主任

佐野は、突き抜けた自己表現には固執せず、周囲の多様な思想・デザイン・技術を参照し、自らの設計に落とし込むことを得意とした建築家であった。初期のサントリー山崎蒸溜所から始まり、機能主義を突き詰めた大阪ターミナルビル、ベルリンフィルハーモニーホールを参考にしたサントリーホール等にその傾向が見られる。

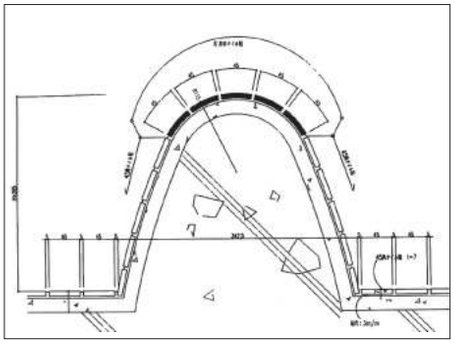
その設計思想は、佐野が安井建築設計事務所入社後に養われたものだろう。佐野は、青年期に影響を受けた建築家・安井武雄の危篤を知ると、同社の立て直しを図るため、当時勤めていた国鉄から鞍替えした（その後二代目社長に就任）。入社直後は安井武雄の担当案件を引継ぐことも多く、設計過程において特徴的な安井武雄デザインを強く意識する状況が続いた。そのため佐野が周囲の思想を受け入れて設計するに至ったことは、ごく自然だったのかもしれない。

また佐野は著書「建築家三代」にて「建築をつくることは、直接には優れた内容の設計によって、力量ある施工者の入念な施工で実現する。しかしその根源に建築主の強い意志と高い理想によって、そのリードに導かれて徹底した姿に成熟する」と語る。自身の設計力に加え、施工会社の力量、建築主の事業牽引力にも期待を寄せつつ、佐野は建築をつくっていた。

「大阪ガスビル新館」（1966年竣工、施工：大林組）はその思想が生かされた先駆的な建築である。1933年に安井武雄が設計した大阪ガスビル旧館への増築プロジェクトで、佐野が新館の設計を施した（後に同ビルは国の有形文化財に指定）。大阪ガスの関連事業には大林組も長年施工に携わり、2006年には同ビルのタイル全面貼替の大規模修繕を行った。54年前の建物だが、幸運にも大阪ガスビル新館の外装工事を担当した弊社OBの浅田忠雄氏（81歳）に、同ビルのエピソードを伺う機会を得た。

ハンドメイドで凝った意匠の旧館に対し、新館は合理的にワンディティールを建物へ展開する当時最先端の手法を用いていたと浅田は語る。新館では貸オフィスとしての利便性を優先し、窓、外壁コーナー部の曲率、柱スパン等では佐野が自身の考えに基づき設計した。一方、庇や化粧柱等は旧館のデザインを新館にも踏襲し、建物全体に統一感を持たせている。外装材はアルミエンボス庇やセラミックタイル等、旧館と質感を馴染ませながら当時の最新素材が新館に採用された。

施工検討時、浅田は丸太足場を組んで旧館の庇や窓を実測し、原寸図面を作成する等、当時でも通常とは異なるアプローチで取り組んでいた。もの決めの過程では、例えば化粧柱の曲率が異なるR形状焼物タイルを自ら何種類も作成する等、施工担当の一役割に留まらない程の積極的な関わりがあった。それらの検討事項は工事監理担当の武田氏を通じて佐野率いる安井建築設計事務所に提案されていた。実際に佐野と浅田が直接対面することは無かったようだが、武田氏を介した試行錯誤の中で、二人は建築へのこだわりを互いにぶつけ合いながら、きっと対話していたに違いない。


新館化粧柱スケッチ（2006年改修時）

また新館着工時、図面は一般図程度しか無く契約金額は決まっていなかったらしい。大変大らかな時代である。佐野は基本方針を設計した後、詳細を施工会社の検討力に任せる部分もあったようだ。設計者－施工者間の信頼関係が感じられる。更にコスト重視でなく、よい建築をつくるという建築主の思いが強いプロジェクトであったため、竣工後54年経っても大阪ガスビルは際立つ個性を放つと浅田は語った。

高度経済成長期の時代の転換点が色濃く残る、左右同じようでアシンメトリーの御堂筋側ファサードを見ると、一定のようで不規則に揺れる蝋燭の火を見るような、不思議な心地よさを覚える。安井武雄と自身のデザインを融合させ、設計者・施工者・建築主らによる「共創」を目指すという佐野の設計思想が、その心地よさを生み、後の文化的価値の獲得にも繋がったのだろう。


大阪ガスビル　御堂筋側ファサード

浅田は取材時、佐野のことを二代目と呼称したが、佐野も著書の中で二代目自認の弁を述べていた。「技術が多人数の共有意志で支えられ特定の個性ある体系をつくり、これが継承に値する価値あるレベルに達した場合は、（二代目を）継承する対象になり得る―」佐野が手掛けてきた建築の価値を、周囲が評価して来たが故の敬称「二代目」であった。それは建築家・佐野正一への敬意と同時に、佐野の思想が設計者の枠を超えて建築界に広く影響を与え続けてきた証とも感じられた。

（いのうえ　まさひろ、あさぬま　たくや）

各論　佐野正一
建築協会会長として

協会会長・先輩として
～佐野先生のこと～

京都大学名誉教授
金多　潔
聞き手　設楽貞樹

1953年京都大学工学部建築学科卒業、1959年米国スタンフォード大学大学院終了。同年京都大学防災研究所助教授、1964年同工学部助教授を経て、1965年より京都大学工学部教授、1994年定年退職。京都大学名誉教授、工学博士。
2001年～2003年　日本建築協会第9代会長
主な受賞
1981年　BCS賞
1995年　日本建築学会賞
2016年　日本建築学会賞大賞

■安井武雄との縁

金多：京都四条通の大和銀行京都支店（旧大阪野村銀行京都支店　1926年）の建物がすばらしいなぁと思っていたのが、後で安井先生の作品だと知り、いまだに瞼に残っています。親の知り合いの紹介で、今のインターンシップのような形で安井武雄事務所に大学３年の夏休みにお世話になりました。兵庫相互銀行本店（1953年）の現場も関わらせていただいて、いい勉強させてもらったのです。通用口の守衛さんのカウンターを設計しなさいと安井先生に直接言われて、描いて持っていったら直しもせんと「これでええやろ」と言われて。神戸の地震の時に見に行ったら残っていました。

■協会と佐野正一

設楽：金多元会長は2001年に市川会長から日本建築協会の会長職を引き継がれたんですね。佐野正一の発言の中で印象に残ったものがあれば。

金多：その前からも理事をさせていただいて、しばらく副会長をして、市川会長からいわれて、では１期だけでもしましょうか、と。

佐野会長は、東京の日本建築学会に対して、関西は一味違って、もっと密度の高い会員同士の懇親もあり、切磋琢磨して関西の建築のレベルを上げていこう、そういうことを念頭に会勢をより広めたいと、特に会員を増強したという気持ちを持たれていました。

また、賞の審査会のときは、佐野先生は本当にまじめに対応されて、自分の事務所の出している案件があると、さっと室外に出られて、結論が出た時に室内に戻ってこられた。きちっと、公私混同されない。感心しました。時間にも約束事にも公の会議でも、きっちりとこなす、一切の問題を後に残さず、そういう行動をずっととられていましたね。一貫して。

「建築と社会」の編集委員会からの報告があると、「今度の「建築と社会」は期日通り出ますか？」と毎回いわれました。

一方で浪高の同窓会なんかで顔を合わせた時には先輩後輩ざっくばらんに話してね。

学生が少ないので同窓生の繋がりが強い。7年間同じ学校で学んでいるとやっぱり人間関係が深まりますよね。それと非常に短命な学校で、大正末期から昭和25年までで20年余りで短かった。佐野さんは非常にいい先輩で、学年は10年違うんですけれど、仕事には厳しいけれども個人として話をするときは親身になって相談にのってくれる本当に理想的ないい先輩でした。そうそう（当時会長の）佐野先生と（当時副会長の）足立先生と私は旧制の浪速高等学校出身で議事進行がスムーズでした（笑）。

■佐治敬三・佐野正一のつながり

金多：浪高のクラスメイトの佐治敬三さんとの関係も仲良くやっておられたけれども、佐野さんはきちんとした端正な方で、佐治さんは豪放磊落、外の人に対しては冗談を言って笑わせているようだけれども、内では多分怖いと思いますよ。そうでなかったら会社をあれだけ盛り上げられなかったですよ。

サントリーウイスキーの本当に基礎というか発展を遂げられたのは佐治敬三さん。それに最大の貢献をしたのは佐野先生。山崎のサントリーの工場はデザインとしても画期的なものでした。サントリーの紋章がばしっと正面にね。しかもそれがJR東海道本線と阪急電鉄京都線の両方から良く見える。非常に一般の人にアピールする建物だと思います。

設楽：自分の作品に込める社会的な責任があるからということを常々言っていましたね。

金多：それは協会の活動でも一緒なんですね。自分のやっていることに対してきちっと責任が取れる、というのが常に行動規範としてあったんだと思いますね。やっぱり学生時代から海軍、そして国鉄とキャリアを経てこられたからじゃないでしょうか。

■三代目京都駅のこと

金多：私が特に印象に強いのはJRの京都駅。二代目の駅舎がに火災に遭って、たちまち三代目が建って、あの水平線のデザインと塔も佐野さんが作られたと後で聞いた。今までの京都駅と全く違う斬新な感じでね。我々学生は非常に好きになった建築だったと思います。そして焼けてからの復興が早かった。佐野さんの号令一下、当時のスタッフあげてやっていったのでしょう。

■大阪駅（現サウスゲートビル）のこと

設楽：仕事の話になりますが、金多先生には大阪駅の増築の構造設計のアドバイスをいただきお世話になりました。

金多：佐野さんは駅前第二ビルの出水事故で苦労された体験から地下構造は随分心配されていたので、大丈夫と申し上げましたね。

佐野さんも大阪駅に愛着があったのか、なにかというとあそこで良く会合をされていました。けれど、決してそこで、これは私が設計した、とおっしゃらない。知らんを顔して。

設楽：そこが美学なんですかね。

■次世代に向けて

設楽：次世代へのアドバイスなどは？

金多：我々は文明の進化と共に歩んでいる。子供の頃は電話がなかった、それからお金持ちの人のところにあり、自宅につき、プッシュボタンになり、携帯電話になって、スマホになって、インターネットになって、そういう風にメディアがかわって。仕事の最後の方にパソコンが現れた我々の世代と今の若い人と全く通信媒体も違いますし、それによって精神構造も違ってくる。だからそういう人たちに建築協会を盛り上げてくれるようにするためにはそれなりの改革が当然必要なんですね。その辺をふくめて、今まで通りやってきたからそれでいいやん、というのは決してしない。寧ろ若い人たちが集まって、若い世代でどうしたらいいかということを吟味してもらったことを吸い上げてもっていくのがいい。ものの考え方とか、これが正しいんだ、ということは、何を残すのか、何を伝えるのか。歴史とか本当に大事なものだと思いますし。

設楽：不易と流行をしっかり見極めるということですかね。

各論　佐野正一
芸術の支援者として

偉大な建築家佐野正一先輩に捧ぐ

（一社）総合デザイナー協会DAS
理事長
嶋　高宏

1938年　大阪生まれ
株式会社嶋デザイン事務所代表。
グラフィックディレクター
元大阪成蹊大学情報デザイン学科 教授
一般社団法人総合デザイナー協会DAS理事長
京都広告協会最優秀賞
サインデザイン協会金賞
朝日流通広告賞銀賞
GRAHISプラチナ賞
フランシスコ・マンテコン国際ポスターグランプリ受賞他、国内外ポスターコンクールなどの受賞、入選多数。
グラフィックデザイン年鑑、パッケージデザイン年鑑等、収録多数。



DAS 50周年のインタビューに答える佐野正一（当時DAS顧問）　写真提供：毎日新聞社

佐野正一氏は、永年、一般社団法人総合デザイナー協会DASの重鎮である。

ここで一般社団法人総合デザイナー協会DASについてご説明しなければならない。（以後DASと表現）DASは、1956年、これからの社会にはデザインが需要なファクターを持つと毎日新聞社が提唱しデザイナーのD、学識経験者A、スポンサーのSが一体となって生活文化に寄与する目的で設立された。その目的に賛同され当時サントリーの社長佐治敬三氏が法人設立委員長になられて建築家村野藤吾氏が理事長で出発した協会なのだ。当時の創立メンバーは佐野正一氏を始めグラフィックでは早川良雄氏、重成基氏、今竹七郎氏、写真は岩宮武二氏、彫刻は中村真氏、VANの創設者石津謙介氏等と蒼々たるメンバーで構成されていた。日本のトップクラスで網羅された日本初のデザイナー協会だった。その後、佐治敬三氏が理事長になり、高校が同期で無二の親友であった関係もあり、その補佐役として佐野正一氏が協会の理事を引き受けられた。1962年である。佐治敬三氏はサントリーや財界でお忙しいこともあり、佐治敬三氏の要望で1982年に佐野正一副理事長が誕生する。1985年にDASが30周年を迎えたとき、DASの記念イベントとして大阪の主要な会場６カ所で展示＆セミナーが開催された。大阪の色、大阪の音、大阪の艶など、大阪をテーマに約一カ月の催しだ。新聞紙上でも取り上げられ華々しく記念式典も開催された。この30周年記念イベントに、佐治敬三氏が600万円をDASに寄付されたので話題になったのだが、この30周年発案と牽引は実は佐野正一氏だった。この実現のために何度も佐治敬三氏に会われ実現したのだが、一度も、私の努力でDAS30周年記念が実現したと仰られなかったのが印象に残っている。私はこのとき、大阪の艶をテーマにディレクションを任命され、内容は十三のストリッパーによる実演と作家の故阿部牧郎さん、漫才のアホの坂田とよばれていた坂田利夫さんに講演を依頼し講演後、お二人を交え全員参加のシンポジウムをすると言う企画案を提出した。佐野正一氏は企画案をご覧になり、君のシンポジウムはなかなか愉しそうだネ！と優しい目で仰っていただいたのが今でも印象に残っている。自慢も愚痴もひと言もおっしゃたことがなく永年、DASの牽引車となっていただいたのには頭のさがる思いがする。DASの理事長佐治敬三氏がお亡くなりなり、佐治信忠氏に変わられたころから、ご自分の役目は終わったと染織家の谷川順一氏に副理事長の席を譲られた。理事及び副理事長職、実に37年間である。現在のいまあるDASの基盤を確たるものにされたのは佐野正一氏の力による。

今の大阪ガスビルや東京のサントリーホールなど数々の名作を残され建築家としてのご活躍は同時に激務であったろうと思われるのだが、何十年ものあいだ総合デザイナー協会DASを牽引していただいた功績を忘れることは出来ない。

DASの一番大きな事業が毎日新聞社と共催の大学生・高校生デザインコンペ金の卵、銀の卵賞だ。今年で51年目を迎える。現在はネットコンペに切りかえ学生デザインコンペをしているのだが、このデザインコンペティションを1969年。51年前に立ち上げられたのが当時の理事をはじめ佐野正一氏の功績なのだ。多くの優秀なデザイナーを世に輩出してきたDAS学生デザインコンペの歴史は、まさに佐野正一氏によってつくられてきた。そしていまだに最大の事業として続いている。数々の名建築を残された佐野氏がお亡くなりなられたのを機に、毎日・DASデザインコンペ金の卵賞の建築部門で優秀な建築作品にぜひ佐野正一賞を設けたいと、ご子息の（現安井建築設計事務所社長）佐野吉彦氏に申し上げたら快諾をいただき、今、学生デザインコンペ大学生建築部門最優秀作品に佐野正一賞が贈られる。同時にこの賞の選定は吉彦氏だけに決定権があり他の審査員は口を挟めない。現在、吉彦氏には、金の卵賞学生デザインコンペの建築部門の審査員もしていただいている。子が父の名のついた賞に相応しい建築作品を選び、氏が亡き後も、吉彦氏を通じて未来の建築家を発掘する。過去、現在、未来へ文化の継承が見事につながっている。現在、DASの学生コンペに佐野正一賞の設立は自慢のひとつである。同時に、この賞の設立を機に、吉彦氏にお父上と同じくDASの会員になっていただいたことも特筆すべきであろう。当時の事務局長は、厳格で怖い存在だったと聞くのだが、名誉会員になられた後も総会にお越しいただいていて、皆さんの思うようにDASを創ってください。と優しい笑顔で仰っていただいたのは私としては忘れられない一コマだ。偉大な佐野正一氏の足跡には我々は及ばないのだが、どうかこれからも未永くDASを見守って頂きたいと心よりお願い申し上げたい。

（しま　たかひろ）

各論　佐野正一
芸術の支援者として

都市の格

～音楽ホールを持つ銀行本店～

大阪経済大学理事
勝田泰久　談

1942年　東京生まれ。
1965年　早稲田大学第一法学部卒業。
同年　大和銀行入行
1987年　船場支店長
1988年　企画部長
1991年　取締役本店営業部長
1998年　副頭取
2001年　頭取就任
2002年　りそなホールディングス社長就任
2003年　りそな銀行頭取就任
同年　りそなホールディングス社長およびりそな銀行頭取辞任
現在、大塚製薬顧問、日本経営協会評議員、大阪経済大学理事、ニチコン（㈱）取締役、よみうりカントリークラブ理事長、読売テレビ番組審議委員長など歴任。多忙な日々を送る。

■西尾元大阪市長の話

東京進出しないと銀行の発展はないという時代、当時副頭取の私に、大阪市の西尾市長がヨーロッパの都市の格は銀行の本店とサッカーチームがあることだ、あなたの銀行、間違いなく大阪にいてくださいよ、と言われた。大阪市は両方あるから都市格が高いんですよって、西尾さんに言われたのをよく覚えています。

■ビル建設と佐野正一との出会い

先週辞めてから自分の意志で初めて本店に行ってきました。今回は改めて設計者、佐野さんの思いを感じようと思ってホールに入って壁を触ったりしてね。建設当時はやっぱり本店建設委員会、本店建設室というのが中心で私は詳しくなかった。だけど竣工の時には本店営業部長になっていたので、テープカットの先導役になり、他の人からお前はいつもいいとこだけやるなあ、といわれました。(笑)本店建設が始まる頃、応接間に呼ばれて初めて佐野さんにご紹介いただいた。ご挨拶をしたら「いい物を作りたいですね」と一言おっしゃって、品のいい哲学者のような方だという印象でした。

北浜には安井さんの建てられた高麗橋野村ビルがあり、前の野村銀行本店も安井さんがやっておられる。安井設計に行くべくして佐野さんのところへいったということです。

安井武雄と野村徳七との関係を本で読んで、ああそうだったのかと、僕は本当に不勉強だったと思った。

■音楽ホールを持つ銀行本店

竣工した時、大阪市内では10番目に高いということで結構注目を浴びました。堺筋の真ん中にこれだけの銀行の本店ができるというのは大阪にとっても素晴らしいことだったと思います。

玄関ホールの天井の高さ、洒落たあの空間がビルの風格、価値なのかなと見ていました。それと執務室に柱がないワンフロアの広さ。僕は素晴らしいところで仕事しているなと感じていました。

それから24階のレストラン。頭取とニュージーランド銀行の本店に行った時にビルの上にある眺めのいいレストランで昼飯をごちそうになった。あれはいいと上司が言っていたので、建設にあたって要望したのかなと思っています。

地下のホールもいいものを作っていただきました。私はホールで株主総会をわずか2年で5回もやりましたが、声の通りがいいんですよ。アナウンサー志望でマイク無しで通る自信がありましたが、本当にいいホールというのは喋ってみてわかる。もちろん音楽を聴いてもわかるんですけどね。

後々聞いた話ですが話す時と音楽とは別の反射板と吸音板が中でかわるそうですね。それで物入りになったんだって聞きました。

ホールは建設委員の中にも銀行の本店に作らなくてもいいだろうと言ってるのがいました。これは佐野さんの、建物の部分でいうと遊びの部分、24階のレストランも遊びの部分ですね、そういうものがあって総合的にビルの価値があるんだ。私も年をとって、いま改めて見ると、この遊びというものが必要だったんだなということがわかります。

銀行とか大企業というのは社会に貢献しないといけないわけですよ。一般の民間や公共にできないことを。佐野さんは総責任者へそれをインプットして、そうした方がこのビルは良くなるんだという風に委員会がまとまったんです。

佐野さんはクライアントを納得させるたぐいまれな説得力があった。人柄とその情熱というのかな、口説くのがうまいんでしょうね。ホールのこけら落としは佐藤しのぶさんでしたが、彼女のお父さんがうちの銀行にいたというご縁で忙しいスケジュールを１日だけ空けてくれた。

文化という点では銀行経営者に理解はありましたね。当行は合唱団も強かった。コンクールでいつも金賞をとっていましたから。彼らは喜びましたよ。

大阪市や大阪府の要請もあって、市民の音楽会とかいろいろコンサートをやってきたんですよ。本来銀行というのはセキュリティの関係で誰でも彼でも入れないんですけど専用通路ができるように工夫していただいて。

佐野さんが音楽ホールというのは音楽だけじゃない、そのあとのお茶を飲んだりワインを飲んだりする空間が必要だ、ヨーロッパの文化だと、専用ホワイエを作られた。本来こういうところでアフターティーなりアフターワインなりやればいいんだけど、大阪のホールではみんな終わったらぞろぞろ帰るだけですよ。これ佐野さんや佐治さんは怒っているんじゃないかと（笑）僕はそれだけは伝えておこうと思っています。もったいないです。建物っていうのは人が出入りしてこその価値だと思っていますから、ホールはいま何とかしなきゃいけないなという思いがあります。



りそな銀行大阪本店地下講堂

各論　佐野正一
事務所経営者として

設計事務所の継承

元㈱安井建築設計事務所
取締役社長
椚座正信　談

1922年　兵庫県洲本町生まれ。
1946年　京都帝国大学工学部建築学科卒業
　　内務省戦災復興院（現国土交通省）
1961年　富山県庁
1964年　建設省住宅局
1966年　大阪府建築部、企業局、企業局長
1977年　大阪府住宅供給公社　理事長
1984年　㈱安井建築設計事務所　取締役　副社長
1989年　同社　社長就任
1997年　同社　相談役
2002年　退社
1992年　勲四等旭日小綬章　授章

■建築への興味

僕は建築が好きで、大学に入る前から、大阪でいえばガスビルとヴォーリズの大丸、その隣が村野藤吾のそごうでこれらに引き付けられていました。安井武雄も惹かれていました。それで大学に行くときに、迷わずに建築を志望したんです。

大学を卒業した時、設計事務所はほとんど存在せず、大手建設会社は帰国者、復員軍人であふれていたので、採用募集はなかったのです。そんな時ですから、内務省の戦災復興院に入省しました。しかし東京では住居、食事が困難ということで、大阪府庁に入りました。

■佐野正一との出会い

戦災の経験から、戦後、燃えない都市を作りましょうということで、昭和30年代、商工会議所の中に作った不燃都市建設推進協議会に、佐野さんが昭和32～3年の頃かな、顔を出しておられた。

僕は大阪府庁で都市不燃化の仕事を推進する立場にありました。

それで、昭和35年（1960年）に不燃都市建設推進協議会が大阪から全国に呼びかけて、関係者の方を招いて大会を開くこととなり、約600人の方々が参集されました。

その時、佐野さんはどういう立場で来られていたかはよく覚えていませんが、いろいろアドバイスをしてくださって大変ありがたかったです。その辺りからよくお話しするようになりました。

佐野さんは建設業をはじめ、建築材料界その他、建築関係者が集まって、その人々がまず自らの品位を高め、その上で世の中に貢献していくこと目指していらっしゃったから、団体の活動には熱心でありました。

世の中の役に立つことをしていくんだという趣旨を訴えられたのです。

■安井建築設計事務所へ

大阪府庁、その次に千里ニュータウン、泉北ニュータウンの仕事をしました。

ニュータウンの仕事は、みんな憧れるけれど、建設の次には維持、経営の仕事があります。公共公益施設や商業施設を作って管理していくことは、収支の問題があり、建設計画で見えなかったものを、補足したり、修正したり、作った後が大変だと、しっかり勉強させてもらいました。

次に大阪府住宅供給公社に行ったら、経営はずっと赤字、かつ定期的に職員のストライキが起こる状況でした。苦労してどうにか目途がついた時、佐野さんから「安井」に来ないかというお誘いをいただき、ありがたいなと思って入社させてもらいました。

後でわかったことですが、佐野さんが私を見てくださっていたということです。

■設計事務所の継承

安井武雄の仕事、設計、思想とか理念というものをどのように受け継いでいくのか。佐野さん自身も非常に苦労をなさったと思います。

安井武雄を受け継いで、佐野正一が何かをしていこうと考えて、その元をたどっていくという、ある意味では、えらいこと考えている人だなと思いました。

だけど実績として、ガスビルの増築とか、サントリーの施設、野村証券ビルの増築があります。安井武雄を継承して佐野正一のデザインを世に示した。しかし、平成時代に入っても、ご自分でデザインされることはありました。

佐野さんは経営センスがおありでしたから、継承といっても大きい改革はなく、街づくりの方向への動きも僅かでした。

佐野さんの仕事の進め方として、指導されていたのは、一通りの努力の上にもう一押しがんばれ、という強い意向でした。

さまざまな面でその努力を社員に求められ、それについてゆけない社員もいましたが、徹底して突っ込んでいって、時には正解ではないこともありましたが、最後はトップが責任を持つから、みんながついていったと思います。

■団体活動

日本建築協会は、設立の経緯から、特定の業務を代表する立場ではありませんが、佐野さんに適した活躍の場であったと思います。

しかし、バブルの頃はみなさんそれどころではなくて、佐野さんの思い通りの運営にはならなかったのでしょう。

日本建築士会連合会会長の職は、佐野さんの団体活動の集大成として意欲的に活動され、ご満足であったと思います。私は傍らで見ていてよくわかりました。

しかし、佐野さんが考えておられた、建築界から社会への貢献という課題は、とても到達できないままに終わりました。このような話は社内ではあまり語られたことはなく、佐野さん一代の話となっています。

いま、多くの建築関係団体が会員数減少、財政力低下に直面している時、例えば佐野さんが提唱された、建築士会と建築士事務所協会を元に戻して一団体とする考え方も検討課題ですね。

（くぬぎざ　まさのぶ）

各論　佐野正一
父として

佐野正一の疾風怒濤

～息子からの眼差し～

㈱安井建築設計事務所
代表取締役社長

佐野吉彦

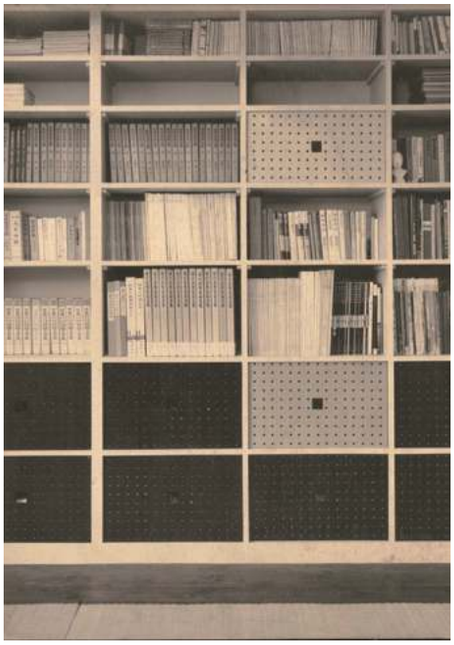
1954年神奈川県・国鉄官舎に生まれ、兵庫県西宮市に育つ。
東京理科大学工学部建築学科卒、同大学院建築学専攻修了。
竹中工務店を経て、1986年安井建築設計事務所、1997年より同社社長。
佐野正一と同じく、日本建築協会会長、日本建築士事務所協会連合会会長、大阪府建築士事務所協会会長を歴任した。
日本建築学会賞（業績部門）受賞、米国建築家協会名誉フェロー。

■子どものころのこと

私が幼少の頃過ごした住まいは、母屋の南隣にあり、キッチン、小さな書斎、東に開いた六畳間で構成されていた。その六畳間の長手方向の壁は天井まで作り付けの本棚だった。寝付けない夜は、そこに収められた本の背表紙をひとつひとつ読んで時間の経過を待った。ギリシャ、ローマ、ロマネスク。その頃はテレビでプロレス中継をやっていたから、レタリングという名の本はその解説本と思っていた。もちろん、いずれも父・佐野正一の蔵書である。

この家に接して母屋があり、こちらは戦後に安井武雄が兵庫県西宮市に再建した住宅であった。その女婿である佐野正一は、安井が亡くなった1955年、安井の創設した事務所を継ぐために東京から戻ってきた。そこで手はじめに、安井宅の敷地内に自らの４人家族が過ごす住宅を作ったのである。扉には花文字で「S.SANO ARCHITECT」と記した文字があり、それはまさしく34歳の佐野正一による高らかな新生活宣言であった。この家は1954年生まれの原風景となり、壁の本はいつしか読む本となり、友となった。安井武雄の妻・浄が1964年に亡くなって佐野家の生活が母屋に移動するまでの記憶である。

当時の父は多くの仕事を抱え、多忙だった。細い鉛筆で繊細なスケッチをよく書いていたが、そこから実際の建築にどうつながってゆくのかはよくわからなかった。竣工式らしき完成写真やスナップ写真を見たりしたので、確かに何かが完成していった感触は持てた。その母屋の居間にあった大きなテーブルは、次第に父の作業机となり、やがて大阪国際空港やその後の空港計画の図面や資料で埋め尽くされることになった。それは紙でできた山塊に等しかった。どうやら並大抵でない、骨身がきしみかねないチャレンジだったことはあとで知った。そういう風景を見ていたのは、私の中学から高校に至る時期になる。



少しさかのぼって幼稚園から小学校低学年にかけて、夏を東京で過ごすことがあった。新幹線が開通する1964年の前だから、在来線の特急「つばめ」や「こだま」で東上して、父が東京での仕事のために借りていた、芝・大門に程近い日活アパートに、しばらく逗留するのである。そこから大井町や自由が丘に居る親戚のところに遊びに出かけた。父は多忙ながら、東京ではかいがいしく家事をし、たまに遠出に誘ってくれた。ある日甲府に行こうと連れられた先は見事に美しい葡萄畑だった。今考えると、それはいまのサントリー山梨ワイナリーだったから、仕事のついでだった可能性があるのだが。

それほど細かい意図はなかったと思うが、父は、そうやって子どもの頃の私に仕事のシーンを垣間見せることになった。父が案内してくれたか定かではないが、1962年に出来たばかりの天王寺ステーションビルは、鉄道好きの少年には十分ワクワクするものであった。一方で、仕事の苦労話ではなく、仕事の相手や自らのスタッフのキャラクターについて、ニコニコしながら語っていたことを覚えている。当時は、家族団欒の食事中にそういう話を聞かされてもなあ、とは思っていたが、人には機嫌が良いときと悪いときがあるものだから、それはおそらく父にとって楽しい時間だったのだろう。これは今振り返ると、仕事とは結局人と人とのつきあいなのだ、という話だったのかもしれない。

■その人が貫いた精神

佐野正一は、学生時代に召集されて海軍の技術将校を務めている。そこで大勢を前にして訓示をおこない、統率する経験を積んだ話を幾度も聞いたことがある。復員して国鉄の建築技師となり、戦後復興の根幹でもある鉄道施設の設計を手掛ける。そうしたなかで、現実にある困難を乗り越えて、大きな使命を果たす覚悟を身につけたのだと思う。それは後年の組織運営の基盤となった。とりわけ、災害時や突発的な事態においても揺るがないマネジメントとして活かされた。

そこに備わった責任感の強さは、父の母・小春によって鍛えられたものでもある。教師であった小春は息子を叱咤激励し、強烈に息子を鍛えた。佐野正一は、どちらかというと小柄な母から、この強靭さから多くを受け継いでいる。私は父の父・又郎の死後に生まれたのだが、同じく教師を経て銀行員となったが、温和な人柄であったという。佐野正一がときおり見せていた柔和な笑顔はこちらに由来している。そういうことから、佐野正一の生き方は興味深いアマルガムである。リーダーとしては非情と温情という、相反する要素を包含しており、処し方は社内外を通じて変わらない。きっぱりと切り捨てる側面と、即決を避けて時間をかける場面と。孤塁を守ることもあるが、仲間を信頼してすっかり委ねる場合もある。デザインの趣向は合理性をベースに置きながら、モダニズムに懐疑も抱いていた。これについては、岳父である安井武雄の問題意識に重ねているようであり、自らの確信に基づいているようでもあった。

先に述べた、私が中・高校生の時期の佐野正一は40代から50代にさしかかっていて、息子から見て自信がみなぎっていた。あとで振り返るとこの時代にはいくつもトライアンドエラーがあったはずだが、息子には強靭な父のなかにある疾風怒濤はよく見えてはいなかった。それは結果的に幸いだったかもしれない。私は結局、父と同じように建築の道に進み、同じように音楽を愛することになるのだが、どの面においても方向を強いられた記憶はない。そこに父の策謀があったかと聞かれると、半分は当たっている。父は、晩年に至るまで私のことを、人の命令を素直に聞かないタイプであると感じていたのであろう。おそらく、この人は自分で頭をぶつけないと道理がわからないやつ、と思っていたから親切に手を差し伸べない。おかげで無知の私は「糧になる失敗」を重ねることができた。

特に30半ばから一緒に仕事を始めてからは、学び、教えられたことは山ほどある。その過程で意に添わない行動で逆鱗に触れることもあり、新たな取り組みに対して突き放すような反応もあった。概ねのところ、そういうケースでは、どんなに細かい事案であっても、父から見て組織の方向を左右する場面と感じたに違いないので、佐野正一としては突き放すしかない。だが、そこで私に諦めさせようとしたのか、そこで諦めるようなら覚悟が足りないと判断したのか、策謀のあるなしがいまだに判然としないところがある。だがやがて、突き放された地点から事態を切り拓くに至ると何も言わなくなったが、とくに褒められるわけではない。その点は最後まで見事に一貫していた。

■そして、受け継いできたもの

継承という面では、父と私が関わった社内外の組織においては、いくぶんの緊張感を持ちつつも、穏やかな見識とともに受け渡しを完了できたと言える。機会があれば場面の詳細を具体的に語ることもあるだろう。今のところ組織の側からみれば、私と父は共有する問題意識に基づいて、わずかに視点を変えながら同じ課題を解き続けている、という現在に至っている。

締めくくりに、親族やごく近しい方々に集まっていただいて催した、佐野正一の追悼ミサ（2014.3.22　カトリック夙川教会）での御礼挨拶を掲載しておきたい。そこに敬意をこめたつもりである。先立っていくつか注釈を加えておくと、佐野正一は母・理子との結婚を機にカトリックに移る前、特に少年期に、親の影響で熱心なプロテスタントの信仰を持っていた。それも佐野正一の明瞭な倫理観や「堅牢性」を養い、ドイツ音楽への親しみを育むきっかけとなっている。父から宗教的な言葉は聞いたことはないが、明治の初めのプロテスタントの発展に旧士族が役割を果たしていることから、佐野正一の育った家にはそれに連なる空気があったと思う。

そして佐野正一は、自らの意思で安井武雄の後継となることを選んだ。国鉄の建築技師の地位を捨てるにあたって悩みがなかったとは言えないだろう。だが、その決断の潔さはその後の人生の推進力となった。60代半ばから度重ねた手術も支障にはならなかった。そうした思いが1955年に記した「S.SANO ARCHITECT」の文字にこめられている。そして、最後までその炎は消えることはなかった。

（さの　よしひこ）



佐野正一追悼ミサ挨拶文

2014.3.22　カトリック夙川教会

本日は父・佐野正一のためにお時間を頂戴し、まことにありがとうございます。もとよりこのような親密なかたちで家族や近しい親族、親しいお付き合いのあった皆様にお集まりいただき、お別れをすることは故人の望むところでした。

司式をいただいた梅原神父様のお話と重複しますが、佐野正一は大正10年（1921年）に大阪市内で生まれ、一昨日3月20日に93年の生涯を終えました。

1942年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業、海軍の技術将校の時期をはさみながら鉄道省・国鉄に建築技師として勤務、1955年、34歳の折に岳父安井武雄の後継として安井建築設計事務所に入社、1961年から89年まで社長を務め、その後会長、代表取締役相談役となって長きにわたってリーダーシップを発揮し、設計組織を育てあげ、今日に至りました。日本建築協会・日本建築士事務所協会連合会・大阪府建築士事務所協会の会長を歴任するなど、建築界の発展・専門家の地位向上に尽くし、1991年には勲三等瑞宝章の栄誉を受けました。

それにもまして、大阪ガスビル新館、大阪空港ターミナルビル、サントリーホール、東京国立博物館平成館といった建築作品を自ら一本一本の線を引いて設計しまとめあげましたが、それらすべてが社会的に意義ある仕事として尊敬を集めた業績でした。

佐野正一にとって、音楽、とりわけドイツロマン派音楽は心の友であり生きる力でした。旧制高校の同級であった佐治敬三様からサントリーの施設の設計を継続して依頼いただいたなかで、サントリーホールは、敬愛する友人のために、また、音楽文化の発展を願って、心をこめてつくりあげた仕事だということができます。

故人には技術者としての誠実さと誇りがあり、社会に対する責任感があり、自らを律し、人を厳しく育てた人でした。それは建築設計の仕事においても、組織運営、建築団体活動においても生涯変わることはありませんでした。ベテランの幹部にも若い世代にも、目的に向かって執念を以て取り組むことの大切さを、叱責あるいは鼓舞などを通じて伝えていたように感じます。

佐野正一はおかげさまで長生きをしました。60半ばで私と姉の母である理子は他界しましたが、70になって悌子さんと再婚をしましてから、一緒に健康を気遣いあう伴侶のおかげで、ときに手術をするようなことがあっても乗り越えてきました。悔いのない人生であったと思います。90を過ぎて今に至るこのところの故人は、優しさと懐の深さを宿しながら、辛口のコメントも相変わらず。人間味と凄み双方が健在の、素敵な時間を過ごしておりました。

私自身は佐野正一の国鉄時代の1954年に生まれましたが、結局のところ同じ建築の道を歩み、父が育てた組織を受け継いできております。佐野正一は長年、創業者安井武雄の魂をどのように受け継ぐべきかについて心を砕きながら、専門家のあるべき姿、果たすべき社会的責任について考え続けました。今思えば、いや最近もですが、父の言葉ひとつひとつのなかには、君にはそれと同じ覚悟が備わっているのかどうかと、ずっと問いかけていたように思います。

おそらく、佐野正一は武士でした。実際に武士の家系ではありますが、この頑固にして忍耐強く切れ味のよいサムライが育てた安井建築設計事務所は2014年4月1日で創業90年に達することになりました。今週父が亡くなる前夜に、私は対外的に90周年目の経営ビジョンとアクションを発表したところです。きっと父はそのあらましを見届けてから正式にバトンを託したのだと思っております。私も武士のひとりとして、しっかりと戦ってまいります。

あらためて、今日はおいでいただきありがとうございました。今日を以て地上における佐野正一の長い戦いは終わりましたが、家族の心の中では変わらず生き続けるでしょう。皆さまも佐野正一をずっと心に留めて頂ければ幸いです。

佐野悌子、私の姉・塩田久美子はじめ家族から心から御礼申し上げます。

佐野吉彦

佐野吉彦が企画した追悼行事

安井建築設計事務所90周年　故・佐野正一相談役追悼企画
つくった情熱、育てる意思ー演奏とトークで語る、これまでとこれからーサントリーホール

2014年12月10日（水）、佐野正一の代表作品のひとつであるサントリーホールで、追悼企画を開催しました。

「サントリーホール：つくった情熱、育てる意思－演奏とトークで語る、これまでとこれから－」と題したこの会には関係者約150名にお集まりいただきました。会場のブルーローズは佐野正一の作品タペストリーで飾られ、サントリーホール室内楽アカデミーの弦楽四重奏の演奏に続いて、佐野正一が尽力したサントリーホールの建設当時の状況について映像を通じて振り返ったほか、福本ともみ総支配人（当時）による「最近のサントリーホール」の紹介、建設から将来、特に子どもを対象としたエデュケーション・プログラムなど、未来に向けた取り組みが紹介されています。

続く第2部では、ホール設立のプロジェクトに関わった音楽プロデューサーの眞鍋圭子氏と作家の北康利氏をお招きしての佐野吉彦との特別トークでは、社会に開かれたホールとしてサントリーホールが果たしていく役割や、佐治敬三氏、カラヤン氏、佐野正一の設計に係わる打ち合わせ秘話などが語られました。（安井建築設計事務所広報部　田村千春）



佐野正一の作品タペストリーが飾られた会場



左から、佐野吉彦、眞鍋圭子氏、北康利氏

注ぎ込まれた情熱
音楽ホール

サントリーホール

サントリーホール・
エグゼクティヴ・プロデュサー
眞鍋圭子

1946年　愛媛県西条市生まれ。
上智大学文学部哲学科卒業。東京芸術大学別科チェロ専攻。ベルリン自由大学とミュンヘン大学にて音楽学専攻。
サントリーホール設立プロジェクトに参加。以来、エグゼクティヴ・プロデューサーとして現在に至る。ホール・オペラという新しい形のオペラ上演の形を生み出し、その企画制作とプロデュース。ウィーン・フィル招聘のプロデュサー。
2005年イタリア政府より『カヴァリエーレ勲章』受章。2008年オーストリア政府より『オーストリア共和国有効大栄誉章』受章
著書に『カール・ベーム（心から心へ）』、『素顔のカラヤン』『音楽と我が人生』、『ベルリンへの長い道』（訳書）など

■佐野先生との出会い

1983年1月26日、極寒のベルリン。早朝のテーゲル空港で佐治敬三夫妻に紹介された時以来、佐野先生はずっと“先生”だった。佐治夫妻が尊敬と親愛の情を込めて、常に“先生”と呼んでおられたからである。小柄な佐野先生は、寡黙で学者肌の気難しそうな人物という第一印象だった。佐治氏の希望で、第三帝国の歴史に登場するヴァンゼー湖まで遠出して、湖畔の古い館で昼食を取った。食事が終わった時、古い陶器製のストーヴの近くに座っておられた佐野先生が「ちょっと失敬！」と席を立たれた。帰ってくるなり「寒いと思って、ホカロンを二つも入れてきたら、熱うてたまらんかった！」佐治夫人の軽妙な受け答えの間、眼鏡の奥の目が、少年のように照れくさそうに光っていた。その時から佐野先生に親しみを覚えることができた。しかし先生が建築家であられること、佐治夫妻の長年の友人であるらしいこと以外、何の前知識もなく先生にお会いしたことになる。

その日の午後にはまず第一回のベルリンフィルハーモニーホールの見学。ベルリン・フィルの老練なインスペクターのバルトローク氏の案内で、ホール全体と舞台機構などの詳しい説明を受けた。真剣な面持ちで先生は小声で質問をしながら、手帳にこまめに書き込んでおられた。小さな字でメモを取り続ける先生のその姿は、旅行中、常に変わることは無かった。真面目で几帳面な方なのだ。

■カラヤンのアドヴァイス

翌日の午後4時前に、再びホールに出かける。指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤンとベルリン・フィルの楽団長に許可をもらい、普段は絶対に人を入れない練習を密かに聴かせてもらうことになっているのだ。丁度その頃、カラヤンとベルリン・フィルの間に問題が生じて、両者が犬猿の仲にあるという非常事態だったので、私達が見学することが、楽団のメンバーに対して、火に油を注ぐことにならないかとヒヤヒヤしたものだった。

休憩時間にカラヤンの部屋を訪問する約束を取り付けてあった。カラヤンは私達が部屋に入るなり、旧知の佐治氏に一体どのようなホールを作るのかと立て続けに質問を投げかけてくる。さらに「自分は、このフィルハーモニーの建設にあたり、ハンス・シャロウンの設計案に大いに賛同して、彼に色々と意見を述べて一緒に期待通りのものを作りあげた。その時に設計の勉強を徹底的にしたので、設計図を見れば、その音響が良くなるかどうか、すぐにでも判断ができる。」

「それで？」と、佐野先生にどのような設計かと尋ねる。極度に緊張した面持ちの佐野先生は、カラヤンの頭の中にはフィルハーモニーの形しか存在しないことを察知されて、設計図を出すことをためらっておられたようだった。結局その場で形を書くと、カラヤンはすかさずこの2階部分をもっと広げるべきだと主張。その他、キャパシティのことや音響のことなど、かなり細かに具体的なことを指摘し始めた。

それ以来、佐治夫妻と気軽に冗談を交わしていた先生の口からすっかり言葉が消えてしまった。考え込んで、心ここにあらずといったご様子。翌日フランクフルトに飛び、オペラハウスをコンサートホールに改装した、ドイツでは評判の良いホールを見学。今も昔の名前で“アルテ・オーパー”と呼ばれている。このホールは大いに参考になったようだった。その日の夕食の時、佐野先生が思いつめたように「もう一度、カラヤンさんに話を聞くことはできんやろか？」とおっしゃった。

翌朝、カラヤンに電話をしてその旨を伝えると、今度は自分のホテルの部屋で話をしようとのアポイントメントを取ることができた。その日のうちにベルリンに飛び帰り、佐治夫妻は東ベルリンを見学されたが、佐野先生はホテルに籠りきり。夜はカラヤン指揮のベルリン・フィルのコンサートに行く。メインはサン＝サーンスの『交響曲第三番：オルガン付き』であった。この時のオルガンがサントリーホールにオルガンを設置するきっかけとなった。カラヤン曰く、「オルガンの無いホールは、家具のない家のようなもの」と。

■ヴィンヤード形式に決定

午後5時からホテル・ケンピンスキーのカラヤンのスイートで佐治夫妻と佐野先生の2回目の会見が始まった。佐野先生はその2日間の内に、カラヤンが最初に指摘したポイントを取り入れて、既にかなり正確な設計図を作っておられた。この2日間の先生の寡黙さがそこに凝縮されていたのだ。先生は疑問点をいくつか質問し、カラヤンが意見を述べる。その二人のやり取りを無言で聞いていた佐治氏が、「カラヤンさんは、何でこの形がええと思われるのかなあ？」と一言。カラヤンの説明に納得がいった佐治氏が、ポンと膝を打って、「ああそうか、ほな、そうしましょ！」ホールの形が決定した瞬間であった。

この2日間の佐野先生の、何かに憑かれたように集中した姿と目の輝きから、これは凄いホールができるのではないかと予感した。ただカラヤンの言うような形にするには、どうも敷地面積が足りないようだった。その問題をいかに解決するかということが、先生が背負いこんだ今後の大きな課題のようだった。佐野先生が音楽愛好家であり、カラヤンを崇拝する方だとは知らなかったが、カラヤンの熱の籠ったアドヴァイスが先生にこのホールへの情熱を巻き起こしたようだった。

何といっても、日本で初のヴィンヤード形のコンサートホールの誕生である！

■ゲヴァントハウス視察

ベルリンフィルハーモニーホールに習って、1981年、次に誕生したヴィンヤード形式のホールが、ライプツィッヒのゲヴァントハウス・ホールである。

ベルリン・フィルもこのホールで演奏したことがあり、佐野先生がベルリンに行かれた際にベルリン・フィルのメンバーが素晴らしいホールだと絶賛するのを聞いていた。サントリーホールがヴィンヤード形式と決まったからにはどうしてもこのホールを見学しなけ

れば気が済まないのが、佐野先生である。

多忙な日程の中から3泊4日の時間をつくり、1983年10月25日、佐野先生は再びベルリンに来られた。翌日、再度ベルリンフィルハーモニーホールを見学し、いくつかの疑問点をインスペクターに投げかける。ピアノのセリ、オーケストラのポディウムのセリ。これらはやはりカラヤンの拘りであった。「ピアノ協奏曲などの場合、オーケストラの椅子を動かすことなくピアノが出てくればセッティングに時間がかからない。ピアノ・セリは必要不可欠。音の伝達の形と同じく、オーケストラは、指揮者を中心に半円形を描いて座り、さらに段差をつけるべきである。オーケストラのセリは、ベルリンの場合、後になって考えついたアイデアであったため、舞台の下の空間が狭く、パンタグラフ形式にせざるを得なかった。新しく作るサントリーホールは、普通のエレベータ形式にできるだろう。」と。

見学を終えてそのまま車でライプツィッヒへ向かった。その晩はゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートを聴き、壮大な建築物としてのホールを見て音響を確かめた。確かにこのホールもこの形式で成功していることを確信された模様。翌日の13時半から15時まで、ホールが使用されていない時間にさらに詳しく説明を受けながら見学することができた。

その晩は、ゲヴァントハウスの向かいに新築された壮麗なライプツィッヒのオペラハウスでモーツアルトの『ティト帝の慈悲』を鑑賞。翌日は先生のたっての希望で、マイセンのアルブレヒト城を見学。さらにモーリッツブルク城を経てドレスデンへ。佐治敬三氏の文化への造詣の深さは有名だが、佐野先生のドイツ文化への造詣も並々ならぬものがあることを知った小旅行であった。

■佐治氏との固い友情

翌1984年の5月、佐治夫妻が東京フィルハーモニー管弦楽団の欧州演奏旅行を聴くことも兼ねてウィーンに来られた。ウィーンでは、ウィーンの音楽界の重鎮を招いてホテル・インペリアルで、サントリーホールのプロデュサー達より『サントリーホール設立の公式発表』を行った。この旅行には佐野先生と、音響の永田穂氏も同行された。

佐野先生はホールの内装のコンセプトをアールヌーボーと決めておられた様で、ホールの椅子の布地もウィーンのバックハウゼン社の物と決めておられた。その大きな理由は歴史的な柄ということに加えて、長年に渡り椅子の張替えごとに同じ製品が補充できるものであることだという。実際、サントリーホールの椅子は既に2回張り替えているが、同じ柄で同じ品質のものが使用されているのは佐野先生の先見の明のおかげである。

この旅行はウィーンからプラハに続く。佐治夫妻と佐野先生と私の4人の列車の旅であった。コンパートメントから出て、背の高い佐治氏と小柄な佐野先生が、通路に立って窓の外を眺め、満面に笑みをうかべながら会話を楽しんでいる様子は、まるで二人が少年時代に戻っているかのような、何とも微笑ましい光景であった。二人は旧制浪速高校の同級生で7年間も一緒に勉学に励まれたとのこと。友情が深まるのも無理はない。佐治氏は「佐野先生は優等生やったから、わしらとは違う」と。佐野先生は「佐治さんは私らとは違うて、なんせ、昼前になったら丁稚さんがお弁当を届けてくれるのだから」と。

長い長い年月に支えられた深い信頼と友情が、サントリーホールという、世界有数のホールを生み出すことになったのだろう。

■尽きることなきホールへの愛情

サントルーホールは、開館して数年の内に、日本の音楽ファンが心地良く集う場所となり、日本をはじめ、海外のアーティスト達に愛されるホールとなった。真の音楽愛好家だった建設主の佐治敬三氏は機会あるごとにサントリーホールを訪れていたが、佐野先生も上京される度ごとに自分の心血を注いで作り上げたホールに足繁く通ってくださっていた。その度に、使い勝手に不都合はないか、などとホールの人間に質問をするのが常であった。

ホールがフルに稼働し始めると、初めには考えもしなかった問題が生じる。開館半年も経たない内に、使用申し込みが殺到し、稼働率は予想をはるかに上回っていた。運営のために必要な人員がどんどん多くなる。チケット・センターも多忙となり、レセプショニストの数も増える。ホールに必要なスタッフが増加し、事務所はかなり手狭になってしまった。その対策を佐野先生はいつも真剣に考えておられた。ホール付近の建蔽率が増えた時も、事務所を何とか拡張できないものかと部下に色々な案を考えるよう指示されていたとのこと。佐野先生の懸案となっていた事務所の拡張は、30年目の改修工事によってやっと実現した。

また私が個人的に感謝しても仕切れないこともあった。サントリーホールはヴィンヤード形式なので、舞台の後方にも客席がある。そのため、歌の入る演目や歌曲、そしてオペラのためにサントリーホールを借りる人は初めの頃は少なかった。歌曲もオペラも音楽のジャンルとして極めて重要なものであるし、歌声がホールに響かないのはいかんとも淋しいこと。ホールの自主企画のプロデュースを手掛けていた私は、はじめにオペラを演奏会形式で始め、1993年からはそれに演出・衣装・照明を加えて、いわゆる“ホールオペラ”としてオペラ公演を始めた。ホールの舞台でオペラ作品を演奏することにより、普通はオーケストラ・ピットに入って演奏するオーケストラの部分が、今までの以上にオペラ作品の中で脚光を浴びることになる。ほとんどオペラしか作曲しなかったヴェルディやワーグナーの作品のオーケストラの部分が、歌と同等の意味をもつようになる。

佐治氏もホールオペラを歓迎してくれ、佐野先生も大阪から必ずホールオペラを観にきてくださった。そこで先生の質問が始まる。演出をするにあたって舞台の機構に不都合はないか、いかにすればオペラをもっとやりやすくできるだろうか？と。本当に真剣に考えてくださる。ポディウム席と舞台を一体化するにはポディウム席の手すりが邪魔になるのではないか？舞台の両脇の大理石の部分の下は空洞になっているから、あの部分は無くしても良いのだが…等々。その真摯さにいつも頭が下がる思いだった。この佐野先生の思いが、やはり30周年改修で実現した。ポディウム席の手すりを取り外すことができるようになったのである。何とありがたいことだろう！

自他ともに“傑作”と称される先生のサントリーホールにかける情熱は尽きることがなかった。現状に満足することなく、さらに一層よくなることを、より使いやすくなることを、さらなる改良を考え続けておられたのだ。先生は2014年1月10日にこの世を去られた。聞くところによると、先生は最後までご自宅の書斎でサントリーホールの30周年の改修のための図面を描いておられたとか。ホールのことが自分の子供のように、最後まで頭を離れなかったのだ。ご子息が先生の思いの籠ったその図面を鞄にいれて、御棺の足元に入れられたが、その鞄は奇跡のように焼け焦げることなく残っていたとのこと。

サントリーホールへの自分の思いを、ご子息に継いで欲しいという遺言のように…。

（まなべ　けいこ）

注ぎ込まれた情熱
音楽ホール

未完成交響曲

～佐野正一のサントリーホールへの想い～

㈱安井建築設計事務所　理事
木村佐近

1955年滋賀県生まれ。1979年中部工業大学（現中部大学）大学院 博士前期課程修了。1979年安井建築設計事務所東京事務所勤務、現在に至る
主な作品
サントリーホール 新築および5年ごとの改修／和光市庁舎・市民文化センター／東京国立博物館平成館・正門プラザ・文化財管理棟新築、同 本館・表慶館・東洋館・黒田記念館の改修／東京汐留ビル（CONRAD HOTEL）／丸の内トラストタワー（SHANGRILA HOTEL）／中国内蒙古大劇場・博物館　他
主な受賞
2008年中国建築学会賞「内蒙古大劇場・博物館」／2012年神奈川建築コンクール入賞「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館 映画保存棟Ⅱ」／2012年JIA25年賞「サントリーホール」／2016年グッドデザイン賞「日本橋榛原」／2019年日本建築学会賞（業績）サントリーホール／第28回BELCA賞ロングライフ部門　サントリーホール　他

今からおよそ40年前、当時のサントリー佐治敬三社長は、学友の当時安井建築設計事務所社長であった佐野正一にサントリーホールの設計を全幅の信頼を持って託しました。

佐野正一は、われわれスタッフを叱咤激励しながら、自ら設計の陣頭指揮にたって、1986年に、このホールを完成に導きました。

ホールの計画は1982年の秋から始まります。佐野正一61歳、私はまだ27歳の頃で、脂の乗り切った佐野の設計への没頭ぶりは今振り返っても背筋が思わず伸びるほど鬼気溢れるものでした。

中途半端なスケッチを見せると、「やりなおせ！明日首を洗って出直して来なはれ！代わりはいくらでもおるからな。」と睨みながら、スケッチを突き返されたりしたものです。

その気配を察してか、当時、大阪本社から佐野が東京事務所にやってくる日は、役員階は決まったように「もぬけのから」になり、たびたびランチのお供をせよと、声がかかりました。

そのような時、佐野からは、口癖のように、「上等なものをこしらえなはれ！」と言われていました。

いまでも「上等な」と「こしらえる」の語感が耳の奥にはっきりと残っています。

「上等な」は、高価な、豪華な、ではなく、品格の高いものとでも言うのでしょうか。そして「こしらえる」は自分の掌の中で、素材を生かしながら、手の跡を残しながら、つくる。

「いまは、カタログで選んだ材料を組み合わせれば建物はできるが、それは違うんだ！」とも言われていました。

ある日、ホワイエの大理石トラバーチンの大きな壁面の展開図に突然鉛筆で、何やら描きだした時には、その意図を図りかねましたが、しばらく描き続け「麦の穂だ」とニヤリとしながら渡されたスケッチは、いつものふにゃふにゃの線。いつものように、トレーシングペーパーに忠実に描き写しました。

そして、壁面ができあがってみると、ホワイエのシャンデリアとステンドグラスの光が麦の穂のシルエットを照らし出し、佐野が大理石に織り込んだ綾が、光の彩となって現れました。作業用の仮設足場が外れ、大理石に麦の穂が浮かび上がった時、これを「こしらえ」たかったのか・・・そう思いました。使う材料のひとつひとつを自分で確かめ、掌の中で、「自分でこしらえなはれ！」と鉛筆を握る佐野の手の動きを思い出しながら。

さて、サントリーのお酒にまつわる麦の穂のモチーフは大理石の壁にとどまらず、階段手摺子の形状や、大ホールパイプオルガン、ブルーローズ（小ホール）の壁面のデザインなどに繋がっていきます。カラヤン広場に面したエントランス扉の内側は俗世から隔離され、音楽のための雰囲気に包まれたエントランスホワイエがひろがりますが、このまわりには、佐野の麦の穂のほかに、アート作品を集中して配置しています。

天井に石井幹子のシャンデリア『光のシンフォニー』がきらめき、振り返ると、宇治山哲平の石壁画『響』がリズミカルな表情をたたえ、その両脇から、三浦啓子のステンドグラス『律』が青い光を放つ。

現代建築は、装飾を排除して、シンプルな空間をめざしています。サントリーホールの後に各地にできたコンサートホールも、例外ではなく、ホール内は音楽のためにデザインされても、ホワイエはオフィスロビーのような無機的なものが多く見受けられます。

サントリーホールのホワイエは、むしろ、音楽をテーマにしたアートや、お酒にまつわる多様な装飾をちりばめ、音楽を聴く前や幕間そして終演後のための豊饒な空間を創り出し、エントランスに一歩足を踏み入れた時から、音楽が始まるように「こしらえ」ています。

ところが晩年まで佐野正一は、「このホワイエはまだ未完成だ！」と言い続けていました。

ガラスの入った扉一枚で、ホワイエと屋外のカラヤン広場が仕切られていて、日常と非日常がしっかり区切れないからという理由からです。



2012年10月６日　ガラコンサート　写真提供：サントリーホール



ホワイエ内観　左手にエントランス扉、正面に麦の穂のモチーフの大理石壁を見る　撮影：黒住直臣

開館した後も「扉のガラスを不透明なブロンズパネルに変えた案をつくりなはれ」と言われ、幾案もの扉のスケッチを描き、再三にわたって、サントリーホールに扉の改造の提案を続けてきました。佐野の中では、サントリーホールの設計はまだ終わっていなかったのです。

佐野は90歳を迎えた2012年の年始に、ご挨拶と称してサントリーホールにエントランス扉の説明に行くと言い出しました。

新年のご挨拶の日、佐野は奥様に支えられて、もう一方で杖をつきながら、小さな歩幅でかろうじて歩けるほど、足腰が衰えていましたが、全日空ホテルのロビーから、サントリーホールの楽屋口に歩いて向かいました。普通の大人であれば、2、3分の距離のところが、その日の佐野にはあまりにも遠く、後ろを歩く私にまでその時間が長く感じられました。そのうち楽屋口玄関につながる駐車場のスロープの途中で、今まで人前で見せたことの無い苦しそうな表情で、スロープの先の楽屋口をじっと見つめたまま動けなくなりました。そのとき、楽屋口から、到着があまりにも遅いことを心配されたホールの支配人が出てこられ、車椅子を準備して、仁王立ちになっていた佐野を何とか館長室まで招き入れました。館長と総支配人がお見えになった頃には、佐野は何事もなかったように、いつもの口調で饒舌に語りかけました。

「サントリーがホールを自前でつくるという決断をした佐治敬三社長の強い意志を受けて、ホールを存続させることは、死に物狂いでやらなければならない大変な仕事である。私は近いうちに命がなくなるので、サントリーホールに伺うのは今日が最後になる。最後のお願いをします。エントランスホワイエの扉の改造は時間がかかってもいいので、ぜひ実現していただきたい。」と。

一方のホール側は、「ホワイエの様子が扉のガラスを通してカラヤン広場に漏れ出し、またカラヤン広場の様子もホール内から窺い知れるのが良いので、今のまま改造はしたくない」との一点張りです。

扉の改造については、佐野正一以外、誰も賛同していない状況の中で、その是非はともかく、ホールの空間や、企画、運営に至るまで、真正面からホールを見続け、文字通り命を削ってホールにご挨拶と称して、意見を述べに来るその圧倒的な気迫は、そこに居合わせたひとりひとりの記憶に深く刻み込まれたに違いありません。

帰り道の途中で、ふと気づきました。「今日の佐野は、ホールに対する誇りと情熱を、後進の私達に伝えるために、体を張ったのだ」と。奥様に片腕を支えられ、もう一方で杖をつきながら、小刻みに歩く佐野正一のうしろ姿を思い出し、こみ上げてくるものがありました。

そしてそのわずか2年後、佐野は天に召されたのです。

葬儀の日、佐野吉彦社長から、「佐野正一の自宅のデスクにあったサントリーホールの扉の木村君のスケッチ、最後まで考えていたようだ。これを棺の足元に入れるから。」と言われ、止まらない涙の向こうにその図面が納められるのを見届けました。

数日後、佐野吉彦社長から呼び止められ、耳打ちされました。

「木村君、木村君のスケッチが、足元に焼け残っていた。サントリーホールの扉のスケッチだけがそのまま」

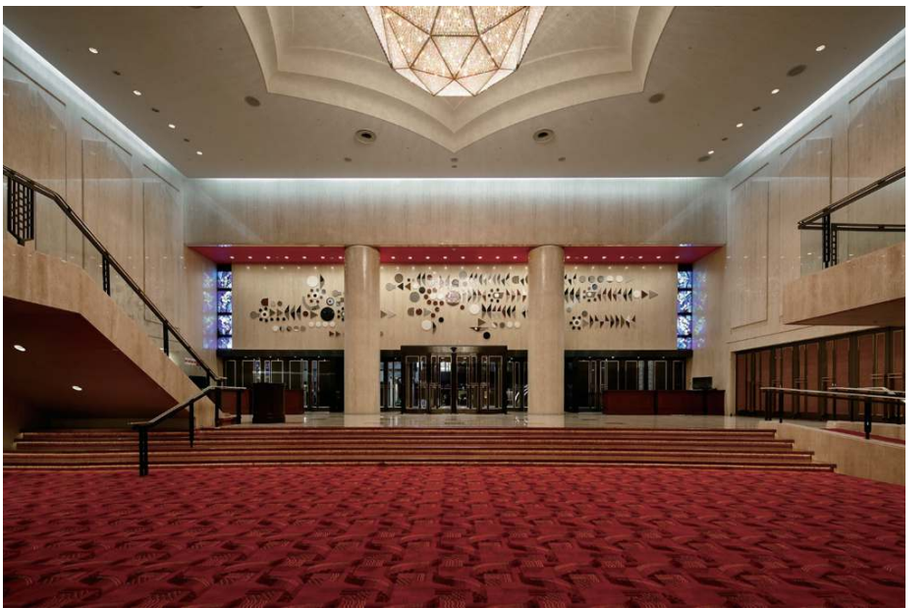
・・・・絶句とはこういう状態のことでしょうか。にわかに状況を飲み込むことができず、しばらく言葉が出ませんでした。

佐野正一はスケッチを置いて行った！・・・・。

そして、

「サントリーホールのホワイエは、まだ、未完成だ！」と佐野正一が耳元でささやいた。ような気が。

（きむら　さこん）



ホワイエ内観　正面にエントランス扉を見る　撮影：黒住直臣

注ぎ込まれた情熱
駅・駅ビル

佐野正一の存在感

～国鉄時代の建物設計を通じて～

佐竹鐵也

1928年　兵庫県生まれ。
1948年　摂南工業専門学校（現大阪工業大学）建築科卒業、同年大阪鉄道局へ入局
1969年　大阪工事局（新幹線、万博対応）
1973年　東京第3工事局（東北・上越新幹線等）
1976年　東京建築工事局（全国駅ビル計画等）
1978年　大阪工事局（第4代大阪駅、学研都市線）
1982年　天王寺管理局（和歌山ターミナルビル、奈良ホテル、天王寺ターミナルビル）
1984年　退職
1984年　和歌山ターミナルビル取締役建設部長
1988年　天王寺ターミナルビル取締役建設部長
1992年　（株）交建建設大阪事務所所長
1999年　佐竹一級建築士事務所所長

■佐野正一の存在感

佐野正一先生との初会は、国鉄天王寺管理部建築課で新進気鋭の課長としてご在職の時で、私は1948年（昭和23年）、就職間もない大阪鉄道局施設部営繕課庁舎係に所属していた。直属の上司は元陸軍航空本部付陸軍建技少佐髙山侃也課長であった。陸軍技術有功章を２回も受賞されていた。武藤清門下の俊才であったと聞いている。構造に関して厳しい指導を受けていた。突然、髙山課長から「佐野課長が非常階段の柱を除れと言っている。君、行って説明してこい。」再度聞き直しても同じ言葉。

物件は戦災復旧の天王寺管理部庁舎は木造釘打充腹梁軟構造である。いが栗頭の生意気そうな奴が来たなと思われただろう。「非常階段の柱について説明に来ました。」横を向かれたままである。

「柱を除去すると側壁柱を支点として階段の篏桁を天秤梁で内側の釘打充腹梁で受けることになります。伝受した振動を抑止するためには１階あるいは２階に支柱を設けなければなりません。せっかくの空間が阻害されます。ただし、振動を伝波することなく、空間阻害することなくご指摘の柱を取る方法があります。」

やっとこちらを向いていただいた。予告されていた怖い人ではない！優しい目をした人だなと思ったのが第一印象である。

「それは反対側にも階段を設けます。そして、篏桁と手摺りを板張釘打充腹梁とし、建物本体とはボルトで縫いつけます。」

しばらくして「君もういいよ。」「・・・それでは柱を建てさせていただきます。」

戻って髙山課長に「柱を建てること了解していただきました。」と報告すると「そうか」と素気ない返事であった。

いま思うと、たぶん「チンチクリンな奴がチンチクリンな理屈」を言ってきたと電話でもされていたのかもしれない。

二度目は、本社施設局建築課補佐をされていた時で、京都鉄道病院の病棟増築の基本的な考え方をご教導いただいた。復旧時代から新しい建築への切り換えの時期であり、「『医療体制、医療機器、空調、断熱』を考慮してほしい。」との指示であった。

私が直接お目にかかったのは、この二度だけだったが、その存在感は今も記憶に残っている。70年前のことである。

■大阪駅・駅ビル計画のための基礎調査

1970年頃大阪駅関連の一連の調査を行った。駅ビルは調査・企画から始まる。経営収支良好の見通しで次の設計に進む。調査マンとしての使命である。

【人の活動調査】

平日、土日、晴れ、雨時に調査を行った。大槻係員（東大43年）に地下鉄完成時を予測し、国勢調査資料を利用して解析してもらった。東大の都市計画の友人の協力得た成果である。

【券売機の分析】

国鉄、私鉄、地下鉄の500台を対象とし調査し「行列待合理論式（阪大　岡教授の紹介）」を用い終日乗降人員からラッシュ時の適正台数を導いた。実作業は宮本君（大工大42年）が纏めてくれた。四次式の手数のかかった「グラフ」であった。本社建築技術講演会で発表し好評を得た。

【タクシーの調査】

女子大学生のアルバイトで行先別調査を行い広場の適正滞留台数の想定を椎名係員に行ってもらった。

【地質調査】

40m地下までボーリングを施工し、２カ所の離れた地点で発信器を設置しその伝波波形と時間差で解析した。その導孔を利用し地震計を設置した。

【バスの調査】

梅田周辺にバス停が40カ所近くあり、地下鉄整備後の路線と時刻は不明で後年調査とし分離した。

【店舗の売り上げ調査】

当時は１日4,000円/㎡であったと記憶しているが、人の流動を阻害することなく売上額をアップさせるのは至難の業である。

以上のような各種の調査結果の分析が次の予測値まで算出可能のグラフ作成し得たことは各担当者の努力とご指導いただいた関係者の方のおかげと感謝したい。そして、これらの調査が後の大阪駅ビル（アクティ大阪）の計画の基礎資料として役立ったのではないかと自負している。　　（さたけ　てつや）



三代目大阪駅



大阪駅ビル（アクティ大阪）

注ぎ込まれた情熱
駅・駅ビル

大阪駅ビル（旧愛称アクティ大阪）設計での佐野正一

㈱交建設計大阪事務所所長
中西　稔

1946年　石川県生まれ
1971年　日本国有鉄道入社、大阪工事局入局
1983年　大阪駅ビル（アクティ大阪）完成
　　国鉄本社　構造物設計事務所転勤
1987年　JR西日本に採用、JR西日本本社ビル担当
2000年　JR西日本コンサルタンツに出向、OSC担当
　　JR西日本コンサルタンツデザイン室長
2012年　㈱交建設計大阪事務所長、現在に至る

私が若くして大阪駅ビル（旧愛称「アクティ大阪」）のプロジェクトに参加できたのは幸運であった。当時係長にもなっていない私が、佐野先生が出席するデザイン会議に出席できた理由を自分なりに考えてみた。

1975年の夏、まだ20代だった頃に、約1カ月間、自費でヨーロッパの建築・都市を視察したことだろうか。

その旅は鉄道建築を視察するというよりは、ル・コルビジェ、アルバー・アアルトといった、当時を席巻していた建築家の作品なり都市計画を観て廻るもので、ギリシアを皮切りに、イタリア・フィンランド・スウェーデン・デンマーク・ドイツ・フランス・イギリスをそれこそ、古代から現代、パルテノン神殿からロンシャン礼拝堂・タピオラ・オタニエミ…。ヨーロッパの文化・建築を20代の内にこの眼で観てみたいと願っていた。

ヨーロッパでは、早朝が見学の稼ぎ時であり、期間中、朝は4時に起床し、主にその都市の中央駅を見学。幸い駅は24時間営業である。ローマ・テルミニ駅、フィレンツェ駅、ミラノ駅、ストックホルム駅、そして、E・サーリネンのヘルシンキ駅、ハンブルグ駅、ケルン駅、そしてパリとロンドンのターミナル駅群。駅はほとんど早朝1人で堪能した。余談ながら、国鉄・JRを55歳で定年退職してからは、隔年ペースでヨーロッパを訪問し、話題の新建築とその都市の主要な駅は必ず観るようにしている。もちろん、私にとって、早朝がベストタイム。

ヨーロッパの駅は、大アーチのトレインシェッドと、頭端駅であることを示すその都市のシンボルとして大空間の駅舎が主であり、通過駅が主体の日本駅とスタイルは大きく異なっている。

大阪駅ビルプロジェクトにおける、国鉄の組織としては、当時、大阪工事局に「開発設計室」があり、当時の室長は、水野雅文氏。水野氏は京都大学・大学院卒の構造屋であり、どういうわけが、私は氏にかわいがられ、デザインは、中西君に任せた、と冗談交じりに言われた。

国鉄は、躯体・外装を担当し、その発注と工事監理が主たる業務である。実施設計を受託している「安井建築設計事務所」として、佐野社長のOKがなかなか出ないせいか、国鉄本社としては、デザインを早く決めろ、と矢の催促。そこで私がガス抜きとして、かなりのエレベーション・パース案を作成したのを記憶している。

そして、大阪駅ビルのデザイン会議である。場所は、かの「大阪倶楽部」で、安井側から、どなたが出席されたのか記憶にないが、たぶん当時の紙部長、岡本さんあたりが出席されていたような気がする。国鉄側からは、当時の大阪工事局長・龍治建築次長・水野室長、そして小生。

佐野社長は国鉄の大先輩であり、駅舎建築のオーソリティでもある。会議は殆ど、佐野社長のワンマンショウのように進んだ気がする。

私は、建築家の講演会などにはよく参加するほうで、建築家の話しぶりには慣れていたつもりだが、佐野社長の話し方は、実に説得力があり、巧みで魅力的なものだった。ぐいぐいと人を引き付ける。この人は「別格」だな、とはその時の印象である。お飾りのオーナー社長とは違う。中でも、特に興味深かったのは、飛行場・空港の設計のために、当時の超音速旅客機「コンコルド」に、わざわざ乗りに行った時のお話が、印象に残っている。新しいものに対していち早く体験・吸収しようとする姿勢に感心したことを覚えている。

その「別格・佐野正一」をして、実務で驚いたことは、昔は図面をA1版のトレーシングペーパーに鉛筆でドローイングしていたものだが、図面の承認欄には、必ず佐野正一のイニシャル「SS」の自筆サインがされていた。聞けば、社長自身全ての原図に必ず目を通して、ご自分でサインされているということだった。組織事務所の長としての、覚悟が図面上にも示されていると強く感じた次第。

水野室長は、構造が専門だけに、非常に地盤の悪い梅田に建つ建築に、総荷重を軽くすることを主張され、結果「弁当箱」とも形容されるアルミカーテンウォールの外装となったが、さすがにディテールの面では安井建築設計事務所の技を多いに発揮していただいた。

別名「アーキテクト・ベイジュ」とも言われた、アルミの電解着色を東西南北、それぞれ異なるメーカーの施工で、その色合わせたるや、大変だったと思われるが、国鉄の監理部門と安井の設計者のメンバーで、見事なカラーマッチングとなった。

小生は、国鉄からJR西日本に採用され、その後、JR西日本コンサルタンツに移行してからも、現在の「大阪ステーションシティ」プロジェクトに参画し、かつてのアクティ大阪の増築計画にも参加した。この時の増築計画の外装デザインは、学識経験者の先生方の指導のもと、JR西日本と安井建築設計事務所のメンバーとの合議制のような形で安井建築設計事務所がまとめたものである。

竣工は2011年。

佐野正一は最晩年ではあるもののご存命中のはず。一言ご感想を伺いたかった思いである。

（なかにし　みのる）



サウスゲートビルディング

注ぎ込まれた情熱
駅・駅ビル

設計・組織作りの原点は国鉄・駅ビル

元㈱安井建築設計事務所取締役副社長
岡本弘之

1944年　兵庫県生まれ
1968年　京都工芸繊維大学大学院建築工芸学終了
1968年　㈱安井建築設計事務所　入社、
以降～設計部長・取締役・副社長・
監査役を歴任
2019年　退任退職

主な作品
・芦屋ステーションビル
・大阪ターミナルビル
・住吉ターミナルビル
・天王寺ターミナルピル
・鹿児島ターミナルビル

■民衆駅・駅ビルについて

国鉄は、戦後復興の過程で財政困難により国鉄法を1950年に改正し民間資金を導入した「民衆駅」を建設した。しかし商業施設が収益を上げても国鉄には地代収入しか入らなかったため、1971年に国鉄法を改正し国鉄の直接投資が可能となる「駅ビル」建設へと移行する。そして1987年分割民営体制へと転換した。今まで培った商業施設運営のノウハウにより、駅ビル事業が収益の柱となり、都市機能充実と市民の日常都市生活に大いに貢献している。

■京都駅ビル

1877年開業の京都駅は、鉄道院技師渡辺節設計によるセセッション様式の二代目駅舎が1915年に建設されていた。しかし、1950年11月失火により全焼した。29歳の施設局建築課設計担当課長補佐であった佐野正一は、復興への対応指令を受け現地に急行し大規模建築工事をまとめることになった。チーフは鉄道建築のリーダーであった施設局建築課長伊藤滋で、佐野正一は現地との調整役まとめ役であったと思われる。大変なスピードで全焼２週間後には施設局の計画案、塔のある現代様式の外観案ができていた。地元説明も行なわれ４カ月後には着工、1952年に高さ30mの塔を持つ近代的な三代目駅舎が竣工した。

佐野正一は「デザインは全部僕が仕切ったが、ノイトラの思想や伊藤の機能主義が入っている。割り切った設計ですが気に入っています。」と記している。

復興の時間的な理由で「民衆駅」方式は見送られ、後日京都観光デパートが入居することとなり、その内装設計を安井建築設計事務所が行なった。

私は1980年の内装改修時に設計を担当し、その内容を佐野正一に説明した。高い塔と横長の箱状低層の組み合わせ、外観端部の傾斜角度、コンコース吹き抜けの意匠などをしっかり詳細に記憶されておられ、建設当時の経過や主旨などの昔話を懐かしそうにされた。



三代目京都駅

老朽化に伴い著名建築家を迎えての国際コンペが開催され、原広司設計による四代目京都駅が1997年に開業し観光都市京都の新名所となった。

佐野正一は「新京都駅ができ旧駅舎が解体になってホッとした。一寸感慨深い。」と語っていた。新京都駅の設計に参画したいと大変強く思っていたがコンペに指名されなかった、その無念さからでた言葉と思う。

■天王寺民衆駅

佐野正一は安井建築設計事務所入社後、国鉄より姫路民衆駅（1959年竣工）に引き続き、天王寺民衆駅の設計監理業務を受託した。生誕の地であり大鉄局天王寺管理部に勤務していたこともあり、天王寺駅には特段の思いがあった。堀割橋上の４階建て鉄道ビルの基礎工事が完成した1943年に、戦争激化による資材不足のため工事が中止され、木造仮駅舎が設置されただけの状態であった。

天王寺民衆駅は線路をまたぐ橋上形式という珍しい駅として1962年に竣工した。箱根での国鉄建築陣幹部の設計検討会議に佐野正一も参加した。外観デザインは議論の結果、深い横線型の陰影をもったグレー色のアルミスパンドレルによるスピード感のあるデザインとされた。「基本は四天王寺の大伽藍の雰囲気である横長い黒々とした甍屋根のつくりだすリズムが設計のモチーフであった。」と愛着を示しながら後記している。

私は1995年の外装全面改修において、横連窓のボックス切れ味感はそのままに、商業ビルらしく明るく軽快なパネルに一新した。当初の四天王寺の甍屋根の外観イメージからの大変更であったが、白色に改修することに佐野正一からは前向きな賛同を得た。広島民衆駅・和歌山民衆駅でも黒っぽいカーテンウォールを明るい白色にイメージチェンジした。



天王寺民衆駅

■天王寺ターミナルビル

天王寺駅ビルに接続して建設された天王寺ターミナルビルは、ともに天王寺都心核の街造りの一環を担って1995年に開業した。

佐野正一は、建築家であられたターミナルビル原弘道社長とデザイン検討会を数度開催し、マッシブなビル外壁が前面道路境界から距離もないことから、将来の模様替えを是とするキャンパス外装とすることになった。華やかさ・躍動感・賑わい感などを表現するため、色の異なるアルミパネルに異なる模様のエンボス加工を施し、季節・天候・時間によって、色合・パターンが多彩に変化して見える。

佐野正一はその後、「商業施設が大部分を占

め今までの駅ビルとは外観はかなり相違する。設計担当したのはわが社の責任であるが、設計細部に同調しているに係らず、設計思想とは違った印象である。すこし遺憾なことである。」と述べている。

2011年に天王寺の二つの駅ビルは統合され、一体感を表現した外装改修・「巨大ウオールアート」により大きく表情が変わった。これを佐野正一はどう感じたか、その思いの真意を聞かずのままとなった。



天王寺ターミナルビル

■大阪駅ビル（アクティ大阪）

赤レンガのハイカラな初代大阪駅、豪壮な石造ゴシック風の二代目、そして三代目が地上5階の駅舎ホテル建物として1936年に着工していた。しかし戦争激化により4階以上の鉄骨が供出解体され、未完成の3階建て駅舎として1940年に開業した。

四代目駅舎アクティ大阪は、ターミナル機能整備を目指した地上27階の大規模複合商業ビルとして1983年にオープンした。外装は軽量化を図るためアルミパネルを採用し、明るく活動的かつ軽快で端正な表現により、商都大阪の堂々とした玄関口の顔として美しい街づくり誘導を目指した。

設計専任チームは佐野正一の直接指示に従いながら、国鉄およびビル会社と活発な議論を実施しながら計画を進めていった。現在のようなCADがない時代に、超高層複合ビルの平面立面すべてを手書き作成し検討していくのは、大変ハードで厳しい状況であった。

プロジェクトの社会的重要性を喚起するため、工事会議には各社トップ責任者の出席を促し、自ら工程確認・品質確保・課題抽出などの監理を進行した。高所閉所恐怖の中で全員参加の工事現場視察を率先していくなど、その強い行動力に、安井建築設計事務所のスローガン「誇りと情熱」を実感した。

佐野正一は「アクティ大阪は私の精神を集中してつくりあげた仕事である。この建物の設計姿勢のなかに理念がみつけられるだろう。」と語っている。そして「基本要件を守る機能主義の中ではっきり駅建物と識別される地域主義の判断で設計している。都市のゲートであり、これを象徴するようにいかに表現、いかに設計するかが最高の問題だった。すべての人にとって駅の存在は明確でなければならない。周辺に高層ビル群が立ちふさがるような事態になっても駅だけははっきり明確でなければならない。」と強い思いを記している。



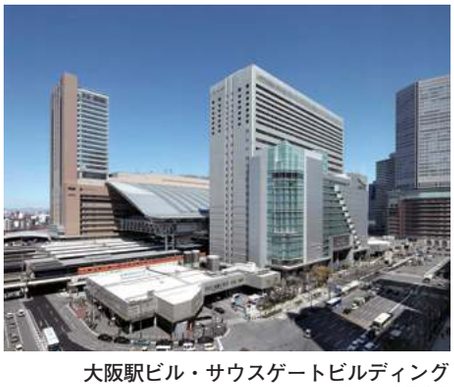
大阪駅ビル・アクティ大阪　撮影：エスエス大阪

■大阪駅ビル（サウスゲートビルディング）

西日本最大のターミナル駅・大阪ステーションシティの一環として、2011年に大阪駅ビル（アクティ大阪）が増築された。アクティ大阪は都市計画法の制約により駅前広場への増築など出来ないと思っていたが、法的に立体的な範囲を定めることにより、駅前広場への増築が可能となった。

駅にアプローチする各ストリートからの見え方や特性に応じて異なる個性ある表情を持たせ、既存ビルから“生長”してきたかのようにデザインしている。正面は、駅の顔・わかりやすさ・存在感・賑わいが感じられる。

佐野正一はアクティ大阪竣工後に、「アクティ大阪でとりあげた設計モチーフは基礎となるものであり、将来駅舎の増改築をするようなことがあれば基本的に守られてデザインを継承することが望ましい。」と記していた。駅ビルについての自らの理念はすでに伝わっていると判断されて、この増築計画すべてを佐野吉彦社長および設計担当総括主任に委任された。



大阪駅ビル・サウスゲートビルディング
撮影：竹中工務店

■佐野正一の設計理念

鉄道建築のリーダー伊藤滋建築課長は信念にもえ駅舎建築に機能主義を実践していた。それを直近で実経験したことが佐野正一に大きく影響を与え、その後の建築設計の理念の原点がそこにあると考える。

「建物デザインの基本は機能主義かつローカリズム指向であり、適度な両面をもつことが理想である。特異な造形、色彩はとらない。見かけだけの現代風造形には断固反対したい。」と記している。佐野正一は機能主義・地域主義の姿勢に基づき建築設計を継続してきた。

■佐野正一と設計事務所

国鉄のチーム体制での施設づくり経験が組織事務所化を進めた。アーキテクト安井武雄がすべてをまとめるアトリエ事務所から、多様な建築課題に対応できる設計組織の充実を目指す。「それぞれに自主的を持たせてはいたが、全部門を掌握、指揮する集中的組織に改めた。いわば大型軍隊風のアトリエ型である。」と自ら記している。

アーキテクト佐野正一は、社員を鼓舞叱咤しつづけ組織化を継続し、完成した図面、図書すべてに自らのサインをすることを責任としていた。そして日本有数の組織事務所に成長させた。

■むすび

佐野正一の設計および組織作りの原点は国鉄・駅ビルにあったと考察しています。私は多くの建築設計を担当させていただきましたが、国鉄出身、駅施設の専門家として、特に駅ビル設計では自らが全責任者であるとの熱い情熱をもって大変厳しく直接指導されてきました。そこで受けた経験が私の建築への思いに大きな意味をもっています。改めて佐野正一には公私にわたりご指導ご鞭撻をいただいたことに感謝申し上げます。

（おかもと　ひろゆき）

注ぎ込まれた情熱
空港ターミナルビル

空港ターミナルビル

情熱と好奇心／直実行

㈱安井建築設計事務所
シニア・エグゼクティブ
横尾迪夫

1946年　京都府京都市生まれ
1969年　大阪工業大学建築学科卒業　安井建築設計事務所入社　関西国際空港ビルディング（株）出向（1978－1979）、大阪工業大学建築学科非常勤講師（1980－1992）
日本建築学会近畿支部卒業設計競技受賞
空港関係主要実績
＜調査＞大阪国際空港ターミナル地域計画調査－運輸省航空局（1970）（1977）（1991－1993）　幹線空港将来計画－全日本空輸（1970）　空港整備5ケ年計画－日本航空（1971）　大阪国際空港ターミナルビル将来計画（1971）　関西国際空港ターミナル施設基本構想調査（1986－1987）
＜作品＞（新）鹿児島空港ターミナルビル（1972）　鹿児島空港国際線ターミナルビル（1982）　熊本空港国際線ターミナルビル（1983）　那覇空港国内線ターミナルビル（1999）　大阪国際空港ターミナルビル国内線化再整備（1998）　東京国際空港国際線ターミナルビル（2010－2020）　東京国際空港庁舎・管制塔（1992）　関西国際空港庁舎・管制塔（1992）　大阪国際空港庁舎・管制塔（2000）　中部国際空港庁舎・管制塔（2003）　東京国際空港新管制塔（2008）　那覇空港管制塔庁舎（2019）

■はじめに

佐野正一が空港施設に係る機会となった、大阪国際空港ターミナルビルに没頭される頃、私は建築を志す一学生、卒業設計「空港旅客ターミナルビル・ユニットの提案」を日本建築学会近畿支部卒業設計競技に応募、受賞。審査委員の一人が佐野正一であったことを知るのは、入社後の表彰式のことである。

私は、大阪国際空港ターミナルビル供用開始の年1969年4月に入社、その年末12月29日に（新）鹿児島空港ターミナルビルの設計監理の依頼があり、翌正月2日、佐野正一は関係者（関西国際空港ビルディング（株）出向から戻った横山設計部長、大阪空港設計室長であった竹本部長代理と新入社員の私の3名）を自宅へ集め、計画のスタートを切った。

以降2000年頃までの間、大阪、鹿児島、熊本、那覇の空港ターミナルビル、羽田、関西などの航空局庁舎と管制塔、関西新空港のコンペや提案などを通して佐野正一の謦咳に接し、人となりを学び見る機会を得たのである。

■鉄道駅から空港ターミナルへ

●民衆駅のきっかけ　「第３代京都駅」

佐野正一は、1955年安井建築設計事務所に勤める前の約10年、運輸省（後に日本国有鉄道）に勤務、京都駅の建替えに参画している。

京都駅は、御所で行われる即位の礼にそなえ、皇室の貴賓室や車寄せを持つ駅である。建替えを期に、貴賓室や車寄せは独立させるが、一般利用客を大きく優先する空間構成を創り出した。１階は乗車及び降車コンコース、その中間に出札や待合室、２階に店舗を集中、第３代京都駅は都市の玄関口としての象徴的な鉄道駅から、一般利用客を優先する大量輸送時代の鉄道駅を指向するものとなった。

朝鮮動乱により高騰する駅舎工事費を補う方法に、府、市と商工会議所の推薦する店舗で構成する新会社を設立「工事費の一部を負担させ、営業をさせる方法」を生み出した。

後の、民衆駅（駅ビル）の手法である。

●民衆駅的経営を　「空港ターミナルビル」

米軍からの伊丹基地の全面返還を機会に、運輸省は3,000m滑走路とターミナルビルの建設を決め、万国博覧会を目指すこととした。

ターミナルビルは、新会社関西国際空港ビルディング（株）が建設と運営にあたるが、ロビー等公共部分の多いターミナルビルの運営、航空輸送発展に伴う公共的投資を民間企業形態で行うには、航空の急速な発展傾向を先取りする短期間での資本投下、かたや段階的な増築にも限度があり、初期投資が適正投資を上回る厳しい事業を遂行する必要がある。対応策の一つに「コンセッションに公共部分の負担と売上歩合を賃貸料に加算」とした。

民衆駅（駅ビル）的経営思想の導入である。

●設計者「性格を同じくする民衆駅経験者」

1965年７月、新会社の発起人会は、設計者の選定要件の一つに、ターミナルビルと共通した性格を持つ駅ビルなどの経験があることのほか、関西から選定したいとの意向を持ち、安井建築設計事務所へ依頼することとした。

■未知の分野 短工期の計画・設計

●参考事例の乏しい　新分野

ターミナルビルは、2府県3市に跨る90,000㎡の巨大建物、第３セクターによる複合建物、運輸省から設計・建設委託を受ける区分所有建物、短工期、全てが特別であったと思う。

設計にあたり、参考となる文献もなく、事例は当然のこと国内にはない。海外も乏しいが、足と目で集めるしかない。何分、航空輸送の発展は第二次世界大戦後のことである。

参考としたのは、ターミナルビルの建設・運営主体が類似する欧州のターミナルビル、また建築計画的にも同じフィンガータイプ、特にアムステルダム・スキポール空港などを範として設計を進めたようである。

●設計依頼から供用まで　「僅か３年半」

設計依頼は、供用開始予定の約３年半前1965年７月のことである。

半年間は、計画の基礎となる旅客需要予測と数値的与条件の設定と基本計画原案を作成、引き続いて航空局や航空会社との調整に入り、1967年３月末に基本計画案「27-K案」を航空局が承認、実施設計へ進んでいる。

新会社への発言力が強く最大のテナントである航空会社、営業面や運営面などでは競い合う複数の航空会社との調整、管理者である航空局との協議、複雑で多岐にわたる設計条件の解決、基本計画の策定まで実質20カ月余、驚異的に短い期間でまとめ上げている。

引続き実施設計に着手、５カ月後には地鎮祭を行い、躯体を先行して着工している。

佐野正一は「最も苦心した点の一つは外部の問題で、企画段階で官庁、航空会社、ビル会社の同調への説得にあった。」「もう一つの点は内部の問題で、実施設計のスタッフの頭脳を一つの方向に向けることに尽きたことである」と述べている。

■大阪国際空港が残した財産

●スタッフの頭脳を一つの方向に
－モジュール思想の徹底－

短工期の設計、建築８工区にわたる施工、これらに高い品質、施工や施工監理へ正確な設計意図の伝達などを求めた結果、モジュール思想、きわめて種類の少ない使用資材、現場工数を少なくする仕上材の工業化などを、徹底して導入したのだろう。

モジュール思想は、竣工後の増改築は勿論、後の熊本、鹿児島、那覇の空港ターミナルビルをはじめ航空局の空港庁舎でも採用、また

建物用途は異なるが某洋酒メーカーの工場でも導入、顧客を含めて未だに踏襲されているところは、非常に興味のあるところである。

安井建築設計事務所の財産とも言える「モジュール思想」を創り上げたものと考える。

多くのターミナルビルなどで採用している基準グリッド7.2mは、尺貫法やヤード・ポンド法の国々において工業生産された建築材料の寸法体系にフィットし、現場加工による廃材を極力発生させない寸法体系でもある。余談であるが、メートル法を基準とするフランスのコンサルタントが計画した関西国際空港ターミナルビルは、当初8.0m×8.0mであったがコスト縮減のため7.2m×7.2m（14.4m×7.2m）に改められたと聞く。

■「先見性」「提案」「提言」

●航空交通は、都心への鉄道によって完結

「航空交通には、空港と都市を結ぶアクセス、とくに鉄道が重要である」と説き、大阪国際空港では当初から駐車場に緑地を残し、将来の鉄道駅の用地だと話されていた。

モノレール「大阪空港駅」の場所である。

●街創り・都市整備を期待　アクセス鉄道

1970年「大阪国際空港とその周辺」を作成、都心と連絡する鉄道、空港との繋がりにおいて地域の高度な発展が期待できる空港コミュニティの開発を提言。鉄道は地下鉄４号線を延伸、将来は能勢電鉄に接続し能勢方面の開発促進による建設費の回収策まで示している。

なにわ筋新線に係る話題の先取りである。

●事業中の変更を提言　県知事へ直訴

ー大型機就航へターミナルビル70m後退ー

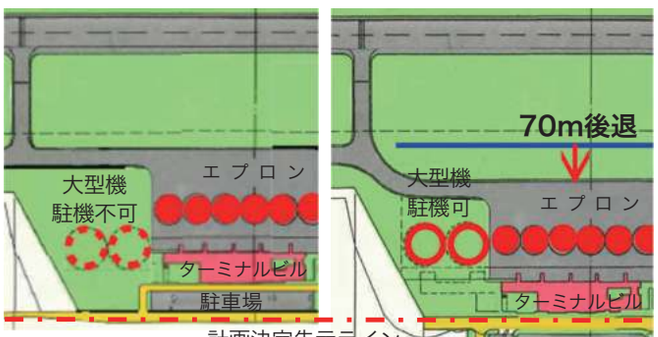
（新）鹿児島空港は、航空局の計画決定に基づき鹿児島県が建設、航空局所有の鴨池空港と交換する売買方式により進められた。

航空局の計画では、滑走路からの距離に応じた高さ制限（転移表面）により、近い将来就航が見込まれる大型機がターミナルビル前面に駐機できない。ターミナル地域を滑走路より70m後退させれば、大型機が駐機可能なターミナルビルの建設が可能となる。

佐野正一は、今、計画を改めるべきだと、金丸三郎県知事に直訴にあがるのである。

鹿児島県では、この提案に基づきターミナル地域を滑走路より70m後退させ、告示域外に出る駐車場は県が用地買収と建設を行い、空港機能は取り揃え、就航機材は大型機の受入れを可能とすることへ変更、航空局の了解を取付け、建設を完了したのである。

鹿児島空港の竣工式典において、金丸県知事から将来を見据えて国の計画に変更を加えた経緯が紹介され、佐野正一は涙していた。



（新）鹿児島空港

原計画（計画決定） 大型機駐機不可	変更計画（70m後退） 大型機駐機可能

■自らが責任を　設計者は佐野正一

佐野正一は、1960年頃から受託が増加し多忙になるが、安井武雄が行ってきたアーキテクトが細部にまでデザインをするという姿勢を基本に業務を進める。そのためには、補助アーキテクトを指名、指示し業務を進め意見は聞くが、アーキテクトである佐野正一が最終決定をする。完成した図面全てに責任の証として「直筆サイン」を行った。

●責任・情熱を注ぐことを拒む距離

那覇空港国内線ターミナルビルは、営業部門の同僚と私、２人で受託に至るまでの５年余、那覇へ足を運んだ物件であるが、佐野正一は遠方で目が届かないと危惧されたか、受託には否定的であった。

プロポーザルへの参加を決めると、ヒアリングでは佐野正一本人が説明、「時間距離を無くすため那覇に事務所を構えるか」の質疑に「設けます」と回答。しかし、特定されると「那覇に事務所、何故？」との具合である。

私に伸し掛かる次の山場は、工事発注時である。「発注は２工区、それぞれ等分とする」となり、左右対称のターミナルビルでは中央部で区分となる。当初から予定していれば技術的区分が可能であるが、実態は梁の中央やサッシュの中央で分けることとなる。これには、佐野正一は激怒「それみろ、政治的に決まるではないか。断ってこい」である。

私は、およそ２カ月間佐野正一に顔を合わすことができず、建築主に理解を求め、技術的な観点から工区取合部で協調を期待する旨、見積要綱書に特記することとし、佐野正一の理解を何とか得た。だが起工式は欠席である。躯体が上がった頃に声がけ、着工後初めて沖縄へ出向いて頂き、結果はご機嫌であった。

「自分が責任をもって収める」ということの重要さが、この行動で示されたと思う。

振り返ってみると、（新）鹿児島空港ターミナルビルでは現場総合定例会議に毎月出席されていた。現場へは、伊丹空港から鴨池空港までYS11で１時間40分程度、鴨池空港から１時間半以上を要していたにも拘らず。

■「好奇心」「行動力」

●搭乗体験　SSTコンコルド

1976年に就航したSSTコンコルド、パリーリオデジャネイロ間の搭乗体験へ。

「日本での受入れは、そう単純には進まないにしても施設計画の上で優れた現代の機種の発着が、支障なく可能なようにしておくことは必要なことであろう」と述べている。

出張の理屈は何であれ、話題の先取り。

●乗車体験　磁気浮上鉄道JAL-HSST

1980年代、国鉄は東海道新幹線に代わる高速鉄道の開発を、日本航空は空港と都心を結ぶ高速鉄道の開発を、目指していた。

日本航空が開発を進めるHSSTが、横浜市の博覧会で営業運行され、佐野正一は空港談義の仲間の一人と私と出掛けたのである。

往復５分程度である。とにかく好奇心。

●思い立てば直ぐに　クアラルンプール訪問

1998年開港前、今なら案内が可能と連絡があり佐野正一の耳に入れたところ、翌日には自身で旅程を組み、早々に出発である。

二日目朝からクアラルンプール新空港を視察、夕方にはお世話になっているレストラン・サントリー・シンガポールで夕食。三日目、佐野正一は帰阪、私は香港へ。この二人旅が、佐野正一の最後の海外出張であった。

先見性、知識に裏付けられた提案力を持つことにはじまり、そのためにも、思い立ったら、直ぐに。とにかく何かにつけ好奇心が旺盛であったと思うとともに、我々建築を志す者にとって必要不可欠であり、見習うべき大きな基本理念の一つである。

（よこお　みちお）

注ぎ込まれた情熱
博物館

東京国立博物館平成館計画

㈱安井建築設計事務所
シニアエグゼクティブ
大村鐵太郎

1973年　大阪大学大学院修士課程建築工学　修了。同年　安井建築設計事務所入社。2009年　取締役副社長、2019年　現職に至る。
主な受賞：関東地方整備局優秀技術者賞（1993　東京国立博物館　平成館）、全国建設技術協会賞（1994　国税庁醸造研究所）日本建築学会作品選奨（1994　京都積水化学工業京都技術センター）
主な作品：国税庁醸造研究所（1995）　東京国立博物館　平成館（1997）　警視庁警察学校（2001）



図１　全景

東京国立博物館平成館は皇太子殿下御成婚記念事業の名のもと、その工事を文部省から建設省に支出委任して行われた。この計画は、1993年（平成５年）７月22日に建設省関東地方整備局営繕部より安井建築設計事務所に契約をいただき、同部との共同で設計にとりかることになる。しかし実際にはすでに準備として同年６月15日に設計はスタートしていた。そのころ私は長野オリンピック施設の某会場のコンペの作業をプロジェクトマネジャーとして行っていたが、そんなものはいいから早くこのプロジェクトをやれとの指示を受けた覚えがある。佐野正一としてはよほどこの仕事を待ち焦がれていたことがうかがえる。

一般的には設計にあたり、所員の中からプロジェクトマネジャーを選定しその下に必要な部員を配して進めるが、今回はそのプロジェクトマネジャーの上にアーキテクト佐野正一がすべてを把握しながら陣頭指揮を執ってプロジェクトを進める形をとった。この時すでに経営第一線から離れ、会長としての立場となり時間的余裕も生まれ、安井武雄の時代のアトリエ型アーキテクト方式がとれる状況が生まれていた。まさにアーキテクトとドラフトマンの構成が可能となったわけである。

６月15日のスタートの時点から、１mmマス方眼紙に寸法を絶えず記載しながら平面計画作成がなされていく。この設計の進め方は安井武雄の緻密な平面計画そのものの手法である。同時に諸室の面積配分を常に配慮し必要な階段、設備機械室等共有部分を検討し埋めていく。この手書き平面スケッチをドラフトマンが解釈しCAD図面として作成していくわけである。この間佐野正一が常にいる場所は大阪であり、その指示はドラフトマンのトップが大阪まで出向くこともあり、また大阪に出張していた当時東京事務所長、現社長の佐野吉彦がスケッチを持ち帰る、あるいは土日に作成したスケッチ図面を秘書に託しファックスするなどして、ほぼ毎日のペースで検討案の指示があり設計の組み立ては続いていく。

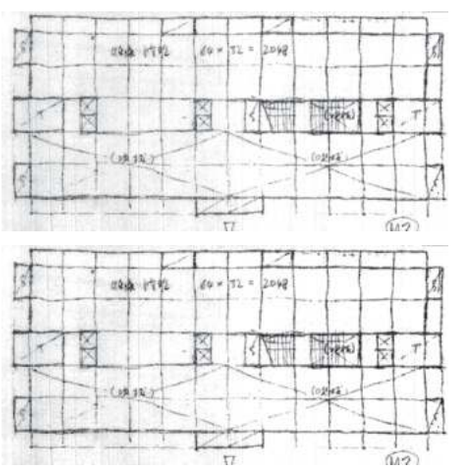


図２　設計スタート時点での初期の直筆平面スケッチ案

７月22日に正式受託契約となり建設省より業務仕様書と平面図を受領し、同時に立面の基本的な考え方の提示があった時点では、A～Tまでの20案の検討がすでになされており、休みなしの制作体制と姿勢であった。ここからはじめて東京国立博物館と建設省との平面計画の調整が始まり、何度かのやり取りを重ね案が絞られていくことになる。

この調整の間で意見が異なったことが大きく次の２点にあった。まずは、平面計画において講堂の位置が議論された。佐野正一としては全国の博物館活動の源流の中心となる講堂の位置づけにいては、それに相応しく奥まった建物の中心に象徴的に位置すべきとの考えを持っていた。この検討作業に多くの時間が費やされた。これにたいして、東京国立博物館側は講演会など広報的にも広く人々に開放すべきものであり、無料の入場もあり、できる限り利用しやすい位置が好ましいとの理由で譲らなかった。

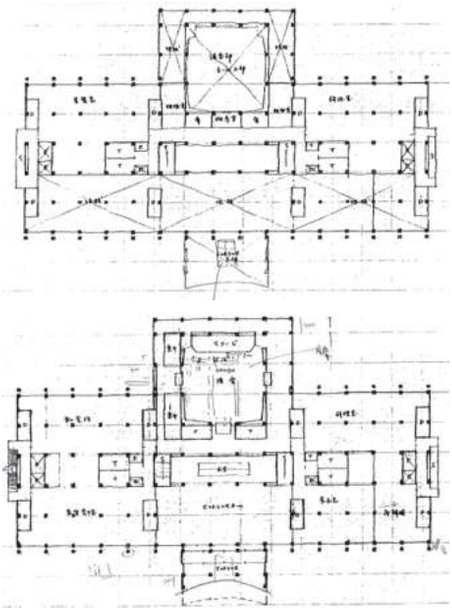


図３　講堂関連直筆平面スケッチ１階・中２階案

もう一点は立面計画である。建設省は前面広場と建物の関係から、できるだけ単純で要素を少なくし一枚の壁として見せる方が好ましいとの考えである。これに対して佐野正一は、これだけのスケールの建物には装飾的な要素を入れないと間が持たないと考えていた。そこで水はけをよくする機能を兼ねた屋根及び軒先に特徴的な装飾が必要ではないかと応えた。この検討にもずいぶん時間がかけられた。

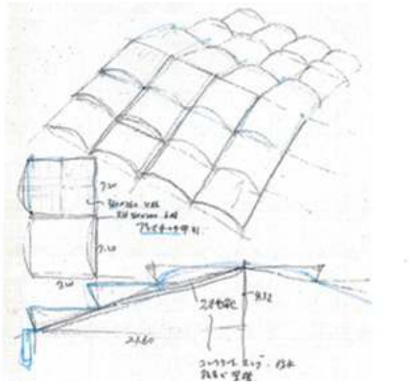


図４　屋根形状直筆スケッチ検討一案

９月８日に第３回の建設委員会で基本設計として、平面計画及び建設省原案に近い立面計画が大枠了承され、次のステップに進めることになったが、意見の異なる２点についてはまだまだ、継続することとなる。旧国鉄時代に三代目京都駅計画で設計会議座長をつとめ、この種類の建設委員会で決定されたプロセスとその重要性は十分に理解した上での、粘り腰である。この時の佐野正一の頑なに自分の考え方を追求する情熱は今でも忘れることができない。

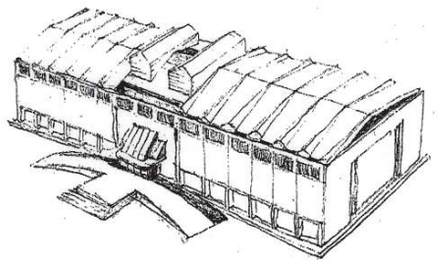


図５　この時点での直筆パーススケッチ検討の一案

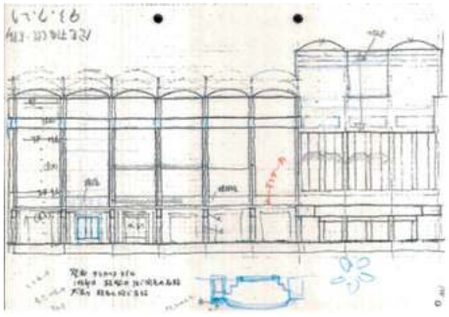


図６　正面立面直筆スケッチ検討一案

最終的には平面計画の講堂の位置については、鑑賞者の休憩場所として、またレセプション会場として要望されたラウンジとの一体利用の観点から、東京国立博物館の意向に賛同し、また、立面計画に関しては１階窓枠及び３階窓に装飾的な要素を加えることにより、それぞれが収まるところに収まった。この姿勢は、言うべきところは徹底的に言うが、最終的にはそれぞれの立場に配慮し収めどころを熟知した佐野正一の設計手法の一つといえるかもしれない。

この後、実施図面作成作業並びに工事段階に入るわけであるが、まだまだ精力的に各部位のディテール及び材料に関しての詳細な指示が追っかける。外壁面に関しては、オープンジョイントのPC版打ち込み800角の陶板パネル、開口部に関しては最大のサイズのガラス面、ブロンズサッシそして屋根はチタンなど昭和時代を終えて習熟した最高の技術と材料で作り上げることが絶対使命である。その技術的・材料的信頼度を確認するために、多くの性能試験が重ねられ、ポイントとなる実在テストには当然のごとく佐野正一自らが立ち会った。

内装に関しては、一階中央階段周りでは、階段照明及び天井照明シャンデリアを石井幹子氏に、２階壁面装飾を陶芸家の河合紀氏に、２階休憩ラウンジ窓面のステンドグラスを三浦啓子氏に、そして自らデザインした陶壁など内装デザインの詰めが続く。風格ある新しい博物館らしさの表情を醸し出すためのデザインだ。中央階段にあるエレベータはゆったりとした階段の勾配に合わすために特注とし、しっかりとした厚みのある階段手摺はトラバーチンと欄干の一部に鋳鉄製のグリル。１階ラウンジのトラバーチンの壁や２階展示室入り口の扉は特に重要な要素であり、装飾的なくり型は控えめであるが、重厚なものとしてデザインされた。ラウンジや講堂のペンダント型照明器具も別注である。これらすべてに佐野正一自らが次から次へとスケッチしデザインしていった。



図７　中央階段とシャンデリア（石井幹子作）

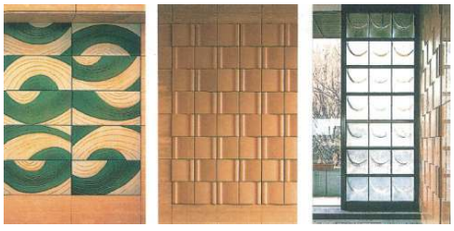


図８　内部壁面装飾（河合紀・佐野正一・三浦啓子作）



図９　展示室扉

「この東京国立博物館平成館は私の最高の作品であり、緻密に徹底した平面計画は安井武雄以来の私の手法であり、建築材料とその表現に留意しながら、明快、端正な美しさと豊かな表情をもつ立面計画は私の手法に他ならない」と佐野正一が言い切ったとおり、長い年月を通じて培われた彼の建築様式の集大成がここに見事に結実したといえる。



図10　講堂とシャンデリア

ここで、東京国立博物館平成館設計に関連して、佐野正一のもう一つの貢献にも触れておきたい。それは東京国立博物館を含む上野の山の将来構想である。ここには博物館のほかに、西洋美術館、上野の森美術館、東京都美術館、東京文化会館、国立科学博物館など、重要な文化施設が集約している。パリのルーブル美術館の敷地に匹敵する広さを持つこの上野の山をより効果的に広く世界に発信するには整備すべき課題が多くある。特に駐車場を含む車動線と人の分離、コアとなる広場づくり、そしてそれらをつなぐネットワークなどが必要と思われる。これに対する提案「上野の山ルネッサンス計画―上野の山をルーブルに」としてパンフレットにし公にしていくべきと行動を起こした。上野公園内のそれぞれの施設の長、東京都関連部局、国会議員などに説明を精力的に行い多くの関係者の共有意識を引き出していくことに努力を重ねた。現在、上野公園の整備が継続的に行われているが、この提案がそのきっかけの一因となったことは間違いないと思う。



図11　上野の山ルネッサンス計画

最後になったが、どうしても気になることとして書いておきたい。それは外壁デザインに関して、一部装飾的なものにこだわり、それを実現させているのだ。それはペントハウスの設備機器の目隠しである。初期の段階で検討した装飾的な屋根形状の三角状の連続した山型がここに施されている。誰からもほとんど見えないところに、佐野正一がデザインしたしるしであるサイン（ℒℒ）をきっちりと残したのではないかと思っている。

（おおむら　てつたろう）



図12　ペントハウスの装飾的目隠し

（図１，７，８，９，10，12　撮影：SS東京）

注ぎ込まれた情熱
ガスビル増築

佐野正一の思い
～大阪ガスビル増築設計～

元㈱安井建築設計事務所取締役
原見昌志　談

1959年　大阪工業大学卒業
1963年　安井建築設計事務所入社
1991年　取締役
2000年　退職

主な作品
大阪ガスビル増改築（1967～1975）
上六地区第一種市街地再開発事業（1980）
守口市河原地区市街地再開発事業（1986）
浜大津駅前B地区第一種市街地再開発事業（1998）
広島駅南口Aブロック第1種市街地再開発事業（1999）

■設計チーム

私は当時まだ若造だったので、佐野正一から直接指示を受けたりすることはなかったが設計チームのことはよく覚えている。チームのメンバーは以下の通り、佐野正一、川合安平、山本純孝、中野孝治、原見昌志、岩佐尚武。同時に南館の改修の設計作業も並行していて別チームが担当していた。当時の設計の進め方は、佐野と中野が大阪ガスと打合せをし、佐野が方針検討したものを直接か中野経由でチームに伝える。そしてスタッフが作業をするという具合。決定はすべて佐野が行ったが、中野さんは間で大変だったろう。

■ガスビル増築の狙い

上記のように設計チームでは私は一担当者であったので、佐野正一から設計意図を直に聞く立場ではなかったが、当時の状況を知るものとして、ガスビルの増築プロジェクトに関して私なりに書き記すことにする。

このプロジェクトは大阪ガス社内の建設委員会の意向を受けて佐野正一が設計を取りまとめたものである。当時の建設委員長であった西山磐副社長の言葉が残っている。「旧ビルが大阪でも十指に数えられる名建築であるといわれておりますので、新ビルは現代の新しいセンスを持ちながら、しかも旧ビルと調和のとれた一体となるものでなければならない。ということだから佐野さんは設計上大変ご苦心をなさったことだと思います。」（大阪ガス社内誌“がす燈”1966年9月号　座談会　新ガスビルの建設を語る）これに対し佐野正一は「正直言って私はこの仕事に恐怖に近い圧迫を覚えた」（佐野正一著「建築家三代」より）というほどのプレッシャーを感じながら仕事を進めていたようだ。

大阪ガスからみたこのプロジェクトの狙いは、下記のようなものだったと思う。

・公益的事業を行うガス会社として各家庭に安全にエネルギーを供給する信頼感を表現する外観を御堂筋に表出させる
・南館建設当時の社長片岡直方の夢であったワンブロックワンビルディングの実現
・新しい時代のオフィスビルとして使いやすい整形なオフィス空間を作り出し、有効床面積を最大限確保する

これらの狙いを実現させるために、佐野正一以下の設計チームが全力を上げてプロジェクトに取り組んだ。

■外観について

安井武雄による南館は1933年に竣工している。当時の最先端技術の粋を集められたビルである。各階床は無梁版方式、全館モザイクタイル貼り、全館完全冷暖房、エレベーター、エスカレーター完備等々が注目を集めた。その竣工から30年以上たって計画された北館であるが、これもその時代（1960年代）の最先端を集約したものとなった。南館より長い柱スパン、アルミサッシの採用による窓採光面積の拡大、内装のモジュールシステムの導入によるオフィスのフレキシビリティ向上等々であった。（当時アルミサッシは最先端ではなかったもののまだまだ普及途上の新しい時代のサッシであった）

それぞれの時代の最先端のビルではあるが、「南館北館併せて一体の統一したデザインとすることが何より大切である。そのためには南館のモチーフは一部抑制し、北館で趣旨に基づいて新しい展開をはかることとする。」（佐野正一著「建築家三代」より）という具合に佐野自身も書いているように、一体感のある外観を目指してスタディがなされた。いくつもの立面が描かれたが、南館の窓割をそのまま北館に展開した立面もあり、しばらく設計室の壁に張ってあったのを記憶している。その案は、大阪ガスと議論した多くの案のひとつであったが、割合早い段階で現状の最終案に収斂していったように思う。



写真1　南館窓



写真2　北館窓

このようにして南館の縦長単窓に対し、北館は大きな窓と対照的な窓が採用されたのだが、南北の調和に関して佐野は「統一の庇さえ回しとけば一体感は出せる」と言っていた。事実、出来上がってみると、庇が共通しているので南北両館の一体感が取れているのに感心した。増築の完成によって、当時の社長片岡直方の悲願であったワンブロックワンビルディングが完成したことになる。



写真３　東側外観

■各部の検討

庇裏のタイル；南館の庇裏には外装と同じ47mm角のタイルが貼られていたが、やはり剥離が防ぎきれない事実があったので、北館ではタイルに見える材料で落下のリスクのないディテールを複数案検討した。アルミパネル案も検討したが、厚みが薄い庇なので取り付けがうまく収まらず断念した。最終的にはボードに50mm角の目地切りを施したものに決定した。見た目にはタイルに見えるはずだ。



写真４　北館庇裏見上げ

南北の接続部；南館の竣工時の写真を見ると北壁面が開口部のないツルっとした壁面に見え、あたかも将来増築を想定していたかのように見えるが、南館設計時には北側に増築は考えていなかったはずである。北壁面が裏っぽく見えるのは、背割下水が東西に通っているため、将来北側に隣接ビルが建つことを前提に開口部を最小にしていることによる。南館の便所部分を改修して南北を接続している。接続部分はこの箇所のみである。南館北端にあった塔屋と時計は南北両館の連続性を確保するため撤去された。

■整形なオフィスビルの実現のために

新しい時代のオフィスビルとして使いやすい整形なオフィス空間を作り出し、有効床面積を最大限確保するというのが、大阪ガスから佐野に与えられたミッションのひとつであった。



写真５　竣工当時の航空写真：佐野が目指した整形なオフィスビルが完成

佐野はさらにこれに加え、ガスビル用地の西側街区もやがては、大阪の都心部として高層ビルが立ち並ぶ時代がきっとやってくると考えていたようで、その時代を先取りするような検討作業を行なった。

「大阪市の建築指導行政関係とも十分話し合いを重ねた結果、西側の道路を20メートルまで拡幅し、これによって西側壁面を御堂筋側と同等扱いにする。北側壁面についても道修町からの斜線制限をうけるので壁面を後退して調整する。こうした処置で整一な形態とする準備ができたところで、新ガスビル（北館）の計画にとりかかる」（佐野正一著「建築家三代」より）と文章に書けばわずか数行で済むが設計チームはこのため、限られた時間の中での検討作業に没頭した時期があり、大変な作業であったことを思い出す。

北館竣工写真のうち、東北方向から撮影した写真があるが、最上階まで整形なオフィスビルが出来上がっている。これが佐野正一が作りたかった形である。

佐野の頭の中には、現在の東京都心部にみられるような高層ビルが林立する都市景観があったのかどうか不明だが、そういう時代を迎えてもガスビルがきちんとした存在感を保てるようにとの思いがあったような気がする。来るべき時代を予測する想像力を持ち、それに対応できるようにと情熱を傾けて建築を設計する力が佐野正一の原動力なのではないかと思う。

（編集責任者注）
建設通信新聞2008年11月５日号の佐野正一の記事「つくり手としての責任を今一度考え直すべき時」より抜粋
二代で築いたガスビル

1966年佐野氏の設計による２期増築が完成。一期と比べて近代技術をフルに使ったことが目立つ。今では時間の隔たりを全く感じさせないが、その技量と労苦は大変なものと容易に想定できる。１期と２期の相違が唯一、明確に表れたのがサッシとガラス。「（完成直後）一期工事の時の資材課長だった井口竹次郎大阪ガス会長から『窓が大きくなったなぁ』とすぐに指摘された」。「（大きさを）揃えたほうが良かったかなと、今でも思う」。竣工から40年以上経過してなお、窓に思いを巡らせている。

という記事を見つけた。佐野正一にしては珍しい述懐である。原見氏の原稿にある「南館の窓割をそのまま北館に展開した立面」というのを見てみたい気がしてならなくなった次第。

注ぎ込まれた情熱
庁舎

設計担当者の立場から「佐野正一の時代」を考える。

元㈱安井建築設計事務所
専務取締役

中川洋一

1962　神戸大学卒業　安井建築設計事務所入社
1981.7～1994.3　大阪事務所設計部長、技術担当
（1992.8.31付け日経アーキテクチュア記事に設計組織「群像」として紹介される）
1994.1～1996.4　大阪事務所長
1997.6～2004.5　参与
2004.6～2009.5　専務取締役技術基盤総括
2013.3　退職
教職：神戸大学工学部非常勤講師（1990,1991）
国立明石高専非常勤講師（1990～2002）
関係した主な作品：大阪国際空港（1969）ゼンセン中央教育センター（1976）ノザワ15番館（1990）那覇空港（1999）大阪赤十字病院（2005）など

庁舎設計にいたる経過

私は早い時期に佐野正一の建築姿勢と人柄に触れることが出来た。

入社して2年目の冬、1963年、私は「日本生命広島ビル」の現場常駐を命じられ、建設工事のプロセスを体験した。佐野正一（当時42歳）は顧客に対し設計責任者の立場で足しげく広島を訪れて、私が準備した資料を確認し、主要な施工図をチェックし私を激励した。

1966年、「ガスビル新館」を竣工させた佐野正一は、念願の「大阪国際空港（1969）」の受託に成功し、空港に関連する知識・情報を得るために自ら奔走し、設計方針に工夫を凝らして強い指導力を示した。この巨大な設計監理業務は終始一貫して佐野正一の指揮下に社内の自力で完遂された。私は受託当初から空港設計室に加えられ、現場にも常駐して佐野正一がプロジェクト貫徹にかける渾身の努力を見続けることになった。

1970年、「東京三和ビル」の計画提案作業のために東京事務所に出向した。佐野正一は強烈な執念で、約1か月間、週に必ず3日、大阪から東京に通い叱咤して短期決戦の作業を推進した。この受託は不成功で終わったが、この時、私は佐野正一の執念に圧倒されつつ、霞ヶ関ビルをはじめとする当時の高層オフィスビル計画のノウハウを学んだ。

ここでは市庁舎等5作品を中心として、彼が示した基本姿勢の一端を紹介したい。

池田府市合同庁舎
（竣工1973　設計競技1971）



1971年、「大阪府池田市合同庁舎」の設計競技に指名された。審査員として増田友也京大教授、足立孝阪大教授が当たった。池田市は歴史・文化と自然に恵まれた大阪府下有数の住宅都市である。佐野正一は、池田市庁舎は、知的かつ健全な市民性を表現するべきものと方向づけを行い、私たちの作業を確認しつつ、鼻先をたばこのヤニで黄色くしながら、自ら設計説明書に北摂豊能地区の歴史・文化と市庁舎のあるべき姿について、設計姿勢を格調高く書き下ろした。この設計競技を、実績の多い大手一流事務所をしのいで勝ち抜けたことは、佐野正一が育ててきた若い設計力による記念すべき成果であった。この受託をきっかけに幅広く地方自治体や中央官庁プロジェクトの積極的な受託活動が加速されてゆく。

池田市庁舎は47年を経過し、2007年には外装改修が済まされ、当初の意図通りの表情で街並みをこしらえている。

奈良市庁舎（竣工1977）



撮影：つねなりスタジオ

猿沢の池の近くにある市役所を平城京の一画、新大宮に移す計画である。受託後、佐野正一は週に一度、市役所をどのような姿に作るかについて、鍵田忠三郎市長と禅問答のような対話を繰り返して方針を固めていった。私は打ち合わせの図面を担当し、生駒山を越えて佐野正一に同行し、傍らで問答を傾聴した。平城京跡は雄大な歴史地区である。そのメタファーはシルクロードであり、天平の甍であり、日干しのレンガであり、万葉集である。奈良市は、歴史上同時期に栄えた、西安、慶州、トレドの三都市と姉妹都市の関係にある。市庁舎の外観は特定様式に偏らず、平城宮跡の朱雀門（奈良時代の祝祭の場）に並び立つ雄大な建造物であることが方向づけられた。佐野正一は奈良時代の心を探るために万葉集を自分のノートに書き写して持ち歩いていた。私は古代を彷彿させる石造の門型をイメージして数十案のエスキースをこしらえた。佐野正一はこれを市長に説明し、鍵田市長は「仏さまが座禅を組んでいる姿ですね」と満足を現して構想が確定された。表現は違ったが二人の間には言葉によらず通じ合うものがあったように思う。

奈良市庁舎は43年を経過して、現在、耐震改修と大規模な設備改修工事が進行中である。大きな特徴であった塔屋が耐震強度から高さを削られることは残念である。佐野正一と市長が語り合った悠久の歴史への夢が長く受け継がれることを願う。

姫路市庁舎（竣工1980）



「新宿野村ビル（1978）」の竣工時期とかさなるこの受託は、従来からの安井事務所の実績と佐野正一の努力による着実な成果であった。当時の市長は吉田豊信である。市役所を姫路城の外構にあった旧陸軍連隊本部の建物から移転し、急速に発展する駅南地区の中心として姫路城と対峙させようとする気概に満ちたプロジェクトであり、敷地は形状と面積に恵まれている。市民の利便性・合理性、新生の駅南地区に都市緑化など、基本設計の

前提となる検証をも含め、着実な計画論的プロセスを踏み、恵まれた条件を生かして揺るぎのない建築品質を獲得していった。竣工時、才気にあふれた性急な佐野正一は、基本に忠実な平凡にも見えるこの成果を高く評価しなかったようにも思う。しかし、40年を経過して今見れば、自らの設計意図の通り、時代の変化に対応する先見性と、市庁舎が森の中に格調高く埋もれている景観を、ほくそ笑んで評価するだろうと思う。

姫路市による維持管理計画は確実に実行され、庁舎外装も竣工当時と変わらず完全な状態である。

広島市庁舎（竣工1985　設計競技1981）



撮影：西日本写房

広島市庁舎は、佐野正一が育ててきた設計提案力が最も充実した時期に設計競技により受託したものである。佐野正一自身は「大阪ターミナルビル（1983）」の工事に文字通り心血を注いでいた時期である。競技参加者は丹下健三をはじめ実力のある大手設計事務所、地元設計事務所が指名されている。広島は長崎と並び核廃絶運動の国際的中心都市であり、市庁舎には、市民が日常の中で世界平和を願うシンボル性が求められる。佐野正一の初期方針は、迷うことなく実用的に最善の建築計画を導くことであった。進行に伴い前庭に被爆建物の地下部分を残して記念展示室とし、その地上部を半屋外の記念空間とすること、静謐な外観デザインとすることが方向づけられた。佐野正一は、最終段階で記念空間の外観に州浜形の三つの円を組み合わせた和風ともいえる開口部を設けることを提案した。これは世界平和記念聖堂において村野藤吾が用いたモチーフであり、平和に対する建築の役割を、村野に呼応して意識してのことであろう。実施設計では、地上部の提案は変更されて州浜形は実現しなかったが、我々の案は、他社がデザイン主張を競うなかで、迷うことなく、真摯に平和を願う心の表現を求めたものであり、審査委員長の広島大学佐藤重雄先生から「主知主義」と評されながら、幸いにも採用された。

広島市庁舎は35年を経過している。この建物は市民のための市役所であると同時に、平和記念公園、平和記念聖堂と並んで世界の平和を発信し続ける記念碑でもある。託された役割りに応え、毅然とした不動の表情で、永く存続することがこの市庁舎に託された使命であろう。

佐賀県議事堂（竣工1988）



佐賀県庁改築工事の設計は、５社（安井、佐藤、アルセッド、石橋、平野）の設計共同企業体により受託された。先行する新議事堂については安井が幹事会社となり、これに関するすべての業務を担当することになった。設計期間が短く佐賀県との設計会議は週一度の厳しいペースで、５社が合意した方針によって進められた。私は会議の前には必ず佐野正一に方針を説明し、彼の意見を入れ、JV内の調整を図ったうえで、県との会議ではその通りの結果を出すことを厳しく要求された。受託条件は不本意ではあったが、デザインはそれなりに密度の高い特徴的なものであり、佐野正一が激しく意地を見せた意欲的作品である。新議事堂竣工に続き、新行政棟が佐藤事務所とアルセッドの主導で、１、２階を南北に視覚的に貫通する３層吹き抜けの県民のロビーを特徴として設計された。安井は構造と設備を担当した。佐野正一は全体の竣工式にJV代表者として出席した。

竣工後32年を経過し、旧庁舎と並んで建つ新行政棟と新議事堂は、低層部を旧庁舎と同色のタイル張りとして歴史の流れをも示す景観を佐賀城址北側の堀に映している。新議事堂のデザインは、旧議事堂を参照したものであり歴史的な品格を受け継ぐ上で役立っているようである。

佐野正一の時代

佐野正一は、独自の信条によりすべての設計の方向づけを行ったが、納得すれば私たちの提案を認めた。彼はすべての図面を確認して手書きのサインを行った。自分の意図に沿わない図面を投げ捨てることもあった。彼は皮相的なデザインを徹底して嫌った。

佐野正一の建築は、一貫して社会との関係性に立脚する。

公共建築の中でも、比較的地味な分野である住宅・学校・病院・市役所など市民生活の基本にかかわる建築について、建築家の矜持の原点に関わるものとして特にこだわりを持ち、社会との好ましい関係性の確保と共に、歴史・風土・文化などを手掛かりとして、市民のための健康なローカリズムの表現を深く思慮した。

優れた洞察力と批判精神による「社会との関係性」は、佐野正一の全ての作品に亘り様々な場面で多様な展開を見せる。佐野正一の「強靭な設計姿勢」と、これを支えた独自の「誇りと情熱」は、「佐野正一の時代」を画するものとして語り継がれるべきものと思う。

日経アーキテクチュア記事「群像」について

佐野正一の肝いりで、1992.8.31付け日経アーキテクチュア記事「群像」に、＜安井建築設計事務所・大阪「在阪の100人をまとめるしたたかなスペシァリストたち」＞として、大阪事務所設計部の12人の設計部長、専門部長がクローズアップされた。

佐野正一は、設計組織の経営持続のために、優れた人材を育てることを大切にしていた。

ここに紹介した庁舎建築の歴史は、ほぼ５年の間隔での大規模な庁舎設計の繰り返しを示すものであり、その波及効果として、佐野正一の趣旨にも合う、技術力を蓄積し人材を育てるための好環境が、建築種別全般に共通して、大阪事務所の中に生じていたように思われる。

この日経アーキテクチュアの記事は、佐野正一が目指した組織整備の一段階を示すものであり、「佐野正一の時代」の一側面を表すものと考える。

（なかがわ　よういち）

佐野正一語録

注）＊はすべて佐野正一「建築家三代」から引用

安井武雄に進路相談して　＊

（安井は）建築家という仕事はデリケートな難しさをもったもので、ある種の才能をもったものが苦労を重ねてはじめて成立つものだということを話してくれた。安井の話は、建築への進学をすすめたものではないが、適性がないから断念せよと否定したものでもない。いまになって考えるとうまい表現で結局は自分自身の資質と努力次第だと返答を私に戻しているのだと理解できる。しかし、この接触で私は自分に適性があると信じこみ、努力は今後の話だと割り切って、あれこれ迷ったことを切り捨てあっさりと東京大学建築学科志望に決めたのだ。

三代目京都駅の設計　＊

コンセプトの大綱がきまり、あとデザインは私が主導となって新時代の京都の顔をつくる構えで突進した。正面長さ100メートル、奥行40メートル、コの字型二階建で高さ15メートル、貴賓出入口の上部に八階建の平たい板状の塔を設計した。烏丸通に正面しているので、かなり遠い四条あたりからも見え、シンボル効果があるといわれた。東に東降車口、西に大きな西降車口を付設している。

鳴尾ゴルフ倶楽部の設計　＊

はじめてのクラブハウス設計である。前例に渡辺節が設計した広野ゴルフ倶楽部と茨木カントリー倶楽部、竹腰健造設計の西宮カントリー倶楽部のクラブハウスがある程度で、すべてに手探りの不安のある仕事だった。しかし、クラブハウスは基本的に住宅に近い対象物だったことに思い至って、安井武雄が住宅作品に愛情をこめてきめこまやかなデザインを展開した仕事ぶりを手本にぶつかることにした。私はここで設計という仕事の難しさと出来上がる喜びと、設計技術の修練の大切さを一緒に初めて自分自身の体験として学びとったように思われる。

天王寺民衆駅の設計　＊

開業時一日の取扱旅客はざっと百万人、なによりもこの大量旅客の円滑な流れを中心に機能的な建物とすることが設計の基本であった。南大阪の交通拠点、日常的な飲食と購買等の施設、簡便なホテル施設の機能をもった都市拠点として地域の利用を高め成功したようである。

大阪ガスビル北館増築の設計　＊

旧ガスビルの設計当時安井武雄は、前作野村證券東京支店ビル（のちの同社本社・昭和５年完）に見せた東洋風のたたずまいのデザイン様式を最後に、従来安井の作風であったローカリズム傾向を希薄にし、そのニュアンスを残しながら「安井の自由様式」というオリジナルな新しい方向に向うのだ。それがガスビル設計となって結実したのである。東洋風のディテールも装飾も超越して、寸法と比例の選択、建築材料の仕上げと表現の選択、空間構成のリズム、色彩と表現の選択を通じて全体的にローカリズムと明快な近代感をにじませようとしているのである。こんどはこの南館に北館を増設して一体として安井の理想を継承しようとするのが私の願いだった。正直いって私はこの仕事に恐怖に近い圧迫を覚えた。（中略）
完成した時、井口社長から「よくやった」とねぎらわれてうれしかった。安井武雄が生きていたら何というだろうか、私はそれが、なによりも気懸りだった。

大阪国際空港ターミナルビルの設計　＊

空港ターミナルビルの設計は私の設計レパートリーのなかでも熱意をこめて私の創作意欲を膨らませて担当した分野である。鹿児島空港、熊本空港、那覇空港とつづき、羽田空港管制塔、関西空港管制塔と手掛けた。デザインは徹底した平面計画と立面計画にみる伊藤滋※から教えこまれた機能主義のアプローチと庇、窓まわり、腰まわりに見るような和風の匂いをとどめる処理は安井武雄のローカリズム手法を付加したものである。
（※伊藤滋；佐野正一が戦後復員・復職した鉄道官補施設局建築課の課長）

京都競馬場新スタンドの設計　＊

安井武雄は競馬には無縁の人だったが、競馬場建築には機能的に強い関心を持ち、精密な平面計画とドイツ、オランダの近代建築デザインを参考に大型の競馬場建築に新しいアイディア提案をして注目されたものだ。これを継承した今回の設計では二倍の規模と長い立面の構成に旧作のアイディアをとり入れ、観覧席にはPCコンクリートの新技術を採用し、この種の構造では最大規模のスタンドを実現し、ゴンドラ型審判席のコンセプトを拡大して大屋根下に連続した大型審判席群を吊り下げている。安井武雄がやったときと同じように緻密な平面計画と立面計画に加え、大胆な構造計画をとり、旧館にあったドイツ、オランダ近代建築風の明快でマッスのある造形を試みている。

大阪駅ビル（旧愛称アクティ大阪）の設計　＊

デザイン傾向は機能主義かつローカリズム指向である。特異な造形、色彩はとらない。それが駅という建物のデザインの基本だと私は信じているからである。
機能主義という考え方からすれば、駅という機能を満足することがすべてであって、人や物の移動にできるだけ流動をさまたげるような建築物や装飾物をつくらないことが本義だとする。（中略）
駅には駅らしい自然な大きさ、たたずまい、明快で平坦な平面計画、誰にでも出入りを拒まぬ寛容な親しみやすさが必要である。その駅の出入りに慣れた人には必要もないことだろうが、遠来の人、土地に慣れない人には駅の存在は明確でなければならない。周辺に高層ビル群が立ちふさがるような事態であっても駅だけははっきり明確でなければならない。これがこのターミナルビルコンセプトの第一条だった。

国立博物館平成館の設計　＊

こうして平成館の建築は、私の様式というべき建築主張をあますところなく織りこんだ仕事といえるものだ。細密徹底した平面計画は安井武雄以来の私の手法であり、建築素材とその表現に留意しながら、明快、端正な美しさと豊かな表情をもつ立面計画は私の手法にほかならない。これは私なりにつくりあげたローカリズムと技術主義の考え方とでもいえようか。長い年月をかけてどうやら私の様式に到達したとように思われる。

佐野正一語録

注）＊はすべて佐野正一「建築家三代」から引用

「誇りと情熱」について　＊

私はこうして、安井武雄のデザインに及ばずながら安井武雄流のやり方と導入して、高度で新しい何かを実現する能力をもつ事務所でありたいと念願し、その目標通りに努力した。安井武雄建築事務所時代への回帰という考えが底流にある。「誇りと情熱」というスローガンをかかげたのはこの事情を反映したものだ。

サントリーホールが竣工して　＊

カラヤンが再び来日したのは1988（昭和63）年４月下旬だった。大阪で演奏会をすませ５月２日東京のサントリーホールに姿を現わした。この時、身体はみるからに疲れがめだち長時間の演奏は大きな苦痛だったようだ。それでも彼は約束を守ってこのホールで演奏をしてくれたのだ。楽屋に出迎えた佐治敬三はその姿をみて感銘して唯々頭を垂れた。その日ベルリンフィルの演奏でモーツァルトとチャイコフスキーをいつもと同じように見事に演奏し終わったのちに新ホールの印象を語って「このホールは音の宝石箱のようだ」と含蓄のあるホールへの賛辞の言葉を述べたのである。その翌日東京の演奏会の第二日のリハーサルのあと、ステージで工事関係では私と永田穂の二人でカラヤンと会って同じ言葉を聞き、ホール設計、音響特性ともに申し分ない出来だといわれて、改めて1983（昭和58）年以来のホール建設の長いみちのりを思ったものだった。

日本建築協会機関誌「建築と社会」誌上に見る佐野正一語録

・アンケートに答えて１（あなたの作家としての転機について）

建築と社会1959年４月号

創作をする過程では、作家の理念がすべての中心をなしていることを私は信じます。しかし技術的、社会的な条件の影響の多い建築設計の領域では、技術の進歩や経済背景と無関係な、そういう外的な事情に全く影響を受けない純粋な作家の理念などというものは存在し得ないと思うのです。

・アンケートに答えて２（建築計画のあり方）

建築と社会1960年３月号

設計の新鮮さというか、その計画の持つ非凡さというものは、必ずしも計画途上でしゃにむに障害を排除することを前提にするものでなくて、積みあげられた長い間の経験をもとにして、その建築のもつべき機能への正確な洞察によって極めて自然に達成できる場合が多いのではないかと思うのです。

社団法人日本建築協会のこと　＊

大阪で大正の初め片岡安氏を会長に創設された日本建築協会は、建築全分野を平等に会員とするユニークな会で、創設当時から安井武雄は片岡会長の側近者として役員に加わり、後に副会長を務めた縁で、私は早くから役員になり、1984（昭和59）年から十年間同会会長を務めている。

こうした業団体のつとめは、なかなか多用で責任も重い仕事だが、団体活動を通じて多くの官、民の専門職と交流をひらき学んだことは私には極めて有益、幅広い接触から豊富な知識を得る機会となったことを感謝している。

日本建築協会創立70周年を迎えて

建築と社会1987年１月号会長挨拶

今年は本協会創立から70周年という記念すべき年にあたります。大正６年（中略）この新しい団体が創立され建築にかかる学術、技芸の発展と普及を目的として華々しく事業を開始したのでありました。学会、業界に広く会員を擁する態勢ですが、関西の事情を考え、教育、設計、建設、電気、管工、建材の分野別を基礎として会員確保と事業を行い、その総合性を発揮して社会との結合を深めることを会の特色としてまいりました。（中略）

関西には古い歴史に支えられた良き建築の蓄積があります。私たちはこれを受けつぎ将来にわたって展開してゆくことが夢であります。少し気負っていうならば、責任でもありましょう。私たちは、そう考えるだけの建築の水準を保持している環境のなかにあると思います。

「21世紀へ語りつぐ―安井事務所の軌跡」佐野正一・向井正也対談より　サントリーホールの設計

建築と社会2000年１月号　安井建築設計事務所創業75周年

私は期待に応えて世界一響きのよいホールをつくろうと、技術上の難問を解明するために佐治さん（※）と一緒に欧米のめぼしいホールを見て歩いたり、ベルリンフィル・コンサートホールに巨匠カラヤンさんを訪ねて貴重な助言を貰ったりして、何とかヨーロッパの一流ホールに引けを取らないものをつくり上げることができました。このホールは外観はほとんど無くて、内観だけの建物です。それでも私は敢えてライフワークと言っています。この仕事では実際それだけのことをやってきました。この建物には私自身の哲学があります。

（※）佐治敬三；当時サントリー社長

関西の建築関係団体について

（2002年５月22日開催の大阪府建築士会創立50周年記念式典の挨拶にて　建設通信新聞・日刊建設工業新聞　記事）

佐野会長は「大阪府建築主会と大阪府建築士事務所協会はともに建築士法にもとづく団体で、もともと兄弟みたいなものだ。われわれとしてはできるだけ早い時期に建築士会と合併したい。」

と発言した。（建設通信新聞）

佐野会長が22日、大阪市北区のホテルで開かれた士会の創立50周年記念祝賀会で、両団体の活動内容が極めて近いことから、できるだけ早い時期に士会と合併したいとの考えを表明。この取り組みを全国的に働き掛けることで、５年程度で全国規模での合併が実現できるとの見通しも明らかにした。（日刊建設工業新聞）

（この発言以降両会は合併実現に向けて努力を重ねたが、両会内部での合意には至らず、合併構想は実現することはなかった。しかしながら、先を見据えた問題提起と、それを推進するリーダーシップは佐野正一ならではのものと思われている）

謝辞と編集後記

佐野正一特集がまとまりました。2020年の春先から計画の具体化に取り掛かり10か月余り、最初のうちは執筆をお願いするのにさほど手間がかからず、お声がけした方々に「そういう企画でしたら喜んで書かせてもらいます」と快諾をいただくことが多く、割合簡単に原稿が集まりそうな感じでした。ところが生誕100年記念ということは今年100歳の方を語ることになるので、相当なご年配の方にお声がけしても、お会いしたことがありません、あるいは一度お会いしましたがとても文章を書けるほどの関係ではありません・・等々の返事ばかり返ってくることが多くなり、執筆依頼にかなり難渋した時期もありました。しかしながら、関係各位のご努力もあって、おかげさまで何とか特集としてまとめることができました。執筆していただいた方々、インタビューに協力いただいた方々その他関係各位に厚くお礼申し上げます。とりわけ総論を執筆いただいた石田潤一郎先生には「佐野正一論」の総論として後世に残る格調高い論文をまとめ上げていただきました。心より感謝申し上げます。

「尽きせぬ情熱」というタイトルにふさわしい内容になったかどうか気になるところですが、佐野正一が持っていた人並外れた情熱、時に執念ともいえるほどの迫力を持ったエネルギーの一端でも感じ取っていただければ幸いです。

佐野正一はよく「社会に対する責任」ということを発言していました。自身の作品のことでもあり、建築家という職能のことでもあったように思います。建築界、とりわけ関西の建築界の発展に貢献するべく努力を重ねた佐野正一は、建築協会の「建築を通じて広く社会の貢献する」という理念を体現・実践した存在であったように思います。その遺志を継ぐ我々から後の世代は、先人の情熱を吸収し、自らの力で新しい地平（＊）を切り拓かなくてはなりません。

結びに、この企画にご協賛いただいた企業各位にお礼を申し上げます。ご多用な中にも関わらず快くご協力いただいたおかげで発刊することができました。本当にありがとうございました。また、企画趣旨をご理解いただき貴重な卒業設計の資料のご提供をいただいた東京大学様、さらには、20年近くも前の記事を掘り起こして提供いただいた日刊建設通信新聞社と日刊建設工業新聞社の皆様、皆様方の資料提供は大変ありがたく、佐野正一の一面を語るうえで価値のあるものになりました。感謝申し上げます。

そして最後には編集サイドとして、この特集を編むにあたり尽力していただいた、建築協会の内山優子さんはじめ事務局の方々、安井建築設計事務所の広報部の吉田正行さん、田村千春さん、深見洋子さん、そして栗山純子さん、ほか大勢の皆さんには心よりお礼申し上げます。皆さんのサポートがなければ出来上がりませんでした。感謝いたします。

（＊）新しい地平へ；2017年日本建築協会が創立100周年を迎えて次の100年につなぐメッセージ

2021年1月

編集責任者

一般社団法人 日本建築協会　会長　設楽貞樹

特集

社会的危機を超える

昨年からの新型コロナウイルス感染の世界的規模の流行によって、これまで経験したことのないような出来事に遭遇し、私たちの日常生活は大きく揺れ動いています。見えない敵から身を守るため三密を避け、これまでのような人と人の直接的なつながりを避けるように、ソーシャル・ディスタンス確保の暮らし方が求められています。

さらに、近年、気候変動や地震・津波などの大災害が多発しています。生命を守る避難所における感染が問題になるなど、安全・安心の確保にはまだまだ課題があります。そのような危機的な状況の中だからこそ、見えてきたものがあると思います。

本特集では、これまでの常識として定着してきた社会や建築の対応に限らず、困難な状況にしなやかに適応し復興を遂げて生き延びていくレジリエントな社会や建築の構築につながる都市や地域のあり方、さまざまな暮らしや働き方など生活のあり方を問いかけてみることにしました。

これらの視点はコロナ禍を契機とするグローバルな問題から、個人の生活における気づきや提案まで多彩です。それぞれのお立場から見えてくる、今日の社会を記録し、今後のレジリエントな社会づくりに向けた重要な課題を抽出し展望しようとする試みです。

計画系編集幹事　田中直人

■ 総論

社会的危機からの復興～東日本大震災の経験からコロナ禍を展望する～
● 御手洗潤

■ 各論

1　新型コロナ感染症をどう理解するのか～防災・復興の視点から～
● 牧　紀男

2　孤高の才は都市の雑踏の中で光彩を放つ
● 奥山信一

3　これからの都市構造のゆくえ
● 星　卓志

4　一次産業空間の再起動～農山漁村の現状と持続性へのまなざし～
● 下田元毅

5　コロナ禍で気づく音のデザイン
● 小松正史

6　在宅勤務のプロセスと課題～一人暮らし～
● 林　雄太

■ 編集後記



新型コロナウイルス感染症の指標である「大阪モデル」の「注意喚起解除へのカウントダウン」として黄色に点灯された通天閣

2020.8.18田中直人撮影

企画：計画系分科会

田中直人／飯田　匡／鈴木克彦／林　雄太／松田奈緒子／守井　辰／吉村英祐

総論

社会的危機からの復興

～東日本大震災の経験からコロナ禍を展望する～

京都大学経営管理大学院
客員教授

御手洗潤

1969年11月生まれ
一橋大学法学部卒業。東京大学公共政策大学院修了。平成４年に建設省入省後、在シンガポール日本国大使館、内閣府統括官（防災担当）付企画官（緊急事態対処担当）、国土交通省都市局都市計画課開発企画調査室長、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局参事官等を経て、2020年７月より復興庁参事官（原子力災害復興班）。京都大学経営管理大学院客員教授（2017年～）。工学博士。

本稿の内容についての責任は筆者にあり、筆者の所属する組織の見解ではないことを申し添える。

■はじめに

本稿では、2020年世界最大の話題であるコロナ禍について、危機管理と復興局面における東日本大震災（特に原子力災害）とのいくつかの類似性をもとに、今後の復興を展望する。具体的には、地域に応じた対応や後戻りの想定、新たな社会の到来を前提に従前よりよい状態にする「復興」の発想が必要であること、私的領域への対応の拡大とソーシャルキャピタルの強化が期待されること等を論ずる。

■新型コロナウイルスが危機管理にもたらしたもの

●新型コロナウイルスの状況

2020年11月中旬現在、国内の新型コロナウイルスの累計感染者数は11万人弱、死者数は約1900人を数える。各種Go Toキャンペーン等の経済対策が盛り上がりを見せ、コロナ対応と経済の両立が日本社会の最大のテーマとなっているが、一方で足下では流行の第３波が到来したとも言われている。

世界に目を転じれば、全世界で約5400万人感染し、約130万人が死亡した。南米やロシア等では感染がいまだ収束が見えず、一時期抑え込みに成功したように見えた米国や西欧諸国でも再び感染が拡大し外出規制や営業規制が広がる。経済とコロナ対応の両立が一筋縄ではいかないことが改めて実感される。

2020年の世界最大の話題であるはずであった東京オリンピック・パラリンピックは、３月22日に史上初の１年延期が決定された。このような事態を誰が予想しただろうか？

●コロナ禍と東日本大震災～想定外～

東日本大震災後に「想定外」という言葉が流行した。実際に、新型コロナ禍は多くの関係者にとっては想定外であっただろうが、危機管理においても想定外だったのだろうか？土木学会第106代会長であった小林潔司は、東日本大震災の規模やそれに続く原発事故は、「我々の想定をはるかに超えるものであったことは素直に認めたい」と反省の念を表し、「想定外のことが起こりえることを想定することが必要」とする[1)]。

政府は、2020年１月30日に、閣議決定に基づき、内閣総理大臣を長とする「新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置した。内閣官房には同本部の事務を担う対策室が置かれている。また、３月には「新型インフルエンザ等対策特別措置法」が改正され、同本部は同法に基づく本部となった。また、同月には厚生労働大臣とは別に新型コロナウイルス対策の担当大臣が任命されている。さらに、４月７日に同法に基づく緊急事態宣言が一部地域で発出され、その後全国に拡大されたが、５月25日には全て解除された。

これらの過程は、大規模災害における対応と大筋で類似している。東日本大震災においても、発災当日の2011年３月11日に内閣総理大臣を本部長とする災害対策基本法に基づく緊急災害対策本部が史上初めて内閣府に設置されるとともに、同日に原子力災害対策特別措置法に基づく原子力緊急事態宣言が発令され、同じく内閣総理大臣を本部長とする史上初の原子力災害対策本部が内閣府に設置された。また、同年６月には東日本大震災復興基本法が成立し、東日本大震災復興対策本部が内閣に設置されるとともに[2)]、東日本大震災復興対策担当大臣が置かれた。

政府にとって、この二つの緊急事態は、類型からして想定外であったわけではない。総理と官房長官を支える内閣官房に置かれる内閣危機管理監は、国民の生命、身体又は財産に重大な被害を生じるおそれがある緊急の事態（国防を除く）への対処や発生防止を担っているが、危機管理監が対処する緊急事態には、大規模自然災害や原子力災害等の重大事故、そして「新型インフルエンザ（ヒト・ヒト感染）」が、今般のパンデミックの前から明示的に含まれている[3)]。

感染症は、14世紀ヨーロッパのペストや16世紀米大陸の天然痘、エイズや近年の新型インフルエンザ等のように古来より人類の脅威であったが、多くの人々が新型コロナ禍を想定外と感じるのは、東日本大震災と同じく、その危機の類型にあるのではなく、被害の規模と態様によるものであろう。感染症も津波も歴史をさかのぼれば類似の危機はあったが、インパクトの大きなものは非常に昔であったり、最近のものはインパクトが小さかったりしたため、社会経済の変化・複雑化とあいまって、一部の学者による学説はあっても、

学界全体ないし社会通念としては多くの点で社会のシステムの内側（想定内）とは考えられなかった[4]ということであろう。

■東日本大震災の知見をもとにコロナを考える

●コロナ禍と原子力災害

コロナ禍と東日本大震災には、大規模緊急事態として政府が対処しているものの、社会システムとしては多くの点で想定外にあったことの他にも、類似点がある。

東日本大震災は、地震と津波の被害も非常に甚大であったが、津波が福島第一原発の事故を引き起こし、原子力災害が発生したことが事態を困難化した。

東日本大震災時の原子力災害と今般のコロナ禍は、生活空間に広範に存在している（かもしれない）目に見えない原因物質への暴露が生命身体に危害を及ぼすこと、暴露の機会や量と生命身体への危害の程度が発生当初は特に科学的に十分な知見がなかったこと、そして生命身体への危機が長期に及ぶことなどの共通点がある。余談だが、今般のコロナ禍で欧米等において強制力を持つ外出制限が行われたが、原子力災害対策特別措置法においても屋内退避の指示が想定される避難の一つとされている。

また、これらの共通の特徴を原因として、社会経済への影響と生命身体の安全とのバランスの中で両立が必要であるうえ、強い社会経済活動の制限を一時的又は地域的に行わざるを得なかった点も類似している。言い方を変えれば、生命身体の危機を伴う緊急事態においては、一般的には、短期的対策として「個人」の「生命身体」を保護するための緊急事態対処が優先され、時間の経過とともに「社会」全体を対象とした「経済や暮らし」の対策に移行していくが、原子力災害とコロナ禍においては、時間が経過してもなお広く「社会」に対して「生命身体」を保護するための対策が「経済や暮らし」の対策とともに必要である。さらには、残念ながら風評被害や差別等を引き起こしてしまったことも共通している。

●原子力災害の状況

福島県沿岸部の住民は、原子力災害によりある日突然十分な情報もないまま国から避難指示が行われ、予想だにしない長期避難を強いられることになった。発災当日（３月11日）以降避難指示の対象区域が刻々と拡大され、翌12日18時25分に福島第一原発から半径20㎞圏内に避難指示が、３月15日11時に20～30㎞圏内に屋内避難指示が発出された。４月22日には、警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域の３種類に区域が再編され、合わせて12の市町村が含まれることとなった。地震津波被害からの避難者等も合わせ、福島県の避難者は最大で約16.5万人に上った。

現在では、福島の避難者は約3.7万人に減少し、最大で約3.3万人いた仮設住宅への入居者は12人にまで減少した[5]。2010年度と比較すると、被災12市町村の域内総生産は約91％（2018年度）、製品出荷額は約79.2％（2019年度）、福島県の農業出荷額は約89％（2019年度）等、回復しつつあるように見える。

しかし、いまだ６つの市町村では避難指示が解除されておらず、居住者は12市町村の住民基本台帳登録人口の約２割の1.4万人、うち65歳以上の高齢者が約44％となっている（2020年４月現在）。さらに、12市町村の営農再開面積は約32％（2019年度末）、福島県の主要な魚市場の水揚金額は2010年度比で30％（2017年度末）にそれぞれ留まる等、厳しい状況が続いている。これは、災害の直接の影響のみではなく、発災から約10年が過ぎ避難者の生活環境や消費者の習慣が変わってしまったことが原因と考えられる。

一方で、明るい兆しもある。例えば、イノベーションコースト構想のもと、陸・海・空のフィールドロボットの開発実証拠点（ロボットテストフィールド）や世界最大級の再エネ水素エネルギーシステムを持つ福島水素エネルギー研究フィールド等の最先端の研究施設が浜通り地区に集まり、それを核としながら363件もの企業が立地している（2019年12月現在）。また、復興支援員、震災ボランティア、地域おこし協力隊、復興企業従事者といった復興を契機として地域につながりを持った人々が移住する動きが芽生えつつあり、例えば村内居住者数約1500人の飯舘村では、2017年の避難指示解除から３年５か月で100人もの移住者を迎え入れている。

●東日本大震災の知見

これらからいえることは、長期的な対応を伴う社会的危機に対処するためには、従前の姿に戻すという復旧の概念だけでは、経済や暮らしは立ち行かないということである。避難が長期化すると避難先での新しい生活が定着し故郷といえども戻ることが難しくなる。これは、もともと抱えていた人口流出や高齢化といった社会経済の変化が短期間で一気に加速したとも言える。これに対処するには、その変化をとらえた新しい打ち手を講じていくこと、いうなれば「創造的復興」が必要になる。原子力災害からの復興は、まだ長期的な対応が必要と言わざるを得ないが、イノベーションコースト構想や復興への思いのある人々を中心とした移住の促進は、長期的な対応の必要性から生まれた「創造的復興」の代表策であり、復興庁ではさらに加速する具体策を講じようとしている。

また、東日本大震災への対応をきっかけに、行政に大きな変化が生まれた。復興庁事務次官であった岡本全勝は、その変化として①防災の考え方の変化（完全な「防災」から「減災」へ）や、②災害復旧の内容の変化（「国土の復旧」から「暮らしの再建」へ）等をあげる[6]。具体的には、①は、従来のハードのみで被害を防ぎきるという発想ではなく、緊急時に「逃げる」ことを基本として防災教育やハザードマップといったソフトが災害対策の重要な要素になってきたことである。②は、原子力災害や津波の被災地のように住民がほとんどいなくなったり有形無形の生活基盤がすべて失われたりした地域では、「インフラの復旧と住宅の再建」だけでは住民は暮らしていけないため、「産業となりわいの復活」や「コミュニティの再建」にも行政の支援が行われたということである。これは、公的政府と私的社会を区分する公私二元論から、その区分が曖昧化し、官・共・私三元論へという社会変化が一気に加速したとも捉えられる。この「行政の守備範囲の拡大」は、私的領域の範囲であるためかつては個人や事業者の自己責任とされていたリスクに対して、政府や社会が援助するという行政のあり方の改革でもある。「産業となりわいの復活」や「コミュニティの再建」の支援のためには補助金等の純粋な行

政的手法だけでは不十分で、被災地以外の民間企業、NPOといった主体が市場経済とは別の手法で大きな役割を果たすとともに、NPOとの協働や企業同士のマッチング支援といった「新たな行政手法」も生み出された。復興庁では、それを紹介するとともに、民間からの参加を促した。企業やNPOはこれに応え、復興に大きく貢献した[7]。

■コロナ禍からの復興を展望する

●地域に応じた対応・後戻り

東日本大震災は3月11日に発生した。今年のコロナ禍もWHOが世界の流行状況をパンデミックと認定したのが3月12日であり、9年の時の差はあるが深刻化した時期は類似している。

東日本大震災では、6月24日に東日本大震災復興基本法が、8月12日に原発避難者特例法が、同月30日に放射性物質汚染対処特別措置法がそれぞれ公布・施行されるなど、徐々に地震・津波災害対策は復興の局面に移行し、原子力災害対策も避難者支援や除染・復旧の体制が整ってきた。しかし、9月30日には福島第一原発から30km圏内の緊急時避難準備区域が解除される一方で、特定避難勧奨地点はその後も指定が続いた[8]。同発電所が冷温停止状態に達したと首相が宣言したのは12月であり、それを踏まえて翌2012年4月に避難指示区域が見直された。その後、田村市の避難指示解除準備区域（2014年4月解除）等徐々に避難指示が解除されてきているが、いまだ6市町村には住民が立ち入れない帰還困難区域が残っている。すなわち、復興に向けた局面は地域により大きく異なっている。また、将来ALPS処理水の放出が行われるとすれば、風評被害が逆戻りすることも想定内に入れざるを得ない。

このようにみると、コロナ禍においても、全体的には社会経済を回復させる復興の局面に入りつつも、世界中あるいは日本国内でも、その局面は地域によってまだら模様にならざるをえず、対応を地域ごとに考えることが必要であるし、場合によっては一時後戻りすることも想定しておく必要があろう。

●創造的復興

復興とは、従前の姿に戻すのみではなく、これまでより良い状態にすることを含んでいる（**図1**）。しかし、長期にわたる復興を余儀なくされた原子力災害の被災地では、前述の居住人口や農林水産業の数値からもわかるように、従前の姿に戻すこと自体が極めて難しく、そのために創造的復興の考え方のもと新しい打ち手を講じている。

コロナ禍で落ち込んだ活動、例えばインバウンドや観光、交通、飲食、大規模イベント等の中には、生活環境が大きく変わった社会（ニューノーマル）では元に戻らないものもあるかもしれない。通勤・出張・会議や大学の大講義等は確実に減るであろうし、職場の大規模な宴会や親戚一同が集まる行事、同窓会等の機会や規模も減少するかもしれない。人々は否応がなくリモートを経験した結果、「距離の壁」を簡単に超える便利さ・快適さを知ってしまった。また、スポーツや音楽や学会等のイベント、繁華街や観光地でたくさんの人を一堂に集める機会等も減るかもしれない。しかし、そのような社会では、他人とのつながりやリアルの経験の価値はむしろ高まるのではなかろうか（「つながりの再発見」「リアルの再発見」）。社会経済を従前の状態に戻し、よりよい状態にするための新しい打ち手を、産官学民で探すことが必要である。

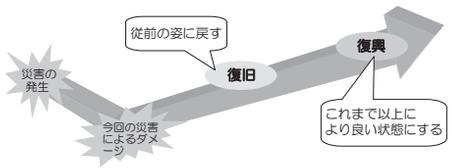


図1　復興の概念図[9]

●想定外を想定する

コロナ禍の経験を踏まえ、想定外を想定していくこと、すなわち社会システムの外側の領域を内側に取り込んでいくには、何が求められるのか。この目に見えない禍に対処するため、政府の「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」をはじめとする感染症等の医療の専門家が当初より大きな役割を果たしたが、6月末に同会議は廃止され、経済学者や実業界・行政当事者等幅広い専門家が入る「新型コロナウイルス感染症対策分科会」が設置された。

このように、想定外の社会的危機への対応には科学的知見が不可欠である。建築、土木工学、気象、疫学、医療等各自然科学の分野の研究を一層深める必要があるが、同時に超大規模危機に対処するため、社会経済の復興局面になればなおさら、社会科学や実務も含めた分野間の連携・協働が極めて重要である。そのためには、日ごろからの連携・知見の共有や複数分野での専門家を養成するといった取り組みのほか、有事・平時ともに専門家間の連携・マッチングを促進する中間機能を磨くことも有効であろう。

福島の原子力災害は地震、津波、原子力3分野の複合災害である。コロナと自然災害の複合災害のリスクも指摘されて久しいが、様々なリスクを想定した準備が必要である。

●行政の守備範囲

先述のように、東日本大震災により、災害対策を担う行政の守備範囲が拡大した。従来の行政は、社会資本（＝インフラ）提供や法制度構築を基本としつつ、何とか公共的なサービス（＝制度資本）や産業資本までを対象としてきたが、壊滅的打撃を受けた地域の復興はそれらだけでは成し遂げられなかった。岡本は「社会的共通資本」と呼ぶが、社会資本や制度のほか、社会関係資本（＝ソーシャルキャピタル）や文化資本（気風、お国柄など）も含んだ地域全体の財産にまで守備範囲を広げていく必要を岡本は訴えている。

コロナ対策においても、行政の守備範囲は広がってきている。これまでの拠点病院中心の医療体制から、町医者を含めた地域全体での医療体制へ、さらに医療現場での対策から職場・学校・飲食・イベント・旅行といった生活の様々な場面での対策へと、民間企業やNPO、さらに個人と、従来の医療行政の範囲をはるかに超えた広い範囲を守備していくことが求められている。

また、先述のように、東日本大震災以降減災の考え方が広がった。これをコロナ禍に応用すると、検査体制と治療薬とワクチンという一時防御手段（津波であれば防潮堤や堤防に相当する）を用いて、理想は天然痘のように世界から撲滅することであろうし、そうでなくともSARSやMARSのように抑え込んで大衆の生命身体への影響を最小化し、社会経済をもとの状態に戻すこと（＝復旧）が防災の発想であろう。しかし、それらの一時防御

手段の確立のための技術開発には相当の時間が必要であろうし、その技術の程度（例えばワクチンの効果やPCR検査の精度）やコスト、グローバル化と世界各国の医療体制や衛生環境、財政状況を勘案すると、一時防御手段のみで社会経済を短期間で復旧することは困難である可能性も少なくない。すなわち、新型コロナの流行を発生させないだけではなく、小規模な流行が発生したとしても被害の発生・増大を可能な限り抑制するという減災の発想で考えていく必要がある。災害対策の場合は、防災＝ハード対策、減災＝ソフトを中心とする対策であり、これに対比して考えると防災は上記の３つを中心とした一時防御手段、減災は先述した地域の医療機関や職場・学校・飲食・イベント・旅行等と考えることも可能である。しかし、防災＝主に公的領域、減災＝主に私的領域と考えると、よりコロナ禍に当てはまりやすい。コロナ対策でも、文化芸術活動への支援、異業種によるマスク等製造への参入促進や雇用シェア（在籍出向）促進等既に動きも見られるが、拡大した私的領域の守備のため、補助金以外を含め「新たな行政手法」への工夫が必要であろう。

●ソーシャルキャピタル

上記小林は、防災と減災、私的領域と公的領域は「両者が相互に関連しあってシステム全体としてガバナンスが機能するような複合的システムとして理解することが適切」とする。これは、公的領域にある法制度を用いた制度資本に対する規制（外出制限、営業規制、出入国制限等）と、私的領域にある個々人の外出等の自粛やマスク・手洗いといった生活習慣という手段を用いて、コントロールをしてきたコロナ対策を思い起こさせる。昨今、欧米等で行われた強制力を持つ外出制限等を範として、日本でも法規制の必要性が議論されている。しかし、日本を含む東アジア・東南アジアのほうが現在のところ結果的に抑え込みに成功しているといわれており、そのカギは、上記の生活習慣や自粛、さらにこれらに対するデモ等の混乱が少ないこと等を含めた社会関係資本や文化資本ではないだろうか。

東日本大震災の際に「絆」という言葉が流行し、ボランティアや被災地の商品購入等人々のつながりが強化され、それとともに防災訓練や避難施設等における地域の巻き込み、近隣の災害弱者への対応等地域での防災に関するつながりが強まったといわれている。一方で、原子力災害の被災者に対するいじめや偏見、福島産品の買い控えといった風評被害、住民が避難した原子力災害被災地での空き巣等といったソーシャルキャピタルへの負の効果も散見されている。それでも総体としては、近年その風化が懸念されつつあるものの、東日本震災によりソーシャルキャピタルが強化され、私的領域における防災・減災は進んできたと筆者は評価している。

今回のコロナ禍においても、医療従事者等への感謝を示す動きが世界中で見られたり、リモートで遠く離れた友人等との絆が深まったり、食品等が売れなくなった地方の生産者を助けようとネット上での商品販売が盛り上がったりと、ソーシャルキャピタルが強化されるような動きもみられる。一方で、コロナ感染者やその家族に対する誹謗中傷、国内では自粛警察と呼ばれるマスクをしていない者や深夜営業をしている店等に対する過度な排斥の動きや、世界的にはマスクや営業規制等に対するデモ、そして各国のワクチン争奪戦といった逆の動きもみられる。さらに、そもそもコロナ禍がもたらす外出や移動の制限といった「社会的な制約は、…ソーシャル・キャピタルに深刻な影響を与えることが危惧されている」との指摘もある[10]。

しかし、（戦争など敵のいない）大きな社会的危機は、分断ではなく協力・協調を生みだすことができるというのが、東日本大震災をはじめとする災害で日本が得た素晴らしい経験である。社会的危機は「絆」を深めるチャンスであり、これが、ソーシャルキャピタルの強化や文化資本の見直し・活用という形で人類の資産の増強につながり、復興を加速することができる。この循環をコロナ禍に悩む世界に広げていくことは、日本ができる重要な役割であろう。世界のグローバル化は、急速な世界規模でのコロナパンデミックをもたらしたという意味では負の側面があるが、一方で世界規模で同じ社会的危機に同時に苛まれるという人類史上初の経験をもたらしている。今回のコロナがもたらした世界共通の社会的危機が、「距離の壁」が簡単に超えられようになったことや「つながりの再発見」と相まって、ソーシャルキャピタルの強化をもたらすことができれば、世界全体で距離を超えて絆が深まるというこれまでにない資産が生み出される可能性がある[11]。この効果を通じて、コロナ禍からの復興を目指すニューノーマルが「これまでより良い状態」になることができるよう、日本の災害時の経験を世界に広めていくことが重要と信じている。

（みたらい　じゅん）

1）小林潔司「想定外リスクと計画理念」土木学会論文集D3（土木計画学）Vol.69，No.5（土木計画学研究・論文集第30巻），2013

2）東日本大震災復興対策本部は、2012年２月に復興庁に引き継がれた。

3）内閣官房ホームページ「国家安全保障会議の創設に関する有識者会議」第２回　資料，2013

4）上記小林では「ひとは社会の問題を解決するために、さまざまなシステムを構築する。しかし、ひとたびシステムを構築すると、システムの内側と外側という背反する領域が出来上がる」として、「システムの改良を図るために、新たにシステムの外側の領域を内側」にとりこんだとしても、「事態が抜本的に改善されるわけではない。」とし、「システムの内側と外側の間にある壁」「を取り除くことは不可能」としている。そして、その想定の壁を克服するには社会システムの外側を正確に観察する学問の強化と、それが社会通念として受け入れられることが必要とする。

5）福島民報2020年９月13日配信記事
https://www.minpo.jp/news/detail/2020091378997

6）岡本全勝（編著）　藤沢烈、青柳光昌（著）「東日本大震災　復興が日本を変える」ぎょうせい、2016

7）参考：復興庁ホームページhttps://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat4/sub-cat4-2/

8）特定避難勧奨地点とは、事故発生後１年間の積算線量が20ミリシーベルトを超えると推定される地点であり、ホットスポットと呼ばれることもある。なお、2014年12月にはすべて解除されている。

9）福島県復興ビジョン（2013年12月）３頁

10）野口泰司、伊藤信人、白土大成「COVID-19 社会的制約班からの提言～第１報～【ソーシャル・キャピタル】」日本理学療法士協会ウェブサイトhttp://www.japanpt.or.jp/upload/branch/prevention/obj/files/COVID-19/3)socially/04_socially.pdf

11）「社会的結びつきの一つ一つが、…パンデミック発生時には、ウイルスそのものの影響だけでなく、ウイルスに付随して私たちの生活のさまざまな側面にもたらされる課題に対して回復力を強化してくれるようにも見える。」（リセット・ロビレス「「ソーシャルディスタンシング」の時代におけるソーシャルキャピタル－社会的なつながりに新型コロナウイルス感染症が及ぼす影響の考察」JICA緒方研究所ウェブサイトhttps://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/news/interview/blog_20200803_01.html）

各論 1

新型コロナ感染症をどう理解するのか

～防災・復興の視点から～

京都大学防災研究所
社会防災研究部門
教授

牧　紀男



1968年京都市生まれ。
1991年京都大学工学部建築学科卒業、1993年京都大学大学院工学研究科建築学第二専攻修士課程修了、1997年に京都大学大学院工学研究科で博士（工学）を取得。1996年京都大学大学院工学研究科助手、1998年理化学研究所/防災科学技術研究所地震防災フロンティア研究センター副チームリーダー、2005年京都大学防災研究所巨大災害研究センター助教授、2007年同センター准教授、2014年から現在に至る。
専門は、防災計画、災害復興計画、危機管理システム、すまいの災害誌。
著書「災害の住宅誌」（鹿島出版会）、「はじめて学ぶ都市計画」（市ヶ谷出版）ほか。
東日本大震災では岩手県災害対策本部において災害対応支援を行う。

■感染症対策と防災

一般的な防災対策とは全く異なると考えられているようであるが、新型コロナの感染拡大防止のために実施されている社会活動を制限して被災（感染）する人を減らすという対策は、自然災害でも行われている。台風接近時の「計画運休」は、鉄道を止めて社会活動を小さくすることで、被害を小さくしている。地震対策でも同様の対策が検討されている。以前は東海地震の「予知情報」が発表されると避難や被害が想定する地域への立ち入りが制限されることとなっていた。現在は、南海トラフ地震の「臨時情報」が発表されると、地震発生後すぐに津波が来るような地域の住民は１週間程度、安全な場所に避難することとなっている。こういった対策も、被災する人を減らすことを目的にした現在の新型コロナの対策と同じ枠組みの対策である。

災害による被害の大きさは、ハザード（揺れの強さ）、脆弱性（建物の耐震性）、暴露量（人口や社会・経済活動といった影響を受けるものの量）の関係で決まると定義されている。通常の防災対策は、建物の耐震性を上げるといった脆弱性を下げる対策であるが、先述のように社会活動を制限し、暴露量を下げるという対策も理論的には存在する。予想精度が高く、社会活動を制限する時間が短い台風のようなハザードに対しては実施されてきた。それでも台風接近時に鉄道を止めることに対する批判も存在した。地震については、期間も長くなることから、どういった影響が発生するのかが良く分かっておらず、実際の運用が課題となっていた。自然災害では様々な課題が存在するために導入が難しかった暴露量を減らす対策が、新型コロナ対策で実施されたことで自然災害対策への適用が容易になったという側面もある。

■新型コロナ感染症とレジリエンス

新型コロナ感染症への対策ではDamage（人命）を防ぐ対策を講じた結果、Loss（社会・経済活動）が発生している。このことはレジリエンスという観点からみると理解しやすい。レジリエンスとは、物理的被害を出さない対策に加えて、災害から回復力も含め総合的に災害に対する強さ（「しなやかさ」）を評価しようとする考え方である。レジリエンスを考える場合、何に対する被害かを明確にして議論することが重要であるが、日本語の「被害」という言葉は何に対する被害なのかが明確になっていない。英語では日本語の「被害」に対応する言葉としてImpact（総合的な影響）、Damage（物理的）、Loss（経済・社会的）という３つがあり、何に対する被害なのかということが明確になっている。壊れたモノの量（直接被害：Damage）を減らすことに加え、災害による社会・経済活動への影響（間接被害：Loss）も含めた総合的な影響（Impact）を減らすことがレジリエンスという観点からは求められる。新型コロナ対策で行っているのは、まさにそういうことである。

今回の新型コロナ感染症の対策では社会経済活動を人為的に一定時間８割まで下げ、その後、回復させていくという対策が取られている（**図１**）。

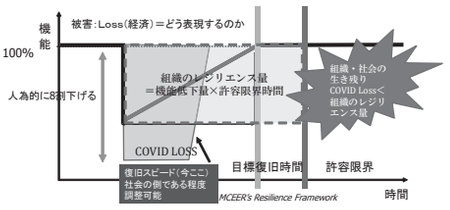


図１

組織のレジリエンス力とは、機能低下量と許容限界時間（どれだけ活動を止めていられるのか）の積であり、組織のレジリエンス力（長方形の面積）＞新型コロナ対策の影響（台形の面積）であればコロナ禍を生き残ることができるということになる。自然災害では、対策（脆弱性を下げる）を実施することにより間接被害（Loss）が減少するが、感染症対策では対策（暴露量を下げる）を実施すると間接被害（Loss）が増加するという反比例の関係にあることが厄介である。

■災害は社会のトレンドを加速する

本稿執筆時は新型コロナの感染者数も落ち着き始め、予断を許さないが徐々に社会は災害前の姿に戻りつつあった。社会の元に戻ろうとする力は案外強く、しばらくすると多くのことはまた元に戻っていくと考えられる。新型コロナ感染症を契機として、新しい事が生まれてきたように思えるかもしれないが、今、起こっていることは、以前から存在した

もの、もしくは以前から考えられてきたことである。今回の大変な経験を踏まえて、本当に何か新しいものが生まれて来るには時間が必要になる。新型コロナ時代を生き残る上で不可欠なツールとなった遠隔会議システムも、あまり利用されていなかったが以前から存在していた。テレワークやサテライトオフィス、さらには二地域居住といったことも、働き方改革や、東京一極集中の是正という文脈で語られていた。感染拡大の防止に必要な十分な公共スペースを持つ都市空間は、防災・にぎわいといった観点から目指すべき都市像とされてきたものである。これまでの災害復興の経験から分かっていることは、災害は社会のトレンドを加速させるということである。災害は、近い将来起こることを顕在化させる。東日本大震災や新潟県中越地震の復興では、数十年後の水準まで高齢化が一気に進行するような事態が発生した。災害後は社会が将来に先送りしていた課題が一気に噴出してくるので、復興事業では問題を解決することができない。したがって災害前から被災をふまえた将来の地域のあり方について考えておく「事前復興」という取り組みの重要性が指摘されている。

新型コロナ感染症への対応を経て現れてきた社会の姿は、近い未来の姿なのである。しかし、自然災害の復興とは異なり、必要であることは分かっていたが、夢物語のようでなかなか実現が難しかったことが実現されて行っていることが少し自然災害とは異なっている。

■災害から生まれた新しいもの

新型コロナ感染症の経験を経て、何が生まれてくるのかはまだ分からないが、大変な被災、復興の経験を経て新たに生まれてくるものは確実に存在する。東日本大震災の発生から10年が経過するが、被災地ではいくつかの将来のまちづくりの鍵となるような新たな試みが生まれている。

一つは大船渡市の「キャッセン大船渡」である（**写真１**）。大船渡の中心市街地は津波で壊滅的な被害を受け、盛土の上に市街地が再建されることとなった。「キャッセン大船渡」で注目すべきは、店舗は市が買収した土地を借地して建設される商業施設の中にテナントとして入ることである。地元商店もテナントとして入居することとなれば、商売を止めた後も家賃を払いつづけるということは考えられない。このようにしてシャッターを閉じたまま持ち続けるのではなく、空いた店舗に新たな商店が入る仕組みが構築されている。

もう一つ紹介したいのは気仙沼内湾地区に建設された商業・公共施設「迎（ムカエル）」である（**写真２**）。１階部分の海側の壁は防潮堤であり、防潮堤の内側に防潮堤の管理用道路があり、通路のさらに陸側を駐車場・商業スペースとして利用する形式となっている。防潮堤の上の２階部分には海が見える飲食店や公共施設が設けられている。海側には土を盛ったスロープが設けられ、できるだけ防潮堤があることが分からないようなデザインとなっている。気仙沼内湾地区に住む人の防潮堤の無いまちにしたい、という復興に対する思いを実現するために防潮堤と建築物が一体となったまちづくりが行われることとなった。

いずれの取り組みにも共通するのは「問題を解決したい」「こんなまちにしたい」という地域の強い思いである。専門家のアイディアだけでは、新たな試みは進まない。地域の強い想いと合致して初めてまちづくりの取り組みが実行されるのであるが、そのためには時間が必要となる。



写真１



写真２

■物理空間の力

新型コロナ感染症下では、打ち合わせ・会議が遠隔会議システムを使って行われ、大学では授業や研究集会がデジタル空間の中で実施されるようになっている。建築や都市といった物理的空間での活動がデジタル空間にとって代わられている。インターネット飲み会はそれほど楽しくないが、買い物はデジタル空間上で可能である。新しいことを始める、議論して企画を煮詰める、相手の顔色を見ながら落としどころを探る、お詫びをするといったことは、なかなかデジタル空間では難しいが、定型的な会議や打ち合わせは、遠隔会議システムで十分代用可能である。外出が抑制されていた時期には、インターネット空間はなかなか便利であり、都市・建築分野の専門家として自分のフィールドが侵食されているような危機感を抱いていた。しかし、落ち着いてよく考えてみると新型コロナ感染症の経験は建築デザインという観点からみるとよい方向に向かうかもしれないと今は思っている。

デジタル空間が多用される中で分かったことは、建築の専門家にはデジタル空間では代替できない本来の意味での良い空間づくりが求められていることである。全国どこにでもあるような紋切り型の場所をつくっていては、物理空間は生き残ることが困難となる。ただこれも別に新しい指摘ではなく原広司は1970年代に均質空間の批判[1)]を行っている。ただ、コロナの経験を経て実際の問題として認識されたと思う。ポスト・コロナの時代、物理空間を扱う専門家には、これまで以上に高い能力が求められるようになっている。それぞれの場所に応じた、訪れたくなる、そこにしかないような空間を創ることの重要性が以前にも増して重要になっている。こういった建築の専門家による試みを通じて、コロナ禍を経た新しいモノの姿が見えてくるのだと考えている。

（まき　のりお）

参考文献
1）原広司、『空間＜機能から様相へ＞』、岩波書店、1987

各論 2

孤高の才は都市の雑踏の中で光彩を放つ

東京工業大学
環境・社会理工学院建築学系
教授

奥山信一



1961年東京都生まれ。1986年東京工業大学建築学科卒業。1992年東京工業大学大学院博士課程単位取得満期退学後、同大学一般教育など図学助手。1995年同大学助教授を経て、2011年同大学教授。2016年より東京工業大学環境・社会理工学院建築学系教授。専門は建築意匠・建築設計・建築論。
主な作品に、柿の木坂の住宅（1995）、曽谷の家（1998）、南飛騨・健康学習センター（2003）、日光霧降マーブルハウス（2004）、御代田山荘（2009）、上馬スモールハウス（2009）、東工大緑が丘6号館（2014）、西新井の住宅（2017）。

■2020年5月、六本木Tバー

夜の帳は降り切らず、まだ僅かな残照が窓を灯す都心のバーでの光景である。コロナ禍の真っ只中であっても、感染症対策は万全に施され、様々な業種のトップクラスが情報交換する場として機能していた。都心に拠点を置く企業のオフィス環境と社員の生活環境の変革がリアルに語られている。しかし、都市に集まって住むという、人類が築きあげた都市環境の本質は、はたしてどれほど変わるのであろうか？

S（IT企業の経営者）：Kさんお久しぶりです。にしても大変な時代になってしまいましたなぁ、ホンマに。ところでうちはずーっとKさんの会社がやったタワーオフィスの2フロア借りてたんですが、在宅勤務はじまったら、結局1フロアで十分やとわかったんですわ。その代わりに神奈川、埼玉、千葉の県境に格好ええサテライトオフィス用意して、在宅に厭きたスタッフの逃げ場つくってあげよかと。スタッフの交通費手当も削減できるし、都心のオフィス賃料半分浮いた分と合わせると、十分余剰金出る算段なんで、それをスタッフに還元して、ヤル気出させようかと思ってますねん。

K（大手デベロッパーの重役）：まさしく正論。こちらはタワーオフィス貸す方だから結構深刻。いままで高い家賃バッチリ払ってくれたSさんの会社のような優良企業が、こぞってフロア半分でいい！と言ってくるのは早晩覚悟してるよ。その空いたスペースをどうするか？　誰でもいいと家賃下げたらもう終わり。それより差別化と付加価値をもっと考えないと。タワー1本あたりの企業数が増えるわけだから、業種同士のマッティングをアレンジして、タワー内で仕事の受注が新たに生じる環境を生み出そうと思うんです。企業同士の交流スペースにも新しいアイデアの模索、すでに始めてるんですよ。うまくいけばより高い賃料設定も可能かと。

S：もう作戦練ってんやな、さすがや！ところで先生、さっき話したうちの会社のサテライトオフィス、設計してくれへんか？

■ウイルスは敵か、味方か？

2020年9月6日発行の朝日新聞日曜版の特別紙面グローブ（No.233）は「世界はウイルスに満ちている」と題した特集を組んだ。このタイトルの意味は、新型コロナに苦しむ全世界の現状を指してはいない。ここでの「世界」とは私たち人間の日常環境のことである。ウイルスは恐ろしい病原体であると同時に、生物進化の原動力として機能してきたことが最新の知見を事例に紹介されていた。フランスの進化生物学者パトリック・フォルテールによれば、ウイルスと生物の細胞の「両者の相互作用が進化の最大の引き金になった・・・、レトロウイルスのようにウイルスのゲノムが、宿主のゲノムに入り込む＜内在化＞はより直接的に宿主のゲノムを改変することになり、進化を引き起こしやすい」のである。具体的には、哺乳類の胎盤は約3000万年前に内在化したレトロウイルスが関与して形成されたことがわかっているという。

門外漢にとっては衝撃的な知見であるが、進化生物学の分野ではもはや常識の域を出ない。数年前に訳出された『破壊する創造者』[1]はすでに同様な内容を詳述していた。遺伝子の突然変異とそれが長い時間をかけて環境に適合していく自然選択の過程だけでは、この地球の生命体の多様性を説明できないことを、巧妙な語り口で著者のフランク・ライアンは説き明かしてくれる。先の＜内在化＞と関連して「レトロウイルスには、もうひとつ生来の能力がある。生殖細胞のレベルでもゲノムの融合を起こすことができる。これを内在性化と呼ぶ。内在性化が起きると自由に動き回って他の個体に感染することのできた外来性ウイルスが、生殖細胞に定着して内在性ウイルスに変わる。外来性ウイルスが自由を失う代わりに、宿主のゲノムの一部として長く（ほぼ永久に）生きられるようになる。これは共生によって新たなゲノムが生まれたと考えることができる。」という。ライアンによれば生物に進化を起こす切っ掛けは、定説となった突然変異に限定されず、ウイルスによる共生発生が不可欠な役割を演じてきたということなのだ。禍々しい病原体の側面をもちながら、しかし多彩な生命体に溢れるこの掛け替えのなく美しい地球環境の形成に、ウイルスが一役買っていたことを認識せざるをえないのである。

■人は群れ（集団）を好む？

単独での行動パターンを示す生物もいるが、人間は明らかに群れを好む部類に属し、さらにその集団の規模拡大を常に諮ってきた。雑駁に

言えば、人類の歴史は集団形成の高度な仕組みの発展史と読み替えることもできる。始まりは血縁関係の小集団であったろうが、やがてそれら複数が結合して村落共同体が形成されていった。それは集団内のすべての事柄を把握可能な、生活レベルに差異のない幸福なまとまりであったことが想像される。しかし、いつしか人間は、その穏やかな豊かさを捨てて、見知らぬ人間が入り乱れ、不安と欲望が渦巻く都市を形成するようになった。この村落共同体から都市への移行は原則不可逆運動で、歴史的に逆行するベクトルは生じなかった。それはなぜか？

都市がもたらした様々な便益については、周囲の他集団との武力衝突への対応策を主要因として、都市形成史を紐解く数多な書物が教えてくれる。しかし負の便益も同時にあった。人口増大に見合う食料確保はもとより、水の供給と下水処理は都市の規模拡大に伴う最大の課題であった。現代のような治水技術や衛生概念は及ぶべくもないから、これまで出現した都市はすべて、幾度となく病原体が蔓延する温床に晒されたにちがいない。こんな危険な都市生活をなぜ人間は放棄しなかったのか？　ジャレド・ダイアモンドの『銃・病原菌・鉄』[2]は、その理由を巡る興味深い示唆を与えてくれる。

ダイアモンドは、世界にあまねく存在した民族の盛衰の差異を、大陸の地政学的視点から読み解いている。人類の歴史上、現代に繋がる主導権を握った民族や文明が、アフリカ大陸でもアメリカ大陸でもなくユーラシア大陸に局限するのは、ユーラシア大陸が他の大陸に比べて東西方向に圧倒的な広がりを有するからだという。同緯度の広がりは交易の促進を加速させる。しかし伝播するのは物資や技術だけでない。人や家畜に付随した病原体も頻繁に移動することになった。このことは一時的に危険な状態の到来を招いたであろうが、多様な病原体に晒された文明は、いつしか長い時間を経て強い耐性を持つことになり、それは武器の優位性をも上回る効力を発揮し、結果的に歴史のヘゲモニーをもたらしたというのがダイアモンドの見解である。

人やモノが常時大量に流出入する都市生活を人間がやめなかったのは、小さな集団に比べて病原体への耐性をより高度に獲得した大きな集団の方が、結果的に生き残ったという事実の反映だったかもしれないのである。

■ハウジング・プロジェクト・トウキョウ

約20年前になるが、師である坂本一成先生に監修をお願いして、塚本由晴さんを筆頭とする同僚たちと実践した集住に関する調査研究を一冊の本にまとめた[3]。世界都市東京の中心部に、なぜ私たちは普通に住むことができないのか。その一つの解答を、都市経済の論理ではなく居住性能に関する私たちの意識の変革によって提示しようと試みたのである。

住居内部の居住性に重きをおけば、東京の中心部での住まいは外部環境を遮断する方向へ進む。しかし過密で、時に猥雑な外部環境を魅力の享受と捉えれば、既存環境と豊かな関係を取り結ぶハウジングのイメージが浮上したのである。小さな住戸ユニットの集合体であるハウジングは、各住戸ユニットを連結する動線の最適化条件を外せば実に多様な形態をとりうることが、このプロジェクトに意匠論的なリアリティを与えてくれた。出来上がったプロジェクトは、資本と投機の象徴として立ち上がる現在のタワーマンションとは対極的なゲリラ的な姿を示すことになった。

20年前のこの提案は、実現性の有無ではなく、その主張として、今でも間違っていたとは思わない。どんな状況でも人間は集まって住むことをやめなかったからである。

先に引いたライアンの著作では、いままで知り得なかった進化の要因として、ウイルスとの共生以外にもエピジェネティクスという仕組みが挙げられている。これは後天的な作用によって遺伝子の発現が制御される機構であり、突然変異に加えて「生物は環境に直接呼応するようにして進化しえる」とされる。これを敷衍化すれば、私たち現生人類は、その発生の当初から、群れることが生存のための必須の環境であったが故に、集合願望が生命の奥底にプログラムされていたのかもしれない。

■再び六本木Tバー

S：そやそやKさん、おたくんとこの会社、オフィスだけやのうて、タワーマンションも結構派手にやってきたんやな。そっちの方はどうなん？

K：頭痛いとこ突くね。これだけ消費資本主義がグローバルに浸透したご時世だと、タワーマンション今更捨てるわけいかないよ。コルビュジエ先生の夢は、彼の思惑とは別の方向で現代都市に定着しちゃったから。

S：まあええわ。けどコロナ怖いわ。まだ死にたかないもん。せやけど一番怖いのは、このコロナ禍の状況にみんな慣れてまうことや。住めば都って言うわな。競い合わんと、評価されへんことが普通になってもうて、無駄なコミュニケーションなんか仕事に持ち込まん。コロナ終わっても、ソーシャルディスタンスとか言うて、物理的には「個」が確立してるんやけどな、言葉と裏腹に横並び原則の心地よさに浸ってもうてるから、精神的な「個」が消えてまう時代、続くんかいな。それが一番怖いわ。

K：「個」って重要だよね。孤高の存在っていうじゃないですか。それがないと文明も文化も前進しないよね。そうした知性を生み出す土壌、世の中から絶やしちゃまずいよね。人の群れを遮断した環境では、孤高は孤独に変質してしまう。孤高の才は都市の雑踏の中で光彩を放つ、と思うんだけど・・・。

（おくやま　しんいち）

参考文献

1）フランク・ライアン、夏目大訳、『破壊する創造者・ウイルスがヒトを進化させた』、早川書房、2014年12月

2）ジャレド・ダイアモンド、倉骨彰訳、『銃・病原菌・鉄、１万3000年にわたる人類史の謎』、草思社、2000年10月

3）奥山信一、岩岡竜夫、塚本由晴、小川次郎、足立真、寺内美紀子、『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』、東海大学出版会、1998年11月



各論 3

これからの都市構造のゆくえ

工学院大学建築学部
まちづくり学科
教授

星　卓志



1959年札幌市生まれ。北海道大学工学部建築工学科卒業、同大学院修了後、1985年に札幌市役所に入庁。都市計画部長、都心まちづくり推進室長等を歴任。主に企画、都市計画、まちづくり政策を担当。2013年４月より現職。博士（工学）、一級建築士、技術士（都市及び地方計画）。専門分野は、都市計画、まちづくり。主な著書は、「人口減少時代における土地利用計画」（共著、2010年、学芸出版社）、「東日本大震災合同調査報告」（共著、2015年、丸善）、「初めて学ぶ都市計画」（共著、2018年、市ヶ谷出版社）など

■目指してきた都市構造

今の都心あたりに商業集積があり、その周りに人が住んでいた。20世紀の後半に都市への人口集中が急激に進み、周辺に住宅地を拡大してゆくことになり、ある程度大きくなれば都心だけでは支えきれずに、住宅地の中に副次的な商業集積を作る。これを都市規模の拡大に応じて複層化してゆき、主要なものを交通施設で結ぶ。もとより地形や地物によって実際の形はさまざまだが、都市化の時代に目指していた都市構造は、どこの都市でもおよそこういうものだろう。

その際、最も重視されたことの一つが土地利用の純化だ。住環境の保護と円滑な経済活動環境の確保のため、産業の場と居住の場の混在を避けることに相当な注意を払って来た。人は毎日、それらの間を行き来する。人の移動を前提とした都市構造だ。

もう一つ確認しておきたいのは、古来、都市はコンパクトであるべきであり、事実コンパクトであったということ。集積することで成立するのが都市なのだから、改めて言うまでもない自明なことだ。移動を前提とした都市構造なのだから、人の移動をできるだけ短くする方が効率的で多様性が高まる。

■できた都市構造

都市の拡大発展の過程で自動車依存が過度に進んだため、低密度な市街地の拡散、郊外巨大ショピングセンターの乱立など、自動車依存をさらに高めざるを得ない都市が形成された。1968年に新都市計画法ができて市街化区域と市街化調整区域の区分制度と開発許可制度を創設したことは画期的だったが、1970年頃に全国で一斉に区域区分を行った際に、10年後の推計人口を収容する市街化区域がかなり広大に設定され、市街化区域内未利用地を大量に抱えることになった。このことは大都市よりも地方中小都市で顕著だった。

そうした当初の区域区分以降、増加人口に対応した住宅市街地や生活拠点がきちんとできるはずだったが、大量の未利用地の中でのことなので、いわゆるミニ開発の積み重ねによる、いわば市街化区域内スプロールが起きた。しかもそれらによる市街地形成の途中の段階で、誰も想像しなかった人口減少という事態に直面することになる。

■今日的コンパクトシティ

人口減少なのに、このまま市街化区域内でまちが拡散するのは都合が悪いのでコンパクトにするべきという主張が広がっている。つまり、目指していた都市構造（コンパクトで地域間が交通ネットワークで結ばれているもの）は実現できそうもないので、将来の人口に見合った、よりコンパクトな都市構造へ再編しようというのだ。その実現を後押しするための立地適正化計画制度というものが都市再生特別措置法の改正により創設され、全国で強力に計画作成が推し進められている。

私は、この今日的コンパクトシティ論と同計画制度には、強い違和感を持っている。

■アイスクリームが溶けている

20世紀後半の急激な都市化から今日までに、多くの地方都市では次のような変化が起きた。

桶のような形の器を用意する（市街化区域の設定）。その中心にはアイスクリームの山がある（既成市街地）。直後からアイスクリームは溶け始める（人口分布の郊外化）。しかし、そこにアイスクリームを足すということが可能（人口増加）だったので、桶全体に流れ出ることもありながら、山は少しずつ大きくなっていった。ところが、あるときからアイスクリームの補充ができなくなったどころか、食べ続けられるようにもなった（人口増加の停止から減少へ）。

溶け続けることを放置すれば、最後は液体となって薄く桶の中に広がることになる。食べられ続けながらも、何とかして小さくなっても残っている中央の山を残せないものだろうか。そのためには、溶けることを抑え、外に広がった部分を中央に集めるしかない。桶の外縁部には、アイスクリームの飛沫が残ることになる。

■現実を見れば

そんなことは絶望的に無理だろう、というのが私の違和感だ。都市計画の要諦は、都市の自然な変化に何らかの操作を加え目標とする状態に近づけることであり、自然な変化を逆行させることは不可能だ。川の流れに対して方向を少し変えたり速度を抑えたりすることはできても、逆流させることはできない。

今日多く叫ばれるコンパクトシティ論は、

この逆流を目指しているかのように見える。私は、むしろ市街化区域全体に、薄くても平準的に人口が分布する方がよいのではないかと考えている。むろんこれは、一部の市民だけが生活しやすく、取り残された郊外の人々の生活が劣悪になるよりは「まだまし」、という消極的な意味でではあるが。

ただし、全国の取り組みを調べてみて気づいたことは、この残すべき山を相当小さく設定するのであれば、そこには市民全体にとって有意義な都市サービスやコミュニティの場を再生することができるのではないかということ。実際、それを目指している都市もある。

■緊急事態宣言下

その時、移動を前提とした都市構造の中で、人はどれだけ移動しないで生活や社会を維持できるかを、国をあげて試した。リモートワーク、オンライン授業、食事を始めとする各種宅配サービス、遠隔診療、エンターテインメントの動画配信などが、現段階で可能な限り一気に実行された。人が移動して都市サービスにアクセスするという構図から、サービス自体が移動するという構図への大転換に向けた壮大な実験を行ってみると、現段階でどこまで可能かが鮮明になり、そのことの利点と欠点が見えた。さらにこの先、人が移動しないことの欠点を減らす技術革新が急速に進むであろうことへの展望も大きく開かれた。

■何を求めて人は移動し集まるのか

どうしてもそこへ行ってやりたいことは何だろうか。どうしても集まってしなければならないことは何だろうか。

どんなに通信技術や映像再現技術が高度に発展しても、実際の空間体験、空間の共有にそれが敵わないことがいくつもある。もちろん、知的生産活動や知識集約型産業において、人と人が直接会うことによってこそ生み出されることもあるだろう。

親しい人とワイワイやる、恋人と会う、生演奏を聞く、空気を味わう、スポーツを楽しむ、美味しいワインを片手に木陰で本を読む。挙げれば切りがないが、そういった多様なアクティビティのため、言い換えれば自発的、積極的な楽しみのための空間が都市には不可欠であり、そこには人が移動して集まる。

2018年の秋に撮影した富山グランドプラザの写真がある。何気なく撮った平日の午前中の光景。一つのテーブルを囲んでおしゃべりをする７人の女性がいた。



富山グランドプラザ

ここからは想像だが、この７人の女性は、富山市内のさまざまな所に住む友人たち。日時と場所を約束して集まり話し続けている。その場所としてグランドプラザが選ばれているのが凄い。都市の中心部に誰でも使える空間を作っても、即座に使われはしない。市民の多くに認知され、「自分の居場所」と思われるようにするため、グランドプラザの運営には周到な戦略があった。10年に及ぶ努力の結果として、この光景が生まれたのだと思う。このような人と人の繋がりは決して無くならないし、今後はますます渇望されるだろう。

■これからの都市構造

人と人とのコミュニケーションの場、豊かな空間でこそ可能なアクティビティの場が必要で、それこそ都市の中心に生み出すべきものだ。移動可能な都市サービスを集積する必要性は急速に低下する。とすると、小さいながらも上質なアイスクリームの塊を残し、あとは薄く広がっても良いかも知れない。

舞鶴市は、立地適正化計画の居住誘導区域を市街化区域の７％と限定的に設定し、相前後して用途地域の規制強化を全市的に行うとともに、市街化区域の縮小（逆線引き）までも具体化している。コロナ以前の計画だが、いま見ると、一つの指針を示していると思える。

■まちのマネジメント

仮にそのような都市構造を構想したとき、まちのマネジメントがこれまでにも増して重要になる。富山グランドプラザのように、まちなかの公共空間が人々の居場所となるには、多くの人がそこで人と会って時間を過ごしたいと思えるようになるための仕込みが必要だ。

国土交通省が2020年６月に始めた「新型コロナウイルス感染症の影響に対応するための沿道飲食店等の路上利用に伴う道路占用許可基準」を受けて、全国で路上利用が展開された。札幌狸小路商店街では、瞬く間に90以上の店舗が参加して多くの客を集めていた。

同商店街のある札幌大通地区には既に10年以上の活動実績のある札幌大通まちづくり株式会社があり地区全体での積極的なまちづくりマネジメントを展開している。また狸小路商店街独自でも、これまで道路協力団体になるなど、さまざまな道路空間利用を積み重ねてきている。こうした長年の実績を通して、札幌市、北海道警察などの関係行政機関との信頼関係を築き上げてきている。そのため。今回のコロナ対策道路占用の運用開始も実にスムーズに調整できたという。



札幌狸小路商店街

小さなコア（アイスクリームの塊）以外の住宅地においても、別のかたちのマネジメントが求められる。公共、民間を問わず、生活関連サービスが移動してきて提供されるには、自ずと限界がある。行き渡らない部分はコミュニティの力で補うしかない。清掃、美化などの環境管理、高齢者の見守り・居場所づくり、子育て支援、コミュニティ交通など、否が応でも人口減少、少子高齢化が進行する中で、住民が協力してまちの持続可能性を確保することは、ますます重要になってゆく。

仕込んだり、調整したりし、さらに実行するというマネジメントは、一個人や一企業では決して成し得ず、そのまちの多くの人が思いを共有して活動することが不可欠だ。

これからの都市構造計画は、土地利用計画と交通計画に、まちのマネジメントを加えたものとして描いてゆくことになるのだろう。

（ほし　たかし）

各論 4

一次産業空間の再起動

～農山漁村の現状と持続性へのまなざし～

大阪大学大学院工学研究科
助教

下田元毅

1980年　静岡県伊豆生まれ，広島育ち
2010年　大阪芸術大学大学院芸術研究科
　　博士課程（後期）修了
2016年　大阪大学大学院工学研究科
　　建築・都市計画論領域　助教

■最先端地としての一次産業空間

●＜逆さ日本地図＞

「日本海を手前に、太平洋を上にして、水平線の彼方から日の出を見る地図にして眺めた。こうすると東海道、瀬戸内、北九州に荷がかかり過ぎ、東北、北海道が軽過ぎて不安定さを感じる。そこで目方の重い首都をこちらに移すことで、まず少しばかり平衡が取り戻せまいかと考えた。」1970年、建築家吉阪隆正らのグループは、自立分散型都市を提唱し、＜逆さ日本地図＞を発表している（**図１**）[1]。この図は、今日的状況を見事に予見していただけでなく、次なる変化の過程に向けた思考の呼び水としても示唆に富む図である。

本稿は、＜逆さ日本地図 2000年代＞の農山漁村地域に着目し、一次産業空間（生業と生活を包含する空間）の持続性を見据えた次なるあり方に向け、３つの視点場を私論として準備してみたい。

●魚が食べられなくなる日：一次産業の減退

農山漁村は最先端地域である。50年前から少子化・高齢化・人口流出を経験しながら獲得してきた多くの取り組みの蓄積がある。空き家のリノベーションから維持管理、ゲストハウス運用、遊休地の有効利用に向けた取り組み、離島への荷物のドローン郵送実装に向けた実験など、都市で社会問題化し、取り組みがなされる概ね30年先取りで先進的な取り組みが行われてきたと言える。様々な生活課題を抱えながらも一定の生活水準や地域的な社会を維持し続けている。しかし、現実問題として農林漁業（地域経済）の衰退が続いている。筆者は、多くの日本人の好む魚介類を当たり前に食べられなくなる日が来る危機感を抱いている。例えば、昭和40年の魚介類の自給率は、110%であったが、令和元年度は54%にまで落ち込んでいる。これは、漁業従事者数減による影響が大きく、さらに漁業従事者の平均年齢は、56.7歳である[2]。日本の自給率は、平成５年からほぼ変わらず38%である。都市部で消費される資源の多くは農山漁村との連関の中で成立しているという当たり前の事を今一度再認識し、都市と農山漁村の問題を区分するのではなく、地続きの問題として受け止めた上で、都市農山漁村の横断的な取り組みが求められる。

■１．地方創生と一次産業空間

2014年に「まち・ひと・しごと創生本部」が創設され、地方創生として農山漁村の活性化が国の重要課題として取り組まれてきた。2020年度は、各自治体の第二期総合戦略にもとづき「関係人口」の創出・拡大の１年目であったが、交流を軸とする方針に大きなブレーキがかかった。一方、コロナ禍でJAグループ兵庫では2020年４～６月の農業への求職の問い合わせが前年同月比の90倍、関連する求人サイト[3]への登録も前年比２倍となった。コロナ前・後の上記地方創生の動きと、コロナ禍における食の現場である農業や生産に関心を持った都市住民が増えたと推察できる。しかし、この一次産業に対する気運を受け止める具体的な施策は地方創

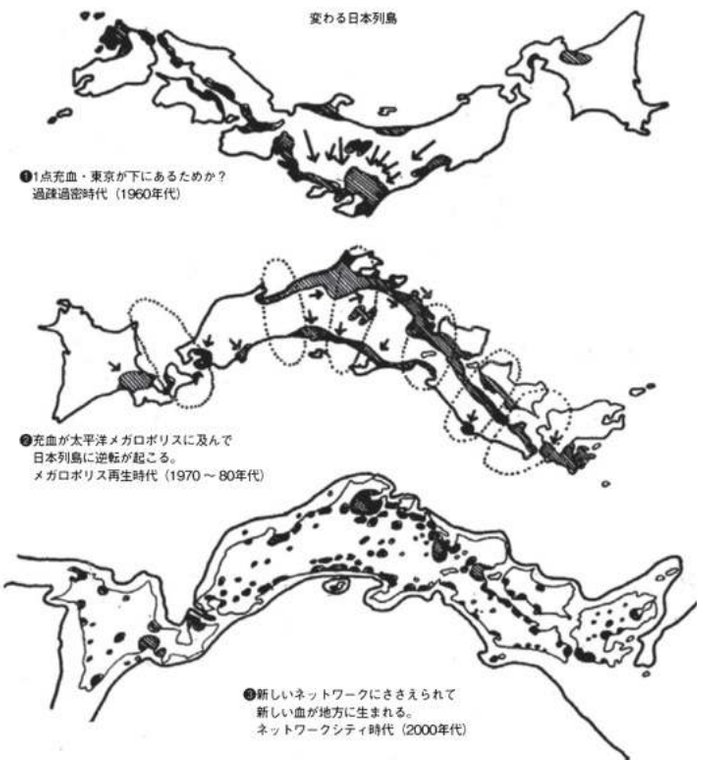


図１　早稲田大学グループ［21世紀の日本］，1970より

生事業のKPIに存在しない。特区や規制緩和措置や各省庁分野での一次産業従事者雇用に向けた施策は存在する。しかし、地方創生のゴールを「人口減少を克服し、地域経済を活性化する」[4] ことになぞらえた時、「関係人口」を軸としながらも、一次産業の持続性を踏まえ、一次産業従事と直接的に結びつけた仕組みが求められる。地域経済としての側面も含め、農山漁村における営みは、脈々と受け継がれてきた相互扶助やコミュニティ、国土保全・災害の未然防止や自然保全、ひいては景観形成や地域固有の文化伝承の維持等にも繋がる多面的な機能を有する。これらの根幹が一次産業である事を再確認した視点場で地方創生事業の着地が必要だと認識している。

■2．一次産業まちづくり

筆者は、生き生きとした生活空間・そこに住む暮らしの日常性を一次産業から思考しながら持続性の担保するまちづくりに向けた活動を「一次産業まちづくり」と定義し、活動を行っている。地方創生の追い風を活用しながら地域の一次産業空間のあり方を思案する為の手がかりとしてもモデルである（**図2**）。

現在、地域おこし協力隊や二地域居住、空き家バンクや六次産業化など、多様な取り組みがなされている。しかし、一次産業から立脚したまちづくりの実践はまだまだ少ない状況である。現在、一次産業従事者減に伴う空き既存インフラ（耕作放棄地、空漁船…）を活用した継業や新規事業など多様な就業形態がみられる。多様な人材を地域に確保していく為にも「つくる・とる・そだてる」と合わせた一次産業インフラを活用した兼業形態を推進していく仕組みづくりも重要となる。

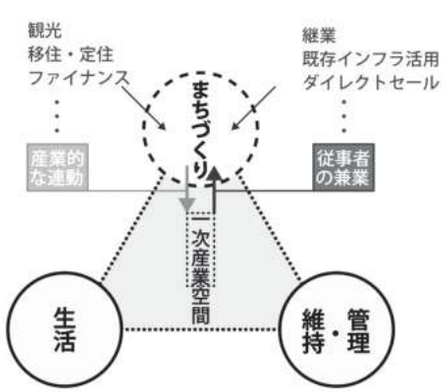


図2　一次産業まちづくりモデル

さらに長期的な時間の射程距離から地域を考える際、観光・移住・定住などを一次産業と連動させながら、既存の地域コミュニティを活かした「まちづくり会社」などの設立も重要である。まとまりある経営形態を地域の軸とすることで、既存の一次産業を地域全体で活かせるだけでなく、新たな雇用の創出を生み出す機会となる。これまでの農山漁村は、密度高い地縁・血縁によって、やや排他的側面を伴いながら一次産業と地域運営がなされてきた。縮小しつつある地域の既存の資源を活用し、生業と生活だけでなく、地域外からの関係性を能動的に創り出した仕組みを構築し、地域運営をも含めた再編のタイミングであると考える。

■3．一次産業空間と建築

地域の再編に伴い、一次産業空間における建築の役割が求められている。筆者の経験から想像し得る今後の一次産業空間は、今後様々な機能と複合化し、地域におけるセルフマネジメントによる公共・共有（入会地含）空間の活用が進むと推察する。行政施設や公民館教育施設、農協・漁協施設、高齢者福祉施設、飲食店など、これまで機能が分かれていたものが、人口減による維持・管理費用の削減と、複合化による利便性、多世代の交流、ITツールの発展など、様々な要因による複合化の流れは、今後も加速せざるを得ないとの見方である。特に一次産業に関する施設は、従事者の聖域として担保されてきた側面もあるが、生活と生業が近い関係にある中で、魚を獲るだけ、農作物を育てるだけでない一次産業と生活機能を兼ね、新たな地域経済を創出する六次産業化の流れもより重要となる。

これら複合化の動きは地域再編の契機となり、建築形式やその空間の質によって規定されるところも大きい。そこには地域に即した空間によって解かれていくことも併せて求められる。さらに、一貫した職住一体の暮らしのあり方は、コロナ禍における都市部における職住一体の働き方への知見を見出す手がかりとなる事も期待できる。生活と生業に関する施設、そして、地域外と繋がる機能を備えた空間は、新たな地域におけるまちづくりの資源と捉えることができるだけでなく、今日的な時代に呼応した新たな建築形式をも創り出す契機となるかもしれない。

■まとめ

一次産業空間は、生産と生活の仕組みが複層的に重なりながら生活空間として形成されている。生業に呼応した民家形式や路地、祭祀などの日常の暮らしと営みが一次産業から立脚した総体として滲み出している。さて、新しい人が入ってくるとすれば、地域のコミュニティーを維持させるための新たな仕組みも重要になってくる。農村漁村に古くからある知識を収集して体系化し、新しい住民や協力者が意味を理解できるよう再構築することは特に重要な作業となる。資源の管理や配分ルールの考え方、更には視点場を変え、自然環境を保全する態度など、生かすべき蓄積された知恵は多く存在し、この知恵を採取・記録し、再構築する作業を通した仕組みも必要となる。

現在の農山漁村のおかれた状況は、新たな暮らしのあり方を一次産業空間に能動的に見出すこと、見出さねばならない状況である。そして、一次産業空間を再起動し、これらの更新手続きを可能にすることができるのは、大局的な視点場と現場を牽引できる専門性を持つ建築分野であると確信している。わずかな経験から大局的な視点場からの私見を述べたが、農山漁村においては、常に地域固有解でしか解けないと筆者は考える。「方法を場所に押し付けない、場所から方法を見つけ出す」吉阪隆正の言葉で結びとする。

（しもだ　もとき）

注釈

1）吉阪隆正：「生活とかたち－有形学」，21世紀の日本列島像・ピラミッドから網の目へ，旺文社，1980
2）水産庁：我が国水産業の現状と課題，2017
3）日本農業新聞：2020年７月１日記事
4）牧瀬稔：あなたの街の地方創生は順調ですか，自治体通信online，2020

参考文献

1）藤山浩：田園回帰１%戦略 地元に人と仕事を取り戻す，農山漁村文化協会，2015
2）小田切徳美，橋口卓也：内発的農村発展論－理論と実践，農林統計出版，2018
3）小田切徳美，尾原浩子：農山村からの地方創生，筑摩書房，2018

各論 5

コロナ禍で気づく音のデザイン

京都精華大学
ポピュラーカルチャー学部
（音楽コース）
教授

小松正史

1971年、京都府宮津市生まれ。大阪大学大学院工学研究科博士後期課程（環境工学専攻）修了。博士（工学）。環境音楽家・ピアニスト・音育家。専門は音響心理学。環境音楽を制作。公共空間の音環境デザインを行う。主著に『人と空間が生きる音デザイン』、『耳トレ！』シリーズがある。

■非常事態宣言後の音環境

新型コロナウィルス感染症（COVD-19）の影響は、これまでの社会にあった常識を根本から覆し、私たちは、新たな生活様式に対応せざるを得なくなった。都市や生活のデザインをゼロから考え直す契機として、「音」の側面から論じてみたい。

2020年４月７日に日本政府から発令された「非常事態宣言（緊急事態宣言）」後、私の住む京都で急激な音環境の変化が現れた。顕著なのは、車やバイクなどの交通騒音が減ったこと（**写真１**）。日中の計測（市内中心部の烏丸御池交差点）においては、平均すると10～15dBも減少した（70dB→60～55dB程度）。３ランク程度の心理的減少レベルである。「かなりうるさい」から「少しうるさい」といった程度の変化である。



写真１　自粛時の御池通

さらに、外国人観光客をはじめとする来訪者の音も激減した。賑やかな喋り声、足音、キャリーケースの移動音など、オーバーツーリズム気味だった京都の主要観光地から、そうした音が消失した。京都の中心部に住んで20年経つが、これほどの静けさを体験したのは初めてのこと。その時期は、一般市民の活動も自粛が続いていた。その後、緊急事態宣言が解除された５月下旬以降は、徐々に街はふだんの賑わいに戻りつつあった。

■海外でも騒音が減少

他の都市ではどうだろうか。フランスのトゥルーズ大学の地理学者・サミュエル・シャレア（Samuel Challeat）氏は、外出制限期間中の都市騒音を計測するプロジェクトを立ち上げた。６月中旬にパリ市内で音響測定機器でデータを収集した結果は、すべての箇所で騒音レベルが減少。環境騒音公害が90%も減った箇所があったという。

世界保健機関（WHO）では、騒音公害を、大気汚染に次いで２番目に危険度の高い環境リスク要因としている。パリは世界で３番目に騒音公害がひどい都市との報告がある。そのような中で、コロナ禍がもたらした人間活動の制限により、人間の出す活動音が減少したことは、思いもかけない変化を生んだ。

■人工音と自然音の逆転現象

音響生態学者のバーニー・クラウスは、地球上にある音環境を大きく３種類に分類している。「ジオフォニー（geophony：非生物による自然音／地形由来の音）」「バイオフォニー（biophony：人間以外の野生生物音／生物由来の音）」「アンソロフォニー（anthrophony：人間が出している音／人工音）」である。コロナ禍によって、アンソロフォニーが減ったと解釈できるだろう。

私の自宅は大通り沿いに近い場所に位置するが、非常事態宣言時には、鳥の声や木々の葉擦れ音がひときわ多く聞かれた。単に自然音が多く出現したというよりも、周囲の暗騒音（背景にある交通騒音など）が減ることで、ジオフォニーとバイオフォニーが際立って聞かれたと解釈できるだろう。

■テレワーク時代の新たな騒音問題

その半面、集合住宅を中心に、外出規制によるテレワーク（在宅勤務）によって、生活騒音のトラブルが激増している。警視庁によると、３～４月は騒音関連の110番通報が前年に比べて４割近くも増加しているという（2020年４月の騒音に関する苦情の通報は１万7287件と、前年の同じ時期より4773件、38％増加）。

自宅で過ごす時間が長くなる中で起きる生活騒音は、「巣ごもり騒音」と呼ばれている。私が所属する大学でも遠隔授業を余儀なくされた。ゼミ生とはPCを使ったビデオ会議システムなどで通信している。自宅で声を出したりスピーカで長時間にわたり音が出力される生活を送っている。２月下旬～６月上旬までは、小学校に在籍する息子が日中家にいる状態であった。集合住宅であるため、隣家に音の気づかいをすることが、若干のストレスになっていた。

■ソーシャルディスタンスで会話が困難

さらに日常生活でも、音による深刻な問題が

発生している。人と人のコミュニケーションに音による障害が出始めていること。自宅から一歩外に出れば、ソーシャルディスタンス（社会的距離戦略）とマスク着用が基本。場所によっては、感染対策用のビニールカーテンやアクリルパーテーションなどが設置され、これまでの円滑な会話が大変しづらくなっている。

聴覚に問題のない人であっても、マスクとパーテーション越しに会話をすれば、人の話を正確に聞くことが難しい。とりわけ周囲がうるさい公共空間だと、聞き取りづらくなる。軽度難聴の人であれば、中度難聴のレベルの聞こえにくさと同じとの報告もある。

相手との距離が２倍になると、声の大きさはおよそ４分の１になる。マスクを着用すると、声が小さくなるばかりでなく、音量の小さい子音（しいん）が聞こえにくくなり、正確さを欠いた声の認識になってしまう。さらに、マスクやビニールカーテン越しになると、人の表情もつかみづらくなる。人は相手の声だけで意味を認識しているのでない。晴眼者であれば、相手の口元を見ながら、音としての声の意味を補完させている。聴覚障害者であればなおさらである。

■コロナ禍時代の音デザイン

私の専門は音響心理学（環境心理学）で、音デザインのアクション・リサーチを行っている。そこで重要になるのが「音のデザインの方法」。音のデザインを要約すれば、「心のデザイン」である。音は目に見えないが、心の中に直接作用する。空間の音に手を加えることは、その場所にいる人びとの脳を、間接的に触るようなもの。デリケートな行為であり、未知なる可能性を秘めている。

音のデザインは３つの手順を経る（**図-１**）。まずは「音をへらす＝マイナスの音デザイン」。不快な音を出す音源を遠ざけたり、目立たなくする段階である。コロナ禍で考えてみると、人の会話を阻害する騒音源を再配置することが該当する。

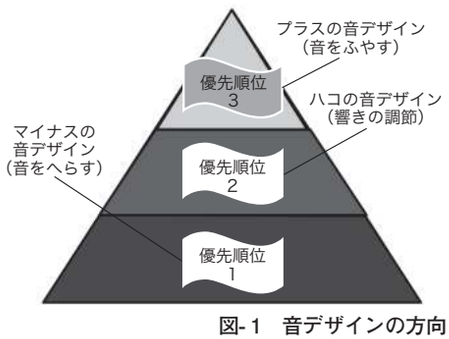


図-１　音デザインの方向

続いては「響きをつくる＝ハコの音デザイン」。おもに空間の内装に着目し、響き方をコントロールする段階である。これまでは、会話を聞こえやすくする空間をつくるために、吸音材を多用していた。コロナ禍後は、会話が吸音されすぎないように、内装の材料を再検討する必要があるだろう。

最後は「音をつくる＝プラスの音デザイン」。元々の空間に、新たな音を導入する段階である。世の中の音デザインといえば、スピーカを使ったプラスの音デザインが主流をなしている。ただ、プラスのデザインはマストではない。しかるべき理由があってはじめて、実行に移すべきである。

■会話がスムーズにできる環境に

私が思うに、コロナ禍後はプラスの音デザインの領域が多くのカギを握っているのではないかと感じる。先述の「会話がしづらい環境」を補完する手段として、小型の拡声器や集音器を使って、スムーズに会話が行えるプラスの音デザインを構築すべきではないか。

ただ、機械さえあればあとは知らない、という態度はよくない。多くの公共空間で「会話をしやすくする音環境」を提供するとともに、人々のサポートも急務ではないだろうか。

さらに重要なことは、音デザインは物理的な響きの改良に留まるべきではない。人と人との関係性が空間にまずあって、それを生かすカタチで物理的な空間をしつらえるスタンスが大切である。ソーシャルディスタンスという言葉は皮肉である。本来コロナウィルスの感染防止をするのであれば、物理的な距離を置きさえすればよい。つまりは、フィジカルディスタンスである。それがいつの間にか、社会的（人と人との関係性）な距離も広げてしまっている。このボタンの掛け違いの原因が何なのかを、真剣に考える必要がある。

■リアルとバーチャルの並存

サウンドスケープ（音風景）分野の用語に「音響共同体」がある。地域が「音」でまとまりをなしているコミュニティを意味する。例えば、寺の梵鐘が聞こえる空間的範囲が、人と人との関係性が保たれる範囲とイコールである、という考え方である。現在では、地域をひとまとまりにするリアルな音が極端に減っている。その半面、メディアを介したバーチャルな心理空間（SNSやゲーム環境など）が台頭している。現代人はリアルな空間にいながら、ネット世界につながる架空環境に心がもっていかれているのである。

この現象は「断片聴取」と呼ばれる。コロナ禍でさまざまな空間が、まさに音環境を断片聴取せざるを得ない空間に急変しているのだ。否定するつもりはないが、リアルな空間で聞こえる音の存在と並列した音環境の維持が大切ではないだろうか。人は、リアルな空間でつながることによってはじめて生きる実感を得て、ホンモノの喜びを感じる動物なのである。

コロナ禍の到来で、誰しもが「目に見えない何かによって引き起こされたネガティブな心理状態」になっている。つまりは、生物として実感や手応えのある環境から乖離しつつある。リアルな空間に居合わせる隣近所の人たちとの関係性がうまくいかないことで、大きな問題が発生するようにもなった。

極論を言えば、この問題はコロナ禍に始まったことではない。これまでの都市や地域に「元々」存在していたコミュニティの問題が、コロナ禍を機に浮上したまでのことである。

■当たり前の音環境を見直そう

その解決法は何があるだろうか。私は２つを考える。一つは、リアルな空間に住まう私たちが、隣人の存在を音を通じて感じ、互いを配慮しあう余裕をもつことである。もう一つは、じぶんの心の状態を、音によって調律（耳のトレーニング）をすることである。前者については、毎日のあいさつといった些細なことから音によるコミュケーションを増やすこと。後者については、日々の生活の中で、地域の音を実際の耳を使って感じることが、まずは有効ではないか。

私たちと地域は、音でつながれている。この「当たり前」の現象を、コロナ禍を契機にした音環境の変化を自覚するだけでも、生活環境は少しずつ好転するのではないだろうか。

（こまつ　まさふみ）

各論 6

在宅勤務のプロセスと課題

～一人暮らし～

独立行政法人都市再生機構
主査

林　雄太

1986年　兵庫県生まれ
2010年　京都工芸繊維大学工芸科学部造形工学課程　卒業
2010年　独立行政法人都市再生機構　入社
現職
集合住宅、災害公営住宅の設計積算、団地リノベーション、都市再生の業務を経験
任意活動として、団地の屋外空間の魅力を発信するイベント“DANCHI Caravan”の企画運営に携わる。
2018年　首都大学東京都市環境科学研究科都市システム科学域修士課程修了

本稿の内容についての責任は筆者にあり、筆者の所属する組織の見解ではないことを申し添える。

■初めに

2020年初頭よりコロナウイルスが世界中で流行し、私の勤務先では３月より出勤者数を制限し始めた。私は異動で東京から大阪への転勤が決まっており、緊急事態宣言の前日（2020.4.6）に新幹線で移動した。いつもは賑わっている新大阪駅の閑散とした状況に不気味さを感じた。



異動と同時に在宅勤務となり、新生活と共に在宅勤務が始まった。今般、コロナをきっかけに突如始まった在宅勤務の環境整備のプロセスを記録し、気づいたこととテレワークの展望について私見を記載する。

■在宅勤務の環境整備のプロセス

●筆者のデータ

・個人データ：30代　男性　未婚　一人暮らし
・住まいデータ：公社賃貸　2001年築　RC造　2F　1DK　41.40m²

●プロセス（図１）

【フェーズ１　ーあるものをそのまま使うー】

子どもの頃から使用しているライティングにノートパソコンを置いて仕事することを試みた。私の仕事の性質上、ノートパソコンのディスプレイだけでは作業効率が悪いことを実感し、外付けディスプレイを設置することを決断。しかし、ライティングデスクではディスプレイの配置が不可であった。

【フェーズ２　ーディスプレイの増設ー】

外付けディスプレイを設置するため、折り畳みデスクを配置。居住空間を圧迫することになったが、作業効率は向上した。デスクを移動させて、DKと南側和室での作業環境を比較した。DKは共用廊下側の小窓のみの行燈居室なので、日中作業をしていても日光が感じられず、一日中照明をつける必要があった。一方で、日中も静かで落ち着いて仕事を行える環境であった。南側和室は、日中日光が入るので明るい環境だったが、ディスプレイに反射して作業しづらいことがあった。南側和室を寝室として利用しており、デスクとディスプレイを置いておくことに防災の観点で懸念があったため、最終的にDKにデスクを配置することとした。その際に、DKと和室の間の襖を取り除き、約17畳のワンルームとすることで、DKでも日光を感じられる間取りとした。

【フェーズ３　ー腰痛の発生からのスタンディングデスクー】

在宅勤務を始めて１ヶ月経過する頃、長時間の着座により腰痛が生じ始めた。通勤の移動が無くなったため、日常的な運動量が減少していたのだろう。座ることが辛く感じられたので、スタンディングで作業できる環境を検討した。市販されているスタンディングデスクや天板の高さを調整する台はオフィス利用を意識したデザインだったため、自宅にある物で高さを調整することとした。スタンディング作業する際の天板の高さはWEBサイトで調べることができた（参考：https://www.bauhutte.jp/bauhutte-life/standing-desk-height/）。筆者は身長170.5cmなので、キーボード作業の適正高さは990mmであった。デスクの高さは700mmなので、上にコンテナボックスを置き、DIYの端材で残っていた合板をカットした天板を置くことで適正高さとなった。



立って作業を使用することで腰痛は改善されたが、終日立ちっぱなしだと足の疲労が溜り、座ることの必要性に気が付いた。

【フェーズ４　ーオフィスチェアの導入ー】

試行錯誤の結果、オフィスチェアを購入することとした。１人暮らしの部屋にオフィスチェアを導入すると居住スペースを圧迫するため、購入を躊躇っていたが、結果的に快適に在宅勤務が行える環境が整った。



■在宅勤務を経験して発見した住宅の課題

従来の住宅設計（特に賃貸住宅）では、住宅で働くことは想定されていないため、在宅勤務を行うためには、住宅に“働く場所”を新たに導入する必要があった。意図的に書斎スペース等を計画しているプランであれば、働く場所に転用することが容易だったかもしれないが、賃貸住宅の場合、面積が家賃に影響するため必要最低限の広さで住んでいることが多い。特に都心部での一人暮らしでは、25m²程度のワンルームマンションに住んでいる人もいる。この様な小さな住宅の場合、新たに仕事場を住宅に導入することは困難である。筆者の自宅は、一人暮らしの住宅としては広めの1DK（41m²）なのでスペースには余裕があったが、どこに働く場所を設けるべきか悩んだ。初期は仕事とプライベートの切り替えが難しく感じ、これまで出勤の移動が仕事とプライベートの切り替えの役割を担っていたことを実感した。結果的に筆者は住宅内で仕事とプライベートを完全に切り分けるのではなく、生活の一部として捉えることとした。居室を分けていた襖を取り除き、大きな1R（約17畳）にすることで、空間的にも心理的にも生活と仕事が一体となり、生活の一部として仕事する環境を整備した。

■在宅勤務でよかったこと

１人暮らしでは小修理が発生した場合、在宅で対応する必要があったので、これまでは対応できる日が休日等に限られていた。今回筆者は引越直後だったこともあり、複数の小修理に対応する必要があったが、在宅勤務だったため、平日に対応することが可能であった。小修理中も仕事を行うことができた。これまで、居住中物件の小修理する場合、居住者とのスケジュール調整が難しいこともあったが、在宅勤務が一般化することで、従来より居住者が柔軟に対応できるだろう。

■将来のテレワークに対する展望

今回のコロナ禍では、感染予防の観点から在宅勤務が多くの企業で行われた。将来的にコロナが収束した後、在宅に限らないテレワークが一般化することが想像される。

既に、働く場所を計画した間取りの提案は行われているが、筆者は住宅内の環境を充実させるだけではなく、エリアで働きやすい環境を整備することが重要と考える。例えば、地域のコワーキングスペースや仕事ができるカフェ等の整備である。何故ならば、テレワークが一般化しても、人々が街に出て人と出会い交流することは必要だからである。一人暮らしの場合、自宅だけで仕事を行っていると、外出の機会が無くなり、人と全く会わないで生活することも可能である。しかし、今回実感したのは、人との接点は必要であり、テレワークが一般的になっても変わらない。仕事は自宅ですべきでないということでは無く、自宅以外でも仕事ができる場所が近くにあることで、気持ちの切り替えや、地域の人とのコミュニケーション、効率的な働き方を促進できるという事である。既存の住宅の間取りの中に無理に仕事専用の場所を作るのではなく、住宅内の働く場所は生活の一部として整備し、仕事専用の場所は住宅の外に整備するイメージである。（図２）

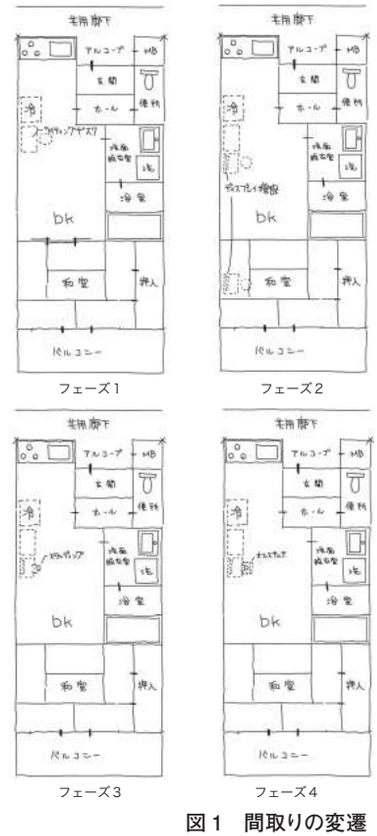


図１　間取りの変遷

■約半年間在宅勤務を行い感じた事

一人暮らしの在宅勤務により人と接する機会が極端に減少した。家族がいる場合少なくとも家族との会話があるが、一人暮らしの場合、誰とも話をしない日が数日間続くことがあった。コロナ禍という緊張感があるので、耐えられた部分もあるが、人とのつながりが無くなることの心理的な辛さを今回実感した。隣接する公園で走ったり、運動したりすることで気分転換を行っていたが、常に人との距離を意識し、話しかけることも躊躇してしまう状況が続くことは辛かった。偶然の出会いや些細なコミュニケーションは社会生活を行う上で必要であり、在宅勤務やテレワークが一般的になったとき、今まで以上に個人が意識して接点を持つ努力が必要と感じた。

（はやし　ゆうた）

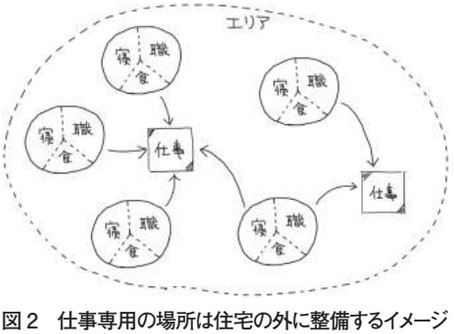


図２　仕事専用の場所は住宅の外に整備するイメージ

編集後記　コロナ禍から見えたこと、これからの社会的危機を超える建築と社会を考える

計画系分科会

本特集に関わった編集委員からコロナ禍から見えたことやコロナに限らず、今後、懸念されるこれからの社会的危機を建築と社会はどのように、しなやかに超えるか。特集テーマの「社会的危機を超える」に至るまで、編集委員の皆さんと議論した内容やまちの様子などを紹介させていただき「編集後記」とさせていただきます。なお、掲載の写真・図版の選定は各筆者によるものです。（編集幹事：田中直人）

レジリエンスな社会の復興■鈴木克彦



©NASA

コロナ禍が一向に治まる気配を見せない。我が国はこれまで大震災や風水害に加えて原発事故、経済的ショックなど様々な社会的危機に立ち向かってきたが、こうした時には潜在的な社会問題が顕在化してくるものである。

今回の特集企画にあたっては、コロナ禍に的を絞るのか、より広義に社会的危機として社会のあり方を論じるのか、編集委員の間で十分なコンセンサスがないまま進められた。幸いにも執筆者の方々からは、将来の社会像のあり方について様々な論点から貴重な提言をいただいた。想定外の危機を防御することは現実的には不可能であり、むしろ被害リスクを最小限にしつつその後の回復力（Resilience）を重視する施策が重要であることを再認識させていただいた。こうした概念は水害を防ぐ都市再生でも注目されており、その代表的なプロジェクトがニューヨークの「The BIG U プロジェクト」である。コロナ禍の影響により、今後ますます３密を避けるためのコミュニケーションの合理化が加速するであろうが、究極にはリアルな空間で養われたコミュニティの力が社会を救うことになろう。これまで立ち向かってきた多難な社会的危機からの復興の姿がそれを物語っている。

コロナ禍の真っ最中、民間による商業宇宙船では初となるクルードラゴン１号機が11月16日にケネディ宇宙センターから打ち上げられた。この宇宙船は、コロナ禍による困難や苦境から世界が回復することを願って「レジリエンス」と名付けられた。現在は、一刻も早くコロナ禍を克服するよう国際宇宙ステーションから地球を見守っている。

大阪環状線を独占した日■松田奈緒子

2020年３月９日、ベルリンに発とうとしていた。当日朝まで迷っていたが、結局、断念した。旅行代理店からの代金は戻ってこなかった。それから次々に色々とあったが、一番印象に残っているのは、GWのある一日。健康のためとひたすら歩き、帰りに疲れて近くの駅から電車に乗ったとき、車両に誰もいなかったことだ。思えば、大阪の街には、ほんの少し前まで外国人であふれ、ホテルやドラッグストアの建設ラッシュだったのに、環状線に人が全くというほどいないのは衝撃的だった。活気を通り越して喧騒すら感じていたのが一転、この静寂。丁度いい「あいだ」はないのだろうかと、都市の音環境に思いを巡らすきっかけとなった。

それでは、人は一日にどんな音を聞いているのだろう。ゼミ生の一人（大東市在中）に、聞こえてくる音を一日中記録してもらった。外出しづらい期間のため家の中に限定したのに、ノート９ページにびっしり！ さらにその68種類の音を、好ましいと思うかどうかで表に整理してもらった。好ましい音がこんなに少ないことにも驚かされた。

小松正史先生によると、コロナ禍で都市の騒音は減ったが、テレワークなど生活騒音によるトラブルが増えたという。音は一筋縄ではいかない。それでも、聞こえてくる音にただ受け身でいるのではく、能動的に感じ取ることで、隣人や地域とのかかわり方も変わっていくと、希望を示して下さっている。

さて、私自身は、日々きちんと音と向き合えているのだろうか？ 心の余裕のなさを反省するばかりである。

好ましい音（7）
・「ピヨピヨ」の鳥の鳴き声 ・「ピピピピ」の鳥の鳴き声 ・風で枝葉が揺れる音 ・ご飯が炊けた炊飯器の音 ・音楽の流れる音 ・ハサミで植物の茎を切る音 ・鈴の音
好ましくない音（35）
・車の走行音 ・自転車の鈴の音 ・虫の羽音 ・扉が閉まる音 ・冷蔵庫の機械音「ビーッ」 ・家の中で椅子をひく音 ・おばちゃんの咳 その他
どちらでもない音（26）
・「バックします。ご注意ください」の音声 ・車のロックを外す音「ピピッ」 ・猫の鳴き声 ・洗濯機の蓋を開ける音 ・学校のチャイム ・人の歩行音（外） その他

ゼミ生による自宅での音の記録（2020年６月３日）

新型コロナの教訓■守井　辰

2020年は新型コロナの一年だった。オリンピックは延期になり、各地の伝統行事は中止されるなど、予想もしなかった事が現実となり、当たり前と思っていたことは必ずしも当たり前ではないことを知らされた。社会的危機とつきあいながら暮らしていくため、行動や意識、価値観等を見直すことが必要になった。

2020年がこんな一年だったからこそ、変容を求められた中での我々の思考のプロセスを残しておくべきだと思いながら、2021年１月号の特集テーマを委員会で議論した。新型コロナを扱わない選択肢はないと考えていた。

会議の結果、「社会的危機」が特集テーマとなった。多様な論点を集めるよう心掛けたが、読者の皆様はどう感じられただろうか。阪神・淡路大震災や東日本大震災、そして今回の新型コロナ。社会的危機は、我々が見過ごしがちな本質的な問題を再認識させる契機でもある。新型コロナの感染が続こうと、我々は都市を諦めないし、集まって時間と空間を共有する行為を捨てることはない筈だ。社会的危機から多くのことを学び、そして気づいて、思考と行動をアレンジすることを続けていくことが問われているのだと強く感じている。

見えないコロナを市民の心へ見える化■田中直人



かつて通天閣界隈を泳いでいた大フグの看板

通天閣や万博記念公園の「太陽の塔」などでは、新型コロナウイルス感染拡大に伴う休業や外出自粛の要請解除に向けた府独自の基準の達成状況を、赤・黄・緑の３色で色分け、ライトアップしていた。赤色は警戒レベル、黄色は注意喚起レベル、緑色は基準内を意味している。解除後は黄色から緑色になり、警戒の必要な状況に戻れば赤色に点灯する。一日も早いまちの復活を願う希望の灯である。シンボリックな建築物を社会的危機に面する市民への公共的なサインとして活用する試みとして注目したい。
通天閣は大阪を代表する歓楽街、新世界にある。しかし、コロナ禍の波はすっかりまちの様子を変えてしまった。人影もまばらな店先の上を泳いでいた「づぼらや」のフグの看板もなくなったとか。コロナの恐怖でどこかへ消えてしまったのかな。感染から逃れ、「命」を守るか、インバウンドも含む集客の賑わいで「金」をとるか、大きな選択を迫られている。
街中では感染拡大防止のためのマスク着用は、すっかり個性的なファッションとして定着、行列やエレベーター内でのソーシャルディスタンス確保を促すサインなども社会全体の一員として一人ひとりの心に訴える見える化に役立っている。しかし、ややもすれば当初の危機感を忘れ、意識が薄くなる可能性がある。ここで、コロナに限らず、いつなんどき到来するかもしれない別の危機に対しても油断してはならない。忘れたころに来るのが社会的な危機の方程式である。

人が集まる意義■林　雄太

コロナ流行が始まって約１年経過するが、人が集まる意義を感じている。在宅勤務が始まり、１人で周りに誰もいない環境で仕事をする機会が増えた。これまでは当たり前に会社に出社し、周りの音や話し声を聞きながら仕事しており、時には雑音に感じていたが、このような雑音が重要な情報源だったことに気づいた。各論で牧教授が述べられていたが、今回のコロナによって、働く環境という点で社会のトレンドが加速した。オンライン環境で代替できるものが意外と多くあることを発見した１年だったが、一方、わざわざ移動し、空間を共にしながら交流する価値も実感した。今後もwithコロナの時代は続くが、ある程度終息したからといって、従来の働き方に逆戻りすることは無いと想像する。人との交流が気兼ねなくできるようになった時、わざわざ移動して人と会うことに大きな価値が生まれるだろう。その際に都市や建築の空間的魅力は重要度を増すように思う。
しばらく警戒する日々が続きますが、みなさんご自愛ください。


コロナ禍の折に開園した「こども本の森 中之島」。12月現在も予約制で思い立った時に入れないが、こういう建築には訪れる価値のある空間的な力があるのではないかと思う

未知の危機に備えつつ新しい一年を■吉村英祐


新型コロナ第二波で昼食時間帯でも閑散としている飲食店（2020年８月27日・東京）。賑わいはいつ戻るのか？

年末恒例の『2020 ユーキャン新語・流行語大賞』（現代用語の基礎知識選）が12月１日に発表され、「３密」が“年間大賞”に選ばれましたが、トップ10のうち、「３密」を含めて「アベノマスク」「アマビエ」「オンライン○○」「GoToキャンペーン」「ソロキャンプ」の６語が、新型コロナウイルス関連でした。昨年度の“年間大賞”が「ONE TEAM（ワンチーム）」であったことが、今となっては夢のようです。
「距離の壁を越え、つながりを再発見する」（御手洗氏）、「災害は、近い将来起こることを顕在化させる」（牧氏）、「人類の歴史は集団形成の高度な仕組みの発展史」（奥山氏）、「自発的、積極的な他の市民ための空間が都市には不可欠」（星氏）、「地域の再編に伴い、一次産業空間における建築の役割が求められている」（下田氏）、「人は、リアルな空間でつながることによってはじめて生きる実感を得て、ホンモノの喜びを感じる」（小松氏）、「在宅勤務やテレワークが一般的になったとき、今まで以上に個人が意識して接点を持つ努力が必要」（林氏）。
これらは各論を通読し、それぞれから私がもっとも気になる一節を抜き出したものです。いずれも、新型コロナ禍で混乱が続く社会状況をふまえて書かれたものですが、今後社会が直面するであろう未知の危機に、どのように対応し乗り越えるべきかについて、建築と社会の新たな関係を再考するうえで、きわめて示唆に富む内容であると思います。
ご多忙のなか、ご寄稿いただいた方々に、紙面をお借りして感謝申し上げます。

601

法令コーナー

都市再生特別措置法等の一部を改正する法律

（令和２年法律第43号）

国土交通省都市局まちづくり推進課
国土交通省都市局都市計画課

はじめに

令和２年１月に開会した第201回国会において、安全で魅力的なまちづくりを推進するための「都市再生特別措置法等の一部を改正する法律（令和２年法律第43号。以下「改正法」という。）」が成立し、同年６月10日に公布された。

本稿では、改正法による制度改正の概要について、「安全なまちづくり」と「魅力的なまちづくり」の２つの部分に分けて紹介する。

安全なまちづくり

■改正概要

○災害ハザードエリアにおける開発抑制

近年の自然災害の頻発・激甚化を踏まえ、災害発生時に自己の業務の用に供する施設の来訪者、従業員、宿泊客等の利用者の生命・身体に直接の被害が生じないよう、このような施設についても、他の施設と同様に災害レッドゾーンに立地することを原則として禁止することとした。

また、市街化調整区域は、市街化を抑制すべき区域であることから、原則として開発が規制されているが、市街地の隣接、近接する等の区域のうち、地方公共団体が条例で区域等を指定すれば、市街化区域と同様に開発が可能となる。

今般の法改正では、この手続きにより開発を可能とする場合であっても、災害の防止が図られるよう基準を設定することとした。

こうした都市計画法における取り組みに加え、コンパクトシティの取り組みにおいても、居住誘導区域外の災害ハザードエリアにおいて開発等を行おうとする事業者に対し勧告を行い、これに従わない場合には事業者名等を公表できることとした。

○災害ハザードエリアからの移転の促進

市町村が主体的に住民や施設の所有者等の意見を調整した上で、移転に関する計画を作成し、住民等の手続き等の代行等をできる制度を創設することとした。

具体的には、市町村が計画を公告することにより、計画に定めた所有権、賃借権等が設定され、または移転するとともに、計画に基づく権利設定を市町村が一括で登記することが可能となる。

○立地適正化計画における防災の主流化

改正法の趣旨を踏まえ、政令改正により、居住誘導区域から原則除外することとする区域に、土砂災害特別警戒区域、地すべり防止区域、急傾斜地崩壊危険区域といった災害レッドゾーンを追加することとした。

一方で、改正後も居住誘導区域内には土砂災害警戒区域、浸水想定区域等の災害イエローゾーン等、災害のおそれのある区域が含まれうることから、改正法において、居住誘導区域内等で市町村が行うハード・ソフトの防災対策（避難路、防災公園等の避難地、避難施設等の整備や警戒避難体制の確保等を想定）を定める「防災指針」を立地適正化計画の記載事項に位置づけることとした。

なお、防災指針に基づく特例制度として、宅地造成等規制法の特例制度及び土地区画整理事業の特例制度を創設した。

宅地造成等規制法の特例制度は、居住誘導区域内で市町村が行う対策事業を防災指針に位置付けた場合、当該市町村は宅地造成等規制法に基づき都道府県が行うとされている事務を実施することができることとなる。

また、土地区画整理事業の特例制度については、居住誘導区域内における洪水災害等の被害を防止・軽減することを目的とする土地区画整理事業を防災指針に位置付けることにより、災害ハザードエリアに存する住宅を防災措置が講じられた安全な土地に集約させることができることとなる。

魅力的なまちづくり

■改正概要

今回の改正法により、「居心地が良く歩きたくなる」まちなかの創出のため、市町村が作成するまちづくり計画に、官民一体となって交流・滞在空間を創出する取り組みを位置付けて、法律・予算・税制のパッケージによる支援を行うことで、集中的に推進することとした。

具体的には、予算の面では、官民の関係者によるまちづくりビジョンの策定や、市町村による車道の広場化などの空間整備に対する支援を行う。税制面では、民間事業者がオープンスペースの提供などを行った場合に固定資産税の軽減措置を講じることとし、改正法においては、こうした取り組みに対して特例措置等を講じることとした。

以下、その概要について紹介する。

まず、「居心地が良く歩きたくなる」まちなかづくりに取り組むエリア内においては、民間事業者等（土地の所有者等）が、市町村の取り組みと併せて交流・滞在空間を創出する「一体型滞在快適性等向上事業」を新たに位置付けた。

具体的には、行政による車道の一部広場化等の取り組みに併せて、民間事業者等が行うオープンスペースの提供、建物低層部のオープン化等による賑わい空間の創出といった取り組みを想定している。

このほか、以下の制度を創設した。

・民間事業者等が公園管理者と協定を締結して、都市公園にカフェ等を設置する制度
・駐車場の出入口をメインストリート側ではなく、反対側の道路に設けさせるなど、駐車場の出入口の設置を制限する制度　等

また、住民にとって暮らしやすい環境を整備し、都市の魅力を向上させるため、改正法では以下の措置を講じることとした。

○居住エリアにおける病院、店舗等の立地の促進（「居住環境向上用途誘導地区」制度の創設）

市町村が、都市計画において、居住誘導区域内に「居住環境向上用途誘導地区」を定めることにより、病院、店舗等の日常生活に必要な施設について容積率、用途制限の緩和を可能とすることで、これらの施設の立地を促進することとした。

○老朽化した都市インフラの計画的改修

都市インフラの計画的な改修を推進するため、市町村が立地適正化計画に都市インフラの改修事業を記載し、都道府県知事等の同意を得ることにより、都市計画税の充当を可能とする仕組みを創設した。

おわりに

改正法のうち、魅力的なまちづくりと、安全なまちづくりのうち防災指針に関する部分について、は昨年９月７日に施行されており、安全なまちづくりのうち開発許可関係の規定が令和４年４月１日に施行となる。また、居住誘導区域から災害レッドゾーンを原則除外することとする政令改正が令和３年10月１日に施行される。

改正法に基づく制度の活用を通じて、安全で魅力的なまちづくりが日本全国でより一層進むよう、引き続き取り組みを進めてまいりたい。

「再読 関西の建築」

29

Whityうめだ

設計：大建設計
施工：大林組

電　　気：栗原工業
空　　調：高砂熱学工業
給排水衛生：西原衛生工業所

（1987年７月号）

阿部文和

大阪歴史博物館
学芸員

所 在 地　大阪市北区小松原町梅田地下街
延床面積　18,945㎡
工　　期　1985年９月～1987年４月

■渋滞緩和への課題

水都大阪は淀川水系と大阪湾の豊かな水資源に恵まれ、日本の経済・物流の要所として栄えた。明治維新による諸藩の改革は大阪経済に大きな打撃を与えたが、大川沿いに造幣寮が設置されたのをさきがけに商工業都市としての道を歩みはじめる。また、これまでの水陸交通手段に加えて1874年５月に大阪と神戸を結ぶ鉄道が開通、２年後には大阪―京都間が開通する。初代大阪駅駅舎は赤レンガの２階建てで、当時はまだ郊外農地であった梅田が建設地となった。1906年に阪神電鉄が梅田に乗り入れ、さらにその４年後には箕面有馬鉄道（現・阪急電鉄）が梅田と宝塚間に開通してターミナルを形成する。こうした交通事情に加えて1925年の第２次大阪市域拡張により人口が増加、市内には路面電車が整備・充実していたが朝夕のラッシュ時に対応できず、深刻な交通渋滞が問題となった。このような事情を背景に新たな人の輸送方法として地下鉄建設（御堂筋線）が計画されたのである[1]。1933年にはまず梅田―心斎橋間が、35年には難波、38年には天王寺まで開通して市内の主要ターミナル梅田・難波・天王寺が南北に結ばれた。

地下鉄は地上の渋滞緩和に大いに役立ったが、それを上回る人口増加は戦後の経済復興で顕著となった。1956年の阪急前・阪神前では自動車９万台、歩行者32万人に達し、５年後にはさらに自動車1.6倍、歩行者は２倍以上に激増する[2]。梅田の交差点は東西南北からの交通が集中する場所であるが、駅前の信号機設置場所には歩行者の横断があり、路面横断をスムーズに流すために１分以上の自動車停滞時間が発生、渋滞が途切れることのない飽和状態にあった。渋滞緩和として建設された地下鉄御堂筋線も混雑は増すばかりであった。そこで新たな対応策として地下鉄四つ橋線と谷町線を御堂筋線のバイパス線として建設する計画がたてられたのである。計画当初の谷町線は天王寺―天満橋―梅田新道―阪急ビル西側―角田町を経て天六へ至る計画であったが、御堂筋線と並行する南北路線であるため工事の難航が予想されていた。そこで通過点を東に寄せて梅田新道から曽根崎警察署前、OS劇場前を経て天六へ至る現在の路線を設定し、地下鉄駅と地上との間に地下街を計画して同時施工する方針で進められた。

■ウメダ地下センターの開業

梅田に先行して大阪で最初に開業した地下街は難波であった。梅田は地下街建設の最有力地であったが、大阪最大のターミナルとなっていた梅田では工事も大規模にならざるを得ず、自動車と人の流れを遮断しての工事は不可能であった。また技術にも相当な困難が予想された。そこでまずは難波駅に地下街を建設して必要な技術を積み、梅田地下街建設に活かそうと考えたのである。こうして1957年に「ナンバ地下センター」が開業する。それまでの暗い地下のイメージを払拭する地下街の誕生は市民の意識を変え、キタにも地下街をという要望が高まった。市民の声の後押しもありナンバ地下センター開業から１年を待たずしてウメダ地下街計画は準備に入る。設計は大阪地下街株式会社と大阪建築事務所（現・大建設計）が担当し、大林組が請け負った[3]。

工事は1961年３月に起工、全体を６区に分けて開始された。地下を輻輳する上下水道幹線やガス、電話回線などの埋設物と地下水の処理に難航しながらの工事であった[4]。地下街の入店者募集は大変な人気で、締め切りまでに1000店舗以上の申し込みがあり最終的に186店の出店が決定した[5]。こうして着工から２年10か月後の1963年11月29日に開業、名称はナンバ地下センターと統一して「ウメダ地下センター」と正式決定した。初日は100万人が押し寄せる大盛況であったという。

施工面積は１万8000平方メートル（店舗面積は約8000平方メートル、道路面積は7000平方メートル）におよび、ナンバ地下センターの3.5倍、当時国内最大級の東京渋谷地下街の２倍という巨大な地下空間が誕生した。特に地下街の本質である道路は事前に通行者５万人にアンケートをおこない１時間当たりの通行量を算出して道路や階段の幅を決めている。出入口は周辺の既設ビルや計画中のビル地階など21か所に計画された[6]。

地下工事に際しては通路50メートル間隔



①ホワイティうめだストリート（『建築と社会』1987年７月号）

で消火栓を設置、自動スプリンクラーを併設して炭酸ガスボンベや火災報知機を要所に設けて火災に備えている。照明については１万8000本の蛍光灯で店舗を800ルクス、通路を500ルクスの明るさに設定している。内装はモダンを意識した白と黒を組み合わせたタイル貼り、天井光の反射効果もあって明るい地下世界をつくりだしている[7]。

雨に濡れない地下都市は大阪市の商業形態にも影響し、この頃から地上でもアーケードを設置する商店街が増えた。その後のウメダ地下センターは万国博覧会関連事業による地下鉄や幹線道路の工事にともない拡張（第２期工事）が行われ、新名所となる泉の広場が誕生することになるが、これについては後述する。

■梅田換気塔

地下の空気環境はナンバ地下センターの冷房設備の整備と換気設備の設置工事が困難であった経験を活かし、機械設備室と天井ダクトに十分な余裕を持たせて施工された。換気設備は路上外部から空気を取り入れて地下の空気を地上へと排気する強制通風式を採用。そのための機械装置は阪急百貨店うめだ本店と阪神百貨店、曽根崎警察署のデルタ地帯に設置され、地上の換気塔部分のデザインは建築家村野藤吾に依頼して設計された。計画当初は信号機や交通の見通しが悪くなるのではないかと批判的な意見が出たが、1963年11月には計画通り着工されて翌月に完成した。

換気塔は高い所で18メートルほどあるＡ基からＥ基までの５本で構成されるが、足元の一部は６本に分かれ、上部でも途中つながる有機的な造形である[8]。下地は鉄骨で組まれており、その上にステンレスの外装を施している。塔全体の柔らかな曲線が重厚な印象を和らげ、太陽光や夜のネオンを受けて１日を通じ様々な表情を見せる。現在の換気塔足元は空調の室外機置場となり植栽がそれらを隠すように取り囲んでいるが、建設当初は周囲に大小の噴水が設けられて今日以上にシンボリックな存在であった。

■ホワイティうめだへの再生

ウメダ地下センターの開業から20年が経過し、地上では周辺の商業施設や百貨店の改装が進んだことで地下街の陳腐化と老朽化が際立って時代遅れなイメージの低下がみられるようになった。ただし開業以降もウメダ地下センターでは部分的な改修は行われており、北端の星の広場改装ではヨーロッパ調からアメリカンな印象へとシフトを変えてプチ・シャンゼリゼを「プチ・シャン」に、星の広場を「プチ北広場」に改めてイメージアップが図られている[9]。しかし開業以来使い続けられてきた各通りについては設備改修を含め全面的な見直し時期が近付いていた。そこで1985年９月、初めに開業したエリア（第１期工事部分）の全面改装工事が起工する。

新しい時代に対応する地下街の形成と店づくりを基本戦略とし、大阪の玄関口という地の利を活かして活気ある地下空間が計画された。地下街全体は白色を基調とし、街全体の雰囲気は美しく若々しい華やかなムードに、各商店は個性的な店づくりを目指し、店舗コーナーや現在地が利用者によりわかりやすい計画としている。

以上の基本方針を軸に天井には防災と美観を考慮して曲面スリット付アルミスパンドレイル天井で、床面は菱形模様のテラゾータイル貼りに変更している。壁面については乳白色の磁器タイル仕上げ、独立柱はネオパリエ貼付となる。地上出入口の上屋はシンプルな総ガラス片流れ屋根としている。地下通路の照明については複雑な内部構造をわかりやすく提示するため、各通路に沿ったカラーライン照明および蛍光灯と水銀灯のスポット照明としている。対照的に憩いの広場については間接照明で曲面を演出するなど空間演出に工夫を凝らしている。

名称もそれまで親しまれてきた「地下センター」から一新して「Whityうめだ」（ホワイティうめだ）にリニューアルした。「ホワイティ（Whity）」とはホワイトシティ（White City）からの造語で、白を基調とした地下空間をイメージしたものである。

■設備更新とサイン計画

ホワイティうめだへの改修工事では開業以来使い続けてきた空調、電気、給排水、ガスなどの設備がより高性能なものへと更新された。また防災面では従来の防災設備（防炎垂れ幕、非常照明、絵文字誘導灯）の改善に取り組み、排煙設備能力の向上が図られた。屋内消火栓の配管とスプリンクラー配管は分離して消防隊専用送水口が新設され、新たに電動防火シャッターが設置された。加えて漏水対策も行っている。

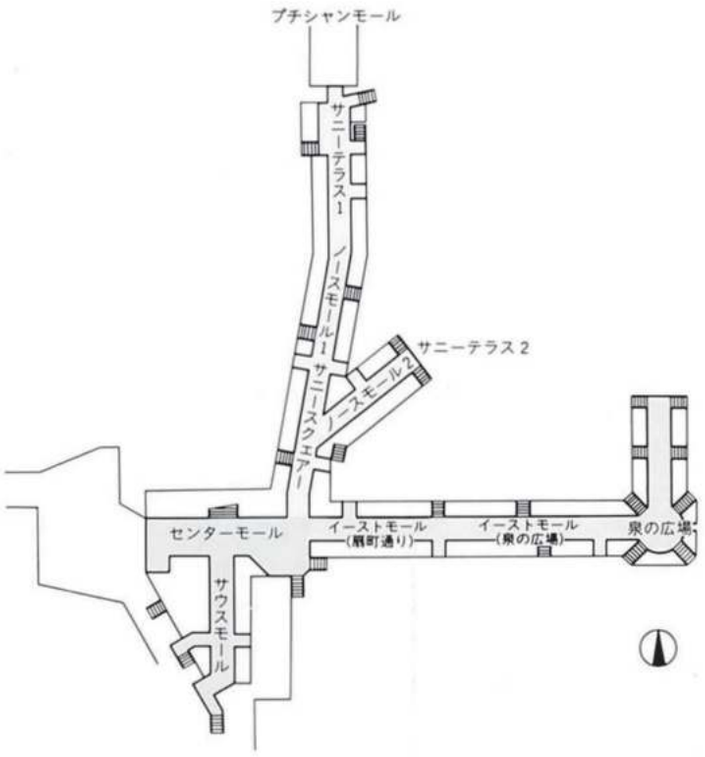
地下街ではランドマークが少なく方向感覚や現在地に迷いが生じやすいため、目的地への誘導や避難経路を考慮してサイン計画が見直された。ウメダの地下街は立地から大阪市外の利用者も多く、海外旅行者の往来も見込まれたため各通りと目的地を示す明確なサイン計画が求められた[10]。各通りは国際化時代に対応するため名称を変更し、コマ通りを



②梅田換気塔（筆者撮影）



③サニースクェアー（『建築と社会』1987年７月号）



④平面図



⑧地下入口上屋



⑨天井サイン



⑤サニーテラス 1



⑥サウスモール



⑦センターモール出口天井



⑩センターモールの天井メタルレリーフ。現在は柱にデジタルサイネージを設置している

図版出典④〜⑦、⑩『建築と社会』(1987年 7 月号)、⑧、⑨筆者撮影

ノースモール１（NORTH MALL1）、OS通りをノースモール２（NORTH MALL2）、中央通りをセンターモール（CENTER MALL）、中央通りの御堂筋方向をサウスモール（SOUTH MALL）、扇町通りをイーストモール（EAST MALL）と英語にカタカナを併記している。また視覚的に通りの違いが分かるようコマ通りとOS通りはオレンジ、中央通りはピンク、扇町通りはブルーと各通りをライン照明で色分けしている[11]。サニースクェアーやセンターモールの通路交差部天井はより造形的な照明デザインが採られ、通路を曲がり、新しい通りに入るごとに変化に富んだ姿が展開する。

工事計画は地下街を閉鎖せず、人の流れを残したまま行うことを前提に進められた。そこで工区をA・B・Cの３区に分け、さらに各工区を２分割することで工事中の安全対策と工事にともなう地上交通と地下鉄運営への影響を最小限に行われた。施工時間は現状通りの通行を可能とするため深夜とし、店舗部分は仮囲いをして昼夜間工事が進められた。この施工方法により工期と店舗休業期間が短縮された[12]。

■生まれ変わった泉の広場

ウメダ地下センターからホワイティうめだまで開業以来最も時代に合わせて変化してきた名所のひとつが泉の広場である。ウメダ地下センター第１期工事から５年後の1968年、さらなる交通事情にあわせて地下街を東へ拡張する第２期工事が着工、万国博覧会開会直後の1970年３月に開業した。新エリアは東西扇町通り東端をさらに東へ100メートル、そこから御堂筋線を北に80メートルのかぎ状に延長された。そして商店街に憩いの場が欲しいとの要望を受けて御堂筋線と扇町線の交差点に直径30メートルの広場をつくり、中央には噴水が設置された。360度に流れ落ちる噴水の上部につるされたシャンデリアが豪華に、非日常の空間体験を演出している。噴水へはコインを投げ入れる人が後を絶たなかった。初代噴水は11年後に階段状の落水型へとデザイン変更される。２代目の噴水は水中カラーランプと組み合わせて光を演出、天井は鏡面加工が施されたステンレスとし、円形垂れ壁のステンドグラスと組み合わせたものとなった。さらに2002年にはデザインを一新して３代目の泉の広場が登場。噴水は高さ３メートル、直径９メートルにもなる大理石製で、大阪市の姉妹都市イタリア・ミラノの彫刻家がデザインをし、噴水から床のモザイクタイルまですべてイタリア製。天井は空を描いて以前より開放感ある空間にしている[13]。

第２期工事から50周年を目前とした2019年、泉の広場を含む第２期部分がリニューアルされて話題となった。喧噪な地上とは対照的な落ち着いた憩いの空間は継承し、噴水の変わりに登場した樹木「Water Tree」はそれまでの噴水広場とはまた違った空間へと生まれ変わっている。樹木の枝葉は鏡面仕上げのステンレス製で、LED照明が桜や紅葉のカラーで照らし、より四季の変化を感じる演出がなされている。新生泉の広場までのイーストモールもリニューアルされ周辺の百貨店や繁華街とは違った個性的な通りとなっている。

大阪は2025年に日本国際博覧会（大阪・関西万博）、「うめきた２期」再開発と大型プロジェクトが進行している。地上ターミナルと市内交通の要である地下鉄を結ぶ地下街はその重要性を一層増すと思われる。グルメやファッションなど流行とニーズを取り入れながら進化してきた梅田の地下が今後どのように変化するのか注目される。

---

1 大阪市は1903年に日本初の公営路面電車を大阪築港桟橋―花園橋間に開通、市内に路線が引かれて戦後まで交通機関のトップの座を占めた。しかし自動車が普及すると次第に路線は交通渋滞の要因となり、やがてトロリーバスへの転換が図られるようになる。そして1961年には市バスにトップの座を明け渡し、1960年代後半から路面電車は順次廃止され、代わって地下鉄が台頭、市バスがその補助交通機関となり大阪市内の交通体系が確立されることになった。

2 調査時間は午前７時から午後７時までの12時間とし、交通網の集中する阪急前・阪神前を事例にあげた。統計は『大阪市統計書』（1956年－1960）を参照とした。

3 大阪地下街株式会社編『大阪地下街三十年史』大阪地下街　1986年

4 『大阪人』第17巻12号　1963年

5 注３前掲書64頁

6 注３前掲書59頁

7 注３前掲書60頁

8 「確認通知書」によれば工作物の種類は装飾塔で、高さはそれぞれＡ基13.5ｍ、Ｂ基16.0ｍ、Ｃ基14.4ｍ、Ｄ基18.0ｍ、Ｅ基15.4ｍとなる。大阪歴史博物館編『特別展村野藤吾－やわらかな建築とインテリアー』2014年

9 注３前掲書120頁

10 梅田地下街に関するサイン計画についての研究報告は稲垣光宏・亀谷義浩・知花弘吉「大阪梅田地下街のサインに関する研究」『平成20年度日本建築学会近畿支部研究報告集：計画系』日本建築学会　2008年。中尾真由子・田中直人・老田智美「大阪梅田地下街の迷い行動とサインに対する利用者意識－公共空間サインのユニバーサルデザインに関する研究－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会　2017年。などがある。

11 注３前掲書119頁

12 注３前掲書120頁

13 桑田敦「泉の広場改装再生工事-大阪地下街・Whityうめだ」（『設備と管理』38巻５号　2004年５月１日）



⑪３代目泉の広場噴水（筆者撮影）



⑫新たな装いとなった泉の広場「Water Tree」（筆者撮影）

創業150周年事業の挑戦
（仮称）KONOIKEテクノセンター

河井翔太郎
株式会社鴻池組　設計本部建築設計第１部

（仮称）KONOIKEテクノセンターは、当社創業150周年事業の一環として大阪市住之江区南港に計画された建物である（**図１**）。管理棟、実験倉庫棟、駐車場棟の３棟に分かれており、用途は当社土木部門の技術研究所、事務所、150周年メモリアルギャラリーである。本報で取り上げる管理棟は、４階建ての鉄骨造（柱CFT造）で、災害時のBCP対策として基礎免震構造を採用している。平面は21.6m×27.6mの整形な形状である。ZEBへの取り組み、循環型木材利用、省CO_2の建物に加えて、来客者に木目や木の肌触りを感じる心地のいい空間を提供できるよう、エントランス部に耐力壁としてCLTパネルを設けている（**図３、４**）。２～４階の外壁の一部にもCLTを採用している。

また、本建物は大阪の南港エリアに位置する大臣認定建物である。そのため、長周期地震動の最も揺れが大きいエリアOS1（以下「OS1」という。）の地震動の検討が必要である。今回は、OS1に対して、レベル２地震動に対するクライテリア以内であることが求められた。OS1の擬似速度応答スペクトルを**図２**に示す。

（管理棟　建物概要）
最高高さ：21.523m
建築面積：1743㎡　延べ床面積：2665㎡
所 在 地：大阪市住之江区南港1-35-3
竣　　工：2021年10月31日（予定）



図１　外観パース

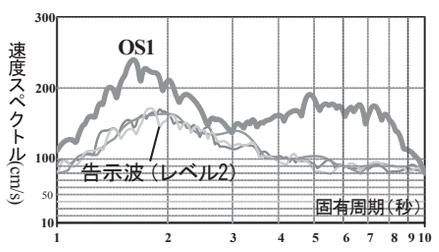


図２　疑似速度応答スペクトル

構造計画

■免震計画

軽量な鉄骨造建物は免震効果を得にくい構造だが、本建物では、振り子の原理により建物重量に関係なく免震周期を伸ばすことのできる球面すべり支承（以下「SSB」という。）を採用した。SSBはゴム径支承に比べて装置高さが低いため、掘削量削減にもなる。しかし、SSBは引き抜き力の発生する箇所には使用できない欠点がある。建物四隅は長期軸力が小さく、大地震時に引き抜きが生じるため、X2、X4通りの免震装置を抜き、隅角部に長期軸力を集めることで引き抜き力を抑制する工夫を行った。さらに、１階大梁を鉄骨造にし、ロングスパン梁にも対応した。SSBの使用により、１階大梁の鉄骨化に伴う建物軽量化に対しても免震効果を発揮することができた。減衰材はU型ダンパーを採用した。免震層のクリアランスは650mmと長周期地震動に対応するため許容変形を大きくした。

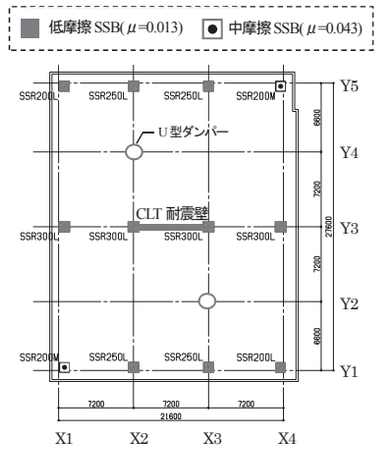


図３　１階伏図

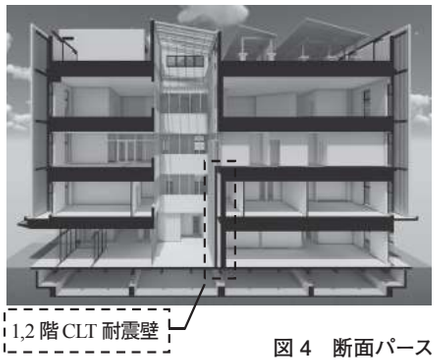


図４　断面パース

■長周期地震動「OS1」に対する工夫

軽量の本建物の周期を極力伸ばすためには、低摩擦系の支承材を多く配置する必要があるが、これに伴う減衰力の低下は免れない。その弱点を補うために減衰材の付加は必須となる。今回採用したU型ダンパーは鋼材であり、製品のばらつきが±10％と小さい。さらにOS1の繰り返し加力に対しても性能低下が比較的少なく、性能低下を考慮した場合においても減衰効果を十分発揮できた。

上記のデバイスの組合せにより、大地震時の周期は、3.9秒程度と十分伸ばすことができ、OS1の繰り返し加力による性能低下を考慮しても免震層の変形は460mm程度であり、免震層のクリアランスに十分余裕を持った設計を実現した。OS1の相対変位の結果を**図５**に示す。

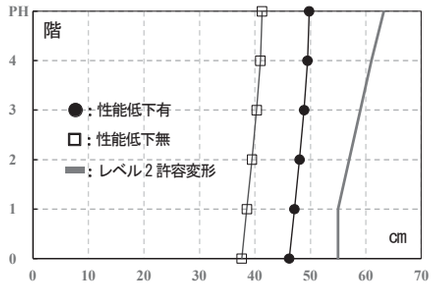


図５　相対変位（OS1）

■耐力壁としてCLTパネルの採用

１，２階に設置したCLT耐力壁は、強度等級が異なるラミナを内層に用いた直交集成板（異等級構成）とする。強度等級は、Mx60、５層５プライを採用する。鉄板をCLTに割り込みドリフトピンで接合する。ガセットプレートと鉄骨梁とは高力ボルトで接合する。実験により、金物の接合部の耐力、崩壊形を確認して詳細を決定している。大地震時に、金物が概ね引張降伏にならないようにしている。今後、CLTの耐力をより高めるために実験を重ねていく予定である。

■免震装置との接合を簡素化

１階の免震装置と鉄骨との仕口周りはリブプレートなどの補強が多くなりやすく、鉄骨製作工場での加工手間が課題であった。本建物では、免震クリアランスまで変形した状態でもスライダーの軸心がCFT柱の断面内に納まる計画とした。その結果、上部構造の軸力が球面すべり支承に流れる際、面外曲げをベースプレートの跳ね出し部に受けなくなり、加工手間の低減を図ることができた（**図６**）。

（かわい　しょうたろう）

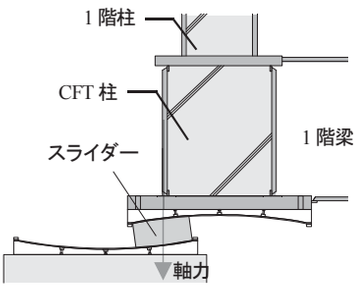


図６　球面すべり支承変形図

●河井翔太郎
1986年大阪府生まれ。大阪大学大学院修了。2011年株式会社鴻池組入社。現在に至る。

第66回 工高生デザインコンクール

設計課題／『現代』の茶室

【応募校数】23校　【応募作品数】117点
【締切日】2020年９月30日　【審査会】2020年10月17日　【表彰式】2020年11月14日

審査総評

審査員長　一階　聡之

第66回目となる歴史と伝統のあるデザインコンクールの課題は、「『現代』の茶室」とされました。端的には、「茶室とは？」との問いかけであるとも認識できます。

近うて遠きもの（枕草子）

日本人にとって「茶室」は、イメージし易いものでありますが、それ故にその本質に迫る作品は、誠に残念ですが、少なかったというのが、今回のデザインコンクールの全般的な印象であります。一見すると、身近に感じてしまう課題でありますが、実の処は、非常に難しい課題であったと云わざるを得ないと再認識致しました。

茶の湯の歴史は古く、一般的には、遠く鎌倉時代の喫茶の儀礼に始まり、千利休によって侘茶として大成され、今日まで続く日本固有の文化・芸術として認識されています。

我々は、作品の審査にあたり、『現代』の「茶室」をどのように捉えるのかに関して、３つの観点に注目したと考えます。

１．主客の主体
２．対話の本質
３．空間の設え

茶室は、亭主と客の一期一会の真剣な対話の場であると捉えられます。静謐なる空間であるとともに、自然や他者との関係から自己自身をも深く見つめ直す空間でもあります。もてなす側ともてなされる側、そして、茶を喫するという行為を通しての対話がその本質であるとも云え、この対話という行為を一期一会に相応しく彩る空間とはいかなるものであるべきかが問われている課題であるとも認識して欲しいと我々は考えました。

入選された作品群は、そのどれもが、確固たる考えのもと、空間デザインのみならず、暮らし・生活・ライフスタイルなどへの提案が盛り込まれていると我々は受け止めました。『現代』の茶室という難題への見事な提案であり、嬉しく思いました。

作品群全般を俯瞰すると、残念ながら、私たち一般人は、「茶道」に関しては、知識としてはその多くを知りつつも、「茶事」・「茶室」を、正に、現実のものとして「体現」する機会に恵まれていないのかも知れないと痛感しました。

2020年は、ある意味エポックメイキングな時であったと、近い将来には評されるかも知れません。

近年のデジタル技術の進展に伴い、人と人（情報）の感覚的な距離は、圧倒的に縮んで来ています。ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）などの蔓延もこれに一役を担う大きな要素であり、人を常に身近に感じることの出来る便利なツールであるばかりか、ひとつの世界とも捉えられるほどです。さらに、コロナ禍は、人と人との物理的距離を制限する結果を招きつつあり、「個」人としての存在を、「他」人から引き離し、一定の距離を置くことに拍車を掛ける状況を生み出しつつもあります。
物理世界：リアルワールドでは、一人になり、電脳世界：サイバーワールドでつながるという状況が浸透しつつあることは、物理世界の建築家としては憂慮すべき事態なのかもしれません

世界全体は、過去に体験したことのない状況が今なお継続しています。我々建築を志す者に何ができるのかも熟慮し、行動する時だと強く感じざるを得ません。みんなで明るい未来を築きたいと考えます。

最後に、真摯に課題へと取り組んだすべての学生の皆さん、そしてご指導に当たられた先生方に深く敬意を表し、結びとさせていただきます。

【審査員長　プロフィール】
1964年生まれ　大阪府箕面市出身
1983年　大阪府立　北野高校　卒業
1987年　京都大学工学部建築学科卒業
1989年　京都大学工学研究科建築学専攻修士課程修了
同年　株式会社日建設計　入社
2012年　株式会社日建設計　設計部長
2019年～　株式会社日建設計　ダイレクターアーキテクト
2014～2018年　奈良大学非常勤講師
【主な作品】
1995年　大阪府立中央図書館
2001年　高松港港湾旅客ターミナルビル・レストハウス
2006年　山口フラワーランド
2008年　滋賀銀行浜町研修センター
2012年　梅田阪急ビル
2016年　茨木国際ゴルフ倶楽部クラブハウス
2017年　SENRITOよみうり
2019年　芦屋ベイコート倶楽部ホテル＆スパリゾート
2020年　大同生命札幌ビル
2020年　宝塚ホテル
【主な受賞】
日経ニューオフィス賞　大阪まちなみ賞
日本図書館協会建築賞　香川県建築士会表彰
高松市都市景観賞　日本建築学会作品選集



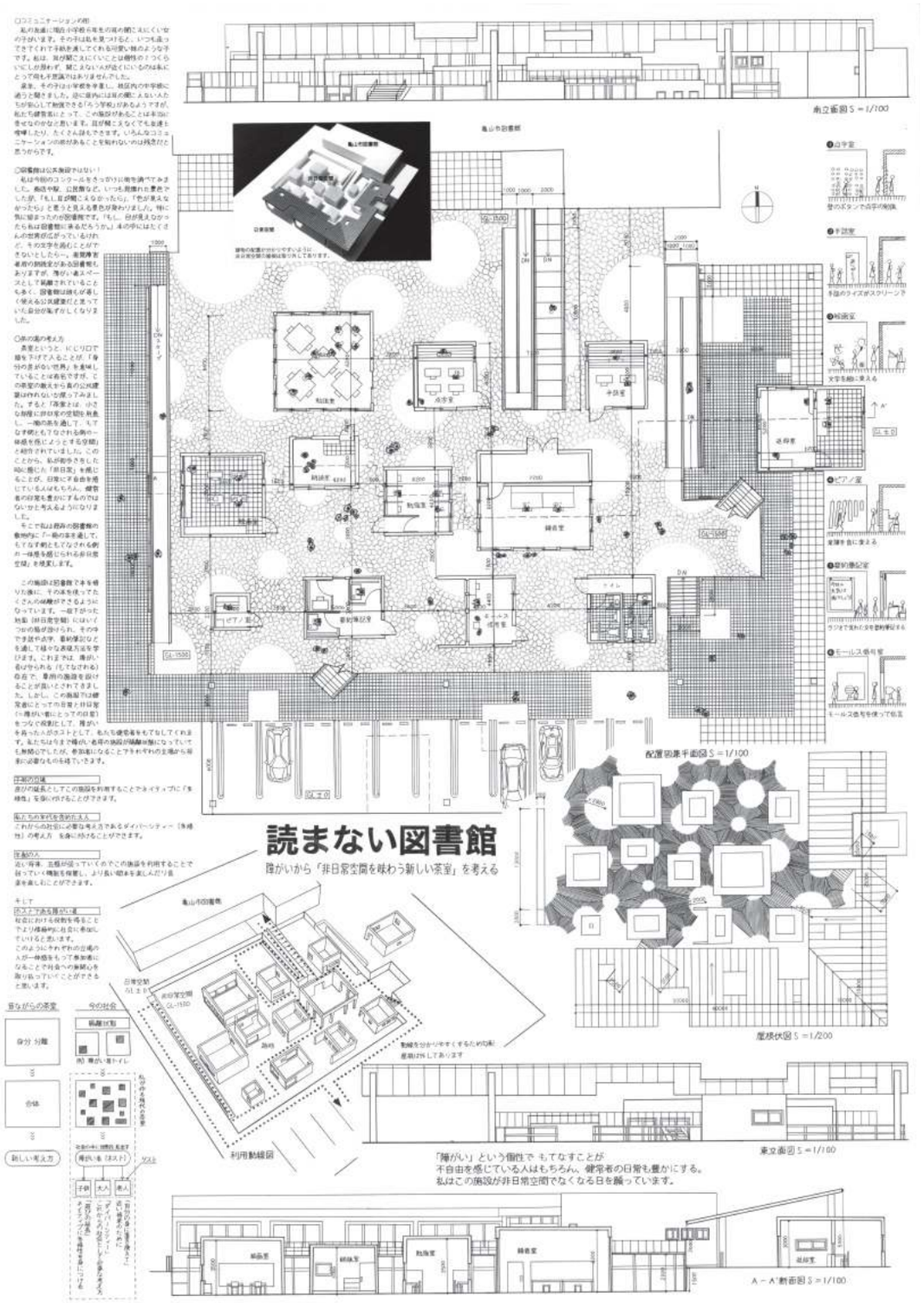
【審査会】





●審査員（50音順・敬称略）－職場は2020年10月当時－

一階　聡之／㈱日建設計設計部門ダイレクターアーキテクト
小笠原絵理／間工作舎一級建築士事務所代表
神谷　浩司／㈱大林組大阪本店建築事業部プロジェクト設計部担当部長
岸下　真理／Atelier KISHISHITA共同代表
近藤　良彦／㈱安井建築設計事務所マネジメントビジネス部企画主幹
平岡健太郎／㈱竹中工務店大阪本店設計部グループ長
藤木　庸介／滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科教授
前田　茂樹／ジオグラフィック・デザイン・ラボ代表
松下　典央／㈱昭和設計ソリューション部部長
宮本　雅弘／㈱東畑建築事務所設計室部長



入選・最優秀賞

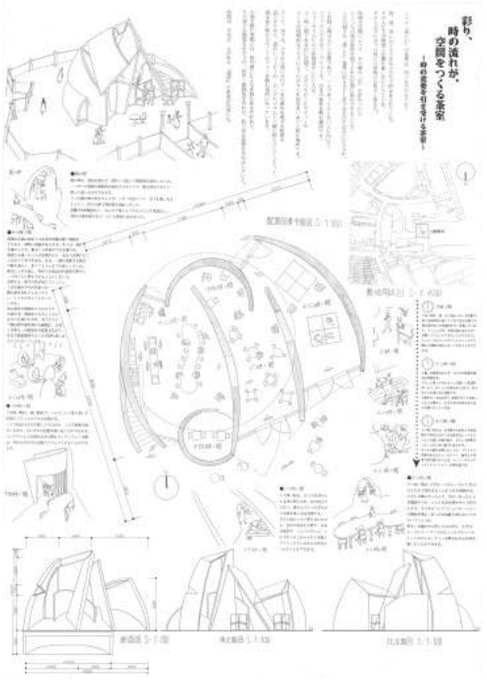
林　那海

三重県立四日市工業高等学校２年

「『現代』の茶室」というテーマから自分の街を調べてみました。
そこで目に止まったのが図書館でした。私の身近には耳の聞こえにくい女の子がいます。また、目の見えにくい人たちもいると思います。そのような人たちは、図書館に来るのだろうかと考えました。
そこで私は茶室の考え方である「非日常空間」と結び付け、既存の図書館に本を音に変えて読む施設を提案しました。ここでは地面が下がっている非日常空間で、図書館で借りてきた本を手話や点字などを使って読む事ができます。
入選通知を受けた時はとても驚きました。図面を描くことはもともと好きでしたが、初めての設計コンクールということもあって、考えがなかなかまとまらず大変でした。しかし、この夏ずっと支えてくださった先生や先輩、家族、友人のおかげで作品を作り上げることができました。その恩返しができたと思います。
本当にありがとうございました。

▲審査コメント／一階聡之

「茶室」を「非日常的な対話の舞台」と捉え、現代社会が今なお持ち続ける課題への対応を提案した作品であります。作品全体は、繊細さと暖かさに溢れ、好感が持てる表現となっていました。
「読まない図書館」というタイトルも非常に巧妙で、鉛筆描きによる迫力ある画面と相まって、見るものの眼をくぎ付けにする効果は秀逸でありました。
ここに展開された建築空間には、障がいをもつ女の子との係わりから着想し、「一冊の本」をキーワードにみんなの心を豊かにすることが、新たなコミュニケーション手法とともに提案されています。
障がい者の積極的な社会活動参加への誘発のみならず、新たな図書館としての発展的な方向性も示唆し、「茶の精神」を現代建築空間へと昇華させた優れた提案となっていることが、高い評価を受ける結果につながりました。建築デザイン的にも、一つ一つの個性を持たせた空間が路地（露地）でつながり、内外の空間が溶け合うように、既存施設とも連携しつつ、一体的な「場」が創り出されており、完成度の高い作品であると評価するものであります。今後の更なる精進と発展に大いに期待致します。



入選・優秀賞　上田涼乃・貴島　渚

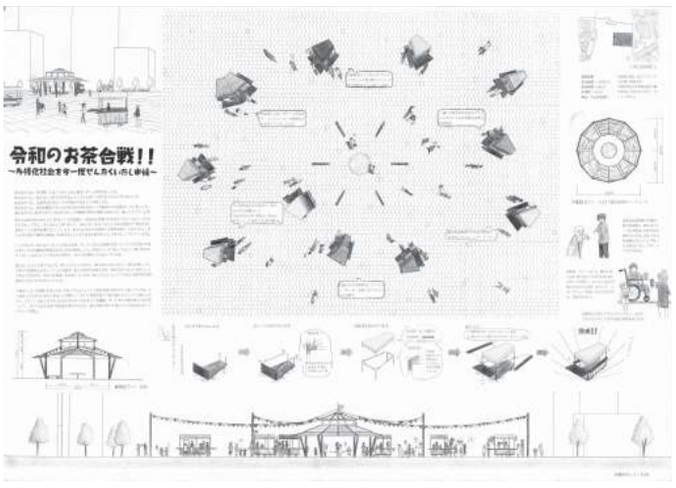
兵庫県立兵庫工業高等学校２年

私は茶室を小さな空間ともともとは思っていたのですが、今回のコンクールには“『現代』の茶室”という課題で、それぞれの国籍や性別、価値観、他に複雑な背景にとらわれずにみんな楽しむ場というのもあったので、もともとあった茶室の概念を取り払い、コミュニティの場にもなるような空間を作ろうと考えました。私が思う今の日本はスマートフォンをメインに生活している人が多いような気がします。SNSやインターネットが普及し、何もかもそれに頼ってしまったり、SNSを通じて画面内でコミュニケーションをとって、そこで完結したり、直接知り合う機会が少なくなっているように思い、開放的な空間で、自然と人と人との距離を近づけて、全く知らないような人とも会話を時間を空間を楽しめるような場を設計しようと思いました。

今回のコンペで入選通知を受け努力は結果につながることが身にしみてわかりました。1度一人でコンペをしたときは、コロナ期間中もあり先生と相談もあまりできないまま提出したのでコンペを最後までやってやったという感じはあまりありませんでした。でも、今回は二人でそして先生と色々なアイデアを出し夜遅くまで残ってやっと完成することができた作品です。なので、達成感と充実感があったので、入選できてとても良かったです。私はこのコンペ、この入選をきっかけに、次のコンペでも、入選を目指して結果を残したいと思いました。このコンペ以上に充実した期間にしたいと思いました。

▲審査コメント／宮本雅弘

優秀賞入選おめでとうございます。「彩、時の流れが、空間をつくる茶室」と名付けられた本案は、一見奇抜に感じられる建築形態よりも、そこに内包される空間の魅力が優秀賞に選ばれる要因となりました。各国のお茶文化の違いに着目しながら、時刻に応じ、空間に身を置くに人にとって居心地の良い特徴的な空間が提案されています。何時の間と名付けられた空間も、自由でのびやかな曲面の壁に包まれる構成、文化の多様性、意識のバリアを取り払うことを意識された開口部により、季節や時刻により光や風の香りのうつろいに伴い、更にその彩の変化を増していくようにも感じられました。提案の紙面において空間の変化や彩、高度な立体的な魅力を表現することが非常に難しい内容ではありましたが、貴島さん、上田さんお二人の豊かなアイデアと空間を操作する手腕に今後の更なる成長を期待したいと思います。



入選　上原侑子　神戸市立科学技術高等学校３年

私は現代の茶室を考えた際、昔の茶室は「当時の武士に反抗する意味でも建てられた」ということを知り、現代にはびこる偏見に反抗する茶室を考えました。人は知りもしないのに偏見だけで決めつけ、SNSで似た意見を募り自分を正当化しようとします。ですがそれら全てが真実というわけではありません。なのにそれによって傷つく人がいるのは現代の悪いところだと思いました。今、定着している偏見からの正当化の流れを切り、それに苦しむ人たちがいなくなるような社会になることを願っています。

今回はこのような賞をいただき、ありがとうございました。部活動など時間のない中、朝早くから来てアドバイスをくださった先生や、一緒にこのコンペに取り組んだ友達のおかげで完成できた作品なので、感謝と喜びで胸がいっぱいです。この経験を活かし、今後の大学などの活動で役立てていきたいと思います。

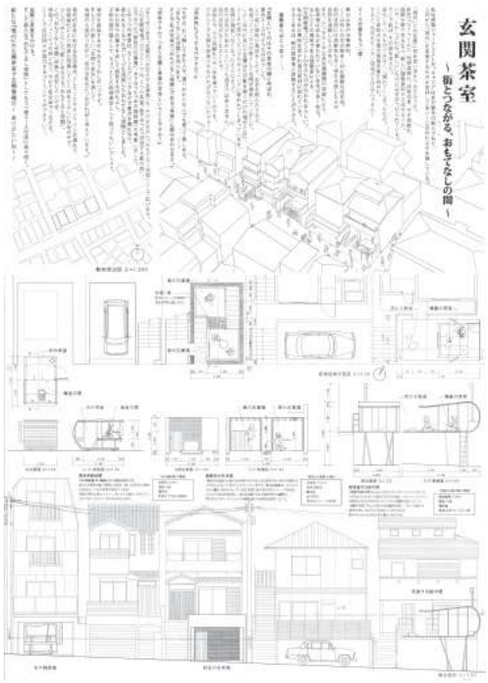
▲審査コメント／藤木庸介

様々な人が、様々な境遇にあって生活を行っています。そんな多様な生活があるなかで、一定の人をターゲットにしたSNS上の偏見に満ちた書き込みが問題視されて久しくもあります。SNS上のみならず、実社会の中で差別や偏見に直接触れることだってあるでしょう。上原さんはこうした社会風潮に疑問を持ち、これに立ち向かうために「現代の茶室」を通して、多様性を認め合い、また多様性を楽しむための場を出現させようとしています。

組み立て式屋台としての「茶室」は、デザイン性が際立つものではありませんが、それも良いと思います。建築物のデザインを追求することではなく、先に述べた様に多様性を認め、それを楽しむ場を出現させることこそ、上原さんが提案したかったことなのでしょうから。

説明文のなかで、「コミュニケーション」とか「コミュニティー」といった言葉を安易に使っていないのも良いですね。意図してのことでしょうか？もしそうなら、とても思慮深いことだと思います。なぜなら、「コミュニケーション」からなる「コミュニティー」の形成は、異なる「コミュニティー」の形成をも誘発し、対立の構図を生むことだってあるからです。ここでは「コミュニケーション」ではなく、「アンダースタンディング」が優先されるのでしょう。

俯瞰的に描いた平面構成の表現も印象的で好感が持てます。



入選・優秀賞　木下岳空　兵庫県立兵庫工業高等学校３年

私は大学への進学を有利なものにするためこのコンペに挑戦しました。「『現代』の茶室」ということで普段から茶室という空間に触れていないこともあってか、考え込む日も多くありました。茶室というものは何なのか？まずは調べるところからスタートし、先生とディスカッションを重ね、社会的意義のあるもの、つまりそこに住まう人たちにとって必要であるものを設計しようと計画を立てました。技術の進化により急速に発展していく『現代』。住宅建築ではLDKが進化改良されていく一方で玄関は“家の顔”からただ靴を脱ぐスペースになってしまいました。進化が著しい現代だからこそ廃れてしまった玄関を復活させる。そのために私は玄関に茶室を掛け合わせました。元来から“おもてなし空間”である茶室を掛け合わせることで、少しのゆとりと癒しを与え、玄関が再びコミュニティの核として機能します。それが地域に点在することで街はよりつながり、活気あふれていくでしょう。先生に「入賞した！」と言われたときは頑張ってきたことが報われてきてよかったという気持ちでいっぱいでした。しかしうれしさの中にも頂点に届かなかった悔しさもありました。私は今までの高校生活で２つ、自分が主体となりコンペに取り組んできました。主催団体は異なりますが、どちらも佳作止まりで非常に悔しい思いをしてきました。だからこそ後日に先生から“優秀賞入賞”の知らせを聞いた時は涙があふれてきました。締め切りの４日前では間に合わないので他の作品に力を注ぐために辞退という話も出て決断を迫られた時もありました。今ではそこで諦めず最後までやり続けた自分を誉めたいと思います。諦めないこと、努力を続けることの大事さを改めて痛感したコンペでもありました。人としても成長でき、このコンペに挑戦してよかったなと思います。

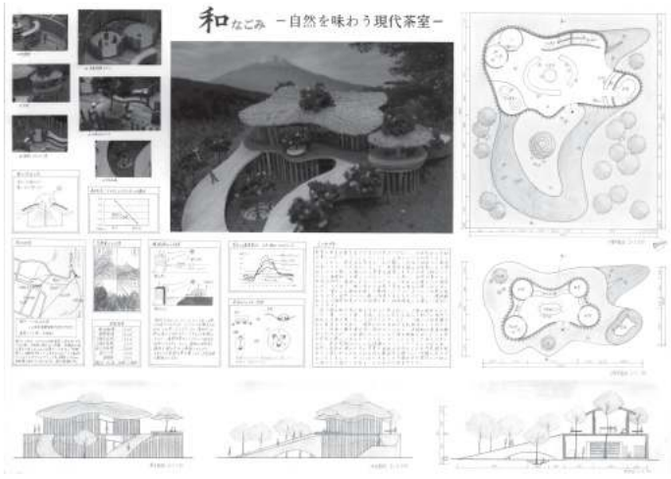
▲審査コメント／松下典央

新米の建築ジャーナリストが、「現代」を象徴するものを取材する任を得た所からストーリーが始まり、大変ユニークな切り口で作品の解説をしていく。図面も鉛筆を使っての描写力がしっかりしており、非常に表現力に長けた作品である。

作者は、住民付き合いが希薄となった身近な街の問題に着目し、茶室の機能と空間を住民の繋がりを生む「おもてなし空間」として住宅の玄関や車庫を計画（復権）していく。「茶室」と言う形に捕らわれ無い柔軟な発想を高く評価したい。「向こう三軒両隣」の縁すら薄くなっている現代において、かつて玄関先で営まれた「ご近所付き合い」が、少子高齢社会や人口減少が進むこれからの時代において、安全に安心して人が住まうための重要な課題解決の一つではないだろうか。

また、作者の洒落心は、暗い車庫とうす暗い海底に棲む蝦蛄に語呂を合わせ、形態も蝦蛄が背を丸める姿を模した庵を計画している。さり気ない遊び心は、大切にして欲しい感性である。

少し残念なのは、「玄関復権」と謳いながら、肝心の玄関にカメラが向けられていない。玄関と街の関係性をもう少し表現して欲しかったと思う。



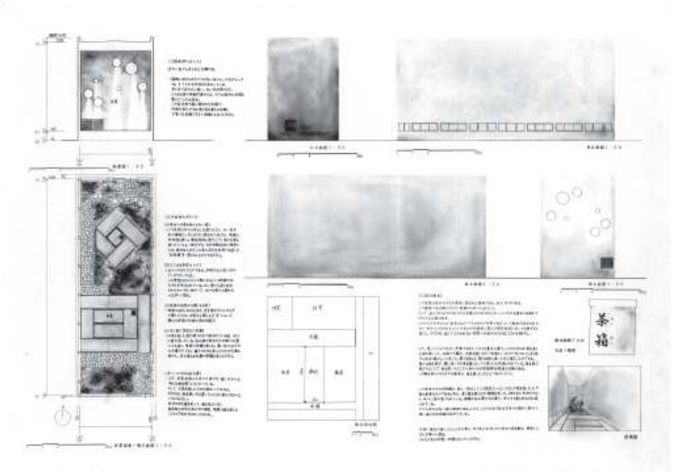
入選　梅林向日葵　大阪市立工芸高等学校３年

茶室には古い歴史があり、亭主が茶を点てもてなすだけではなく、非日常の空間を楽しんだり、コミュニケーションの場としても利用されてきました。しかし「茶室」と聞くと敷居が高いイメージがあります。そこで、服装や難しい作法にとらわれずに、老若男女誰もが気軽に立ち寄れて、人々の憩いの場となる現代の茶室を提案しました。円形空間や曲線を使い、自然とコミュニケーションが生まれる空間をデザインしました。また、山梨県の豊かな自然を活用し、緑に囲まれた空間にすることで人々に癒し効果を与えるだけではなく、環境にも優しい建物となるよう工夫しました。ここを訪れた人が和を感じ、心を和ませられたらと思い制作しました。

（入選通知を受けた時）まず一番に驚きがありました。貴重な10作品の中に選んでいただけたことにとても感謝しています。この経験がこれからの作品制作への自信や意欲につながると思います。大学でも空間デザインについて学んでいきたいと思っているので、これからよりレベルアップして人の心を動かせるような作品を制作できるよう努力していきたいです。

▲審査コメント／近藤良彦

誰もが気軽に立ち寄れ、建物内外の各所に設けられた円形の茶室でお茶を飲みながら、四季折々の富士山の絶景を望む提案である。「茶室」という課題が難しかったのか、その精神性まで踏み込んだ案は少なく、本案のように地域の特色ある風景を活かした案、波や雨の音を感じる案など、自然を取り込みながら交流する地域のコミュニテイセンター的な案が多く見られた。その中でこの案は図面の構成において全体的にまとまりがあり、とりわけ明るさが印象に残り、タイトルにあるように「なごみ」が感じられる案であった。また光や風の取り込み方、屋上緑化・壁面緑化による断熱効果、芝生による温度変化などの環境負荷低減についての分析、さらに森林浴によるストレスホルモンの減少の分析など、他にない視点も高評価につながった。模型で表現されている自然素材を使った外観はほほえましく優しさを感じる反面、2階への唯一のアプローチであるスロープの勾配がきつすぎるのが気になった。誰もが楽しめる空間としてエレベーターや階段もうまくデザインする他、敷地の高低差を活かし、ゆるやかな散策路で上下階を繋げるなどあればもっと良くなった気がする。今後の躍進に期待します。



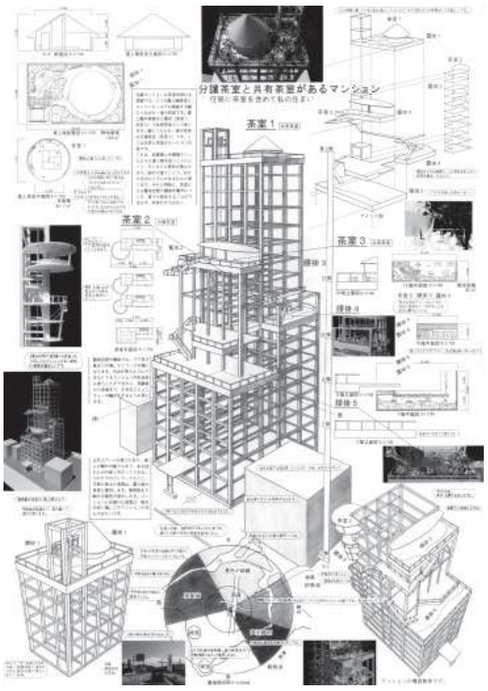
入選　大畑和香　静岡県立島田工業高等学校３年

お茶を通して人をもてなす空間の「茶室」に興味を持っており、現代版の茶室を設計したいと思い応募しました。考えるにあたり、実際の茶室を体験しに行きました。そこでは、とてもきれいな庭があり、お茶を楽しんだ後に散策することができ、ただ庭を眺めるだけでなく近くで鑑賞できる楽しみもありとても魅力的でした。今回の設計では実際に体験した茶室を取り入れるとともに、現代の感覚として別々に存在する庭と母屋を一体化させ、室内ですべてが簡潔にまとまる空間を作りました。

100点を超える応募の中で入選できたことにとても驚きました。設計していく中で、実際にお茶を体験したり、自分が求める茶室の資料を探したりと自ら考えて取り組む事ができてとても楽しかったです。茶室の設計は初めてでしたが、住宅とは違うお茶の空間について深く考えることができてうれしかったです。また、絵を描くことも好きだったので、鉛筆で様々な表現ができて良かったです。表彰式ではほかの人がどんな茶室を考えたのかを参考に見てみたいです。

▲審査コメント／岸下真理

とにかく美しいプレゼンテーションである。濃淡を効かせたドローイング、無駄の無いシンプルな説明文、そしてそれらのバランス良いレイアウト。建築という行為の中で重要な部分を占めるプレゼンテーション、特に今回のようなデザインコンクールにおいては更に重要度を増す図面表現において、本作品は多くの審査員がその美しさを高く評価した案である。提案としては伝統的な茶室の特徴や優れた点を素直に引き継ぎながら、「通り抜け」という動的な要素と「庭室一体」という複合的な要素を加味した空間となっており、設計課題である「『現代』の茶室」に相応しい建築となっている。ただ、この建築単体での提案というイメージが強く、隣地を含め周辺環境との関係性などをもう少し具体的に、そして積極的に提案の中に取り込むことが出来れば、より良い建築となったのではないかと私個人としては感じてもいる。この案にも見受けられる素直な視点に加え、様々な経験を通して得られるであろう広い視野を持つことで、更に美しい建築の提案に繋がるものと今後の取り組みに期待している。



入選　芝本　喬　三重県立伊勢工業高等学校３年

この製図コンクールに挑戦した理由は、私の家に父が使う広間の茶室があり、小さい頃は家族でお茶をしていたからです。

私の町には、最近マンションが増えてきているのでその中に茶室を仕掛けようと思い、提案しました。

今年は、コロナの状況が悪化する中外出が思うようにいかなくても、マンション内で外部の空間を設けることでストレス無く楽しめる茶室にしました。また、伊勢の町が展望できるのもこの茶室の特色になっています。三つの茶室と五つの腰掛けと露地をめぐらせました。そうすることによってテレワークの場にもなると思い設計しました。

入選したことを先生から聞き、とてもうれしくその日のうちに親や知人に結果を報告しました。後から、先生とは作品について何が良かったのか、何が足りなかったのかを考えました。今は、内観パースがあったら良かったかなと思っています。

良い結果が得られたことで、自分自身の自信に繋がりました。学校の友人や先生にも称賛していただきました。

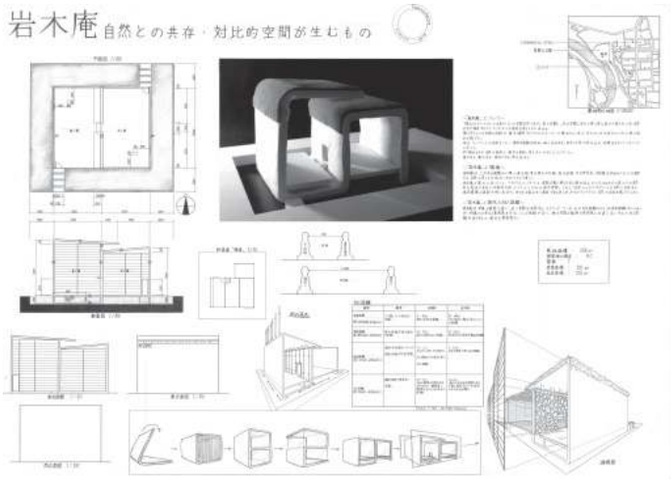
コロナの影響で夏休みが短く大変な取り組みでしたが、良い結果を残すことができたので、とても良かったと思っています。

▲審査コメント／神谷浩司

茶室を世俗から切り離された空間と定義するなら、相反する場所が日常の空間となる住居ということになる。そうした点で、この作品は茶室の存在意義を最も明確に表している。内に入って精神的活動を広げるという所作に限定せず、外へのつながりを持たせた作りとしコミュニケーションを期待するなど、従来の茶室観を超えた提案も面白い。

同様の着想による作品は他にもあったが、この作品の秀でている部分は見ての通り図面表現にある。迫力あるドローイングに加え、個々の茶室が図面で丁寧に表現されている。会話調の説明文とシーンを表現する模型写真など、主文以外のいろんな部分からも設計主旨が読み取れるように工夫されている。建物本体をスケルトンで見せることで、茶室部分を明確に、強く表すことにも成功している。

一方で、敷地に関するダイアグラムがあるものの、土地や歴史と建物のつながりについての説明がやや不足していた。場所性を加味した提案であったなら更に上位に選ばれたと思われる。



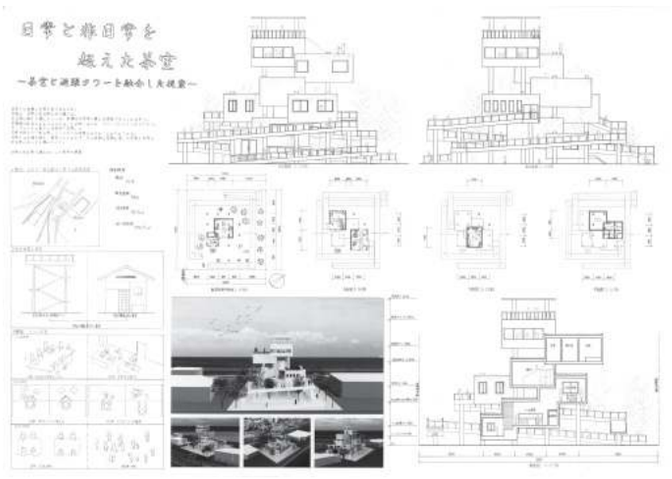
入選　戸津川由羽　広島県立広島工業高等学校２年

この作品を制作する上で、私が一番に大切にしたことは「自然との共存」でした。自然をより近くで、その精密さや美しさを室外のみならず室内でも感じられる茶室を目指しました。また、現代の新型コロナウィルスなどの感染症対策を踏まえ、従来の茶室のイメージである「せまい」空間を「ひろい」空間へ現代の茶室として「対比的空間」を考えました。室内を流れる雨水の音が響きやすいよう、開口部を両サイドのみにし、大きな壁で全体を包み込むデザインとしました。日本特有の四季の中で、お茶と自然を五感で味わう茶室を海外の人たちにも知ってほしいと考えています。

（入選通知御受け）うれしいと思うものの、素直にいうと複雑な気持ちでした。初めてのコンクールの参加で、わからない中、さまざまな茶室の情報を調べたり、スケッチを繰り返したり、先生方にもアドバイスをいただきながら、イメージを形にしていきました。しかし、形をはっきりさせるまで時間がかかり、A1サイズの用紙に向き合ったときには締め切りが迫っていました。時間との戦いの中で、何とか間に合い提出できた時は、とてもほっとしました。先生方にもとても感謝しています。今回の結果は入選ということでしたが、次回コンクールに参加させていただくときには、ぜひ最優秀賞を目指したいと思います。

▲審査コメント／前田茂樹

雨の日の情景を審査員皆が想像して、五感で感じる詰的な空間が出来るだろうというところが評価につながった。パースや模型写真に人が入っていないことと、模型のコンクリートの厚みが図面よりも厚いことから、極小空間のように思うが、図面を見ると60㎡（36畳程度）ある。現代の茶室であっても、少人数で時を過ごす場所として考えるならば、参考に掲載している「待庵」のような極小空間でもよかったのではないかも考える。また、模型には着いていないが、パースや図面ではコンクリートの妻面にはガラスのスクリーンが入っている。こちらもガラスという素材、透明感が良かったか、またコンクリート面よりも大きいサイズのものを張りつけるデザインが最適だったのか、スタディの余地は大いにあると考える。しかしながら、フランク・ロイド・ライトの落水荘のように、自然を取り込む造形力は素晴らしく、屋根、壁の素材についても、最初に考えたコンセプトに本当に合致する素材なのか、異素材の合わせ方なのか、を常に自問自答し、今後この賞を糧により研鑽し、自然と一体化する魅力的な建築作品をつくっていってほしい。



入選　中野峻太郎・山岡翼太　静岡県立浜松工業高等学校３年

設計課題が「現代」の茶室ということで私たちは現代のことを調べた。そこで私たちは現代の社会目標でもあるSDGsに着目しその中の「気候変動に具体的な対策を」に着目した。

災害時に人々の集まる避難塔と茶室を融合し、フェーズフリーの考えを取り入れ、自助の意識を高め共助を生む、現代の茶室を提案した。

茶室での交流で防災を身近に感じいざという時の協力にもなる。この建築が防災の拠点となると考えました。

この度は入選に選んでいただきありがとうございます。山岡・中野ともに共同で作品を作ることが初めての経験でした。短い時間の中、二人で互いに指摘し合いながら作品制作に臨みました。初めての共同作品が入選できたことは素直にうれしかったですし、二人にとって自信にもつながりました。

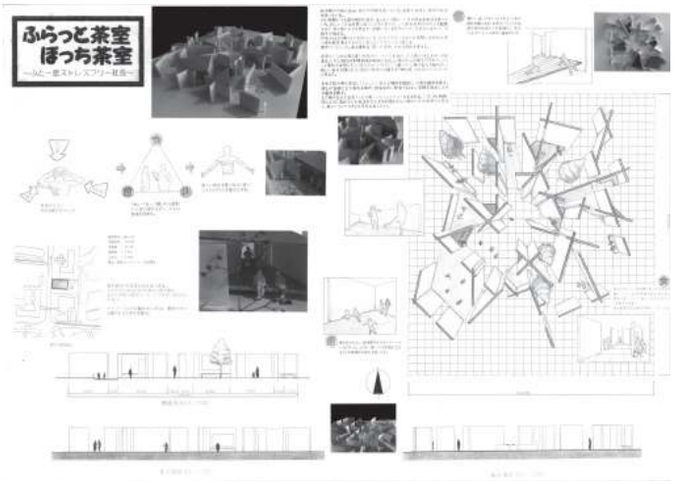
▲審査コメント／平岡健太郎

防災大国である日本において、災害時＝「非日常」への備えが、普段の生活＝「日常」と切り離されていることを問題として捉え、その解決策として、日常的に茶室として利用する避難タワーを提案した作品である。

現実的で、どちらかというとネガティブな印象を与える「防災」という課題設定に対し、リズミカルにスタッキングされたボリュームにスロープが巻き付いていく、立体的な動きのある建築のカタチで応えることで、ポジティブで楽しげなイメージを与えている点が非常に印象的であり、その点を高く評価したい。

また、丁寧に描かれた立面図・断面図と、背景にも気を配ってつくり込まれた模型写真によって、それぞれの場所でのアクティビティがうまく表現されていて、登ってみたくなるワクワク感が感じられ、日常的に楽しく利用されることが想像できる提案となっている。

施設の利用シーンとして考えた、つくる茶室、考える茶室、交流の茶室という３つの機能の設定に、もう一歩踏み込んだ提案と、生き生きとしたアクティビティが想像できる表現があれば、さらに強く魅力的な提案になったであろう。



入選　松原戒亜　神戸市立科学技術高等学校３年

私が今回この作品を作ろうと思ったきっかけは、登下校中、道行く人々を見ていると、自分も含め、疲れが溜まっている様子が見受けられたことです。そこで「ふらっと立ち寄れて、疲れを癒す場所」をコンセプトに制作しました。また、「ふらっと立ち寄れる」事が重要なので、従来の少しお固い雰囲気にはせず、誰でも気軽に立ち寄れるようにランドスケープのようなデザインにしました。扉などによる隔たりがないので、人々のコミュニケーションの場にもなります。

私は今まで建築設計競技に参加したことがなく、このような機会は初めてだったので、一から全て考えて制作するのは、考えれば考えるほど、ダメに感じてしまい、とても苦労しました。苦労して作った作品が入選したと知った時は努力が実ったことを実感しました。今回入選した事をバネにして、大学進学後もより良い設計ができるように精進したいと思います。

▲審査コメント／小笠原絵理

都市に建つ、建物の断片をひろい集めて配置したような空間群。

この作品は、不規則な角度で交わる２枚の壁が、偶発的に間合いをおきながら自立する。ところどころに屋根や床が設けられ、訪れる者の居場所をつくる。用意された水盤の水面は刻々と時を写し、樹々は四季折々に姿を見せる。旅で出会う集落のように、訪れる者は、非日常の世界に迷い込むのではないだろうか。急な雨に雨宿り。ひとり思いにふけることも、ともに語らうこともある。ふと足をとめ、広がる景色に思いをはせることもあるだろう。流れる時と、訪れる者自身が、偶然そこに存在してるかのような不思議な世界を醸し出す。

設計者は、都市に住むことの日常や周囲を観察し、時間に追われる日々の暮らしに一石を投じようと、画一的な都市の中に、偶発的な非日常の空間を落とし込む。訪れる者に、自分と向き合う、人と触れ合う、なにげない大切な時間をもたらしている。

『ふらっと茶室』は、ビルの隙間や屋上、公園の一角、路上にちりばめることも可能だ。ふらっと立ち寄れ、こころに余白をもたらしてくれる「拠りどころ=茶室」が、都市のあちこちに建ち現れて、新たな出会い、新たな交わり、新たな文脈を生み出す可能性を秘めた作品だ。

●応募学校

- 明石工業高等専門学校
- 秋田工業高等専門学校
- 石川県立羽咋工業高等学校
- 岩手県立水沢工業高等学校
- 大分県立日田林工高等学校
- 大阪市立工芸高等学校
- 大阪市立都島工業高等学校
- 岡山県立水島工業高等学校
- 高知県立高知工業高等学校
- 神戸市立科学技術高等学校
- 静岡県立島田工業高等学校
- 静岡県立浜松工業高等学校
- 東京都立蔵前工業高等学校
- 富山県高岡工芸高等学校
- 長野県長野工業高等学校
- 兵庫県立豊岡総合高等学校
- 兵庫県立兵庫工業高等学校
- 広島県立広島工業高等学校
- 福島県立福島工業高等学校
- 北海道旭川工業高等学校
- 三重県立伊勢工業高等学校
- 三重県立四日市工業高等学校
- 山梨県立甲府工業高等学校

【表彰式】



表彰状を読みあげる設楽貞樹日本建築協会会長

本年は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、インターネットで会場と学校をつなぎ、バーチャル表彰式を行いました。

●審査記録

10月７日　予備審査：応募作品について応募規定違反の有無を調べ、その検討を行った。
今回、応募締切り後に届いた作品があり、公正を期するため審査対象から外すこととした。その他検討の結果、一部作品に要求図面の不備や違反事項が見られたので、予備審査結果として審査会に報告することとした。（教育委員会・工高生教育小委員会）

10月12日　事前審査：審査会当日欠席の審査委員１名により審査が行われた

10月17日　審査会：審査委員９名により当日審査が行われた。（審査時間13：30～17：00）

●審査経過

審査を開始するにあたり、本年度の応募校数、応募作品数の報告を行い、一部作品の要求図面に対する不備や違反事項を予備審査報告として審査会に提示された。その結果、審査では違反事項を考慮するが全作品を本審査の対象とすることとし、続いて審査委員長より審査方針の確認があり、審査に入った。

■１次審査（審査員10名）117作品→26作品
全応募作品について審査委員１名につき10作品を選んで投票し、集計。

得票	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
作品数	1	1	1	4	1	0	4	3	3	8

票を得た26作品を１次審査通過とした。（審査時間13：35～15：00）

■２次審査（審査委員９名）26作品→入選10作品
1次審査通過26作品のうち、得票数１～３の作品について次のステージに残すべきかどうか審議され、得票数の多い12作品に絞り込まれた。これらの作品を２次審査通過とし、違反事項を確認の上、各々について投票した審査員が推薦理由を説明しながら審議が重ねられた。その上で再度投票により９作品を選定、最後の１点については挙手により決定され、最終的に10作品を確定、入選作品とした。（審査時間15：15～16：15）

■３次審査（審査委員９名）入選作品10作品→最優秀作品１点、優秀作品２点
引き続き、優秀作品３点を選ぶに当たり、入選作品10点より得票数の多かった５作品から最多得票の作品を最優秀作品に決定し、優秀作品の選出については議論を重ねたうえで、最優秀作品１点、優秀作品２点を確定し、審査を終了した。（審査時間16：15～16：45）

会誌“建築と社会”への審査経過報告掲載にあたり、10点の入選作品について審査委員が分担してその評価を誌面にまとめることを約束し、審査会を終了した。（審査会終了時刻17：00）

謹賀新年



令和３年元旦

大　松　　敦
日　建　設　計
代表取締役社長
〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4－6－2　TEL（06）6203-2361

理事
酒　井　祥　三
西松建設 株式会社 西日本支社
常務執行役員支社長
〒540-8515　大阪市中央区釣鐘町2－4－7　TEL（06）6942-1173

千　種　幹　雄
株式会社 昭和設計
代表取締役社長
〒531-0072　大阪市北区豊崎4－12－10　TEL（06）7174-8787

常任理事
勝　山　太　郎
日　建　設　計
執行役員設計部門グループマネージャー
〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4－6－2　TEL（06）6203-2361

副会長
指　田　孝太郎
日　建　設　計
取締役常務執行役員大阪代表
〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4－6－2　TEL（06）6203-2361

永　嶋　元　博
東リ 株式会社
代表取締役社長
〒664-8610　兵庫県伊丹市東有岡5－125　TEL（06）6492-1331

理事
栗　原　信　英
栗原工業 株式会社
代表取締役会長
〒530-0054　大阪市北区南森町1－4－24　TEL（06）4709-2300

理事
佐　野　吉　彦
株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長
〒540-0034　大阪市中央区島町2－4－7　TEL（06）6943-1371代

原　　眞　一
コーナン建設株式会社
代表取締役会長
〒531-0075　大阪市北区大淀南1－9－10　TEL（06）6456-4311

小　池　一　郎
西日本建設業保証 株式会社
取締役社長
〒550-0012　大阪市西区立売堀2－1－2　TEL（06）6543-2553

会長
設　楽　貞　樹
株式会社 安井建築設計事務所
監査役
〒540-0034　大阪市中央区島町2－4－7　TEL（06）6943-1371代

藤　澤　一　郎
ダイダン 株式会社
代表取締役社長
〒550-8520　大阪市西区江戸堀1－9－25　TEL（06）6447-8000

近　藤　康　之
不二熱学工業 株式会社
代表取締役
〒542-0081　大阪市中央区南船場2－1－1　TEL（06）6261-4321

副会長
田　中　日出男
株式会社 きんでん
取締役常務執行役員技術本部長
〒531-8550　大阪市北区本庄東2－3－41　TEL（06）6375-6229

副会長
米　井　　寛
株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長
〒541-0043　大阪市中央区高麗橋2－6－10　TEL（06）6202-0391

謹賀新年　丑　令和３年元旦

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所
取締役会長　森口雅文
代表取締役社長　小田義彦
本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1−15−15（桜通ビル）TEL（052）222-8611
東京事務所
〒101-0021 東京都千代田区外神田3−5−12（聖公会神田ビル）TEL（03）5294-6211

東畑建築事務所
TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS, INC.
代表取締役社長
米井　寛
大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL (06)6202-0391
東京 / 大阪 / 名古屋 / 九州
http://www.tohata.co.jp

NIKKEN
EXPERIENCE, INTEGRATED
日建設計
代表取締役社長 大松　敦
東京都千代田区飯田橋2-18-3
Tel. 03-5226-3030
大阪市中央区高麗橋4-6-2
Tel. 06-6203-2361
http://www.nikken.jp

安井建築設計事務所
代表取締役社長　佐野吉彦
本社　540-0034 大阪市中央区島町 2-4-7　TEL.06-6943-1371
大阪・東京・名古屋・福岡・仙台・台北・ホーチミン　www.yasui-archi.co.jp

100年をつくる会社

鹿島
KAJIMA CORPORATION

本　　社：東京都港区元赤坂1丁目3番1号
関西支店：大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06（6946）3311
https://www.kajima.co.jp/

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長　井上 和幸　　副社長執行役員関西支店長　池田 耕二

本　　社　〒104-8370　東京都中央区京橋二丁目16番1号　Tel. 03 (3561) 1111
関西支店　〒541-8520　大阪市中央区本町三丁目5番7号　御堂筋本町ビル　Tel. 06 (6263) 2800

地図に残る仕事。®

TAISEI

大成建設株式会社

For a Lively World

代表取締役社長　相川　善郎
常務執行役員関西支店長　加賀田健司

本社　東京都新宿区西新宿 1-25-1
電話　03-3348-1111
関西支店　大阪市中央区南船場 1-14-10
電話　06-6265-4504
http://www.taisei.co.jp/

想いをかたちに 未来へつなぐ

TAKENAKA

竹中工務店　取締役社長　佐々木正人
〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201
〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000

戸田建設株式会社

代表取締役社長　今井 雅則　　常務執行役員大阪支店長　三宅 正人

本　　社　〒104-0032　東京都中央区八丁堀2−8−5　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1−13−47　TEL 大阪06(6531)6095

夢のレンガを積みあげよう

都窯業株式会社

〒530-0047　大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル
Tel（06）6367-0389　Fax（06）6367-5567
工房　三重県伊賀市西山 伊州窯 伊州観白楼
http://www.miyakoyogyo.com　E-mail：info@miyakoyogyo.com

大阪工業技術専門学校
OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科（設計専攻・施工専攻・設備専攻）・インテリアデザイン学科・大工技能学科・建築設計学科（リカレント生対象）
建築学科Ⅱ部（夜間）・フレックス建築学科（夜間・単位制）・建築士専科（二級建築士受験資格取得者対象）

〒530-0043　大阪市北区天満1丁目8番24号　0120-0910-19　https://www.oct.ac.jp/　Tel. 06-6352-0093

学校法人　修成学園
修成建設専門学校
一級建築士受験資格認定校　職業実践専門課程認定校

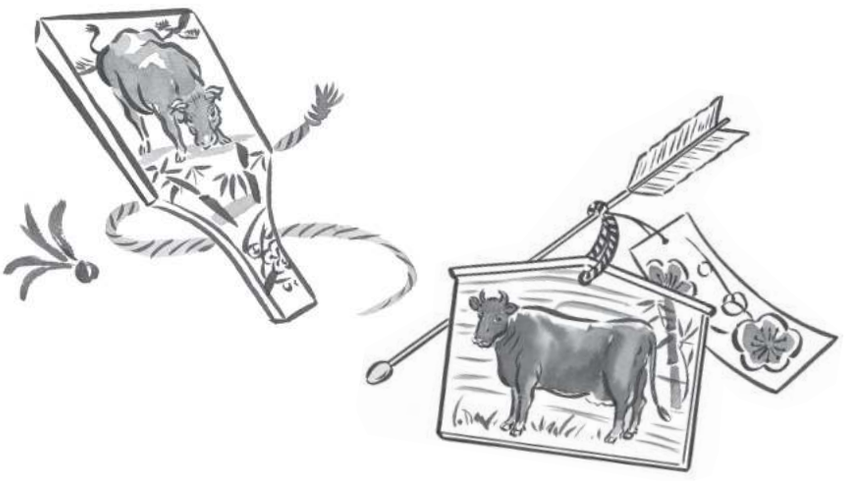
〒555-0032 大阪市西淀川区大和田5-19-30　TEL:06-6474-1644（代）
0120-446-456　https://www.syusei.ac.jp/

■建築学科（昼・夜）
■建築CGデザイン学科
■空間デザイン学科
■住環境リノベーション学科
■土木工学科
■建設エンジニア学科
■ガーデンデザイン学科
■専科 2級建築士科
■専科 1級建築士科

JBMA　一般社団法人 日本建築材料協会

会　長　松本　將

〒550-0002　大阪市西区江戸堀1−4−23　撞木橋ビル4階　TEL（06）6443-0345　FAX（06）6443-0348
http://www.kenzai.or.jp/



一般社団法人 日本建築協会

会　長　設楽貞樹

〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31　TEL（06）6946-6981

一般社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　高松隆夫

〒732-0805　広島市中区十日市町1-1-9（相生通り鷹匠ビル4階山陽工業㈱内）　TEL（082）232-6471

一般社団法人 日本建築協会東海支部

支部長　篠原佳則

〒460-0008　名古屋市中区栄2−10−19（名古屋商工会議所ビル9階）TEL（052）201-2201

一般社団法人 日本建築協会京都支部

支部長　長瀬博一

〒604-0944　京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641 京都建設会館別館　TEL（075）211-2857



1 ヨーロッパの宝石箱 リヒテンシュタイン伯爵家の至宝展

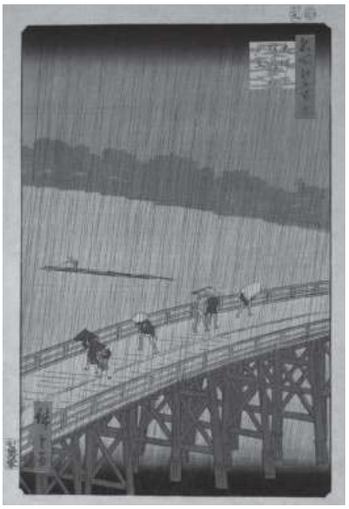


ヨーゼフ・ノイゲバウアー
《リヒテンシュタイン侯フランツ１世、８歳の肖像》
1861年　油彩・キャンヴァス
©LIECHTENSTEIN. The Princely Collections, Vaduz−Vienna

オーストリアとスイスに挟まれた独立国家の君主であるリヒテンシュタイン侯爵家は12世紀以来の長い歴史を持ち、歴代にわたる美術作品の収集によって高い名声を得ている。
ルーベンス、クラーナハ（父）、ヤン・ブリューゲル（父）ら侯爵家秘蔵の油彩画63点をはじめ、華麗な宮廷の空間を彩った陶磁器など全126点のコレクションにより、優美なヨーロッパの貴族文化の香りを堪能することができるだろう。

期　　間　1月30日（土）～3月28日（日）
　　火～金　10：00～20：00
　　月・土・日・祝　10：00～18：00
　　※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　2/1
会　　場　あべのハルカス美術館
　　大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43
　　あべのハルカス16階
　　TEL.06-4399-9050
観 覧 料　一般1,500円、高大生1,100円、小中生500円
　　＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名まで
　　当日料金の半額

2 企画展　広重の名所江戸百景 併催：新収蔵品・新寄託品を中心に



歌川広重
「名所江戸百景　大はしあたけの夕立」
錦絵　縦大判
江戸時代（19世紀）
奈良県立美術館蔵
（前期展示）

歌川広重（1797～1858）は、江戸時代末期に浮世絵風景画の名手として活躍した浮世絵師である。代表作の「東海道五十三次之内」（保永堂版五十三次）は、一説によれば、広重の東海道中の体験をもとに描いたと伝えられる。その旅情溢れる浮世絵は江戸時代の人々の人気を集めた。
広重の「名所江戸百景」は江戸人の広重が晩年に描いた「江戸」の名所絵である。浮世絵は庶民が気軽に入手できる大量生産の版画で、描かれる対象は庶民の暮らしや関心事に密着していた。「名所江戸百景」は江戸の人々が自分たちの生きる都市の「名所」を再確認する浮世絵だったのだろう。
本展では、広重の描いた「名所江戸百景」を前期・後期に分けて全点展覧する。また、近隣の美術館の協力を得て、広重の「東都名所」シリーズや「東海道」シリーズを展示に加え、江戸の人々も夢中になった広重の浮世絵風景画の魅力を堪能できる機会となるだろう。
併催の「新所蔵品・新寄託品を中心に」では、近年当館所蔵・寄託となった作品のうち、初公開の作品を含む絵画、彫刻、工芸、版画作品を展示し、奈良県立美術館の活動の一端を紹介する。

期　　間　1月16日（土）～3月14日（日）
　　9：00～17：00
　　※会期中展示替えあり
　　前期：1/16～2/14　後期：2/16～3/14
　　※入場は16：30まで
休 館 日　月曜日（ただし3/1、3/8は開館）
会　　場　奈良県立美術館
　　奈良市登大路町10-6
　　TEL.0742-23-3968
観 覧 料　一般400円、高大生250円、小中生150円
　　＊65歳以上の方は無料
　　＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

3　没後70年 南薫造



《春（フランス女性）》
1908年頃
ひろしま美術館蔵

「日本の印象派」を代表する画家のひとり南薫造（1883－1950）は、東京美術学校卒業後、イギリスやフランスに留学。帰国後に第４回文展で三等賞を受賞し、若くして画壇での地位を築いた。風景画を得意とし、農村や海景といった瀬戸内の情景を描くとともに、アジア各地に写生旅行に赴き、異国の情景をみずみずしい感性で描き出した。本展は、南薫造の全貌を紹介する東京での初めての回顧展である。

期　　間　2月20日（土）～4月11日（日）
10：00～18：00（金曜日は20：00まで）
※会期中一部展示替えあり
前期：2/20～3/14　後期：3/16～4/11
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　月曜日（ただし4/5は開館）
会　　場　東京ステーションギャラリー
東京都千代田区丸の内1-9-1
TEL.03-3212-2485
観 覧 料　一般1,100円、高大生900円
＊中学生以下無料
＊障がい者手帳等をお持ちの方は100円引き、
その介助者１名は無料
＊入館券はローソンチケットで販売

4　特別展　花森安治『暮しの手帖』の絵と神戸



花森安治『暮しの手帖』
１世紀37号　表紙原画
1956年　鉛筆、水彩・紙
25.7×18.2㎝
世田谷美術館蔵（後期展示）

神戸市出身の花森安治（1911～1978）は、兵庫県立第三神戸中学校（現・県立長田高等学校）を卒業後、旧制松江高等学校、東京帝国大学に学んだ。在学中は『帝国大学新聞』の編集に熱中し、1938～39年、召集され満州で過ごす。病を得て帰国した後は、大政翼賛会の仕事に従事した。
敗戦後の1945年秋、花森は大橋鎭子と出会い、翌年、大橋を社長とする衣裳研究所（現・暮しの手帖社）を設立、『スタイルブック』を刊行した。1948年、『美しい暮しの手帖』（現・『暮しの手帖』）の初代編集長となり、あらゆる分野で手腕を発揮し、膨大な仕事を残した。
花森安治の業績を紹介する展覧会はたびたび開催され、特に集大成とも言うべき充実した展覧会が2017年に全国を巡回した。
神戸は、彼の出身地でありながら、花森関連の本格的な展示はまだ実施されたことがなく、このたび、彼が30年間にわたり描き続けた『暮しの手帖』の表紙画や、さまざまな誌面記事を、神戸ゆかりの美術館所蔵の神戸風景と併せて紹介する。

期　　間　3月14日（日）まで
10：00～17：00
※会期中展示替えあり
前期：1/31まで　後期：2/2～3/14
※入館は16：30まで
休 館 日　月曜日（ただし1/11は開館）、1/12
会　　場　神戸ゆかりの美術館
神戸市東灘区向洋町中2-9-1
TEL.078-858-1520
※来園の際にはマスク着用のこと
観 覧 料　一般1,000円、大学生500円
＊小中高生は無料（要証明）
＊神戸市在住の65歳以上の方は一般料金の半額

本欄掲載の１～４の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（84円）を日本建築協会事務局までお送りください。

事情により開催内容が変更、もしくは中止となる場合もございますので、会場WEBサイト等で最新情報をご確認ください。

「建築と社会」誌

特集一覧●1999〜2020

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。

販売価格は2019年9月号までは1,230円、2019年10月からは1,254円（税込・送料別途）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綴る小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品’99 北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに＊	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年＊	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン＆インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間＊	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ＊	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●ＩＴ社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境―近未来に向けて今できること― ●大建設計―作品特集1996〜2001―	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法―会員作品―	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心―パート2―	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●漆町リバープレイス＊	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて〜サステナブルエンジニアリングの現在〜	●私の空間作法―会員作品―	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	●サスティナビリティ〜次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン〜	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー〜建築の主観的価値について〜	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法―会員作品―	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯〜心地よさを求めて〜	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法―会員作品―	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ	●私の空間作法―会員作品―＊	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」〜まちと共存する空港づくり〜	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作	●都市再生の本質〜光と影のはざまで〜	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー―エネルギーをたくわえ、有効利用する〜	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…〜構造が未来へつなぐ夢〜	●私の空間作法―会員作品―
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	●創立90周年記念―この10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりが創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法―会員作品―	●PFI事業、その後＊	●東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を訪ね歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造
2009 vol.90	●私の空間作法―会員作品― ●京阪電車 中之島線―新線が拓く中之島新時代―	●水の都 にぎわいのある未来に向けて	●東海―TOKAIオムニバス	●楽しい福祉	●体感するインテリア	●建築空間が求める空気環境（空気質）	●建築と水	●実用レベルで展開される施工管理のIT化	●第56回青年技術者	●地域の歴史資産を活かしたまちづくり	●第16回会員作品特集“私の空間作法”	●構造家日記〜頭の中をのぞいてみたら〜
2010 vol.91	●創業110周年記念特集NIKKEN SEKKEI	●建築とエコ技術	●東海支部復活50周年記念号 東海―TOKAIオムニバス	●食と建築・都市	●ホスピタリティのあるケア空間	●太陽光発電	●建築と石	●再生・受け継ぐ・繋がる＊	●第57回青年技術者	●建築ストック社会の形成への展望	●LED照明の活用・将来を考える〜人・地球への思いやり〜	●東京スカイツリー
2011 vol.92	●UR向ヶ丘第一団地ストック再生実証試験―ストック活用時代の夜明け 第17回 会員作品“私の空間作法”	●BIMは設計を変革するか?	●東海支部復活50周年記念号 東海―TOKAIオムニバス	●まちなかのサードプレイス	●変遷する“身の置きどころ”	●ECO〜建築設備が出来るECO技術〜	●建築と土	●鉄道駅に注目する	●第58回青年技術者	●火災に強い建築を考える	●コンクリートという素材	●構造教育と社会
2012 vol.93	●自然災害に立ち向かう力を求めて	●今、私が思う『和』	●東海支部特集	●第18回 会員作品“私の空間作法”	●中国市場に挑む	●ZEB ネット・ゼロ・エネルギー・ビルを目指して―低炭素社会の実現に向けて―	●建築と窓	●巨大地震に備える	●第59回青年技術者	●超高齢社会に求められる住まい	●歴史的建造物の保存活用	●身のまわりの世界の「構造」を探る
2013 vol.94	●東畑建築事務所創立80周年 U-35のまなざし ●躍成長の時代を考える	●“らしくない”空間 ●小特集 中之島フェスティバルタワー	●東海支部特集	●第19回 会員作品“私の空間作法”	●コミュニティの“かたち”―人と人とのつながりを再考する―	●無駄から見える節電	●第60回青年技術者	●グラントフロント大阪	●素材としての建築	●建築に携わるものに求められること	●木の街をつくる	●実験
2014 vol.95	●エリアマネジメントの新展開に向けて	●融合する空間〜新たなる試み〜	●東海支部特集 ●小特集「ABENO REBORN」	●第20回 会員作品“私の空間作法”	●オフィスビル設備の変遷とこれから	●オフィスのこれから	●第61回青年技術者	●建築と時間	●省エネ・低炭素のこれまでとこれから	●大阪・上町台地・あべのハルカス ●複雑・高度化する建築とその技術について	●でっかいものはすごいぞ	●安井建築設計事務所90周年
2015 vol.96	●フォー・オールの時代に向けて	●場をつくる〜プログラムの挑戦〜リノベーションのリアル	●支部復活55周年記念東海支部特集	●第21回 会員作品“私の空間作法”	●あかり・文化・創造	●これからの学びのかたち	●第62回青年技術者	●建築の価値	●空き家と向き合う	●職人がいなくなる!!オリンピックと10年後に備えて	●形態にあらわれた構造	●「図面」を変える〜BIMの深化が誘う建設プロセスの変革〜
2016 vol.97	●都市の記憶をたどって	●非日常の棲み処〜寝泊まりの進化	●東海支部特集	●第22回 会員作品“私の空間作法”	●人の移動・物の移動・情報の移動	●第63回青年技術者	●おもてなしと建築	●UR都市機構西日本支社〜暮らし輝く先駆けのまちづくり	●人口減少社会のまちづくり	●見えないものを診る〜新たな技術による施工管理・検査システムへの展開〜	●構造を支える人と技術のつながり	●ボーダレス〜消失する境界と拡張する領域
2017 vol.98	●ニュータウンから学ぶこれからの「計画」	●第23回 会員作品“私の空間作法”	●日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100	●東海支部特集	●建築設備の伝統と革新	●第64回青年技術者	●100年前の建築、100年後の建築〜意匠・空間の視点から〜	●観光立国を目指した宿泊施設について	●100年前の建築、100年後の建築〜施工・材料の視点から〜	●社会と繋がるディテール	●関西で木と生きる	●時間軸に挑むクリエイター達〜時をデザインするということ
2018 vol.99	●東畑建築事務所創設85周年 ●温泉と暮らす	●第24回 会員作品“私の空間作法”	●東海支部特集	●働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル	●スポーツイベントを支える設備技術	●第1回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集テーマ これからの建築と社会―その関係を問う	●第65回青年技術者	●平成と建築	●安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと今後の可能性	●山と建築―そこに山があるから登るのだ!―	●重さと関わる	●こだわりの空間料理人
2019 vol.100	●共生社会のまちづくり	●第25回会員作品“私の空間作法” ●京都支部創設70周年記念特集景観とまちづくり―保全・再生・創造―	●東海支部特集「社会と建築」という流れ	●建築と社会を繋ぐプロダクション	●建設業2.0〜価値・意識・生産性〜	●第2回 片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集テーマ：建築をつくるひと―これからの姿を問う	●第66回青年技術者	●建築の仮設性と恒久性	●「災害。逃げる」	●新素材の可能性―材料の高機能化とハイテク素材―	●最先端技術と社会	●オープンマインドな空間
2020 vol.101	●大阪ベイエリアの再生	●第26回 会員作品“私の空間作法”	●東海支部特集	●建築教育の今	●つなぐ	●第3回 片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）テーマ：建築におけるダイバーシティとは	●第67回青年技術者	●消費志向の変化と建築〜トキを味わう空間としての建築〜	●「都市を鳥瞰する」	●宇宙と建築	●構造家日記2020〜構造設計者が今感じていること〜	●バーチャルリアリティとダイレクトコミュニケーションがリンクする社会へ―フクターコロナの新しい体験の価値観を考える―

＊は欠号

特集：尽きせぬ情熱　佐野正一生誕100周年記念

協賛広告目次

Daigasエナジー㈱ ……（表紙４面掲載）

㈱大林組…… 104

鹿島建設㈱…… 105

清水建設㈱…… 106

大成建設㈱…… 107

㈱竹中工務店…… 108

㈱東畑建築事務所…… 109

戸田建設㈱…… 110

西松建設㈱…… 111

日建設計㈱…… 112

㈱安井建築設計事務所…… 113

㈱淺沼組…… 114

㈱きんでん…… 114

栗原工業㈱…… 115

㈱鴻池組…… 115

㈱昭和設計…… 116

東リ㈱…… 116

不二熱学工業㈱…… 117

つくるを、
つくり変えろ。

人類の歴史は、つくることの歴史だ。
制約、常識、願望。
人は、つくることによって、
さまざまなことを乗り越えてきた。
時代が大きく変わろうとしている今。
私たちは、つくることそのものをつくり変えてゆこうと思う。
形あるものだけが、ものづくりか。
人間のためのものだけが、すべてか。
常に問いかけながら、可能性を拓き続けようと思う。
世界は不確かで、複雑さを増している。
でも、だからこそ。
これまで培ってきた力が、
まだ見たことのないものを実現する原動力になるはずだ。
なぜならいつだって、つくることは、何かを超えることなのだから。
建設の枠を超え、新しい領域を拓いてゆく。
次の大林組の挑戦に、ご期待ください。

大林組

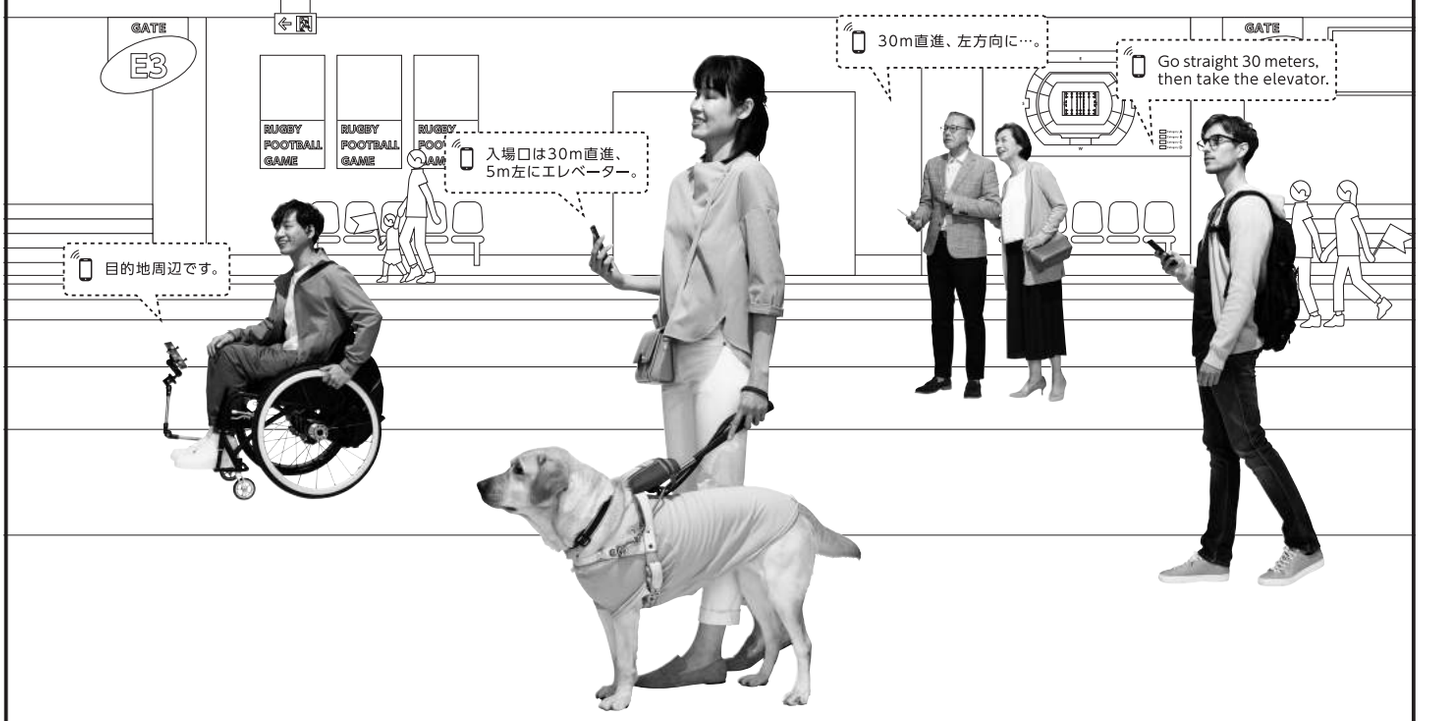


つくるを拓く
MAKE BEYOND


「あした」は、ナニイロ？
鹿島のしごと。
それは「あした」をつくること。
人と自然と向き合って、
よりよい毎日をつないでいくこと。
暮らしを描く、ものづくり。
無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。
100年をつくる会社
鹿島

SHIMZ

清水建設は、誰もが暮らしやすい
インクルーシブな社会づくりを目指しています。



すべての人が活き活きと輝くことのできる、
社会の実現を目指して。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

音声ナビゲーションシステム/インクルーシブ・ナビ
スマートフォンを活用し、目的地までの経路を詳細に案内する高精度な音声ナビゲーションシステムを、日本IBM(株)東京基礎研究所と共同開発。バリアフリーな街づくりに向け、視覚障がい者、車いす利用者向けのほか、外国語にも対応します。

インクルーシブな社会 … あらゆる壁をなくして、すべての人が参加できる社会

なにができるんだろう?

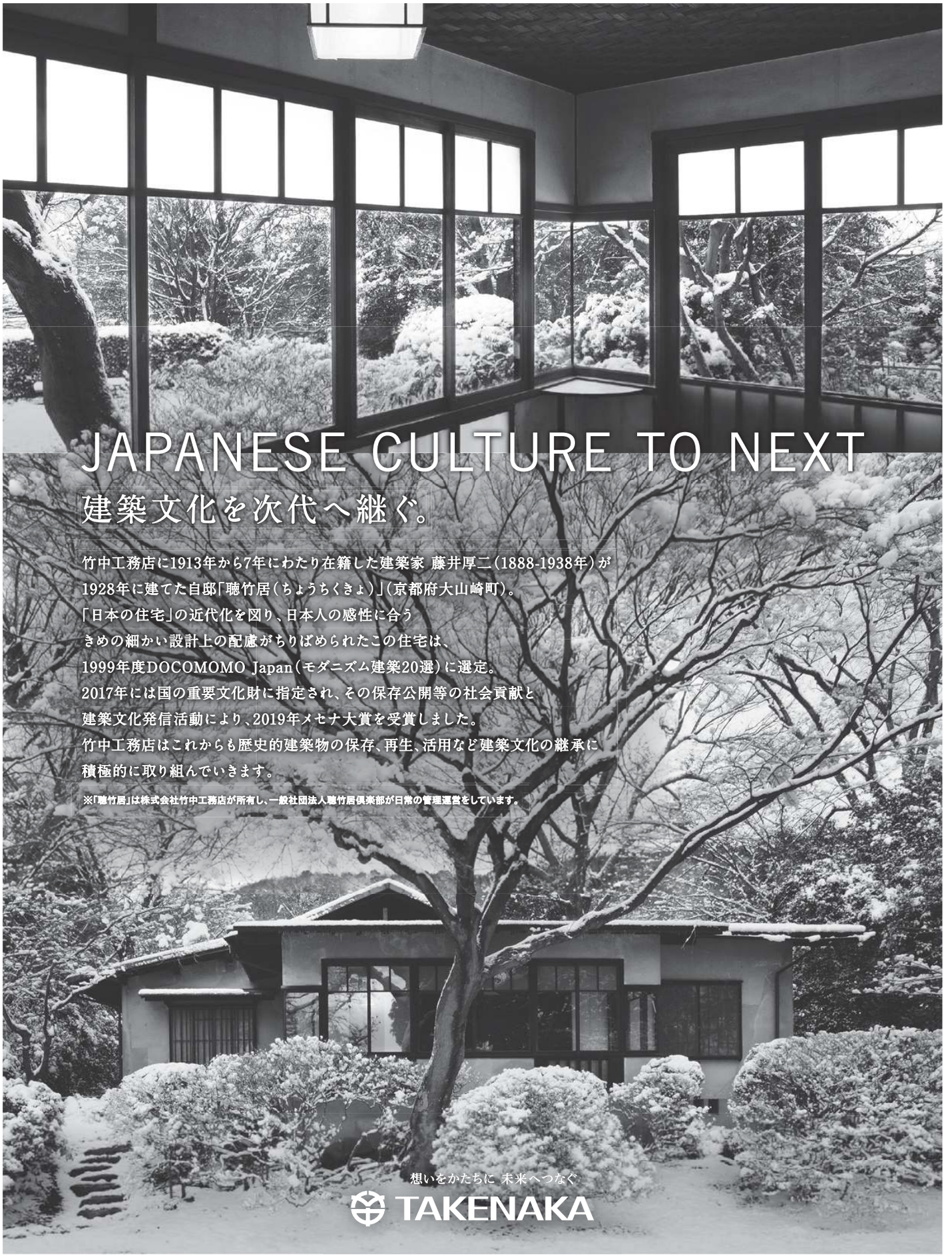
夢と希望にあふれた
社会づくりを実現させるために、
わたしたち大成建設は
これからも人がいきいきとする環境を創造します。

地図に残る仕事。®

大成建設
TAISEI

For a Lively World





JAPANESE CULTURE TO NEXT

建築文化を次代へ継ぐ。

竹中工務店に1913年から7年にわたり在籍した建築家 藤井厚二（1888-1938年）が
1928年に建てた自邸「聴竹居（ちょうちくきょ）」（京都府大山崎町）。
「日本の住宅」の近代化を図り、日本人の感性に合う
きめの細かい設計上の配慮がちりばめられたこの住宅は、
1999年度DOCOMOMO Japan（モダニズム建築20選）に選定。
2017年には国の重要文化財に指定され、その保存公開等の社会貢献と
建築文化発信活動により、2019年メセナ大賞を受賞しました。
竹中工務店はこれからも歴史的建築物の保存、再生、活用など建築文化の継承に
積極的に取り組んでいきます。

※「聴竹居」は株式会社竹中工務店が所有し、一般社団法人聴竹居倶楽部が日常の管理運営をしています。

想いをかたちに 未来へつなぐ
TAKENAKA

株式会社 竹中工務店
〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13 Tel.06-6252-1201
〒136-0075 東京都江東区新砂1-1-1　Tel.03-6810-5000

竹中工務店　聴竹居　検索
https://www.takenaka.co.jp/news/2019/10/04/



積層型大規模木造庁舎
長門市本庁舎（2020年竣工）

TODA
CORPORATION



もっとワクワクする
未来へ

WORK WORK

たとえば、ホタルを守りながら
トンネルをつくること。
たとえば、再生可能エネルギーで
建設現場の電力をすべてまかなうこと。
あらゆる命が育まれる自然環境のために、
建設会社にできることはたくさんあります。

人と自然が深くつながり、
お互いに協力し合う世界。
そんな未来を想像するとワクワクしませんか。
豊かで持続可能な地球を目指して。
戸田建設は、SDGsの実現に
積極的に取り組んでいます。

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT GOALS



www.toda.co.jp
戸田建設株式会社



未来を創る“現場力”

私たち西松建設の強み、“現場力”。

常に現場に向き合い、時代の変化に対応しながら、課題を解決し、
困難を乗り越えるチカラです。

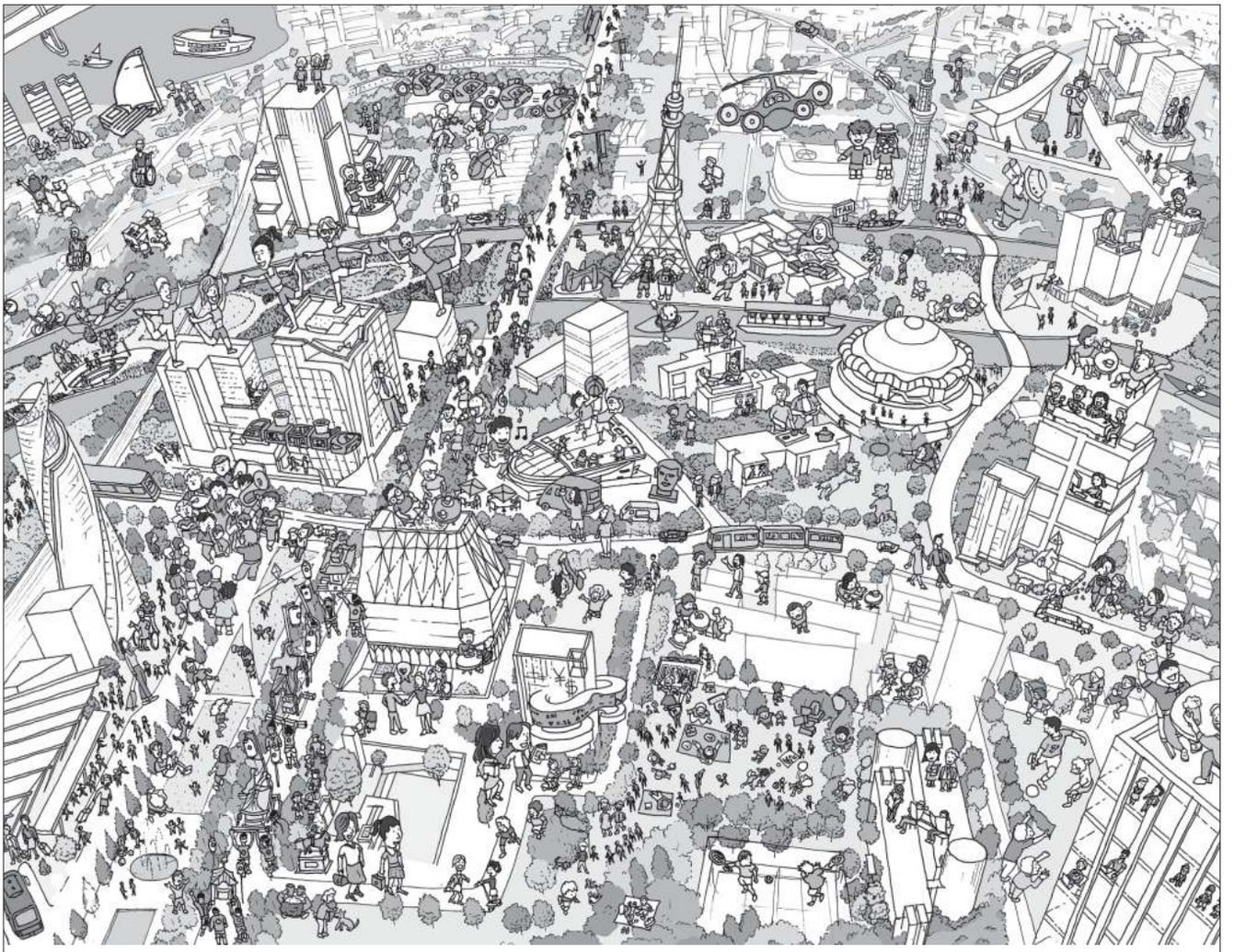
次世代が安心して暮らせる社会、環境のために。
私たちは、この“現場力”を原動力にイノベーションを起こし、
140年以上磨き抜いてきた技術や経験・知識を結集した“総合力”を発揮して
新たな価値を創出していきます。



Successfully building a better future

西松建設

https://www.nishimatsu.co.jp/



NIKKEN

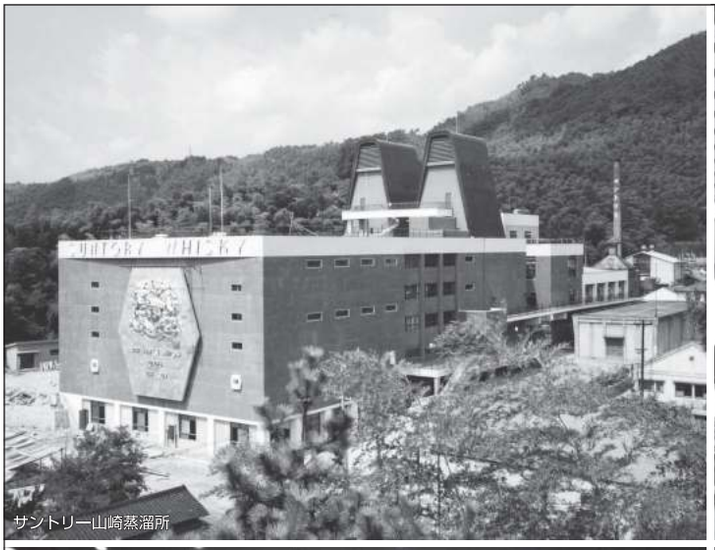
EXPERIENCE, INTEGRATED

日建設計

代表取締役社長　大松　敦

東京都千代田区飯田橋 2-18-3　Tel. 03-5226-3030
大阪市中央区高麗橋 4-6-2　Tel. 06-6203-2361

http://www.nikken.jp


サントリー山崎蒸溜所


大阪国際空港ターミナルビル


サントリーホール


東京国立博物館平成館


大阪ターミナルビル（アクティ大阪）



大阪ガスビル（新館／北館）

佐野正一代表作品より

安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐野 吉彦

本社 〒540-0034　大阪市中央区島町2-4-7　TEL.06-6943-1371
大阪・東京・名古屋・福岡・仙台・台北・ホーチミン
www.yasui-archi.co.jp

株式会社 淺沼組

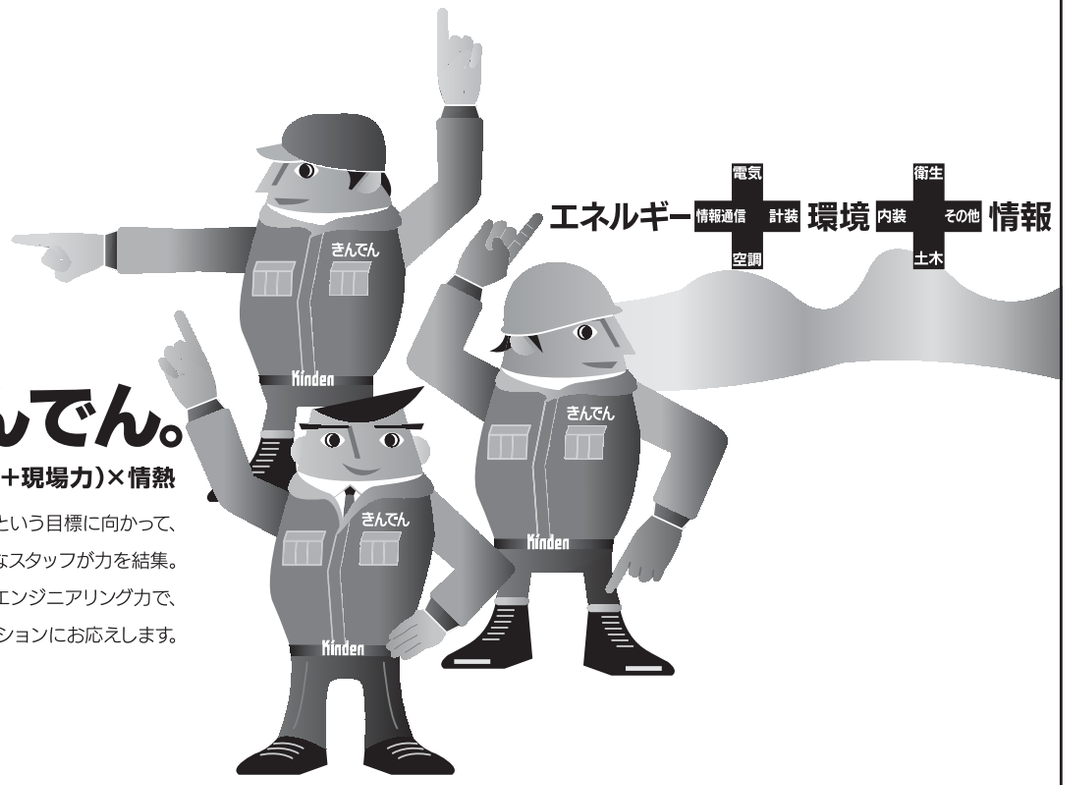


誇(ほこ)れる歴史がある
創(つく)りたい未来がある

Asanuma

本社・大阪本店　〒556-0017　大阪市浪速区湊町１丁目２番３号　TEL.06-6585-5500（代表）
東　京　本　店　〒108-0023　東京都港区芝浦２丁目１５番６号　TEL.03-5232-5888（代表）

Kinden



エネルギー 電気 情報通信 計装 空調 環境 衛生 内装 その他 土木 情報

チーム、きんでん。
（施工力＋技術力＋現場力）×情熱
“お客さま満足”という目標に向かって、
さまざまなスタッフが力を結集。
人間力を基盤とした総合エンジニアリング力で、
あらゆるソリューションにお応えします。

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号　東京本社 東京都千代田区九段南2丁目1番21号
TEL.06-6375-6000 TEL.03-5210-7272
https://www.kinden.co.jp/
きんでん



心につなぐ未来(あした)を創る Honesty and Earnestly

電気・情報通信・計装・土木・空調
栗原工業株式会社
https://www.kurihara.co.jp/

大阪本社
〒530-0054
大阪府大阪市北区南森町1-4-24
TEL：06-4709-2300

東京本社
〒105-0014
東京都港区芝3-24-7　芝エクセージビルディング
TEL：03-6400-3001

まじめに、まっすぐ
KONOIKE

人と社会をずっと支えていくために、
私たちには信頼に応える責任があります。
まじめに、まっすぐ、ひとつになって
成しとげる、熱い思いと確かな仕事。
おかげさまで、私たち鴻池組は
2021年に創業150周年を迎えます。

2021
150
鴻池組

「都市・建築・環境」から未来を拓くパートナー

SHOWA SEKKEI

株式会社 昭和設計

代表取締役社長　千種 幹雄

本　社　〒531-0072　大阪市北区豊崎 4-12-10　TEL 06-7174-8787
東　京　〒108-0023　東京都港区芝浦 3-16-20　TEL 03-4531-1290
仙台・神戸・九州・上海
http://www.showa-sekkei.co.jp



光沢のある石を思わせる無方向柄。立体的なループと方向性のない柄が自然な広がりを演出。

様々な糸や色が交じり合う織物を思わせる材質感のあるヘリンボーン柄。

安心　公共建築工事標準仕様書の第一種規格目付水準をクリアした安心品質。

多彩　計121アイテム（超制電タイプ、糊付タイプ等含む）。

清潔　1982年発売以来の、汚れに対するフッ素系樹脂による防汚加工を継続。

TOLI
よろこびを敷きつめる

東リ株式会社　西日本営業開発部　06-6943-1645

特設サイト GA-100.com をご覧ください。

空気調和設備・給排水衛生設備・低温設備の設計・施工・保守



自然に甘え、自然に押しつけるのではなく、
技術で自然の循環系に共生する。
それが不二熱学による地球への回答。

Fujinetsu

空気と水のエンジニア
不二熱学工業株式会社

〒542-0081 大阪市中央区南船場 2-1-1
TEL(06)6261-2436

日本建築協会

月間の動き

2020年11月

理事会等

第２回通常理事会
11月18日（水） 16：00～17：00
OMM地下１階ギャラリー＆WEB会議
出席者　設楽会長ほか27名
議　事（１）2020年度上半期の事業執行状況

第４回常任理事会
11月18日（水） 17：10～18：10
OMM地下１階ギャラリー
出席者　設楽会長ほか９名
議　事（１）「会誌活性化に向けて」その後の動き
（２）役員会の今後の日程

第１回会長・副会長・常任理事・支部長会議
11月18日（水） 14：30～15：30
OMM地下１階ギャラリー＆WEB会議
出席者　設楽会長ほか10名
議　事（１）2020年度上半期の事業執行状況
（２）意見交換

編集委員会

第６回広告企画・編集合同委員会
11月19日（木） 18：00～19：00
WEB会議
出席者　勝山委員長ほか５名
議　事（１）12月号特集「バーチャルリアリティとダイレクトコミュニケーションがリンクする社会へーアフターコロナの新しい体験の価値観を考えるー」
（２）１月号特集　社会的危機を超える佐野正一生誕100周年記念特集
（３）２月号特集　私の空間作法
（４）３月号特集　東海支部特集
（５）４月号特集　建築と社会の時代性を考える（仮）
（６）その他　「建築と社会」活性化の動き

第３回計画系分科会
11月25日（水） 18：30～20：15
日本建築協会会議室＆WEB会議
出席者　田中幹事ほか３名
議　事（１）４月特集号企画

第６回設備分科会
11月11日（水） 18：00～19：15
WEB会議
出席者　橋本幹事ほか６名
議　事（１）特別編集委員会報告
（２）「設備の頁」の企画
（３）2021年特集の企画

第３回法令分科会
11月25日（水） 15：00～16：45
日本建築協会会議室＆WEB会議
出席者　岡田幹事ほか３名
議　事（１）法令コーナーの企画
（２）４月特集号企画
（３）９月特集号企画

第６回作品作風小委員会
11月26日（木） 19：00～
日本建築協会会議室＆WEB会議
出席者　菊池委員ほか２名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況、予定
（３）gallery掲載報告、予定

第３回特別編集委員会
11月17日（火） 18：30～20：30
ドーンセンター中会議室＆WEB会議
出席者　設楽会長、勝山委員長ほか11名
議　事（１）アーカイブとサロンをどのように両立させるか
（２）４月号特集小委員会の組合せ

事業委員会

第４回情報見学小委員会
11月12日（木） 18：10～19：20
WEB会議
出席者　中尾委員長ほか６名
議　事（１）本年度事業の検討
（２）イケフェス2020WEBサイトの報告

大阪都市景観建築賞令和２年度第３回幹事会
11月25日（水） 10：30～12：10
大阪府建築士会会議室
出席者　中尾常任理事
議　事（１）第40回大阪まちなみ賞
（２）記念事業

出版委員会

第５回出版委員会
11月24日（火） 16：00～17：00
WEB会議
出席者　西委員長ほか７名
議　事（１）既刊書籍経過報告
（２）制作進行中の書籍
（３）今後の出版テーマ
（４）建築セミナー

教育委員会

第８回大阪府住まい・まちづくり普及協議会
11月20日（金） 10：30～12：00
WEB会議
報告・議題
（１）出前講座
（２）クラウドファンディング

未来創生プロジェクト

第４回2040委員会
11月19日（木） 19：30～
PARK Lab.＆WEB会議
出席者　駒井リーダーほか５名
議　事（１）企画内容
（２）今後の委員会活動

U-35委員会　7th action「建築と水辺」
11月３日（火） 9：00 ～17：00
中之島公園各所
委　員　髙畑リーダーほか19名
参加者　約1,000名
インスタレーション＆スタンプラリーなど

U-35委員会　7th action「建築と水辺」
11月13日（金） 18：30 ～20：30
中之島公園
出席者　髙畑リーダーほか15名
座談会
ゲスト　川勝真一　氏
笹尾和宏　氏

見学会

第５回学生のための現場見学会
「平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事」現場見学会
11月26日（木） 14：00～15：30
講　師　清水建設（株）関西支店　奈良営業所
平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事作業所　工事長　谷破光氏
委　員　菅原委員長ほか３名
参加者　17名

審査会

第66回工高生デザインコンクール表彰式
11月９日（土） 13：30～15：00
ドーンセンター会議室＆WEB
出席者　受賞者10名（各学校にてWEB参加）
審査員　５名（内２名WEB参加）
委　員　橋寺委員長、谷口小委員長ほか２名
協会関係　設楽会長
最優秀賞１点、優秀賞２点、入選７点

編集委員会（2020年度）

■副会長
川合　智明
■編集担当理事
◎勝山　太郎
佐藤　栄一
橋寺　知子
西　博康
菅野　忠司
山田　淳
吉村　英祐
■副委員長
○戸川　勝之
■編集委員
中原　岳夫
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
△田中　直人
林　雄太
松田奈緒子
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
桑原　悠樹
下坂　浩和
△東　拓郎
樋口　展寛
三谷　帯介
米山　剛史
渡部　剛
★ｲﾝﾃﾘｱ･住宅系
赤川貴世友
東　奈生子
今井　充彦
高橋　伸明
川合　隆之
河西　孝平
△黒栁　亮
ペリー史子
■構造分科会
宇野　綾真
岡田　健
△岸本　光平
古島　正博
正野　和司
瀧野　敦夫
竹本　孝輔
萩原　学
宮久保秀樹
向井　洋一
■設備分科会
有尾清二郎
木谷　晃之
北野　勝也
寺井　千佳
仲村　憲一
夏井　重行
△橋本　直樹
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
森山　正和
山本　雅洋
■施工材料分科会
門野　陽
桜井　和男
秋竹　教行
藤丸　啓一
△山口　紀宏
河合　智寛
吉田　正友
岡田　淑子
■法令分科会
△岡田　耕介
垣内　明
河野　学
西　雅昭
福岡　誉顕
■作品作風小委員会
居内　章夫
池上　明
石井眞由美
稲垣　和江
▲太田　栄治
加嶋　章博
菊池　浩輔
倉渕奈千子
澤田　純一
髙木　秀晃
鞆野　淳司
西田　佳代
藤原　寛
平野　尉仁
増田　敬彦
■広告企画小委員会
小川　雄介
金築　雄
小山　昭
野山　将男
藤田　昌宏
▲前田　衛
山辻　直樹

（順不同）

◎委員長
○副委員長
▲小委員会委員長
△幹事

印　刷　２０２０年12月25日
発　行　２０２１年１月１日
発行人　一般社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱中島弘文堂印刷所
定　価　1254円（税込）

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本　　社　〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761／FAX.06-6976-8765

東京支社　〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580／FAX.03-3526-5582

http://www.n-kobundo.co.jp/

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：４月号～翌年３月号までの１年間
掲 載 料：**48,000**円（消費税込み）
サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。
※原稿は１年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人　日本建築協会　内山・井筒

TEL：06-6946-6981　FAX：06-6946-6984　E-mail：koukoku@aaj.or.jp

Daigas Group
大阪ガスグループは、Daigasグループへ。

ぐっとそばで、
ぐぐっとミライ。

このまちで暮らすあなたの笑顔を、もっと増やしたくて。
会社やお店で働くあなたの、もっと頼れるパートナーになりたくて。
これまで以上にぐっとお客さまのそばで、暮らしが、ビジネスが、
素敵なミライにぐぐっと近づくお手伝いをしていきます。



Daigas エナジー

新会社 Daigas エナジーは、業務用・産業用のお客様に、エネルギーや
各種サービスによるソリューションをワンストップでご提供します。

建築と社会　2021.1　Vol.102　No.1186　一般社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31　電話:06-6946-6981　FAX:06-6946-6984　http://www.aaj.or.jp　定価 1,254円(税込)